京都府遺跡調査概報

第 4 冊

1. 下　畑　遺　跡
2. 土　師　南　遺　跡
3. 園　部　城　跡
4. 黄　金　塚　2　号　墳
5. 平　安　宮　跡
6. 内　田　山　古　墳
7. 橋　爪　遺　跡

1982

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

昭和56年4月に財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが発足しました。その設立の目的は，京都府内の埋蔵文化財の調査，保存，活用及び研究を行い，その保護を図るとともに，先人の遺した文化財を大切にする考え方の普及育成に努め，地域の文化の発展に寄与することにあります。

当調査研究センターの直面する事業は，京都府内の各地における埋蔵文化財の発掘調査であり，昭和56年度は34件の調査を受託しました。これらの発掘調査は，いずれも道路建設，学校建設，宅地造成などの開発事業に伴う事前調査であり，調査によって発見された遺跡の多くは，調査終了後破壊され，消滅する運命にあります。しかし，発掘調査したすべての遺跡が開発事業により破壊されていいはずはありません。一つでも多くの遺跡がその重要性を理解され，現状のまま保存されることが望ましいのは言うまでもありません。

当調査研究センターでは，遺跡の保存のためあらゆる努力をするとともに，たとえ保存が困難な遺跡についても正確な記録を作成し，その活用に努めていく所存であります。この「京都府遺跡調査概報」は，正式の調査報告としてまとめる前に年度ごとに調査結果の概要を報告するために刊行するものであります。既に刊行している「京都府埋蔵文化財情報」とあわせて御活用いただければ幸甚であります。

この報告書をまとめるまでの現地調査では，開発事業関係者はもちろんのこと京都府教育委員会，各市町教育委員会をはじめ関係機関の御協力を受け，さらに，炎天の下，厳寒の中で熱心に作業に従事していただいた多くの方々があります。この報告書を刊行するにあたって，これらの多くの関係者に厚くお礼を申し上げます。

昭和57年3月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

理事長　福　山　敏　男

凡　　例

1.　本冊に収めた概要は，

　　1. 下畑遺跡　2. 土師南遺跡　3. 園部城跡　4. 黄金塚２号墳

　　5. 平安宮跡　6. 内田山古墳　7. 橋爪遺跡

　を対象としたものである。

2.　各遺跡の所在地，調査期間，経費負担者及び概要の執筆は下表のとおりである。

遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1 下畑遺跡	与謝郡野田川町三河内	昭56. 9. 8 ～ 昭56. 9. 11	京都府教育委員会	竹原　一彦
2 土師南遺跡	福知山市土師南	昭56. 7. 17 ～ 昭56. 7. 25	京都府教育委員会	辻本　和美
3 園部城跡	船井郡園部町小桜	昭56. 7. 13 ～ 昭56. 10. 19	京都府教育委員会	水谷　寿克 引原　茂治 岡崎　研一 竹岡　　林 平本　浩樹
4 黄金塚２号墳	京都市伏見区桃山町遠山	昭56. 11. 20 ～ 昭56. 12. 4	京都府教育委員会	久保田健士
5 平安宮跡	京都市中京区西ノ京式部町	昭56. 9. 21 ～ 昭56. 10. 9	京都府教育委員会	石尾　政信
6 内田山古墳	相楽郡木津町内田山	昭56. 9. 2 ～ 昭56. 9. 28	京都府教育委員会	大槻　真純
7 橋爪遺跡	熊野郡久美浜町橋爪	昭56. 8. 10 ～ 昭56. 10. 3	京都府教育委員会	戸原　和人 伊辻　忠司

3.　本冊の編集には，調査課企画資料担当が当った。

目　　次

1　下畑遺跡発掘調査概要…… 1

2　土師南遺跡発掘調査概要…… 4

3　園部城跡発掘調査概要……10

4　黄金塚２号墳発掘調査概要……62

5　平安宮跡（推定式部厨）発掘調査概要……67

6　内田山古墳発掘調査概要……72

7　橋爪遺跡発掘調査概要……78

挿 図 目 次

下 畑 遺 跡

第 1 図　調査地位置図…… 1
第 2 図　調査地平面図…… 2
第 3 図　土層断面柱状図…… 2

土 師 南 遺 跡

第 4 図　周辺遺跡…… 5
第 5 図　調査地位置図…… 6
第 6 図　各トレンチ配置図…… 7
第 7 図　各トレンチ土層断面図…… 8

園 部 城 跡

第 8 図　周辺の遺跡分布図……13
第 9 図　調査地地形図……15
第 10 図　第 1 調査地北壁層序断面図……18
第 11 図　第 2 調査地西壁層序断面図……19
第 12 図　第 1 調査地平面図……21
第 13 図　第 1 調査地 SD 01 実測図……22
第 14 図　第 2 調査地平面図……23
第 15 図　第 2 調査地 SD 09・SA 16 実測図……26
第 16 図　第 2 調査地 SD 24 実測図……27
第 17 図　出土遺物（陶磁器 1）……28
第 18 図　出土遺物（陶磁器 2）……30
第 19 図　出土遺物（土師器）……32
第 20 図　出土遺物（瓦 1）……34
第 21 図　出土遺物（瓦 2）……35
第 22 図　出土遺物（瓦 3）……36
第 23 図　出土遺物（瓦 4）……37
第 24 図　出土遺物（瓦 5）……38

第 25 図　出土遺物（瓦６）……39
第 26 図　出土遺物（古銭・刀装具）……40
第 27 図　出土遺物（埴輪）……42
第 28 図　小山東町宮越採集遺物……44
第 29 図　船井郡城跡分布図……49
第 30 図　写真で見る園部城の遺構(1)……57
第 31 図　写真で見る園部城の遺構(2)……59

黄金塚２号墳

第 32 図　調査地位置図……62
第 33 図　調査地地形図・トレンチ設定図……63
第 34 図　調査地付近地形図（昭和11年）……65

平安宮跡

第 35 図　調査地位置図……67
第 36 図　調査地平面図……68
第 37 図　土層断面図……69
第 38 図　出土遺物実測図・拓影……70

内田山古墳

第 39 図　調査地位置図……72
第 40 図　トレンチ設定図……73
第 41 図　遺構平面および断面図……74
第 42 図　円筒埴輪実測図……75
第 43 図　家形埴輪実測図……76
第 44 図　土馬・須恵器実測図……77

橋爪遺跡

第 45 図　橋爪遺跡周辺遺跡分布図……79
第 46 図　調査地周辺地籍図……80
第 47 図　調査位置図……81
第 48 図　SD 04 出土木製品 ……82
第 49 図　第１～３トレンチ検出状況……83
第 50 図　第４トレンチ検出状況……85
第 51 図　地質柱状図……87

第 52 図　第4トレンチ出土遺物(1)……89
第 53 図　第4トレンチ出土遺物(2)……90
第 54 図　第4トレンチ出土遺物(3)……91
第 55 図　第4トレンチ出土遺物(4)……92
第 56 図　第4トレンチ出土遺物(5)……93
第 57 図　第4トレンチ出土遺物(6)……94
第 58 図　第4トレンチ出土遺物(7)……95

付 表 目 次

園 部 城 跡

付 表 1　船井郡城跡分布一覧表……50

橋 爪 遺 跡

付 表 2　橋爪遺跡の花粉分析結果表(1)……98
付 表 3　橋爪遺跡の花粉分析結果表(2)…… 102

図 版 目 次

下 畑 遺 跡

図版第1　(1)調査地遠景（北から）　(2)調査地遠景（東から）

図版第2　(1) No. 2 土層断面　(2) No. 9 土層断面

土 師 南 遺 跡

図版第3　(1)調査前状況（西から）　(2)調査風景（南東から）

図版第4　(1)B・C地点調査状況（南東から）　(2)B地点調査状況（南から）

図版第5　(1)B地点調査状況（西から）　(2)B地点土層状況

図版第6　(1)A 2 トレンチ調査状況（北から）　(2)Cトレンチ調査状況（北から）

園 部 城 跡

図版第7　(1)調査地遠景（南から）　(2)第1調査地調査前風景（北西から）

図版第8　(1)第1調査地全景（北西から）　(2) SD 01 全景（北西から）

図版第9　(1) SD 01 石組み状況　(2) SD 01 石組み状況

図版第10　(1) SK 02 検出状況（東から）　(2) SK 02・SD 03 完掘状況（南西から）

図版第11　(1) SK 02 遺物出土状況　(2) SK 02 遺物出土状況

図版第12　(1)第1調査地遺物出土状況　(2)第1調査地遺物出土状況

図版第13　(1)第2調査地調査前風景（西から）　(2)第2調査地全景（北西から）

図版第14　(1) SD 09・SA 16 完掘状況　(2) SA 16 柱穴

図版第15　(1) SD 09 全景　(2) SD 09

図版第16　(1) SD 09 埴輪片出土状況　(2) SD 09 埴輪片出土状況

図版第17　(1) SD 24 検出状況　(2) SD 24 全景

図版第18　出土遺物（陶磁器）

図版第19　(1)出土遺物（土師器）　(2)出土遺物（古銭・刀装具・埴輪）

図版第20　出土遺物（軒丸瓦・棧瓦・他）

図版第21　(1)出土遺物（軒平瓦）　(2)出土遺物（丸瓦・平瓦・他）

図版第22　(1)園部城巽櫓（左）・櫓門（右）（南から）

(2)園部城太鼓櫓（船井郡八木町）

図版第23　(1)園部城二重橋御門（亀岡市千代川町）
(2)家老屋敷跡長屋門（船井郡園部町）
図版第24　(1)園部城本丸跡北側石垣　(2)園部城内堀跡
図版第25　(1)園部城古図（上仲喬明氏蔵）　(2)園部城古図（本丸付近）
図版第26　(1)園部舊城郭見取図　(2)園部城郭図

黄金塚2号墳

図版第27　(1)調査地全景（南から）　(2)黄金塚2号墳後円部（南西から）
図版第28　表採埴輪

平安宮跡

図版第29　(1)調査前風景（南から）　(2)トレンチ全景（南から）
図版第30　(1)トレンチ東壁　(2)立合調査風景
図版第31　軒丸瓦，軒平瓦，刻印瓦

内田山古墳

図版第32　(1)調査地全景（東から）　(2)調査地全景（北西から）
図版第33　(1)東辺の周濠（北から）　(2)東辺の周濠（南から）
図版第34　(1)西辺の周濠（北から）　(2)西辺の周濠（南から）

橋爪遺跡

図版第35　(1)第1～3トレンチ全景（北から）
(2)第1～2トレンチ検出状況（北から）
図版第36　(1)第1～3トレンチ全景（南から）
(2)第1トレンチ SD 01・02 検出状況（南から）
図版第37　(1)第2トレンチ全景（東から）　(2) SF 03, SD 04 検出状況（西から）
図版第38　(1) SF 03 断面（西から）　(2) SD 05 断面（北から）
図版第39　(1)第4トレンチ断割り（北西から）　(2)第4トレンチ地層調査（北から）
図版第40　(1)第4トレンチ全景（南西から）
(2)第4トレンチ遺物出土状況（南東から）
図版第41　(1)第4トレンチ遺物出土状況（北から）　(2)えぶり出土状況
図版第42　(1)組み合わせ式木器出土状況（北から）　(2)板・角材出土状況（南から）
図版第43　(1)タゲタ出土状況（東から）　(2)立木根出土状況（東から）
図版第44　(1)土器5出土状況　(2)土器4出土状況

図版第45　(1)第４トレンチ調査風景（北東から）
(2)第４トレンチ埋め戻し風景（北から）
図版第46　SD 04 出土木製品
図版第47　第４トレンチ出土遺物 (1)
図版第48　第４トレンチ出土遺物 (2)
図版第49　第４トレンチ出土遺物 (3)
図版第50　第４トレンチ出土遺物 (4)
図版第51　第４トレンチ出土遺物 (5)
図版第52　第４トレンチ出土遺物 (6)
図版第53　第４トレンチ出土遺物 (7)
図版第54　橋爪遺跡出土花粉化石 (1)
図版第55　橋爪遺跡出土花粉化石 (2)

1. 下畑遺跡発掘調査概要

1. はじめに

下畑遺跡は，京都府与謝郡野田川町字三河内に所在する（第1図）。野田川町は丹後半島の基部に位置し，町の中央部は南から北へ流れる野田川の中流域を占めている。野田川は大江山連峰の赤石岳にその源を発し，野田川町を中心として細長い谷平野（加悦谷）を形成し，名勝天の橋立により画された阿蘇海に注ぐ，全長 16km におよぶ河川である。

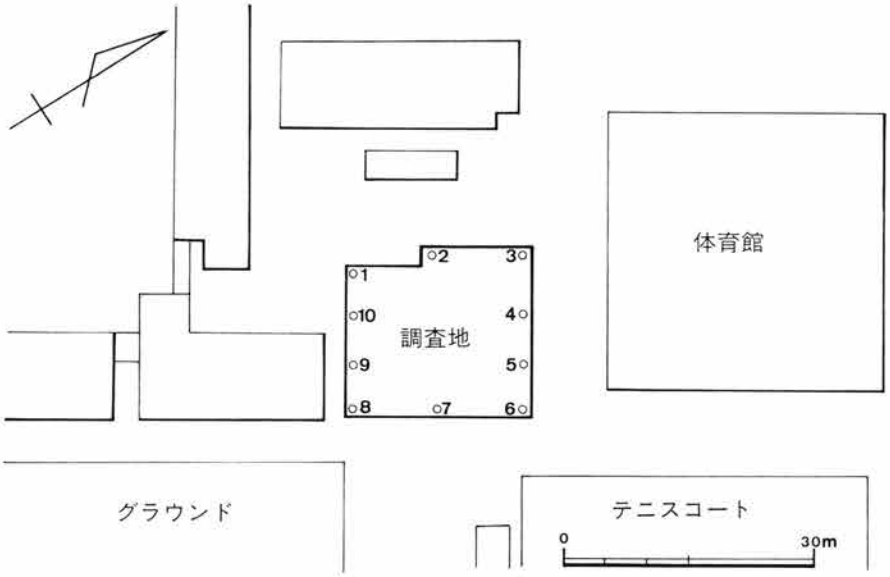
下畑遺跡は，野田川の支流である岩屋川が加悦谷へ注ぎ込む右岸の山脚端に位置する。下畑遺跡の発見は，この地に存在する府立加悦谷高校体育館建設に伴って土中より遺物が採集されたことによる。

今回の調査は，遺跡推定地内で新たに加悦谷高校の校舎増改築が計画され，府文化財保護課との協議の結果，下畑遺跡の確認及び性格を把握するための立会調査が必要であると判断されたため，行われたものである。調査は，建設用地約 440m² を対象とし，昭和56年9月8日から9月11日まで実施した。

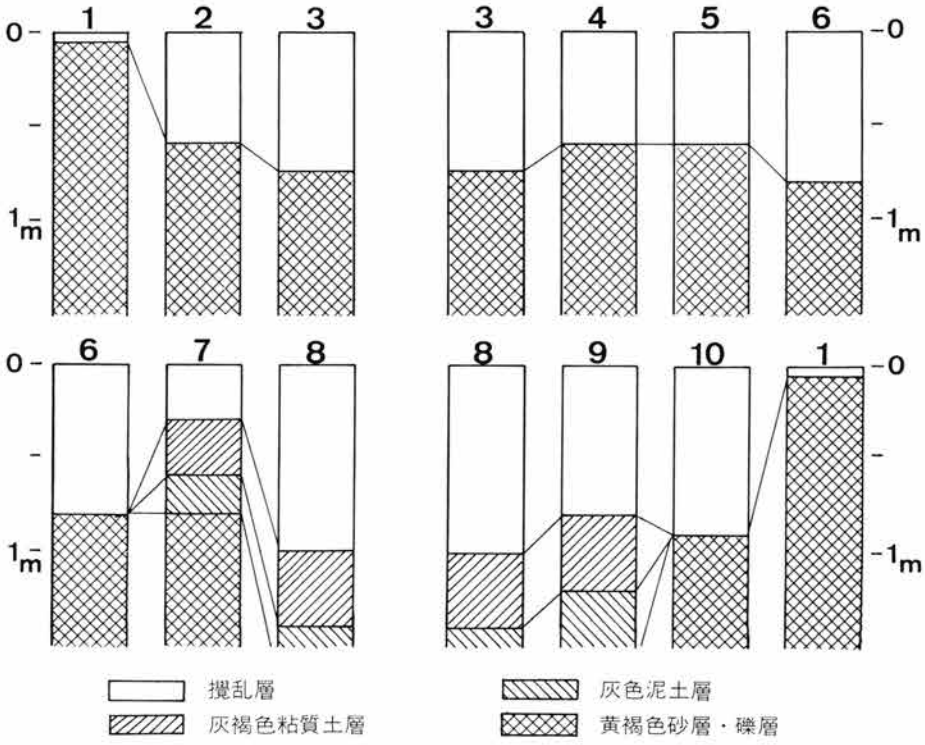
第1図　調査地位置図

2. 調査経過

調査地は同校体育館の真南に位置し，調査は機械掘削作業に並行して実施した。調査地内にはすでに多数のコンクリートパイルが打ち込まれており，断面観察は，基礎工事の関係上，任意の地点（第2図）で実施し柱状図の作成を行った（第3図）。調査地南東部では遺物包含層が認められたが，遺構の存在を確認することはできなかった。このため調査は断面観察と遺物採集のみにとどまった。



第 2 図　調　査　地　平　面　図
（○印，No は土層柱状図と一致する）



第 3 図　土　層　断　面　柱　状　図

3. 調 査 結 果

調査地西壁及び北壁には攪乱層の直下に地山の黄褐色砂層と礫層が認められた。東壁と南壁では攪乱層の下部に灰褐色粘質土層，さらには灰色泥土層もみられた。調査地の西側は山脚がせまり，山裾部は広く削り取られており，校舎建設段階で削平されたことがうかがえる。この削平は調査地内にも認められ，南端部を除く残り約 2/3 が削平を受けていた。南端部でみられた灰褐色粘質土層と灰色泥土層は南側のグラウンド方向に傾斜している。灰色泥土層の存在から，常に水が漏滞水していたことが推察されたが，このことは，工事中でも付近から水が多量に湧き出していたことからも判る。灰褐色粘質土層中には若干の土師器片が存在していたが，その多くは細片であり，土器表面は磨滅が著しかった。また器形も不明であり，確認できたのは黒色土器椀の底部片のみである。底部には糸切り痕がみられ，内面のみを黒色に仕上げている。時期としては12世紀代に比定されよう。

以上の結果から概観してみると，下畑遺跡の存在は今回の調査においても確定するに至らなかった。しかし遺物の出土をみたことから，この付近に遺跡の中心部があるものと考えられる。さらに土層断面の観察から，遺跡が加悦谷高校グラウンド及びその近辺に拡がっている可能性が高いと思われる。今後の周辺調査による下畑遺跡の解明が望まれる。

（竹原 一彦）

2. 土師南遺跡発掘調査概要

1. はじめに

本調査は，府立福知山高校校舎老朽化に伴い，新たに現グラウンド等の空地を利用して，鉄筋コンクリート製の校舎が建設されることにより実施したものである。元来，同校を含めた周辺一帯は比較的緩やかな地勢で，前・後両方の地には遺跡が数多く存在することからも，この地にも遺跡が存する可能性が頗る高かった。このため，建設工事に先立ってまずトレンチによる試掘調査を行い，その後，遺構残存状況如何によっては本格的な発掘調査を実施すべく，昭和56年7月17日より同年7月25日まで試掘調査を実施した。その結果は後述のとおりであり，従って本調査を行っても芳しい成果は得られないものと判断されるにいたった。

なお，調査に際しては，府立福知山高校・西田工業株式会社及び福知山市教育委員会から種々御協力を得た。記して謝意を表します。

（松井　忠春）

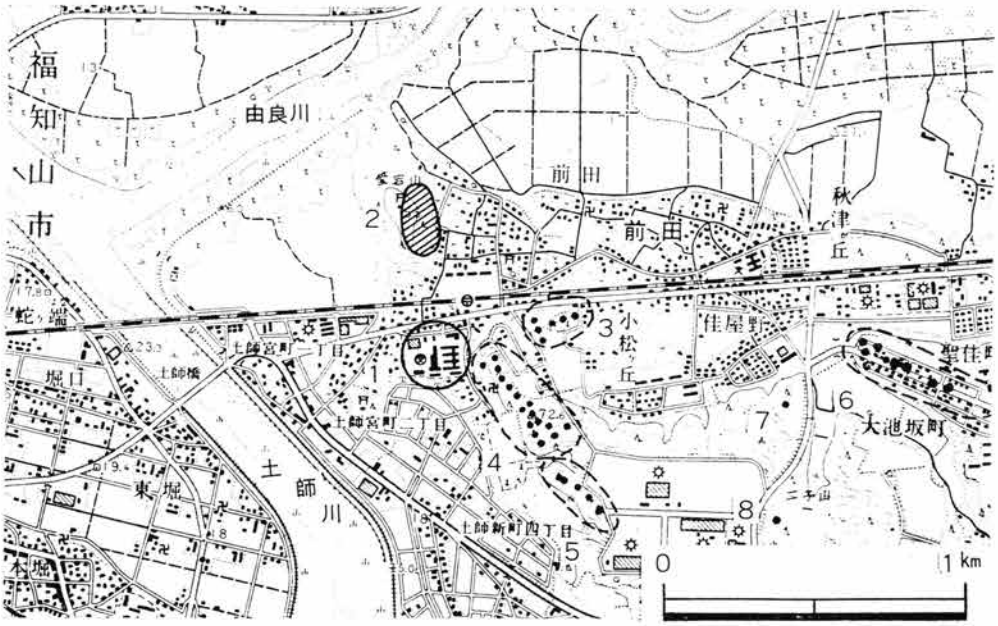
2. 位置と周辺遺跡（第4図）

福知山高校は，福知山市字土師南650番地に所在し，由良川の河川平野に張り出した長田野段丘の北縁部に位置する。標高約25mを測り，平野部からの比高差は10数mである。

当段丘面下の西側で，京都・兵庫両府県境の山間に源を発する土師川が，由良川本流と合流し，由良川は当地点で大きく北へ流路を曲げ福知山盆地を貫流する。このため，平野部においては，幾度となく洪水の危険を被むった。その結果，氾濫原を見降ろす当地点のような段丘縁辺部が，古来より格好の生活の場となって来たものと思われる。

今少し，当校周辺の遺跡をながめると，長田の和田賀[注1]から，旧石器時代のチャート製削器が採集されており，当時既に人々が生活していたことが判明した。一方，段丘の東北縁部にある上野平遺跡[注2]から，縄文時代晩期～弥生時代に属する打製石斧・石鏃類が出土している。ここでは，土掘り具とされる短冊形打製石斧の出土比率が高く，台地面を利用した生産活動が行われていたことがうかがわれる。

弥生時代では，当校のすぐ北の，丁度段丘面が小山のような形で沖積平野に取り残された，愛宕山の北東斜面から中期（第Ⅲ様式）の高杯形土器や台付壺の完形品が出土している[注1]。また，その東に接する岩畑集落周辺の畑地からも，石包丁をはじめとする石器類や中期の土器片が採集されている[注1]。

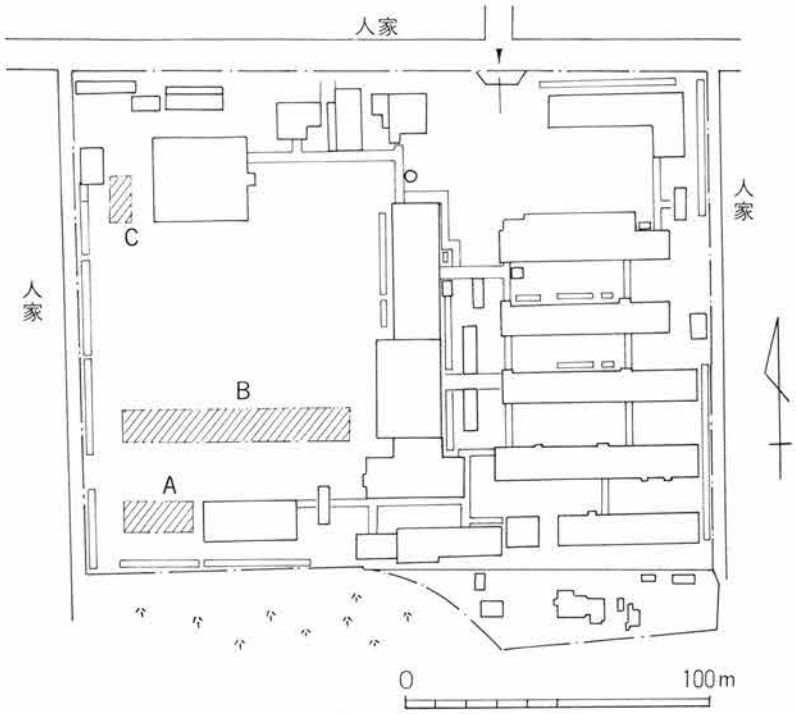


第4図　周　辺　遺　跡

1.土師南遺跡　2.愛宕山遺跡　3.宝蔵山古墳群　4.ゲシ山古墳群
5.南町古墳群　6.中坂古墳群　7.八ケ谷古墳　8.二子山古墳

次の古墳時代には，当校敷地に続く丘陵の東の尾根線上に，ゲシ山古墳群（円墳16基），南町古墳群（前方後円墳1基・円墳3基），宝蔵山古墳群（方墳6基）が所在する。このうち，宝蔵山古墳群が発掘されており[注3]，1～4号墳から弥生時代末～古墳時代初頭にかけての多様な埋葬施設が検出された。ゲシ山古墳群では，埴輪と内部主体に箱式石棺を持つものが確認されている。また，これら古墳群とは離れて所在する八ケ谷古墳[注4]（一辺20mの方墳）でも3基の箱式石棺を内部主体にしていた。ここでは，第1・第2主体部から滑石製の琴柱形石製品が出土している。現在のところ，比較するにはわずかな調査例しかないが，埋葬施設のあり方など，同じ福知山盆地内に所在する他地域の古墳とは，若干異なった内容をもつものが集中している。また，古墳時代後期にも，やや東方に位置するが，中坂5号墳の第3主体部・同7号墳や仏山1号墳から横穴式粘土室と呼ばれる特異な埋葬施設が検出されている[注5]。横穴式石室の採用が稀薄な地域であり，今後被葬者の性格など問題となろう。

律令時代には，当地域は天田郡10郷の内[注6]，土師郷（ハニシ）に属しており，周辺には「土師」「土（ツチ）」など関連地名が遺存する。福知山盆地を中心にした地域には，宗部・物部等，古代氏族の部民に因む郷名が比較的多く散見するが，当地は土師氏の部曲が置かれた所とされる。当校地の西方崖下に土師氏の血脈をひく菅原道真を祭る天満宮が鎮座するのもその縁に依るものである。



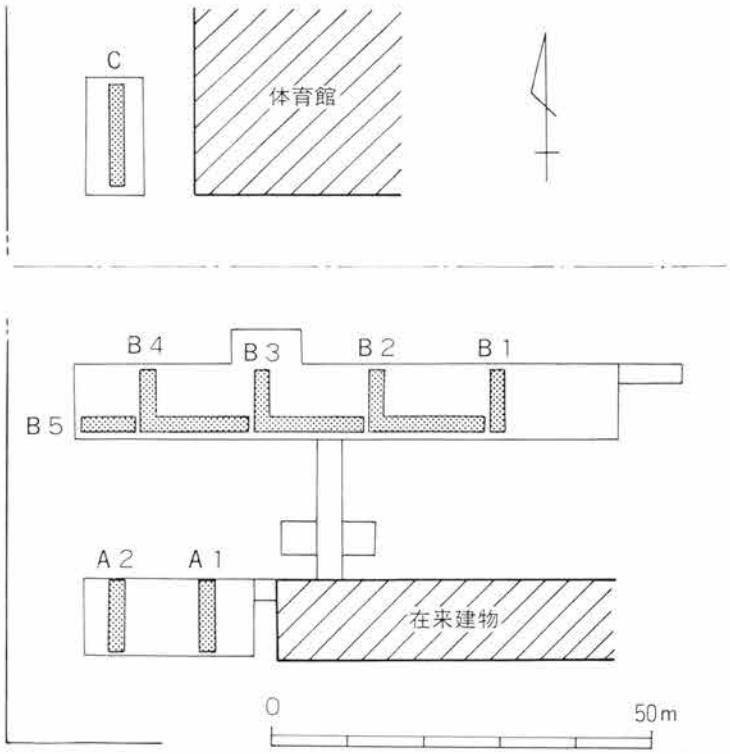
第5図　調　査　地　位　置　図

3. 調査の経過

当校地の周辺からは，従前，土師器片や，須恵器片等が採集されており，また，その立地環境からも，校地内に何らかの遺構・遺物が埋没するものと予想された。このため，学校校舎建設に先だち，事前に発掘調査を行い遺構の有無を確認することになった。今年度に新設される校舎は3棟で，これらは，現在グラウンドとして使用されている校地西側部分に計画された(第5図)。そこで，調査に当っては，それぞれの建設予定地を南から順にA地点，B地点，C地点と呼ぶことにした。まず，各地点の土層の状態や遺構の有無を把握するための試掘トレンチを入れることにし，2m幅の南北トレンチを予定敷地幅いっぱいまで，合計7本設定した(第6図)。その後，A地点から順次，重機を用いて上面のグラウンド整地土を除去し，以下，遺構の確認作業を行った。次に各地点の調査結果の概略について簡単に述べることにする。

4. 各地点の調査の概略

A地点　A地点は，今回調査を実施した内では最も南側に位置し，校地の境界塀をへだてて南側は，崖状の急斜面となっている。2本のトレンチ（A_1・A_2）の調査結果では，最上層は，



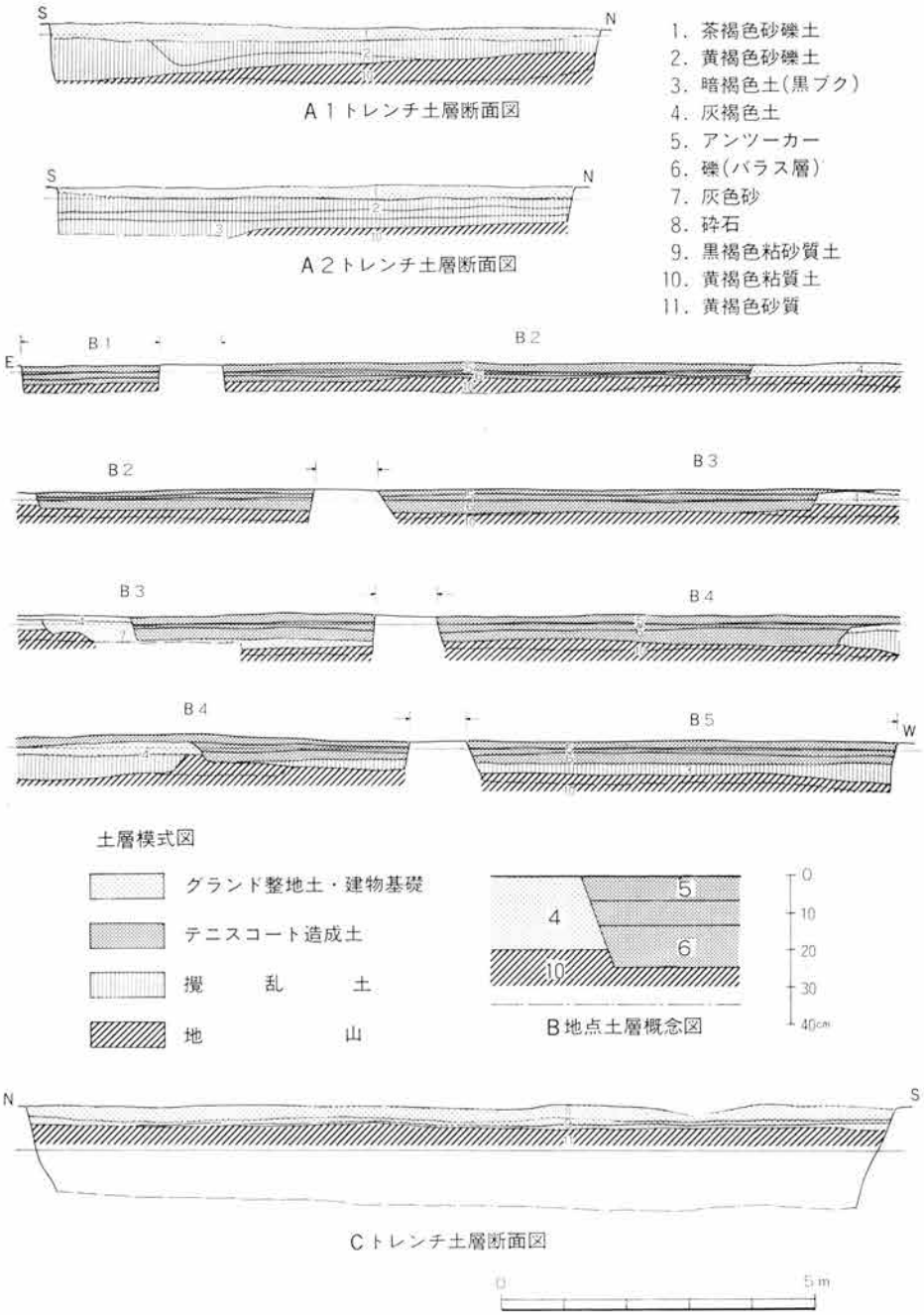
第6図　各トレンチ配置図

グラウンド造成時の整地土で厚さ約20cm程あり，以下，約20～80cmまで瓦礫やレンガ屑を含む黄褐色バラスの攪乱土であった。地山は，黄褐色粘質土（洪積層）で，両トレンチとも，地山面は南側へ傾斜している。グラウンド造成前の旧地形を示すものである。

B地点　B地点は，A地点の北約18m離れ，今回，予定の調査地点の内では，最も広い面積を占めている。トレンチは，各12mの間隔で4本設定し，さらに各トレンチの南端を結ぶ形に東西方向にトレンチを拡張し，調査地全域にわたって土層の観察を行った。

当地点は，これまでテニスコートに使用されていたため，今回の調査結果でも，グラウンドの整地やテニスコートの基礎工事により，地山面上は大幅な削平を受けていた。地山面は全体に西側にゆるく下降しており，西側の深い箇所の一部では，その上面に黒ボクと呼ばれる黒色火山灰土壌の堆積が認められた。しかし，ここでも，A地点と同様，ガラス片や現代の塵介が混在しており，校地造成に際しての置土とわかった。なお，B_1トレンチの北端で部分的に深掘りを行った。結果は地表下約1.2mで湧水し，この付近では地下水脈は浅い所を通ることが確認された。

C地点　C地点は，現在の体育館の西側に隣接し，今回，機械室の建設が予定されている。



第7図　各トレンチ土層断面図

調査地の中央に，幅２m，長さ13mのトレンチを入れた。上面にはコンクリートの基礎があり，その下の栗石を取り除くとすぐ茶褐色の地山が現われた。C地点の地山土は，A・B地点のそれが砂礫混じりの洪積層であるのに対し，茶褐色のやわらかい砂質土である。その後，地表から約1.5mまで掘り下げたが，土層の変化は特に認められず，遺物等も一切出土しなかった。

以上述べたように，今回の調査対象となった３地点については，いずれも，当初予想していた遺構・遺物等は全く検出されなかった。

5. ま　と　め

今回調査を行ったグラウンド面は，現在木造校舎群が建つ地点より，一段低い地形を呈している。また，当地の北・南および西側の校地の境界線から外側は，いずれも，そこから地形が急激に下がる。周辺の地形と今回の調査の結果を合わせてみると，当校地は，東から西に派生する段丘先端部の稜線を削り取って造成されたことがわかる。今少し福知山高校創立期の姿を記すと，明治34年に京都府第３中学校として創立され(翌35年府立第３中学校に改称)，現グラウンドはその当時からのものである。開校以前は，墓地や野原が広がり，綾部方面へ通じる野道が，今のグラウンドを東西に横切る位置にあった。現在，グラウンドの北東隅にある，高さ２m程の築山は，松園山（小円山）と呼ばれ，その当時の名残りといわれる。(注7)

既に何回か述べたように，当丘陵上に存在した可能性が大きい古墳ないし，集落跡に係わる遺構等は，これら学校用地の造成の際，大幅に削平されてしまったものと推測される。

（辻本　和美）

（注１）『福知山市史』第１巻 福知山市史編さん委員会　1976

（注２）『上野平遺跡発掘調査報告書』京都府教育委員会　1973

（注３）堤 圭三郎「宝蔵山古墳群発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報（1967)』京都府教育委員会）1976

（注４）前掲注(1)。平良泰久「八ケ谷古墳出土の琴柱形石製品」(『京都考古』第２号）1974

（注５）安藤信策・平良泰久「中坂古墳群発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報（1972)』京都府教育委員会）1972

（注６）六部，土師，宗部，省部，和久，拝師，庵我，川口，夜久，神戸の各郷。

（注７）その後，大正７年に府立福知山中学校に改められ，昭和22年府立福知山高校に改称された。現在の木造校舎は，昭和13年に全面改築されたものである。以上は，堀 宗男氏ならびに福知山高校教諭川端二三三郎氏，福知山市史編さん室の御教示による。

3. 園部城跡発掘調査概要

はじめに

園部城跡は，京都府船井郡園部町小桜97に所在し，低い丘陵地に築城された近世城郭の一つである。『京都府遺跡地図』には，「園部町遺跡番号31」として登載された城跡に該当する。

園部の町は，国鉄園部駅より北西約2kmの少し離れた所に位置し四周を山で囲まれた人口約1万5千の風情のある町である。その中心部に近い所に小高い丘があり，この地に元和5年（1619）但馬の出石城主小出信濃守吉親によって園部城が築城された。現在では，京都府立園部高等学校が園部城本丸の跡地に建てられてはいるが，櫓門・巽櫓・石塁・濠がいまだ現存し，その当時の面影をただよわせている。

さて，園部城跡の発掘調査は，京都府立園部高等学校の増改築工事に伴う事前の発掘調査として，京都府教育委員会管理課から同文化財保護課を経て当調査研究センターに依頼があった。そこで，当調査研究センターでは，再三にわたる協議や現地視察を行ったうえで，文化財保護法第98条第2項の規定に基づき「埋蔵文化財発掘調査届出書」を昭和56年6月22日付けで文化庁長官あて提出し，同年7月13日より現地調査に入った。

現地調査は，園部高等学校の増改築工事に先立ち，同予定地内に遺構や遺物が存在するか否かを確認し，記録を作成することを主たる目的として実施した。調査地が教室棟増築予定地と本館改築予定地の2箇所に分かれていること，旧本館解体工事が現地調査と並行して行われること等により，調査を2次に分けて行うことにした。すなわち教室棟増築予定地を昭和56年7月13日より同年8月26日まで，本館改築予定地を同年8月26日より同年10月20日まで実施した。また，同年9月5日，現地説明会を開催し，調査関係者や協力機関ならびに母校の文化財に興味を持つ園部高校の学生諸氏等多くの方々が参加され，調査の成果を報告した。また調査終了にあたって学校関係者に対する説明を行った。

発掘調査にあたっては，当調査研究センター調査員水谷寿克・引原茂治が担当して行ったが，城郭跡の調査では考古学的な調査以外に文献史学的な調査が特に必要となり，大阪経済法科大学講師の竹岡 林氏に依頼し，専門的な立場から御指導を賜わった。

現地調査にあたっては，上記引原茂治が中心となり作業の進行をはかったが，下記の方々に御協力いただいた。深く感謝の意を表したい。

調査協力者　　京都府立園部高等学校・園部町教育委員会・京都府教育庁指導部文化財保

護課・京都府南丹教育局・同志社大学・永光　尚（口丹波史談会）・水野建設株式会社・岡崎組・アジア航測・京都府立淇陽学校

調査補助員　平本　浩樹・岡崎　研一・才本　好孝・三原　　進・原沢　則広
斉藤　雅彦・沢　　裕俊・大村　武之

整理作業員　木下　勝義・船越　幸人・石原　俊子・岡崎　法子・加藤百合子
斉田　英子・酒井　信子・末広　春美・田宮　睦子・中野あけみ
兵頭　真千・物部留美子・山本　弥生・吉岡みよ子

現地作業員　中西　　宏・片山　　茂・桐野　鶴吉・田井　俊雄・谷口　吉信
井尻　照子・大家　和子・河村　清子・杉森　和子・杉森　弘子
杉森　房子・谷山美智子・内藤きよ乃・野口　いと

なお，中西　宏氏には調査事務員としても調査を援助していただき，特に感謝したい。
この報告書の作成にあたっては，引原茂治が編集を行い，下記の者が執筆を行った。

はじめに　水谷寿克
第1章　発掘調査
1. 位置と環境　平本浩樹
2. 園部城の概要　引原茂治
3. 調査経過　引原茂治
4. 層序　引原茂治
5. 遺構　平本浩樹
6. 遺物　陶磁器・土師器・瓦・金属製品　引原茂治
埴輪・踏査採集遺物　岡崎研一
7. 小結　引原茂治
第2章　園部城の背景　竹岡林（水谷寿克）

第1章　発　掘　調　査

1.　位置と環境（第8図）

丹波山地の東側を水源とする大堰川は，園部盆地で園部川となって西流し，その流れを東南に転じて亀岡盆地を貫流し，京都盆地で淀川に合流する。園部盆地は大堰川の分水界の南部に位置する小盆地である。園部盆地には，園部川の支流として半田川・陣田川・天神川が

あり，いずれも丘陵と丘陵の間の狭小な水田地帯を流れており，木崎町付近で園部川と合流する。

調査対象地である園部城跡が位置する高台は，口人・半田を流れる半田川と園部川との合流地点から南側約250m に位置する。現在この高台の東側は，民家や商店街によって旧地形の面影は殆ど残っていないが，おそらく独立丘陵であったと思われる。

園部町には縄文時代から中・近世にいたる遺跡が散在している。そのうちで，垣内古墳（5）は全長84mの古墳時代前期の前方後円墳である。主体部は粘土郭で，鏡・石釧・車輪石などが出土した。[注1] 中畷古墳は全長77mの前方後円墳で，直刀・筒形銅器・須恵器片が出土している。

このような代表的古墳の他に，各所に群集墳が散在している。これらの中には，桜池古墳群（7）・小山古墳群（14）・穴武土古墳群（10）・温井古墳群[注2]（7）などがある。これらの古墳群を構成するのは，いずれも円墳である。

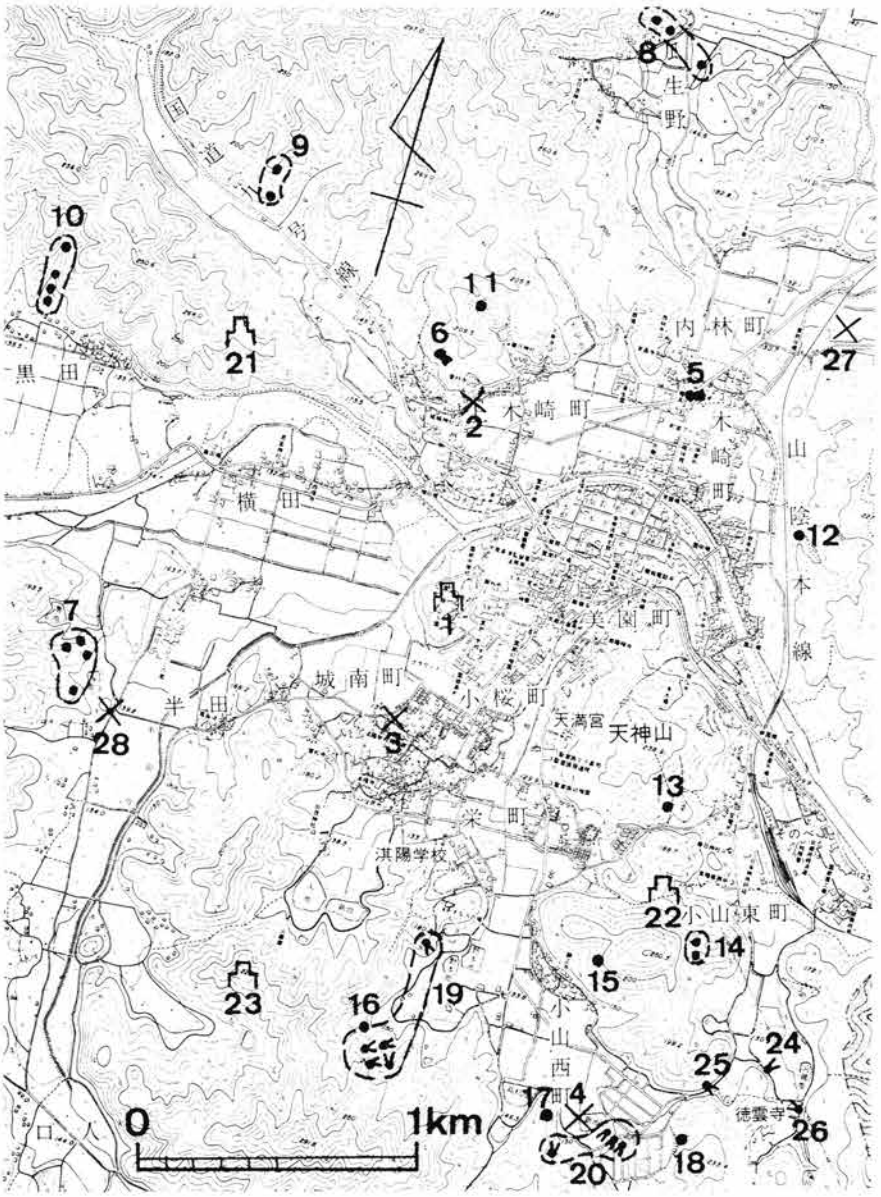
園部町内には多くの須恵器窯跡が分布している。代表的なものとしては桑ノ内窯跡群・大向窯跡群である。桑ノ内窯跡群は，須恵器窯5基が確認されている。古墳時代後期から奈良時代前期にかけてのものである。大向窯跡群は，須恵器窯5基が確認されている。古墳時代後期のものである。ここは先年灰原の発掘調査が行われている。[注3] これらの須恵器窯跡は，園部町南側の小西山一帯に集中している。なお，園部町内には奈良時代以後の窯跡がなく，その点，その時期以降隆盛をみる亀岡市の篠窯跡群との関連が注目される。

中世の遺跡としては，数か所の城跡があげられる。園部城跡近辺のものとしては，まず黒田城跡（21）があげられる。丹波守護代片山氏の居城である。現在，郭跡・石塁を残している。城としては中型である。小山城跡（22）は，小型単郭式の山城で，山城としては古い形態をもっている。荘林氏の居城という。大村城跡（23）は小型の山城で，天守台の祖形とみられるものが残る。田中氏の居城という。

近世の遺跡としては，今回の調査地である園部城跡（1）がある。元和5年（1619）から同7年（1621）にかけて小出吉親によって築城されたもので，現在，櫓門・巽櫓・石垣・濠などが残る。

2.　園部城の概要

園部城は元和5年（1619）国替によって但馬国出石から丹波国園部へ移封された小出吉親によって築城が始められ，元和7年（1621）に完成したもので，本丸に天守閣を持たない陣屋形式の城である。以後幕末まで約250年間，園部藩主小出氏の居城となった。園部藩最後の



第 8 図　周 辺 の 遺 跡 分 布 図

1. 園部城　2. 宮ノ口遺跡　3. 城南町遺跡　4. 滝谷遺跡　5. 垣内古墳　6. 中畷古墳　7. 温井古墳群　8. 瓜生野古墳群　9. 尾谷古墳群　10. 穴武土古墳群　11. 宮ノ口古墳　12. 向川原経塚　13. 天神山古墳　14. 小山古墳群　15. 大垣内古墳　16. 桑ノ内古墳　17. 滝谷古墳　18. シヤノ木古墳　19. 桑ノ内窯跡群　20. 大向窯跡群　21. 黒田城　22. 小山城　23. 大村城　24. 徳雲寺窯状遺構　25. 灰原露出地　26. 窯状遺構　27. 善願寺遺跡　28. 半田遺跡

藩主である小出英尚は，慶応3年（1867）宮中准后殿を守護し京中見廻役につき翌年1月西園寺公望を総督とする山陰鎮撫軍が丹波に入ると直ちに勤皇方に従った。そして同月から翌明治2年（1869）8月にかけて園部城の増改築を行っている。万一勤皇方が負けた場合には天皇の行幸をあおぎ仮行在所にするためとも，京都を守衛するためともいわれる。現在本丸跡に残る櫓門・巽櫓および城壁はこの時の造作によるものといわれる。

この小出氏の園部城以前に荒木山城守氏綱の薗部城が古記録に記されている。天正6年（1578）に織田方の明智光秀・滝川一益・丹羽長秀などによって攻められ落城している。この荒木氏の薗部城の所在地については諸説があるが，そのうちの一説に，小出氏の園部城と同地とするものがある。(注4)

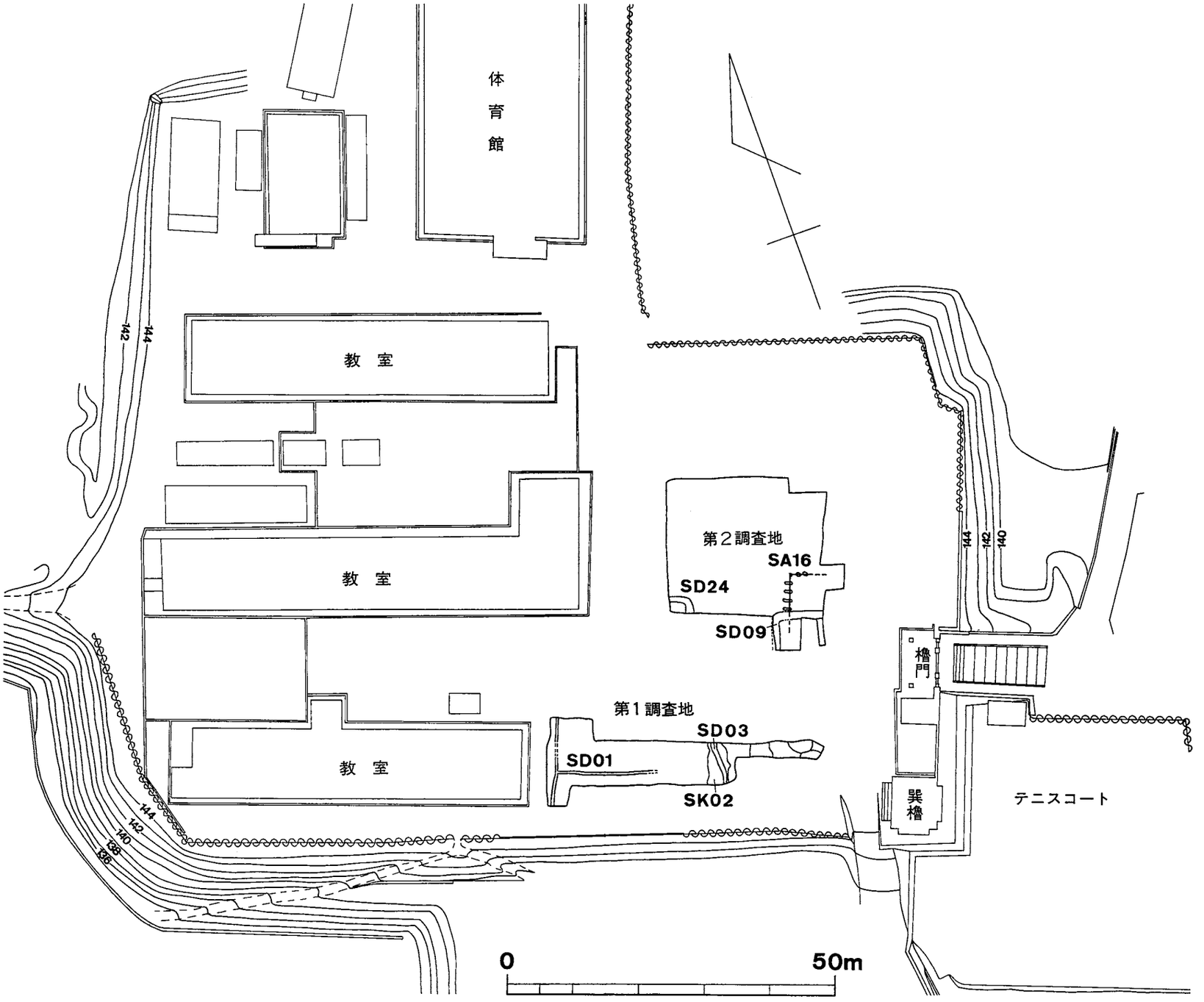
3. 調査経過

園部城跡は，園部町市街地南西側の小麦山丘陵一帯をその範囲とする。今回の調査地である本丸跡は，小麦山南東側の高台で，標高は約145mである。本丸跡は明治20年に船井郡立高等小学校が建設されて以来，学校敷地となり，現在は京都府立園部高校の敷地となっている。今回の調査はその校舎増改築工事に伴うものである。教室棟および本館の二棟が建設される予定なので，発掘調査はこれら2か所を対象として行った。

現地調査は，昭和56年7月13日から開始した。本丸跡主要部の地形測量と掘削とを並行して行った。発掘調査地は，教室棟建設予定地を第1調査地・本館建設予定地を第2調査地と名付けた。掘削にあたっては，学校敷地となってからの盛土が固くしまっているので，その盛土の除去には重機を使用した。それぞれの調査地の方向および地区割りは，建築予定建物にあわせた。

掘削は，空地となっていた第1調査地からはじめた。まず建築予定建物の方向にあわせて約28m×7mの範囲およびそれに続けて東側に13m×2mの試掘トレンチを重機によって掘削し，その後人手で掘削・精査した。また調査途中で一部拡張した。遺構の残存状況はきわめて悪く，調査地全体にわたって旧校舎の基礎などで攪乱されていた。また，これまでの校舎建築によってかなり削平されている様子で，本丸御殿に関する建物の礎石などは検出できなかった。

この調査地での検出遺構は，園部城関係のものとしては，石組み溝（SD 01）・廃城時に不用の瓦などを捨てたとみられる瓦溜り（SK 02），古墳時代の遺構として，SK 02 下から検出した溝状遺構（SD 03），他に用途不明の土壙状遺構（SK 04～07）である。出土遺物は，SK 02 から出土した多量の瓦片をはじめ，陶磁器・土師器・古銭・刀装具などの近世遺物，SD 03


体育館
教室
教室
教室
第2調査地
SA16
SD24
SD09
第1調査地
SD03
SD01
SK02
櫓門
巽櫓
テニスコート
144
142
140
138
136
0
50m

第9図　調　査　地　地　形　図

から出土した古式土師器とみられる土師器片がある。

この調査地で，当初予定された園部城の遺構の他に SD 03 が検出されたことにより古墳時代の遺跡が複合していることが想定された。

第2調査地は，旧本館の取りこわしの終了を待って掘削を開始した。この調査地も第1調査地と同様に旧校舎の基礎などで攪乱され，かなり削平されている様子であった。この調査地は，古絵図によると本丸御殿大玄関付近および主要建物敷地の一部にあたるが建物の礎石などは検出されなかった。建築予定建物の方向にあわせて約20m×24mの範囲の盛土を重機によって除去し，その中に井の字形にトレンチを設定して人手で掘削・精査した。

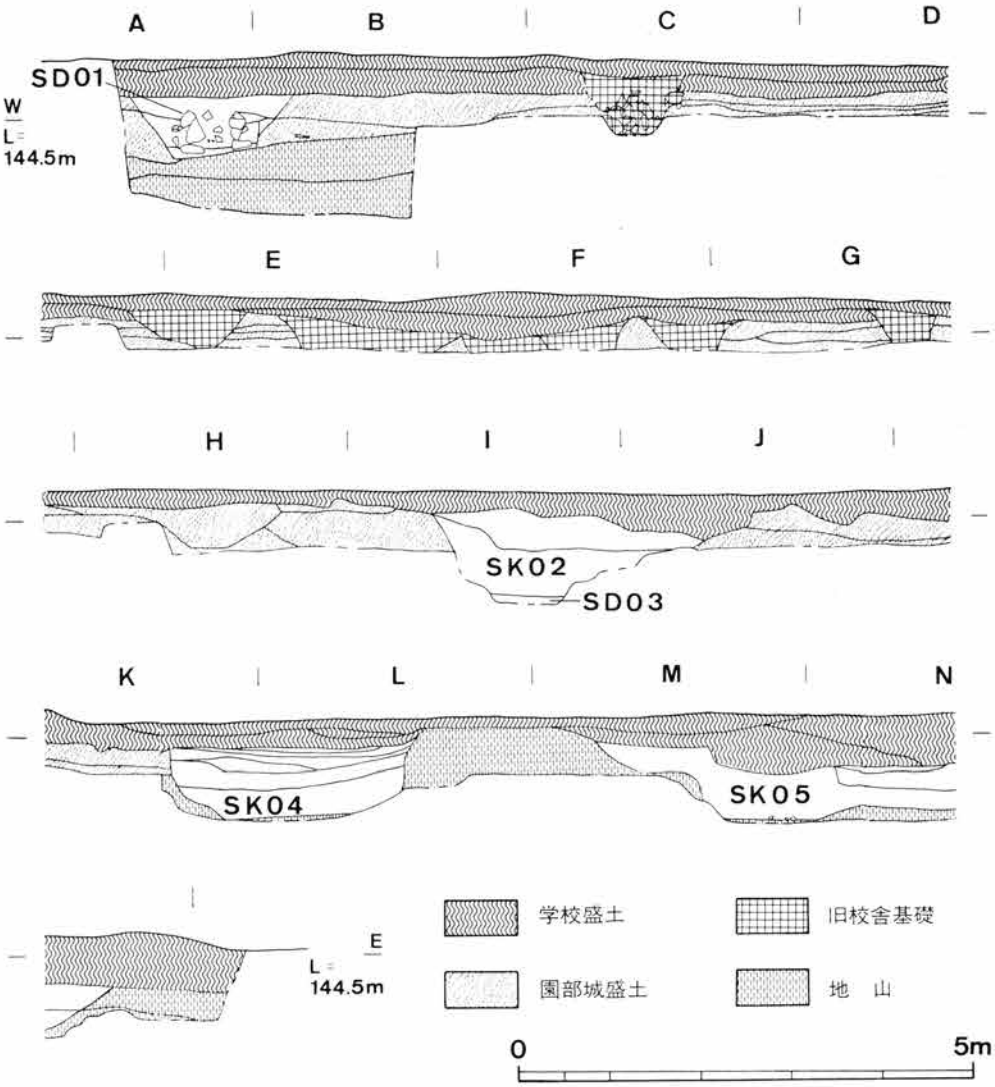
この調査地での検出遺構は，園部城関係のものとしては塀跡 (SA 16)，古墳時代のものとしては方墳の周溝 (SD 09・SD 24) である。SD 09 に関しては，調査地南側を校舎建設で掘削される範囲までトレンチを拡張して確認した。出土遺物は，削平のためか，近世遺物は瓦片・陶磁器が少量出土したのみであったが，SD 09 からは多量の埴輪片が出土した。SD 24 からも埴輪片・土師器片が出土し，また園部城築城時にこれらの古墳を削平して盛土した層からも多量の埴輪片が出土した。

10月20日に器材の撤去をして現地調査を終わった。なお9月5日に関係者・園部高校の教職員および生徒を対象とした第1調査地の現地説明会，10月19日に学校関係者に対する第2調査地の説明を行った。

なお12月22日に，関連遺跡の踏査を行った。これは，第2調査地より出土した埴輪片に関するものである。先年同志社大学考古学実習室によって踏査され，埴輪窯の可能性があると報告されている徳雲寺窯状遺構(注5)から採集された埴輪片に，第2調査地出土のものと類似のものがあることから，この地点を中心に行った。この徳雲寺窯状遺構は，園部町小山東町宮越に所在する。ここでは，同志社大学の踏査以後の改変によるものか，明確な灰層や落ち込みは確認できず，また遺物も採集できなかった。ただ，この下手の水田から須恵質の埴輪片1片・7世紀初頭頃の須恵器片数片を採集した。採集遺物については，遺物の項を参照していただきたい。踏査の結果では，埴輪窯跡と断定するまでにはいたらなかった。しかし，園部町内には古墳時代の須恵器窯跡が数多く確認されており，埴輪窯の存在も充分推定し得る。また，今回の踏査では，灰原もしくは窯状遺構とみられるもの (第8図25・26) も確認した。

4. 層　　序

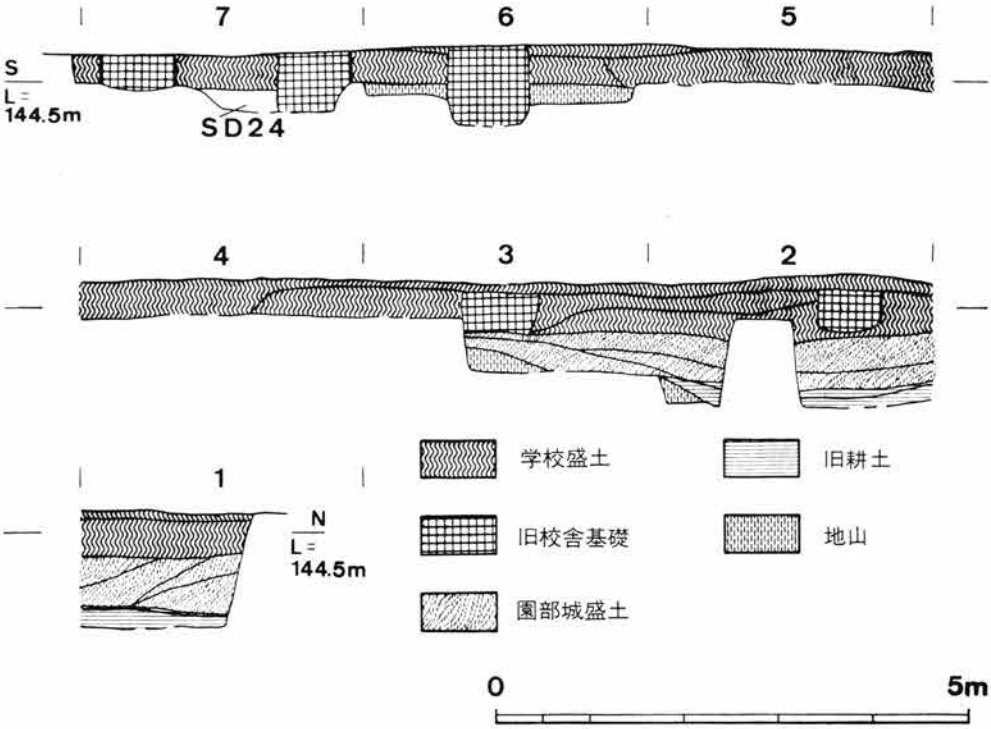
第1・第2両調査地の表面は，層厚約60～30cmの学校敷地となってからの盛土におおわれている。非常にかたくしまっており，少なくとも2回以上盛土されている様子である。第1



第10図　第1調査地北壁層序断面図

調査地の盛土下層は，廃城時の整地による堆積土と築城時の整地盛土とが続くが，攪乱などで複雑に乱れており同一時間面でとらえることが困難であったので，大きく園部城盛土としてとらえた。層厚は約80～30cmである。この層が残存している箇所では，遺構がこの層から切り込んでいることが確認できた。この層からは多量の遺物が出土したが，特に焼土状の黒色土からは，土師皿・古銭などが集中的に出土した。この層の下層は黄褐色粘質土および赤色礫質土の地山となる。

第2調査地では，学校盛土の下層は園部城築城時の盛土となる。さまざまな土質のうすい



第11図　第2調査地西壁層序断面図

層が縞状に堆積している。近世遺物を全く含まない。この層中からは，古墳を削平して盛土したことを示すかのように多量の埴輪片が含まれていた。また，中世の土師皿片1個体分も含まれていた。この層は調査地南側にはみられず，3地区以北に残存している。層厚は北側で約70cmである。この下層には，灰褐色の層がほぼ平行に続いている。一部に畔もしくは畝とみられる台形の隆起部分があり，築城以前の耕作土とみなされる。この層は2地区以北に残存している。この下層は第1調査地と同様に黄褐色粘質土および赤色礫質土の地山となっている。

第1・第2両調査地の状態から，園部城築城以前の旧地形は，第1調査地と第2調査地の間を稜として，小麦山から東側へのびる丘陵地であり，その南側は急斜面となり，北側はなだらかな斜面であったと推定される。そして，その北側のなだらかな斜面は，周囲の地形からみて水田には適さず，畑地として利用されていたものであろう。

5. 遺　　構

今回の調査地は，学校建築によって削平されたり基礎などで攪乱されたりしているので遺

構の残存状態は悪かった。また，園部城本丸御殿の様相を示す建物礎石などは残存しておらず，その詳細は確認できなかった。

園部城に関係する遺構としては，第1調査地では石組み溝 (SD 01)・廃城時に不要になった瓦などを捨てたとみられる瓦溜り (SK 02)，第2調査地では，塀跡とみられる柱穴群 (SA 16) である。

また，今回の調査においては，当初予想していなかった古墳時代の遺構を確認した。第1調査地では，SK 02 底部から検出された溝状遺構 (SD 03)，第2調査地では方墳の周溝の1部 (SD 09・SD 24) である。

この他に，第1調査地で検出した土壙状遺構 (SK 04～07) のようにその性格の不明なもの，第2調査地で検出した土壙 (SK 08・SK 13) のように，学校敷地となってからのゴミ捨て穴とみられるものがある。

また，近世園部城と同地に存在したと推定されていた荒木山城守の中世薗部城に関しては，それに関連する遺構は検出されなかった。

第1調査地（第12図）（図版第8の1）

(1)　石組み溝 (SD 01)（第13図）（図版第8の2）

本調査地西半部にT字形にのびる。東西方向約14m・南北方向約13mを検出した。東方向延長部は削平されている様子である。残存状態のよい箇所で，幅約50cm・深さ約40cmを測る。この溝は東側および北側の底面が高く，西に向かってまた南に向かって低くなっている状況で，本丸南側内堀への排水を目的としたものであろう。またこの溝の東方向延長は巽櫓東側に現存する側溝と合致する。SD 01 が巽櫓東側溝と続いていたものかということに関しては不明であるが，同一の計画性をもっていることはうかがえる。

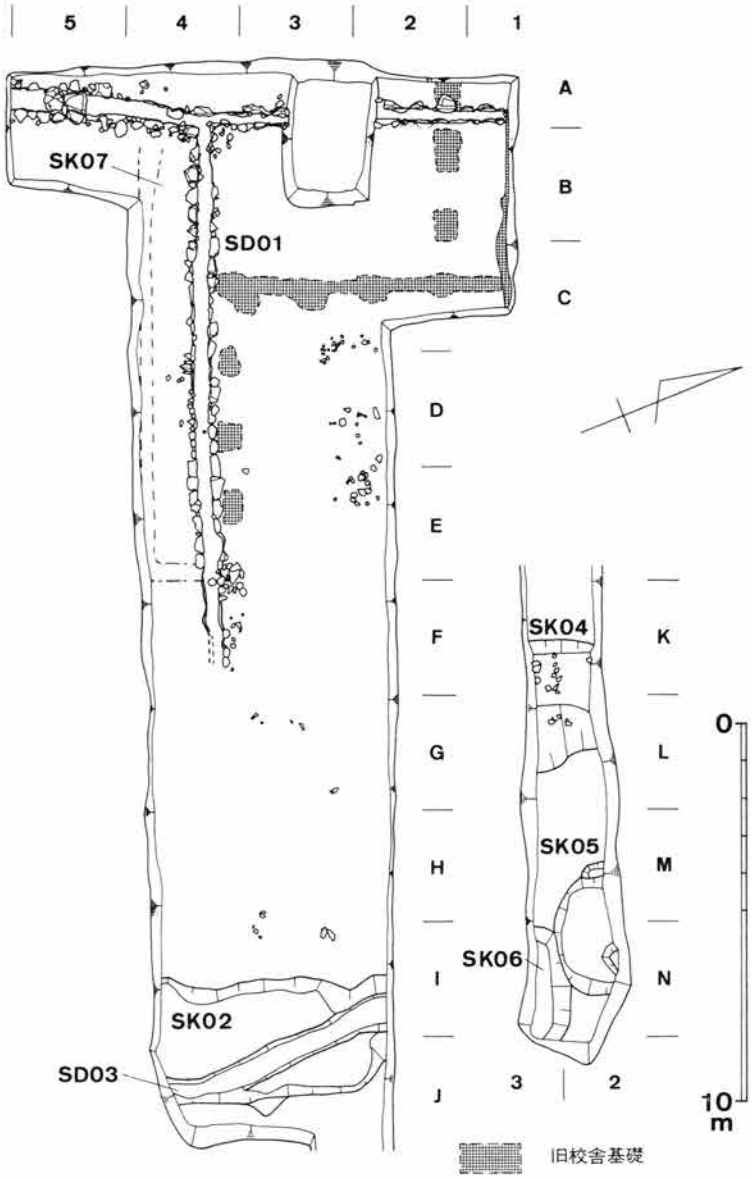
この溝の構築にあたっては，溝幅の約2倍幅の掘方をもうけ，底部に粘土をしいて，側壁の石組みと裏ごめを交互に行っている様子である。

この溝の埋土からは江戸時代後期から明治時代にかけての陶磁器片・瓦片が出土した。

また，この溝の下方から土壙状遺構 (SK 07) を検出した。埋土から江戸時代後期の陶磁器片・近世瓦片が多量に出土した。この SK 07 はあきらかにこの溝に先行するものであるが，遺物からみてあまり年代差がみとめられない。S D01を構築するために埋められたものであろうが，SK 07 自体の性格は不明である。

(2)　瓦溜り (SK 02)（図版第10）

本調査地内中央よりやや東側で検出した。幅約3.3～2.1m・深さ約60cmを測る。多量の

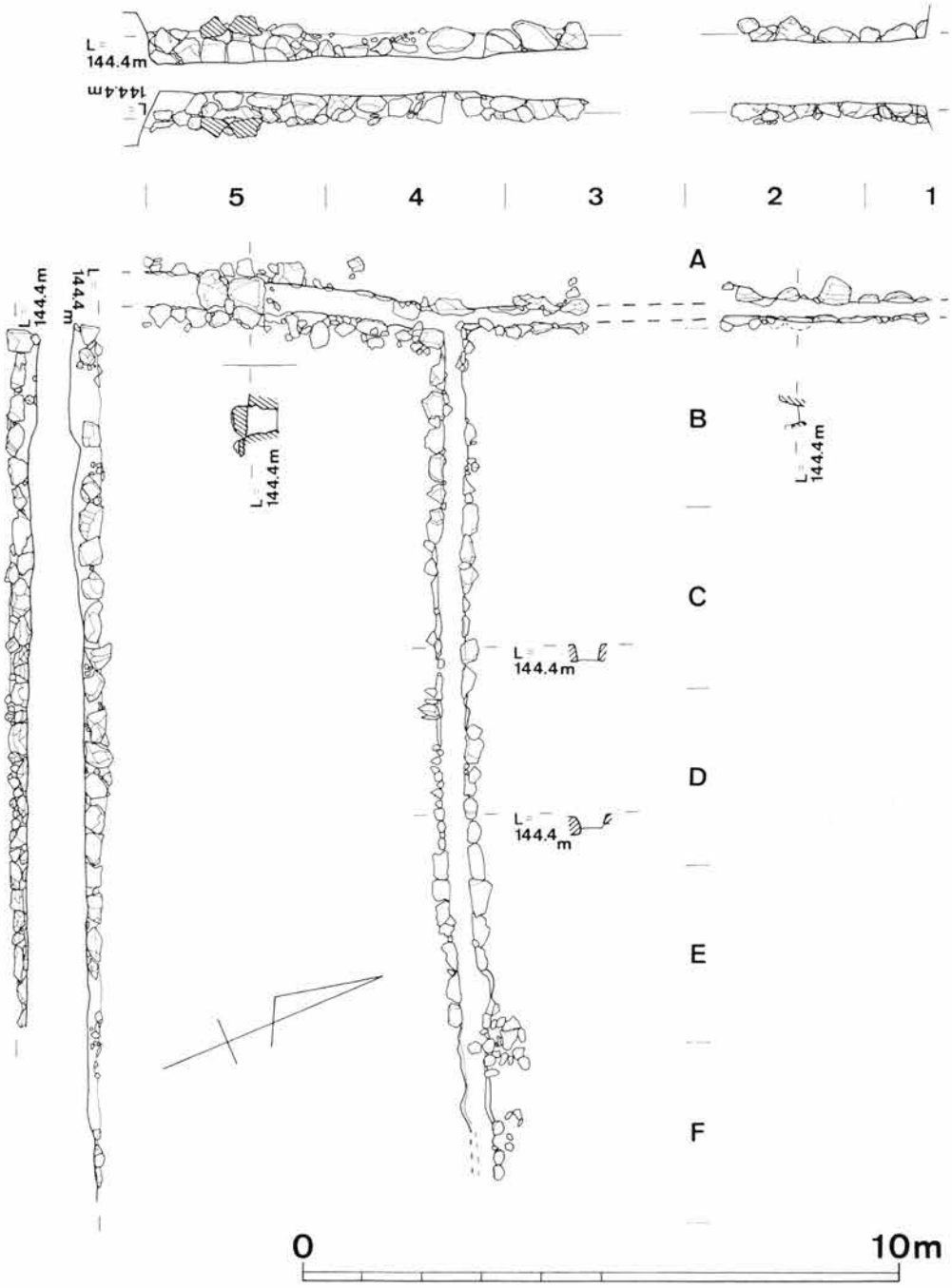


第 12 図　第 1 調 査 地 平 面 図

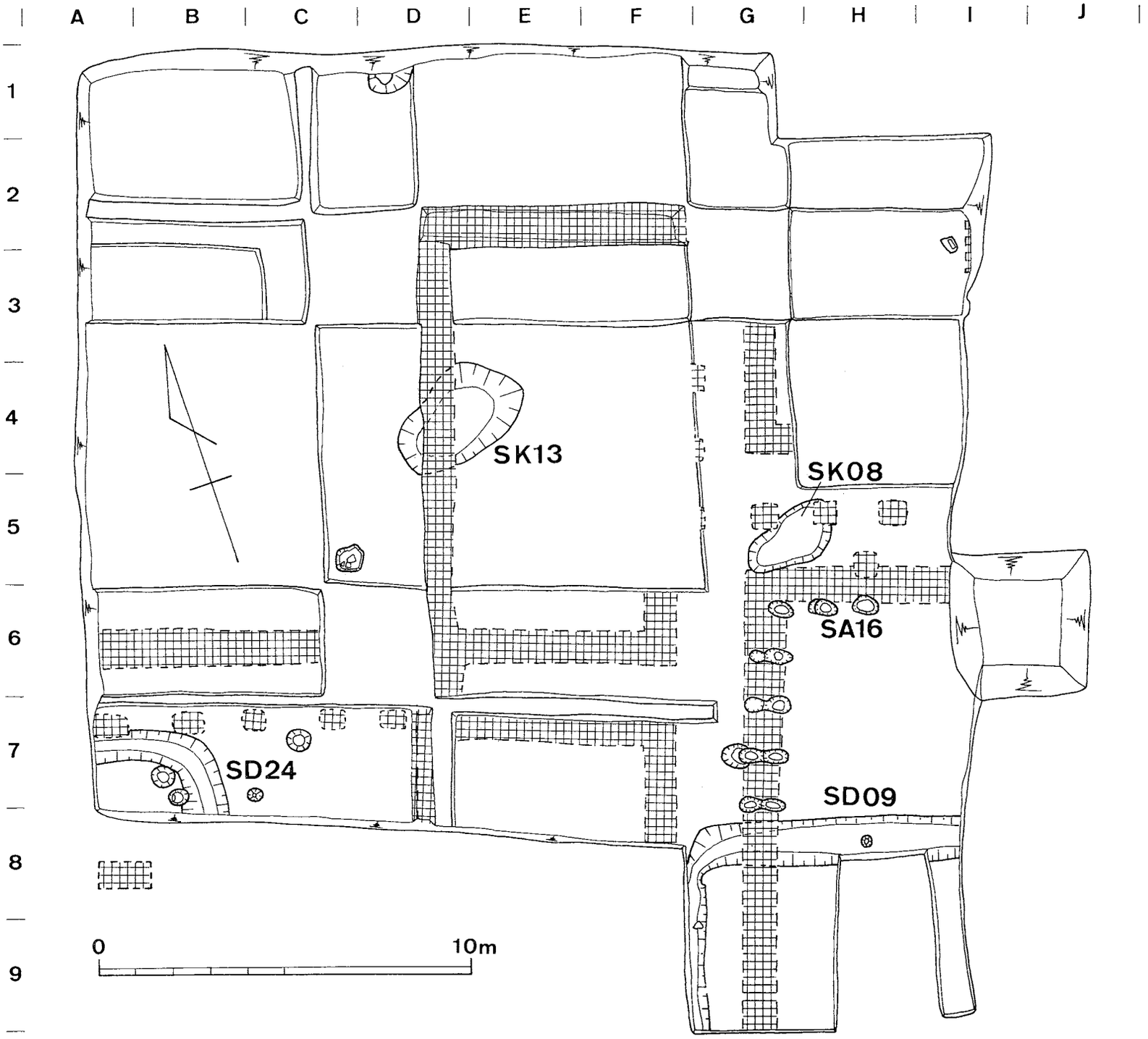
近世瓦片・陶磁器片・土師皿片・古銭などが出土した。これらの遺物は廃城時に投棄されたものと思われる。

(3) 溝状遺構 (SD 03) (図版第10の 2)

SK 02 の底部から検出された古墳時代の溝状遺構で，土師器片数点が出土した。幅約



第13図　第1調査地 SD01 実測図



第 14 図　第　2　調　査　地　平　面　図

1.3m・深さ約20cmを測る。SK 02のために削平されている状態で，底部が残存しているにすぎない。

(4) 土壙状遺構 (SK 04～06)

本調査地東側で検出した。SK 04の埋土から，近世瓦片・土師皿片とともに金製目貫が出土した。SK 05・06は，それに伴う出土遺物がないため，その性格・用途は不明である。

第2調査地（第14図）（図版第13の2）

(1) 塀　　跡 (SA 16)（第15図）（図版第14）

7個の柱穴が1.2m間隔でL字状に並ぶ。柱穴底部に礎板状の石が残存しているものもあり，また近世瓦片を出土したものもある。古絵図によると，本丸御殿大玄関から北側にのび直角に曲って，櫓門から北側にのびる城壁にとり付く塀が描かれており，位置的にもそれに当てるのが妥当であろう。

(2) 方墳の周構 (SD 09)（第15図）（図版第14の1・図版第15）

本調査地南東隅で検出した。幅約1.2m・深さ約40～20cmを測り，断面は逆台形を呈する。多量の埴輪片が出土したが，特に北隅，北東側中央・北西側中央に集中していた。これらの埴輪片は，園部城築城によって墳丘が削平される以前に流入したものとみられる。墳丘部にあたる箇所も精査したが，この古墳に関する遺構・遺物は検出されなかった。

(3) 方墳の周溝 (SD 24)（第16図）（図版第17）

本調査地南西隅で検出した。幅約1m・深さ約17cmを測り，断面はゆるいV字状を呈する。円筒埴輪片・土師器片が出土した。削平のため底部のみが残存するにすぎない。方墳の東隅にあたるとみられる。

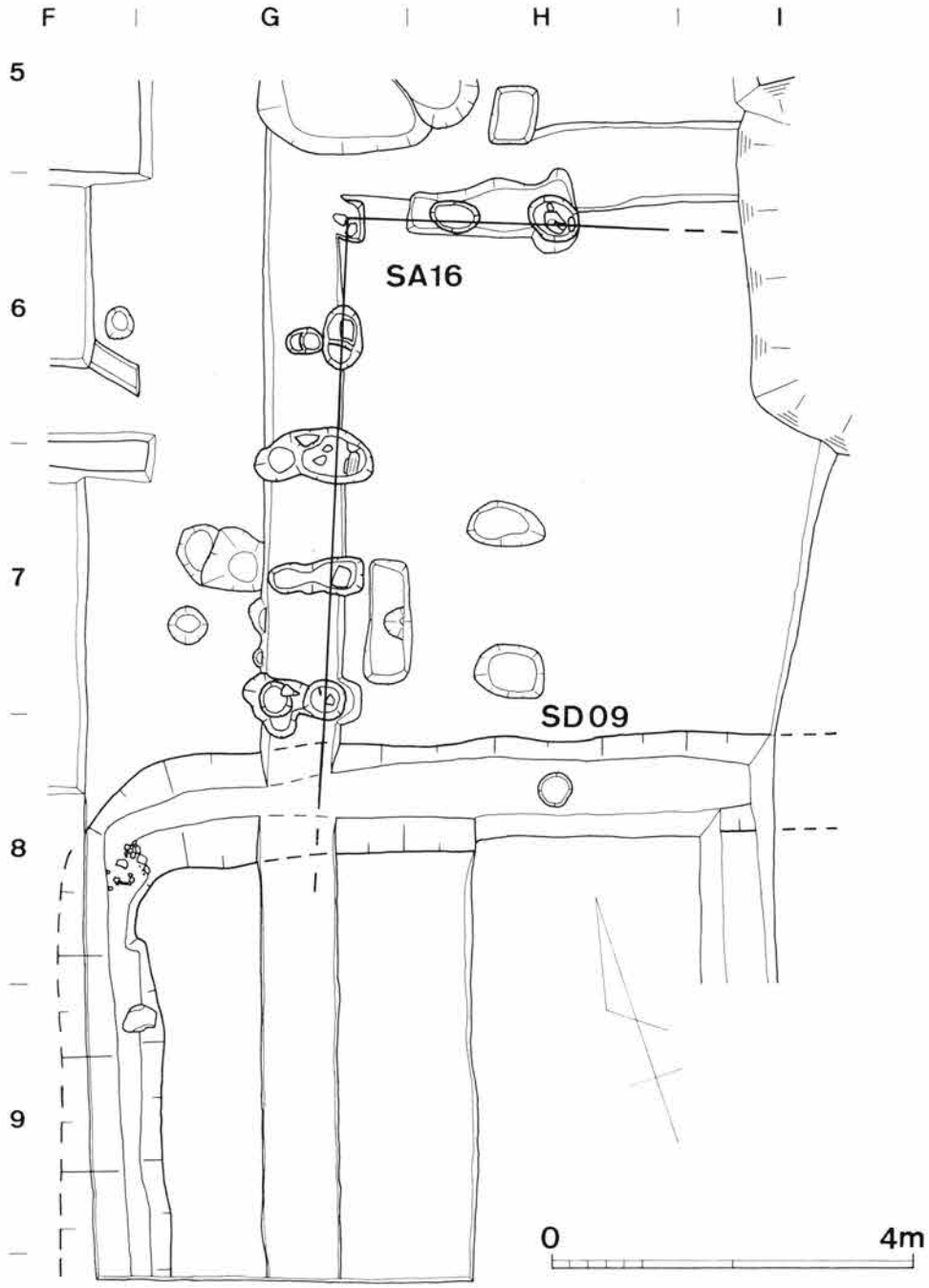
なお，これら2基の方墳は方向をそろえて並列している様子である。その規模については部分的検出であるために明確なことはわからない。

(4) 土壙状遺構 (SK 08・SK 13)

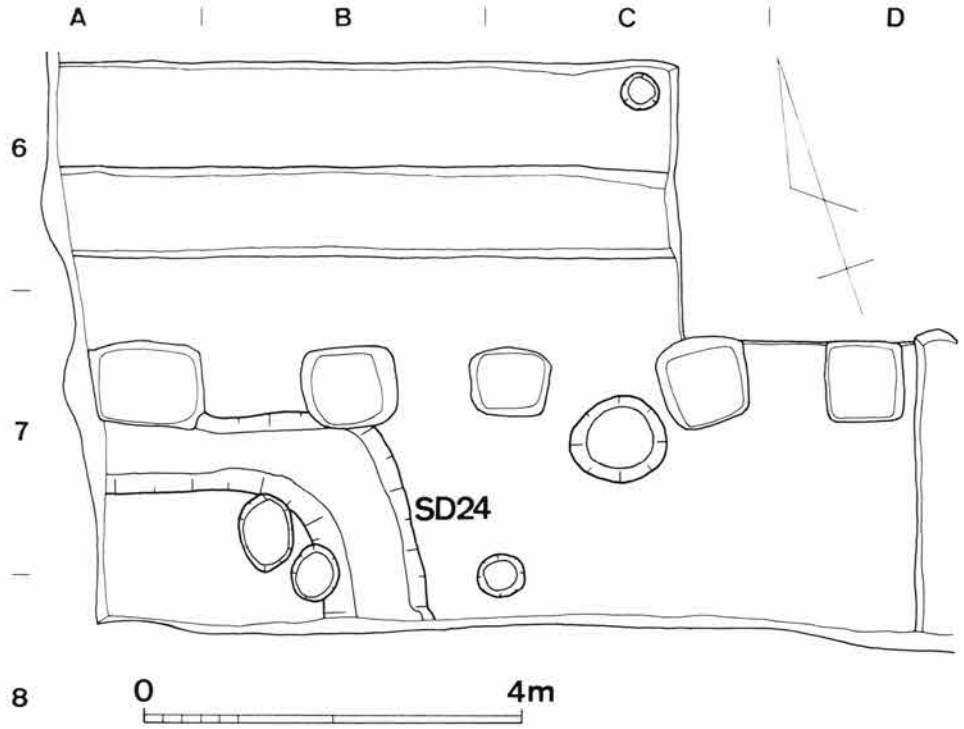
SK 08からは近世瓦片・陶磁器片なども出土したが，それとともに，鉛筆のキャップ・ヘアピンなどが出土しており，学校敷地になってからのゴミ捨て穴であろう。SK 13も同様で，土管片・雨樋の金具などが出土しており，ゴミ捨て穴とみられる。

6. 遺　　物

今回の調査で出土した遺物は，SK 02から出土した多量の瓦片をはじめ陶磁器・土師皿などの近世遺物と，古墳時代の埴輪片が主なものである。第1調査地においては，出土遺物の



第15図　第2調査地 SD09・SA16 実測図



第 16 図　第 2 調 査 地 SD24 実 測 図

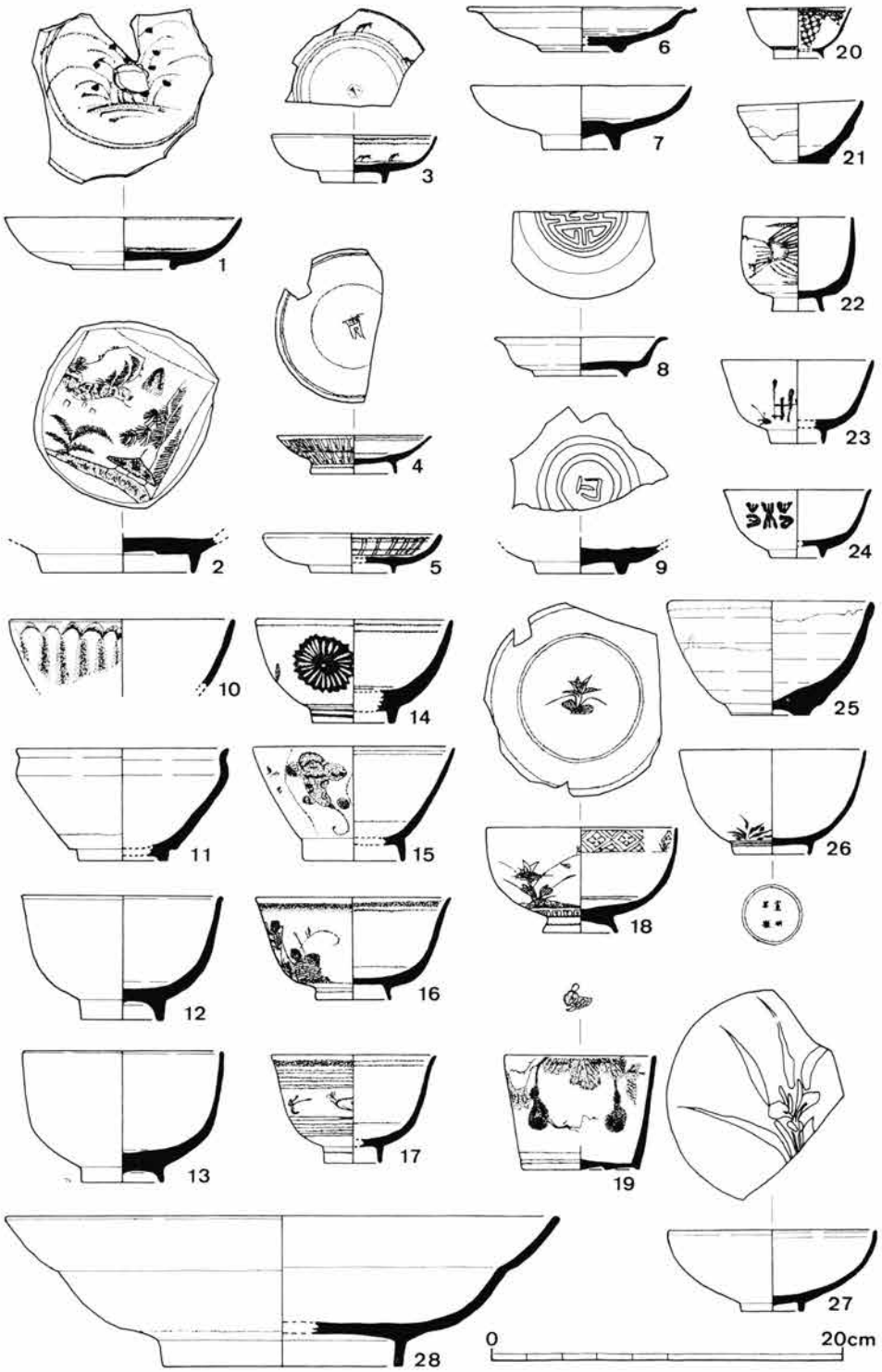
ほとんどが近世遺物であるのに対し，第2調査地では近世遺物はごくわずかで，埴輪片がそのほとんどを占める。

陶 磁 器（第17・18図）（図版第18）

器種としては，皿・椀・鉢・擂鉢・徳利などがあるが，大型の甕などは出土していない。特異なものとしてはお歯黒壺・火入れなども含まれている。伊万里・唐津・備前・丹波・京都・美濃・瀬戸と国内製品がほとんどすべてであるが，1点のみ中国明代の青磁椀が含まれている。国内製品に関しては，ほとんどが江戸時代のものであるが，丹波焼徳利（37・38）のように明治時代のものとみなされるものもある。

染付皿（1）は初期伊万里系のものとみられ，絵付けの発色も悪く，内面中央にはヒッツキがみられる。二度焼きをしていない様子である。

染付皿（2～5）はいずれも伊万里系のものである。（2）は高台内が蛇ノ目状になっており中央の円形窪み部のみ施釉している。（3）は内面見込みが蛇ノ目状に無釉になっており，重ね焼の痕がみられる。（4）は椀の蓋であろうか。（5）も見込みが蛇ノ目状に無釉で重ね焼の痕がみられる。



第 17 図　出　土　遺　物（陶磁器 1）

ＳＫ02—1・7・9・10～13・15・17・28　ＳＫ07—4・14・19・27　焼土状

黒色土層—2・3・16・20～22・25　攪乱層—5・6・8・18・23・24・26

唐津焼皿（6）は内外面ともに灰釉状の釉が施され，見込みおよび高台には重ね焼の痕が残る。皿（7）は磁器質で青磁釉状の釉が施されている。見込みは蛇ノ目状に無釉である。高台は無釉で砂粒が付着している。白磁皿（8）は見込みに変形された「寿」字が押印されている。皿（9）は瀬戸系のものとみられ，見込みは蛇ノ目状に釉がかきとられ，その周囲が鉄釉でふちどられている。中央に「日」字文が描かれている。

青磁椀（10）は外面に退化した蓮弁文が刻まれている。中国明代のもので，15世紀頃の焼造かとみられる。SK 02 から出土しており，伝世したものであろう。

天目椀（11）はその形状から江戸時代に入ってからのもので，美濃焼系であろう。釉は黒褐色の鉄釉で，外面腰以下は施釉していない。胎土は白く精良である。

椀（12・13）は瀬戸系のもので，全面に透明釉がかかる。陶質で，胎土は白く精良である。

染付椀（14～18・22・23）はいずれも伊万里系のものである。(14) は厚手で，いわゆる「くらわんか手といわれるものである。絵付けの発色も悪く，二度焼きしていない様子である。(15) は，いわゆる関東茶椀とよばれるものである。(22)は向付というべきであろうか。

染付向付（19）は，いわゆる「そば猪口」型で，外面底部は蛇ノ目状になっており，中央窪み部分のみに施釉される。こういう形状のものは，江戸時代後期に多い。

染付椀（24）は瀬戸系のものである。椀（25～27）は京焼系に属するものであろう。(25) は外面腰部以下以外に透明釉を施し，口縁部には灰褐色釉を施している。形状・釉ともに唐津焼の「皮鯨手」に似るが，胎土からみて唐津焼写しの京焼とするのが妥当であろう。(26) は陶質の染付である。(27)は陶質の赤絵椀で内面に緑色釉・赤色釉で菖蒲が描かれている。

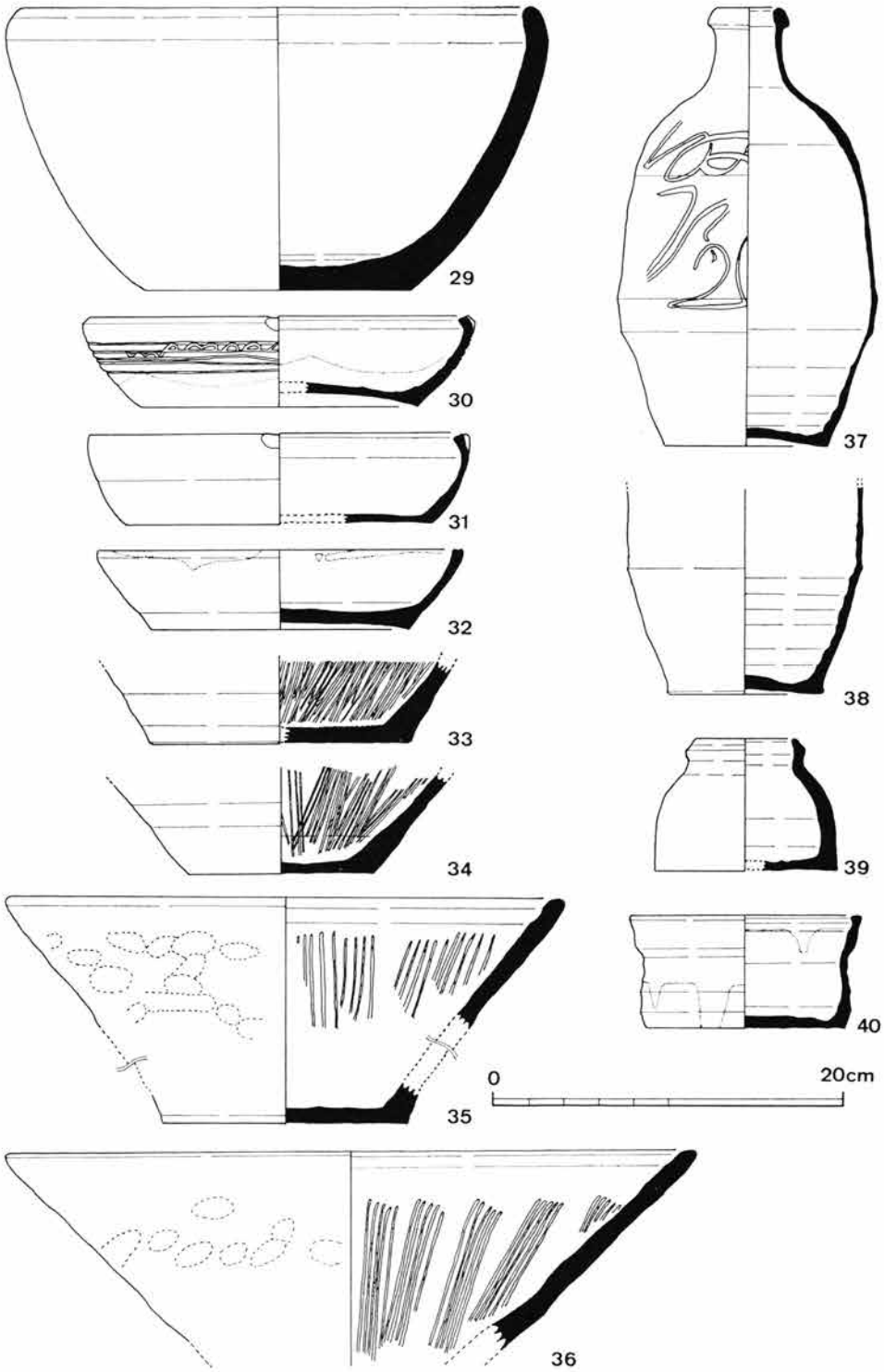
染付盃（20）はうす手で，伊万里系のものであろう。盃（21）は京焼系のものとみられ外面底部に糸切り痕が残る。大鉢（28）は京焼系であろう。

深鉢（29）は備前焼で，あるいは小型の水甕として使用されたものかもしれない。割れて出土したが完形に復元できた。内外面ともに火襷があらわれているが，自然に付いたものでなく人為的に付けたものとみられる。

平鉢（30～32）は丹波焼である。(30)は口縁部が輪花状になっており，外面にヘラ描き沈線がめぐる。(31)は内面のみに飴釉が施され，口縁部は輪花状になる。3点とも SK 07 から出土した。

擂鉢（33・35・36）は丹波焼である。(35・36)は内面に五本を単位とする櫛状の器具で沈線を描いている。3点とも焼成は良好である。

擂鉢（34）は備前焼とみられ，色調は須恵器に似る。余程使用されたものか内面沈線の摩滅がはげしい。



第 18 図　出　土　遺　物（陶磁器 2）
S D01—37・38　S K02—29・33　S K07—30～32・36・40　焼土状黒色土層—34・35・39

お歯黒壺（39）は丹波焼とみられ，内面底部付近には鉄サビ状のものが付着している。お歯黒液が酸化したものか。

火入れ（40）は生産地は不明であるが，焼成はあまりよくない。外面上半部および内面口縁部に褐色釉がかかる。

土 師 器（第19図）（図版第19の１）

今回の調査で出土した土師器は，古墳時代関係のものをのぞくと，すべて皿である。ほとんどのものが灯明皿として使用された様子で，口縁部に煤が付着するものが多い。また，近世のものがそのほとんどであるが，中世頃の様相を示すものも含まれる。出土量は多いが，残存状態の良いものが少ない。

土師皿（57～66）は，外面に指押さえの痕が残り，外反気味に立ち上がる。内面は指ナデ調整で，底部から口縁まで指を引き上げた痕が明瞭に残る。口径はほぼ10cm前後であるが，（57）のような小型品もある。これらは，すべて園部城盛土のうちの焼土状黒色土から出土している。また，（65・66）に関しては，熙寧元寳・洪武通寳・寛永通寳などの古銭20枚がさび付いたものに伴って出土している。

土師皿（67～74）は，調整は上記のものと同様である。口径は12～14cmとやや大きいものである。（67）は（65・66）と伴出している。

土師皿（41～51）は，外面が横ナデ調整され張り気味に丸く立ち上がる。内面は見込みと立ち上がり部分が明瞭に分かれる。口径は10～13cmであるが，（51）のような16cmになるものもある。ほとんどがＳＫ02から出土している。

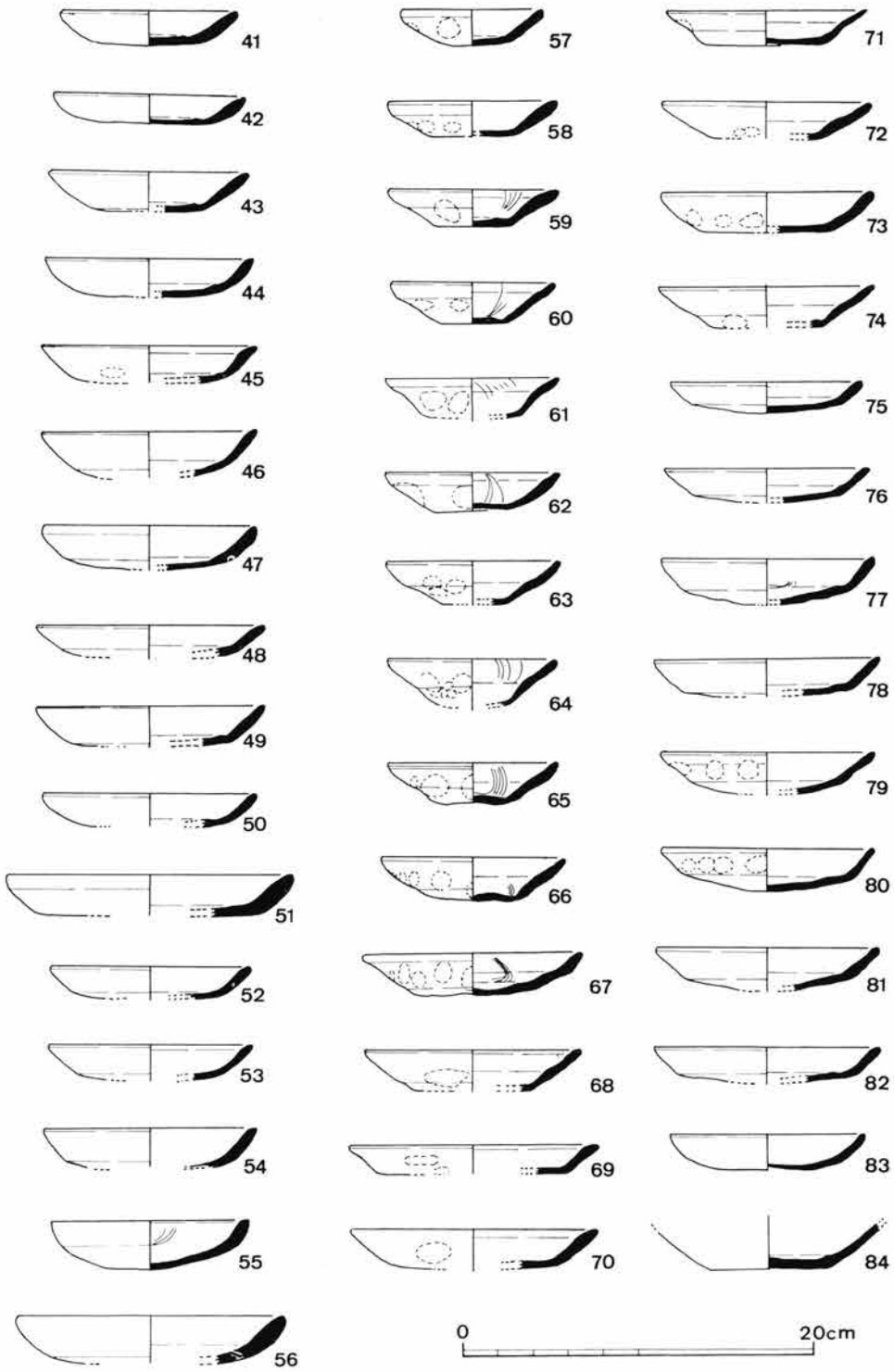
土師皿（52～56）は，外面が横ナデ調整され張り気味に丸く立ち上る。見込みと立ち上がりの境が不明瞭で丸く立ち上がる。口径は11～12cmであるが，（56）のように15cmになるものもある。ほとんどがＳＫ02出土である。

土師皿（75～82）は，外面指押さえ，内面はナデ調整で見込みと立ち上がりの区別も明瞭であるが，底面がややふくらみ気味になる。口径はほぼ12～13cmである。ほとんどのものがＳＫ02から出土している。

土師皿（83・84）は，残存状態が悪いが，中世頃のものとみられる。（83）は内外面ともにナデ調整とみられ，第２調査地園部城盛土から出土した。（84）は，調整は不明であるが，底部に糸切り痕がかすかに残る。ＳＤ01埋土に混入していた。

瓦（第20・21・22・23・24・25図）（図版第20・21）

出土遺物のうちで最も多数を占めるものは瓦類である。軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・棧



第 19 図　出　土　遺　物（土師器）

S D01—72・75・84　S K02—41～48・52～54・56・69・76・78～82　焼土状黒色土層—49～51・55・57～67・70・73・74　園部城築城時盛土層—83　攪乱層—68・71・77

瓦・道具瓦と種類も多い。これらはすべて近世の瓦である。SK 02・SK 07 から多量に出土した。

a　軒丸瓦（95～106）

軒丸瓦の瓦当面は，すべて三ツ巴文でその周囲に連珠文をもつ。

(95・96) は，直径 15.8cm で15個の珠文をもち，左三ツ巴文である。これらは巴文の尾が長く彫りも深い。同笵とみられるが，(96) は瓦当裏が筒状になっている。(97) は直径 16.6cm で，16個の珠文をもち右三ツ巴文である。彫りはやや浅いが巴文の尾は長い。(103) は直径 16.8cm と出土軒丸瓦では大きいものである。瓦当の文様の彫りは (97) と同様であるが，左三ツ巴であり，珠文も13個である。

(98) は直径 15cm，(99) は直径 16cm，(100) は直径 14.6cm で，いずれも16個の珠文をもつ左三ツ巴文軒丸瓦である。巴文は小さく萎縮し，笵ずれしている。SK 08 から出土した。

(104) は直径 14.3cm と小型で，大小の珠文が12個ずつ連なる。巴文はややいびつになる。(105) も直径 14.2cm と小型で，12個の珠文が連なる。巴文は萎縮している。

(101) は推定直径 16cm で16個の珠文をもつ。巴文は扁平になり，尾も短い。(102) は推定直径 17cm で15個の珠文をもつ。巴文は (101) よりも扁平になり，尾も短い。

(106) はほぼ完存しており，瓦当面の直径は 15.3cm を測る。外縁幅が直径に対して広い。巴文の尾はしのぎ立っている。胎土・焼成とも近代の瓦に近く，今回の調査で出土した軒丸瓦では最も新しいものといえよう。この軒丸瓦は調査地から出土したものでなく，第 1 調査地南側の花壇跡を工事用の重機が掘削中に出土したものである。

b　軒平瓦（110～117）

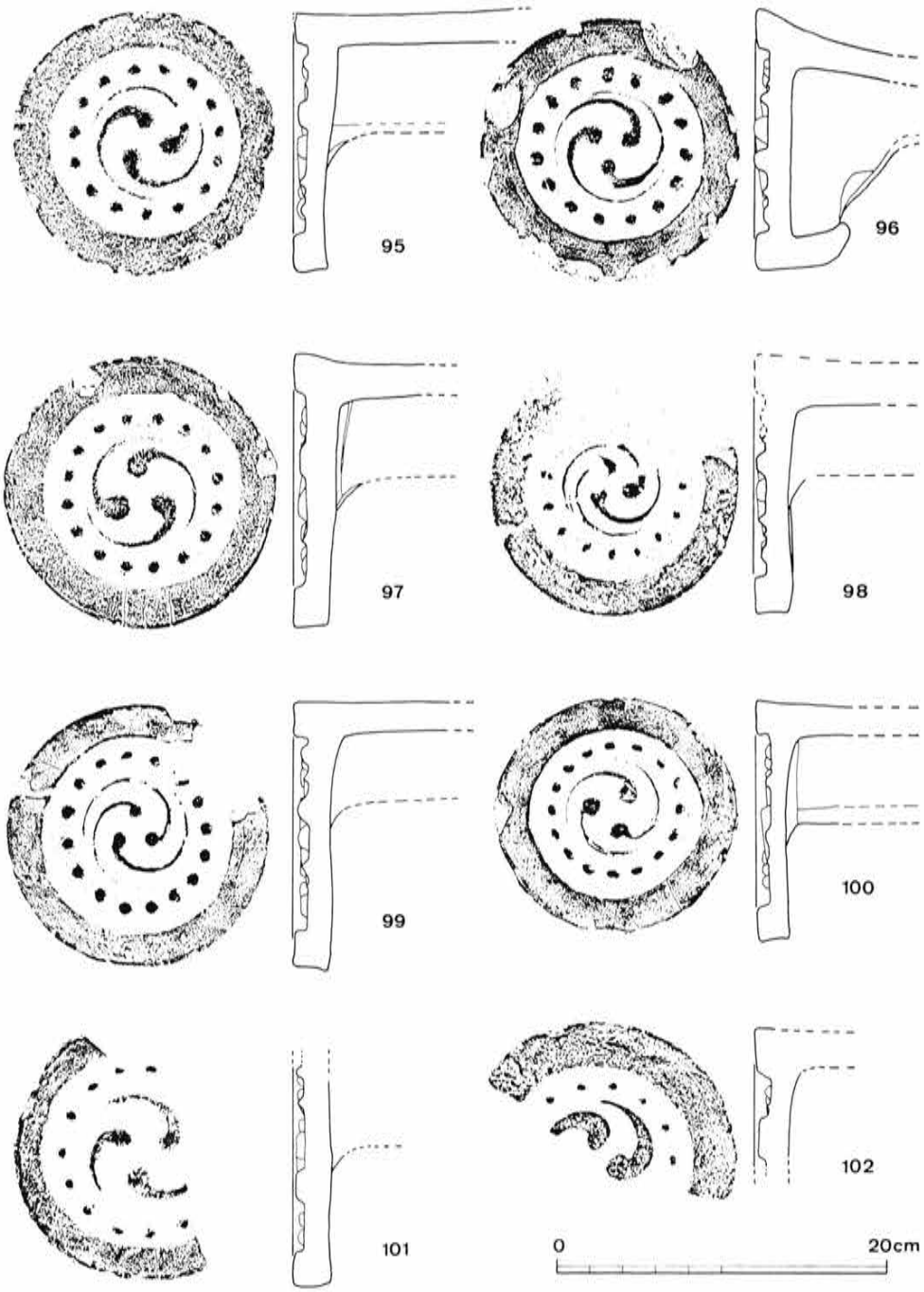
(110・111) は瓦当の中心に三枚葉文をもつ同形式のものであるが，(110) の方の中心の三枚葉文は三ツ葉形になっている。この形式で良好な残存状態のものはないが，復元すればかなりの大きさになるであろう。

(114・115・116) は，瓦当の中心にクローバ形文をもつ唐草文瓦であるが，その唐草文の細部が相違する。(117) は瓦当面の唐草文が非常に簡略化されたものになる。瓦自体は相当な大きさをもつものである。

(112) は小型のもので，唐草文がつく。(113) は瓦当の中心に宝珠文をもつ唐草文瓦である。外縁左上に (改) の押印をもつ。

c　丸瓦（118～121）

(118・119・120) ともに外面はヘラ削りされ，内面には布目を残す。周囲は面取りされている。(121) は上記 3 点のように瓦と瓦を合わせるための段をもたない。後部に瓦をとめる

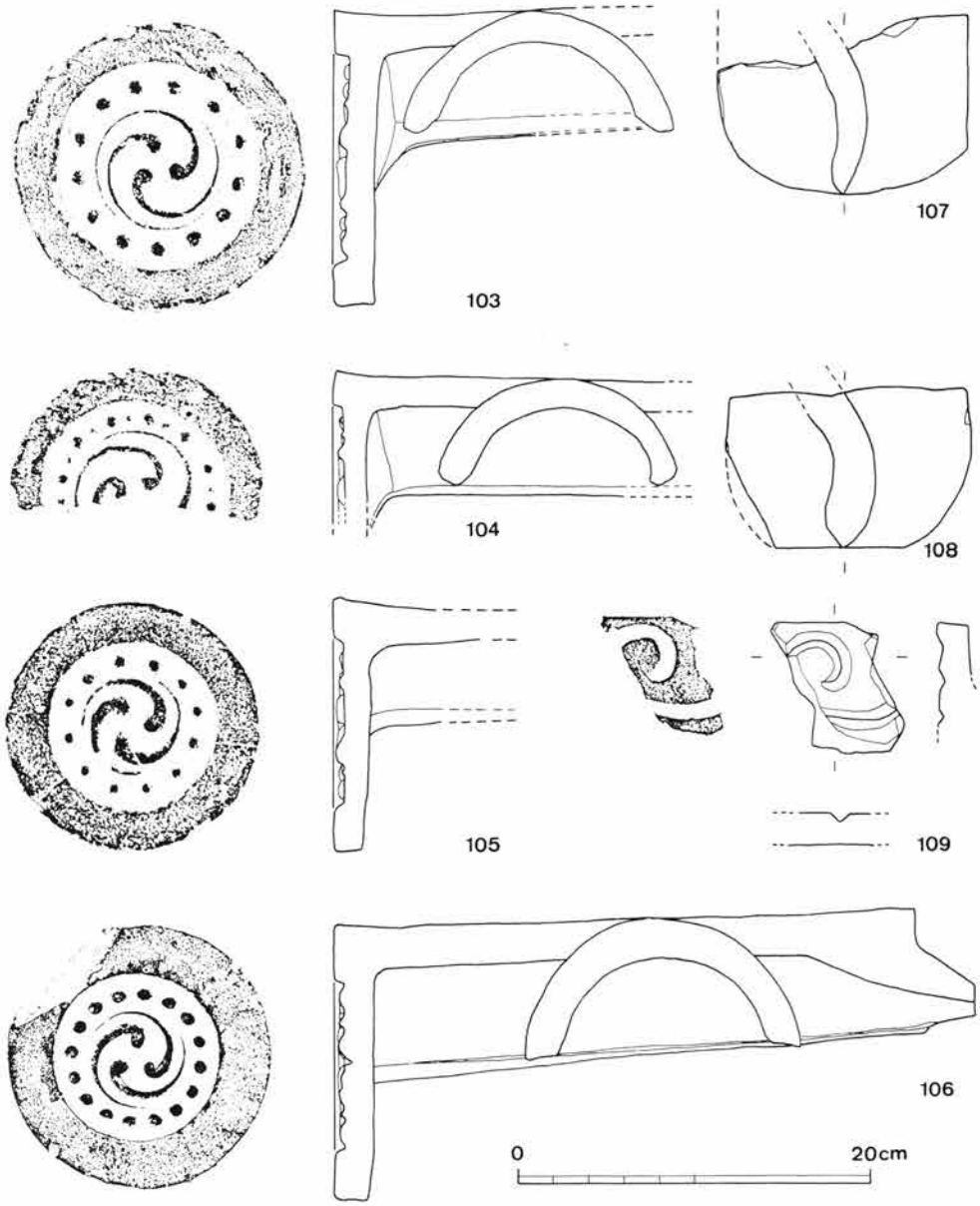


第20図　出　土　遺　物（瓦1）
SK02—95・96・101・102　SK07—97　K08—98～100

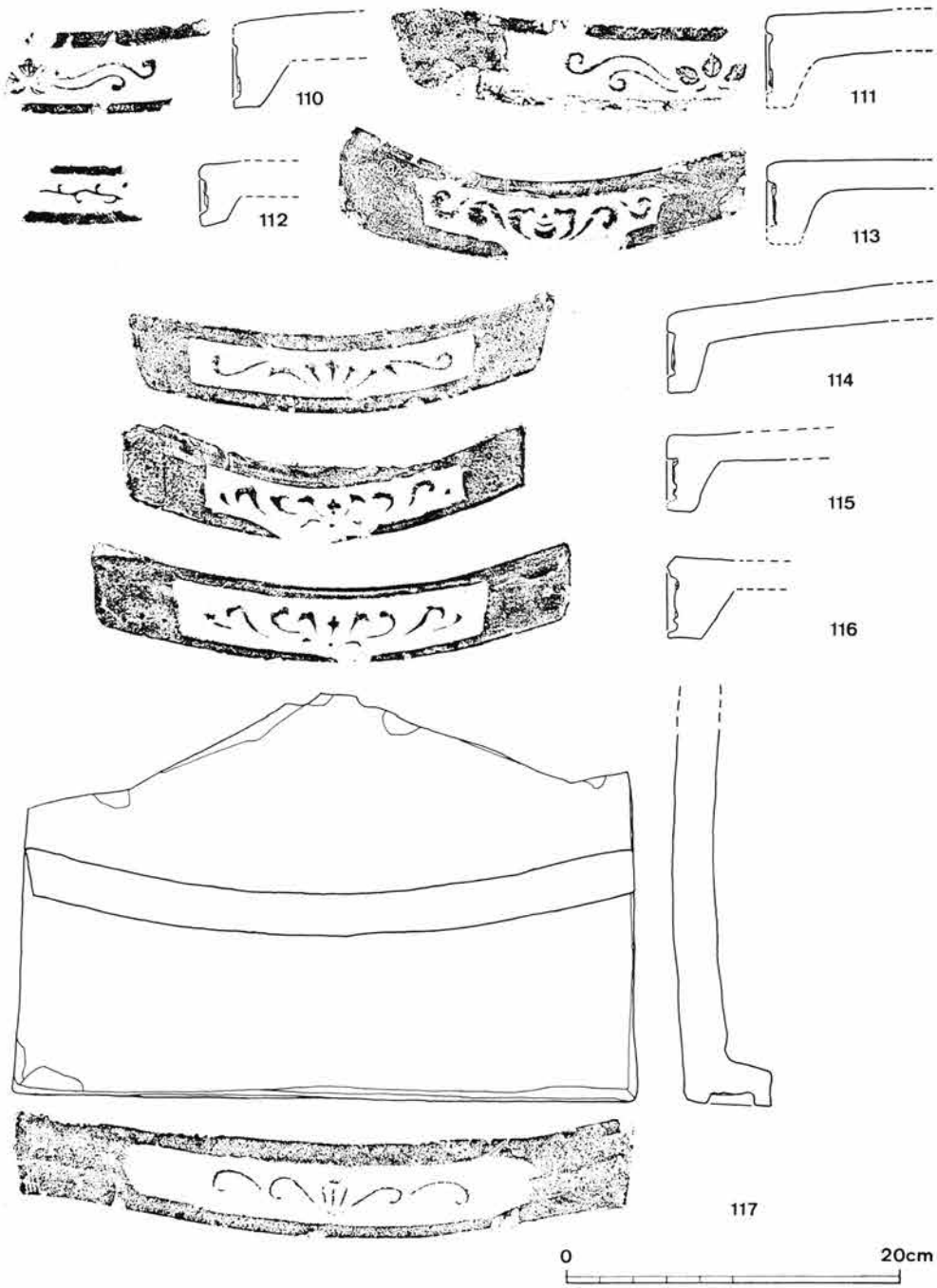
ための釘穴がある。外面はヘラ削りされ，内面には布目を残す。周囲は面取りされている。

d　平瓦 (122・123)

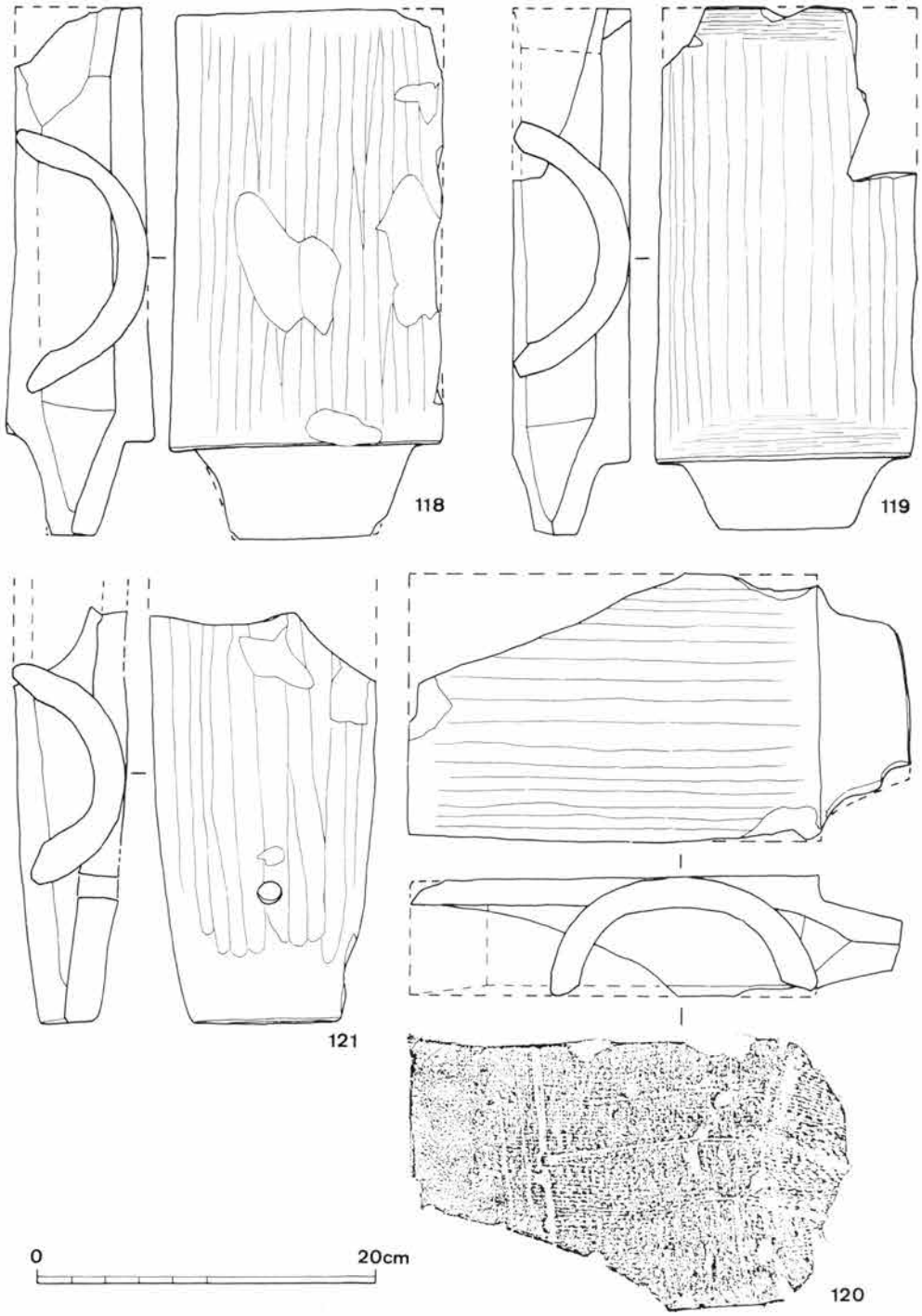
(122)は，表面はナデ調整され，裏面は板の木口で削られている。裏面には桐文が線刻されている。この桐文は，三本の花房が放射状に立つものとみられ，桐文としては古い形態をも



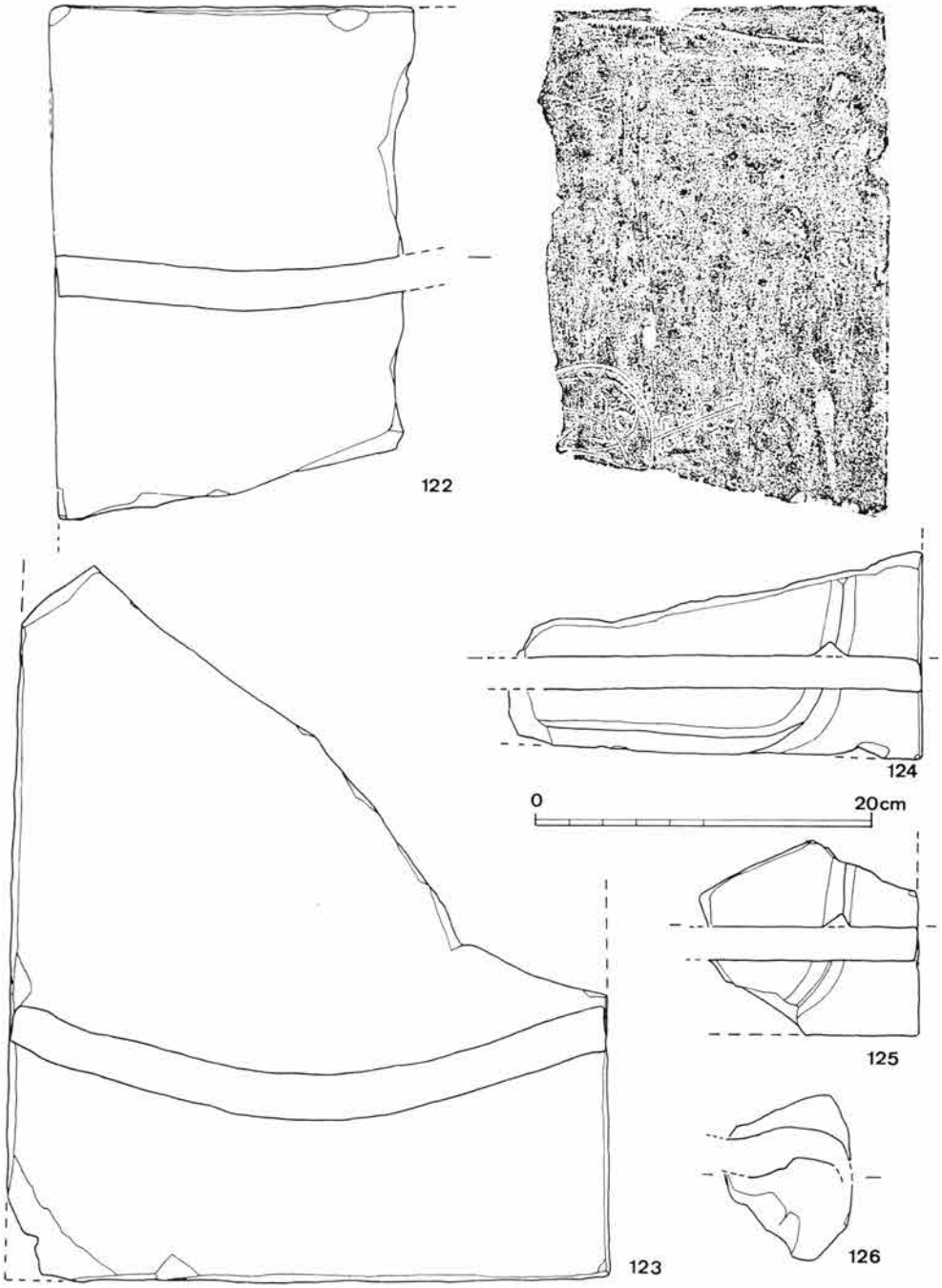
第 21 図　出　土　遺　物 (瓦 2)
SK02—103～105　SK07—109　SK08—107　焼土状黒色土層—108　調査地外—106



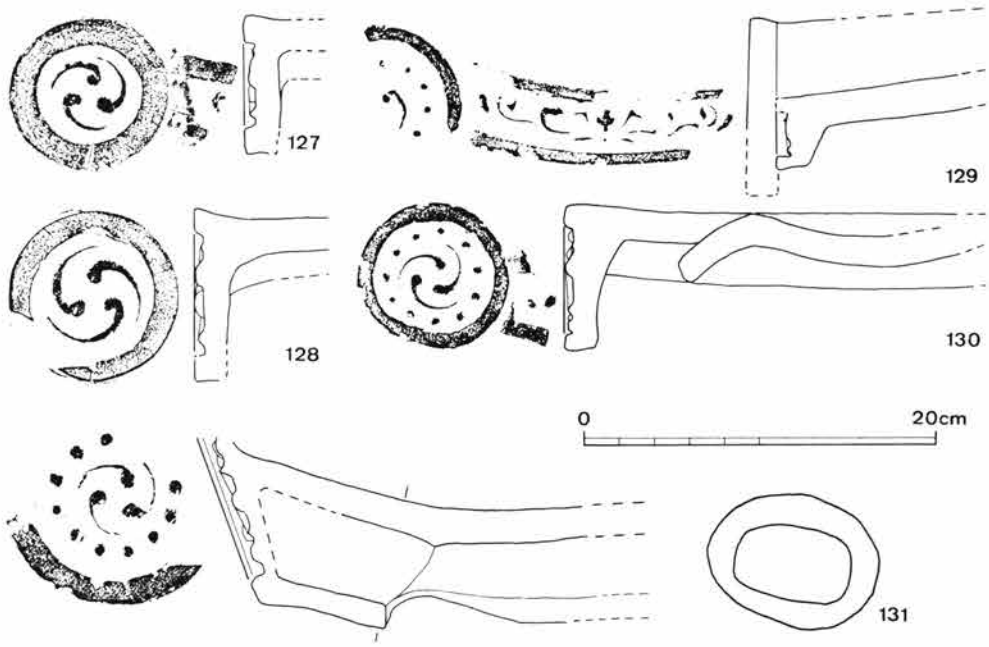
第22図　出　土　遺　物（瓦3）
SK02—100・111・114・116・117　SK09—115



第23図　出　土　遺　物（瓦4）
SK02—118～120　焼土状黒色土層—121



第24図　出　土　遺　物（瓦5）
SK02—123～126　焼土状黒色土層—122



第 25 図　出　土　遺　物（瓦 6）
S D01—130　S K04—131　S K07—127～129

っている。復元すればかなりの大きさになるとみられる。(123)は，(122)と同様に表面がナデ調整，裏面は木口削りされている。

e　桟瓦（127～130）

瓦当の丸い部分が珠文をもつ三ツ巴文になるもの（129・130）と珠文をもたない三ツ巴文になるもの（127・128）がある。珠文をもつものでは（129）が右巴，(130)が左巴となる。（129）に関しては，平の瓦当部分が中心にクローバー形文をもつ唐草文である。珠文をもたないものでは（127）が左巴，(128)が右巴になる。

f　道具瓦（107～109・124～126・131）

面戸瓦（107）は表面ナデ調整，裏面には布目が残り，裏面周囲は面取りされる。面戸瓦（108）は表面ヘラ削り，裏面には布目が残り，裏面下部のみ面取りされる。

不明瓦（109）は雲形文が彫られている。鬼板の一部であろうか。不明瓦（124・125）は，反りのない平板上に断面三角形の凸帯を貼り付けている。不明瓦（126）は宝珠状のものの一部とみられる。鬼板の一部になるかもしれない。(131)は鳥衾である。

金 属 製 品（第26図）（図版第19の 2）

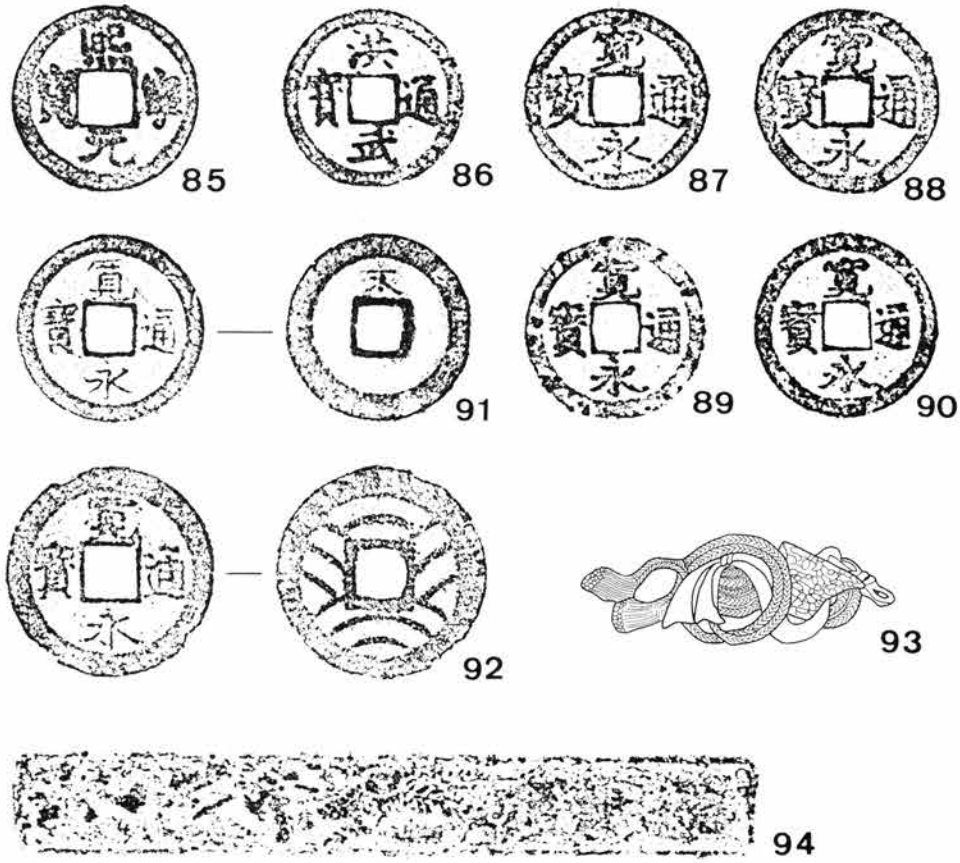
今回の調査において金属製品の出土は少なく，古銭・刀装具・瓦をとめるための鉄釘が少

量出土したのみである。

古銭（85～90）は第1調査地園部城盛土の焼土状黒色土からまとまって出土したものの一部である。20枚がさびついた状態で出土した。ほとんどが寛永通寶であるが，北宋銭の熙寧元寶（85）・明銭の洪武通寶（86）が1点ずつふくまれていた。寛永通寶（91）はSK 02から出土したもので，裏面に「文」の字がある。寛永通寶（92）はSK 07出土のもので，裏面に青海波文がある。

目貫（93）は刀の柄の目釘隠しである。「熨斗」形を表したものとみられ，厚さ0.6mmの金板を型で打ち出し鏨で線刻して仕上げている。SK 04から出土した。

小柄（94）は銅製で残存状態はきわめて悪く文様もさだかではない。内部に刀身の茎がさびた状態で残っている。



第26図　出　土　遺　物（古銭・刀装具）（実物大）
SK02—91　SK04—93　SK07—92　焼土状黒色土層—85～90・94

埴　　輪（第27図）（図版第19の２）

今回の調査で出土した埴輪は，SD 24・SD 09・第２調査地北側から出土したものである。第２調査地北側から出土した埴輪に関しては，園部城築城時に削平され，盛土とともに盛られたものである。したがって遺構に伴う遺物は，SD 24 と SD 09 の溝内から出土したもので，特に SD 09 から出土した埴輪が大半を占める。両溝内からの埴輪の出土状態は，溝底に列を成して配されたものではなく，流れ込んだ形で出土した。出土した埴輪は，円筒埴輪・朝顔形埴輪・家形埴輪・不明形象埴輪があるが，中でも円筒埴輪が大半を占める。今回出土した埴輪は，大半が窖窯で焼成されており，スカシ孔は，すべて円形で，外面の２次調整を省略した埴輪が多いことから，川西宏幸氏の編年の第Ⅳ期に当り[注6]，５世紀中葉～５世紀末の頃のものと思われる。以下，残存状態の良い埴輪片について記すが，内外面の調整名称については，川西宏幸氏の「円筒埴輪総論[注7]」によることにした。

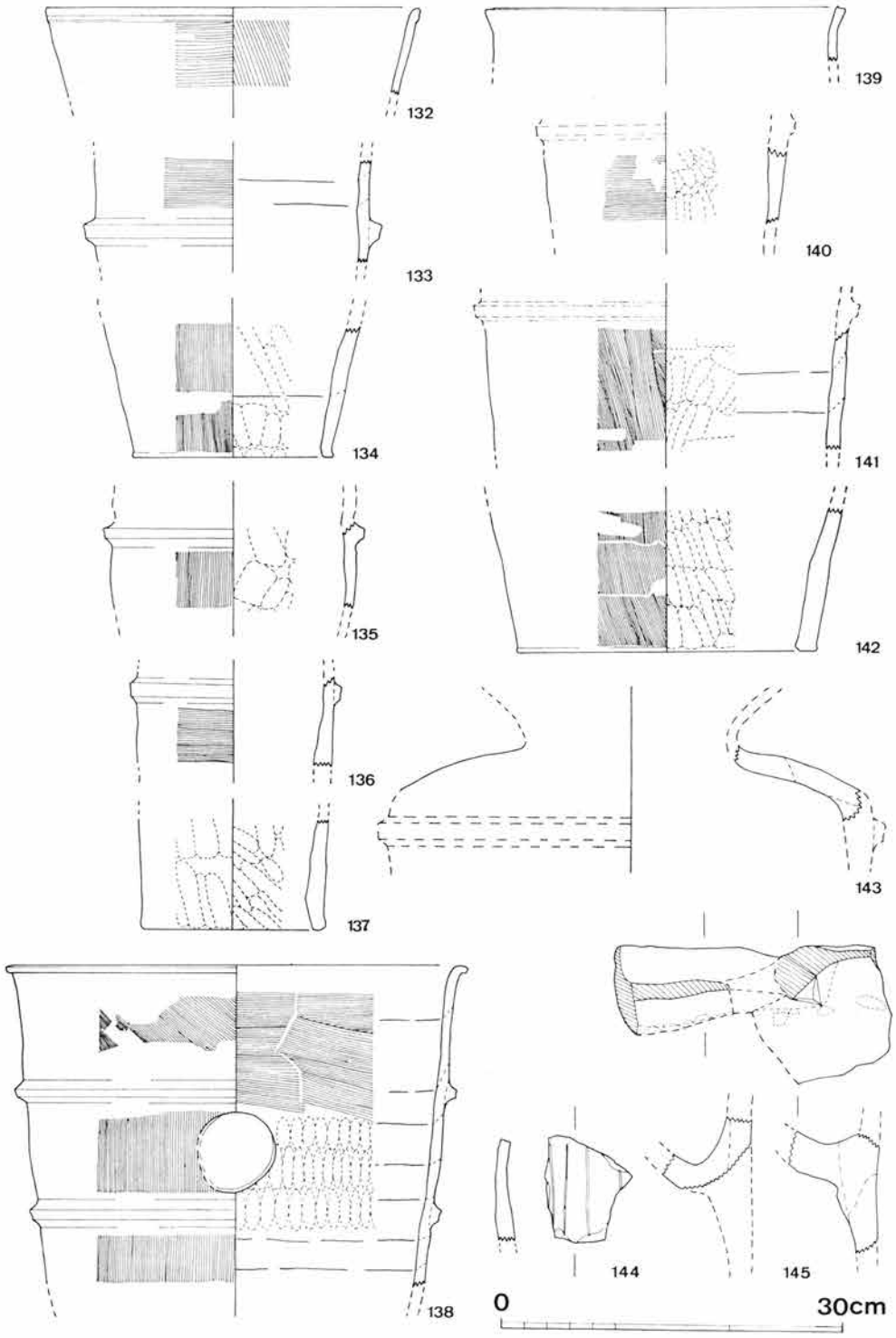
円筒埴輪（132）は，SD 24 から出土したものである。円筒埴輪の口縁部と思われ，内面調整は，口縁端部付近までナナメハケ調整を行っており，外面調整は，口縁端部を幅 1.2cm ほど粘土を貼り付けており，ナデ調整を行っている。その下部は，ヨコハケ調整を行っているが，B種ヨコハケかC種ヨコハケのどちらであるかは不明である。色調は，内外面とも黄褐色で，断面中央は，暗灰色を呈する。

円筒埴輪の凸帯付近（133）は，SD 09 から出土したものである。内面調整は，ヨコハケ調整の後，部分的に粘土を貼り付け補強している。外面調整は，第１次調整がタテハケで，第２次調整はヨコハケである。第２次調整のヨコハケが，B種ヨコハケかC種ヨコハケであるかは不明である。凸帯は，突出度が高く，その断面は台形である。凸帯付着後の調整を行わず，指３本による整形と思われる。一部粘土で補強している。色調は，内外面とも赤褐色で，埴輪片の断面は帯状に暗灰色が連なっている。残存部においては，黒斑を確認することはできなかった。

円筒埴輪（134）は，最下段の部分で凸帯は欠けている。内面はナデ調整，外面はタテハケで部分的にナデ調整を行っている。内外面とも黄褐色で，断面中央は暗灰色を呈する。

円筒埴輪（135）は，SD 09 から出土したものである。内面はナデ調整，外面はタケハケで調整している。凸帯は，突出度が高く，指３本による整形と思われる。凸帯の断面は，台形である。色調は，内外面とも黄褐色で，断面中央は帯状に暗灰色が連なっている。

円筒埴輪（136）は，園部城盛土から出土のものである。凸帯は，突出度が低く，指３本による整形と思われる。その断面は台形を成す。内面の調整はナデ調整，外面はヨコハケ調整である。色調は，内外面とも赤褐色で，断面中央に暗灰色が帯状に連なる。この埴輪片の



第 27 図　出　土　遺　物（埴輪）
ＳＫ02—145　ＳＤ09—133・134・135・138・141・142・143
園部城築城時盛土層—136・137・139・140・144

み須恵質であり，同志社大学考古学実習室が表採した遺物と，胎土・焼成面で類似する。

円筒埴輪（137）は，園部城築城時盛土出土の最下段の部分である。内外面ともナデ調整を行っている。色調は，内外面とも黄褐色で，他の出土埴輪に比べて焼成はやや軟質である。

円筒埴輪（138）は，今回の調査で最も口径の大きいものである。最上段から3段目まで残っている。凸帯から凸帯の間は，約11cmあり，2段目に径7cmの円形のスカシ孔がある。スカシ孔の数は，不明であるが，おそらく2箇所にあったものと思われる。口縁端部は，逆L字状に外側に突出しており，凸帯の突出度は高く，その断面は台形である。外面の調整は，最上段でナナメハケ調整をしており，口縁部付近と凸帯付近は，さらにナデ調整を行っている。第2段目と第3段目の調整は，タテハケで凸帯の貼り付け部付近は，ナデ調整をしている。内面調整は，最上段がヨコハケ調整，2段目からはナデ調整を行っている。また，粘土紐の幅は，第2段目から第3段目にかけては，幅約3cmの粘土紐を巡らしているが，最上段においては，5cm～6cmと幅が広くなる。色調は，内外面とも黄褐色で，断面中央を帯状に暗灰色が連なっている。一部黒斑があり，口縁部付近に赤色顔料が見られる。

円筒埴輪（139）は，園部城築城時盛土から出土した。円筒埴輪の口縁部と思われる。口縁端部はほぼ平坦であるが，端部の断面中央部がわずかにくぼんでいる。内面はナデ調整を行い，外面はヨコハケ調整を行う。破片であるため，外面調整のヨコハケがどのように施されているかは不明である。色調は，内外面とも黄褐色である。

円筒埴輪（140）は，園部城築城時盛土から出土した。凸帯の部分は欠けている。内面はナデ調整，外面はB種ヨコハケ調整の後，部分的に不定方向の雑なナデ調整を行っている。色調は，内面が暗赤褐色，外面が赤褐色である。埴輪片の断面に，暗灰色が帯状に連なっている。無黒斑である。

円筒埴輪（141）は，SD09の溝内から出土したものである。凸帯は欠けている。内面はナデ調整を行い，外面はタテハケで調整している。約3.5cm幅の粘土紐の巻き上げによって形成されている。色調は，内外面とも赤褐色で，断面中央部を帯状に暗灰色が連なっている。無黒斑である。

円筒埴輪（142）は，最下段の部分である。内面はナデ調整を行い，外面はタテハケで調整しており，部分的にナデ調整を行っている。内面底部付近は暗灰色で，その他は黄褐色である。

朝顔形埴輪（143）は，SD09の溝内から出土したものである。調整は，内外面ともヨコナデ調整である。肩の部分から円筒に変わる部分には，指圧痕がみられる。内外面とも黄褐色で有黒斑である。

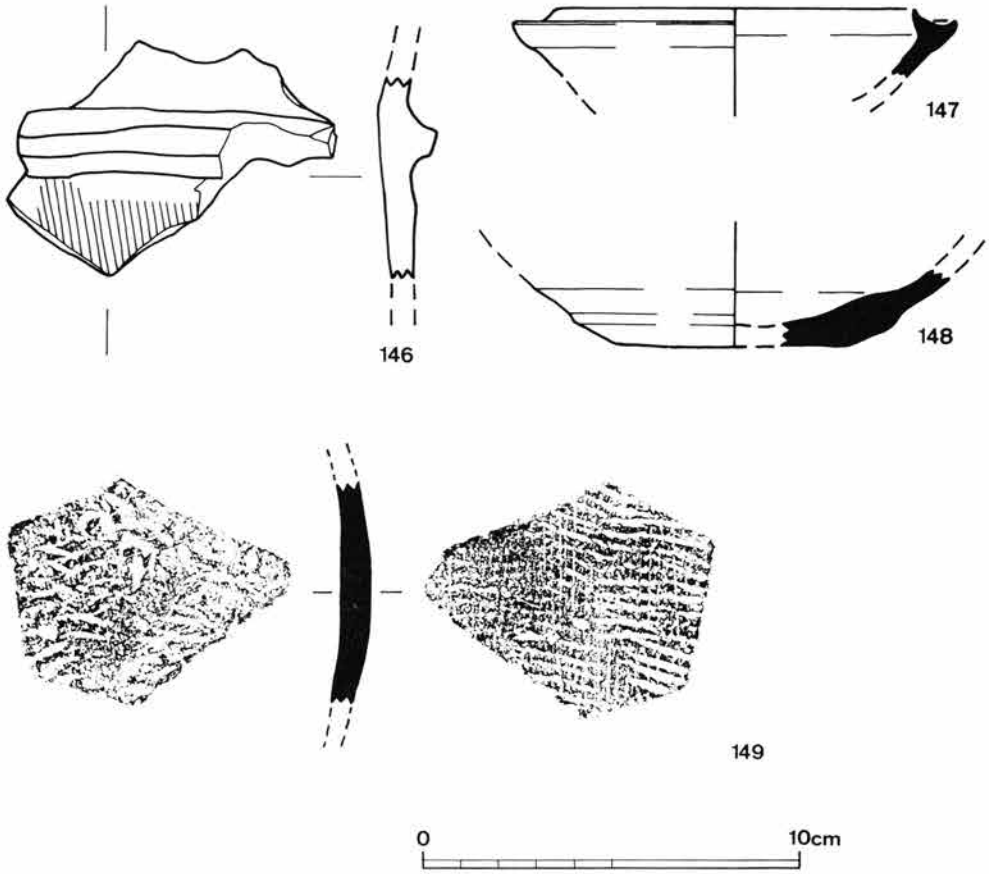
家形埴輪（145）は，第1調査地の瓦溜りから出土したもので，おそらく，園部城廃城時の

削平によって流れ込んだものと思われる。最も薄い部分で約2cmあり，陶棺の可能性もあるが，現在までのところ丹波地方で陶棺の出土例を見ないことから，家形埴輪としておく。内外面とも赤褐色で，断面中央が暗灰色を呈する。

不明形象埴輪（144）の内面はナデ調整を行い，外面はナデ調整の後ヘラによる凹線が4条ある。内外面とも淡赤褐色である。

踏査採集遺物（第28図）

今回の踏査で採集した遺物は，埴輪片・須恵器片などである。埴輪片（146）は，突出度の高い凸帯を巡らし，外面が青灰色，内面が黄褐色の須恵質のものである。ひずみが大きく，その径を測ることは出来ないが，焼成はかなり須恵器に近く，焼きのしまった埴輪片である。外面調整は，タテハケ調整を行い，内面はナデ調整を行っている。凸帯は，指3本による整形と思われる。この埴輪片を表採した所は，徳雲寺窯状遺構(注8)下手の水田からである。同じ所



第28図　小山東町宮越採集遺物

から須恵器片（147・148）も表採した。杯身の口縁部の形態から，7世紀初頭の遺物と思われる。

踏査を行った結果，埴輪片については，徳雲寺窯状遺構から採集したものでないため，同遺構に伴った遺物であるかどうか不明である。しかし，同志社大学考古学実習室が，徳雲寺窯状遺構から採集した埴輪片[(注9)]と，焼成面や胎土面で似ており，あるいは，徳雲寺窯状遺構から流出したものとも考えられる。

7. 小　　結

今回の調査においては，削平や攪乱のために遺構の残存状態が悪く，断片的にしか確認することができなかった。したがって園部城本丸の全貌を解明するのは大変困難なことであるが，今回の調査の成果をふまえてその一端にふれてみたい。

今回の調査で検出した園部城関係の遺構のうちで，その性格が最も明確なものは第2調査地の塀跡 SA 16 である。これは『園部城古図』（図版第25）などにも描かれており，史料と検出遺構が一致する唯一のものである。この塀跡は柱間がほぼ1.2m・約4尺である。園部城の現存建物である櫓門に付属して現存している城壁は，塗籠であるためにその柱の所在はわからないが，おそらくその柱に付いているであろうと思われる肘木の間隔が約1.2～1.3m・約4尺である。この城壁の櫓門から北へのびる部分は古図などによると SA 16 が取り付いていたものである。園部城の塀・城壁に関しては柱間4尺というのが基準になっていたものであろうか。

もう一つの園部城の遺構である第1調査地の石組み溝 SD 01 は，古図などを参照してもその所在が記されていない。また古図自体の描写法にも問題があり，第1調査地自体が園部城本丸のどのあたりになるのか確定できない。古図によると，現存櫓門を入ったあたり，つまり本丸東半部には大書院・大広間などの政庁的性格を持つ建物が描かれており，西半部には御殿・奥殿などの藩主の居館的性格を持つ建物が描かれている。そして，その間は塀および冠木門によって仕切られている様子である。いま SD 01 の状態をみると，南北方向の溝筋が本丸を東西にほぼ二分する位置にある。明確な根拠がないので断定はさけるが，この南北方向の溝筋が東側の政庁的空間と西側の居館的空間との境界とみることも可能ではないか。

また，SD 01 の東西方向の溝筋の北側は三和土のようにつき固められた状態で，何らかの建物敷地となっていたものではなかろうか。SD 01 の南北方向溝筋を政庁的空間と居館的空間の境界とみれば，そのあたりは政庁的空間の方に属す。古図を参照すると，本丸南側城壁

と政庁的建築群との間は空地になっている。その空地と政庁的建築群とは，内玄関および塀で仕切られている様子である。このようにみてくると，この東西方向の溝筋は空地と政庁的建物群との境界とみなすことも可能であろう。すなわち，東西方向溝筋の北側のつき固められた場所は，政庁的空間の南側の一部ということになる。この場所に建物が有ったのか白洲状の空地になっていたものかは不明である。

SD 01 は江戸時代後期の遺物を出土する SK 07 上に構築されている。先にも述べたとおり，園部城は幕末に増改築が行われており，現在本丸跡に残る櫓門および巽櫓はこの時の造作によるものとされている。そして，SD 01 は巽櫓北側溝と同一計画性をもっている。これらのことから，SD 01 は幕末の城普請によって構築されたといえるのではないか。

中世の荒木氏の薗部城に関しては，それに直接関連する遺構・遺物は検出されなかった。この付近で他に推定地を求めるなら，本丸跡北方の家老屋敷跡が本丸跡とほぼ同じ標高を持つので，その近辺ということになる。他にはその候補地は見当らない。

また今回の調査においては，古墳時代中期の方墳が2基存在したことを確認した。その周溝である SD 09・SD 24，および園部城築城時にこれらの古墳を削平して盛土したとみられる層中から出土した埴輪片が，川西宏幸氏の編年の第Ⅳ期(注10)のものに並行することから，5世紀中葉～5世紀末の頃のものと考えられる。園部町においては，古墳時代前期と後期の古墳は確認されているが，中期の古墳としてはこれがはじめてである。

また，これら2基の方墳は方向をそろえて並列している様子である。丹波地方において古墳時代中期の方墳が方向をそろえて並列する例は，綾部市の聖塚・菖蒲塚古墳，亀岡市の馬場が崎1号墳・同2号墳などがあるが，本調査地で検出した方墳に関しては，多分に旧地形に左右されている様子であり，あまりに接近しすぎているので，他の例と同列に扱うには問題があろう。

山間の園部町にも開発の波は押し寄せ，断片的に残る園部城のおもかげも日に日に姿を消してゆく。最後に，これらをいかに残し伝えるかという大きな課題が残った。

（引原 茂治・岡崎 研一・平本 浩樹）

第2章　園部城の背景

1.　丹波国政庁の移動

①古代　丹波国国府

丹波国府がどこに置かれていたかについては，想定説が幾つかあったが，最近にいたり，前期の国府は亀岡市千代川町の方六丁域に国府関連地名があまりにも多く，地形的にも，水陸交通上からも，国府推定地[注11]としてふさわしいものとして，推定の主流をなしてきた。しかし，後期になると国府は船井郡八木町屋賀に移動したと考えられるにいたった。

②中世　守護代の城と居館

律令制が弛緩し，乱れ，やがて鎌倉時代に入り，守護が設置され，現地には守護代が権限をもつようになった。つまり中世の政庁は，守護代の城館を中心とし設置されたというべく，具体例をあげることとした。

◎建武4年（1317）丹波守護代荻野朝忠の居城は詳かでないが留堀（とんぼり）ケ城（氷上郡市島町・城館），朝日城（同郡春日町），黒井城（同郡春日町）。

◎康永2年（1343）丹波守護代　小林　国範

観応元年（1350）　〃　小林　重長

永徳3年（1383）　〃　小林上野介

の名がみえ，多紀郡篠山町沢田の沢田城を中心とした地域が小林氏の城館と考えられる。

◎明徳3年（1392）丹波守護代小笠原成明の居城については不明。

◎応永8年（1401）丹波守護代細川遠江守の居城は詳らかでないが，八百里（やおり）城（多紀郡篠山町瀬利）が考えられる，畑氏以前の城主として，守護細川氏一族としての下野入道満国，その子持春の名がみえる。

◎応永21年（1414）丹波守護代 香西常建，応永33年（1426）同 香西元資 の居城は神尾山（かんのおさん）城（亀岡市宮前町宮川）。大永6年（1526）波多野備前守稙通が兄の 香西光守 が殺されたのを恨み，みずからは八上城に拠って叛し，弟の柳本弾正（賢治）を神尾山城に拠らしめたとある。

以上，園部以外の中世政庁ともなった丹波国守護代の拠った城館を一瞥した。そこで，園部を中心とした船井郡に於いて，どうであったか概観すれば，次のように中世も後期になるにつれて，丹波の政庁は古代の政庁千代川国府想定地に隣り合わせた船井郡八木町八木城を抱含する地域に固定されて，148年間丹波の政庁となったことが判明する。

◎延文2年（1357）丹波守護代片山虎松の 居城黒田城（船井郡園部町黒田・古名片山城）。

『片山家文書』によると，出野城（船井郡和知町出野）が片山氏の本城であるかのように

考えられるが，それは片山氏一族の城であって，守護代の城としては規模・位置・背景共に小さく不適当である。守護代の居城としては黒田城（古名片山城）が妥当である。『丹東城墨記』にも「片山古墨之図」(注12)は記されており，さらに園部町役場の地籍図に小字「片山城」があり，現在の黒田城と全く一致している。さらに，その付近には小字名として「東片山・西片山・小城谷・トンノ奥・堂ノ奥」の地名がみられる。

◎永享3年（1431）丹波守護代内藤備前入道が八木城（船井郡八木城）に入るのは，片山氏より約74年後である。そして八木城が機能を消失する天正7年（1579）頃まで約148年間，政庁の機能を守り続けたことになる。しかしその中には，文明14年（1482）丹波守護代上原元秀，明応2年（1493）同上原賢家が暫時守護代となっている。

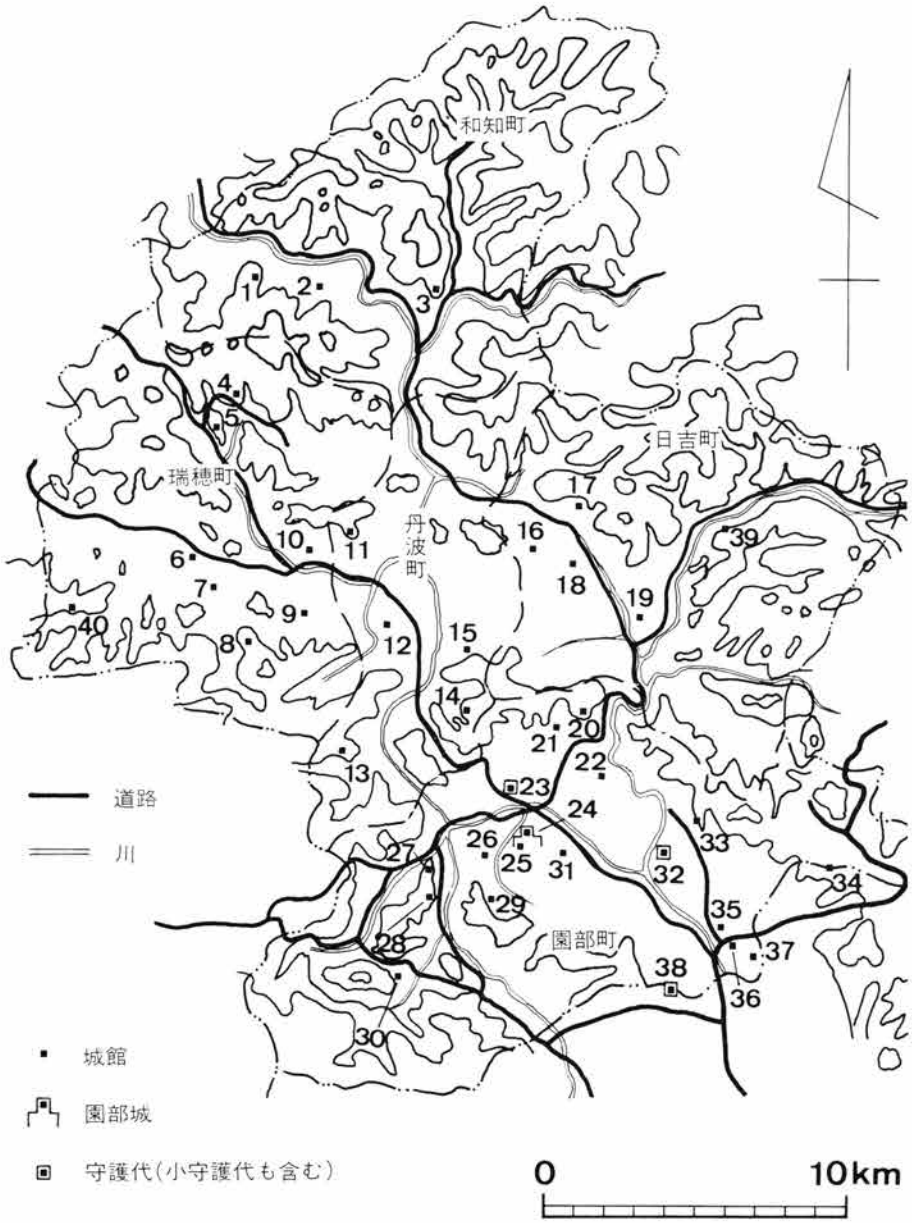
◎文明18年（1486）丹波小守護代井上雅楽助が現われており，井上孫五郎・井上又六と小守護代が続き，その居城には新庄城（船井郡八木町山室）がある。室町幕府は開創直後から郡単位の守護職宛行を実施しており，ここに見る井上氏も船井郡を宛行されたものとみえる。城背後の水田を越した山麓に，今も井上氏の居館跡（八木町船枝）が残り，三面の水濠は埋められて畠となり背面の土塁と空濠の巨大さは丹波随一といえよう。

以上をまとめると，丹波国における中世の政庁ともいうべき守護代の城館は，南北朝時代初期には氷上郡にあったものが，多紀郡篠山町沢田に移り，船井郡園部町黒田に移り，また篠山町瀬利に戻り，室町初期に桑田郡宮前町，それより船井郡八木町（途中何鹿郡にとぶこともあった）に固定された。そして織田信長の部将明智光秀の入丹と共に守護代の城館は消滅していった。

2.　中世薗部城を中心とした船井郡城館の分布

中世薗部城より近世園部城に移行する歴史的過程の中にあって，その背景ともなった船井郡全体の城館像を浮び上らせて，近世園部城が誕生する要因に触れてみたい。一覧図と一覧表は筆者が長年にわたって実地測量を完了した結果作り上げたものである。またそれには中央の文献史料にもとづいて，地方文書に精選検討を加えたことは勿論のことである。船井郡には現在判明しているかぎり40件(注13)の中世城館をみることができる。そして，その一つ一つがその地域の中世の状態を物語るものである。40件の内訳は，山城28（大型2・中型7・小型19），平山城3，平城1，館8が確認される。平城1は屋賀城である。これは国府を継承したものであるだけに，今後の解明にまつものが大きい。館8の中で新庄城城主の居館（八木町船枝・井上氏の館）や東胡麻城城主の居館（日吉町野化・宇野氏の館）などは独立して館城となった。宍人・口人のような近世城への移行的なものも見られる。

事実，小出吉親は元和5年（1619）但馬出石城より国替によって園部城に入部の時，小麦山の近世園部城が完成するまで宍人城主小畠太郎兵衛のもとに元和7年11月まで逗留して2年余をすごし，城の完成をまって新城に初入城したと記されている。このことは，出石城と宍人城の間にあって，政治的な面や国替にともなう交通問題や経済面などの隠れた大きい力



第29図　船井郡城跡分布図

付表1　船井郡城跡分布一覧表

番号	遺跡番号	名称	別称	所在地	遺跡の型式	遺跡の概要	築城城主名
1	2658	出野城		和知町出野	小型梯郭式　山城	頂上平坦，神社あり	出野甚九郎
2		安栖里館		和知町安栖里	館	耕地整理で消失	出野氏
3		市場の砦		和知町市場	小型梯郭式　山城	本丸忠魂碑となり本丸遺跡消失	
4		水呑城	八幡山古城	瑞穂町水呑	小型梯郭式　山城	土塁堀切あり	山内土佐守／津田石見守　2説あり
5		三宮城		瑞穂町三ノ宮	小型梯郭式　山城	道をへだてて両山に双築	山内久豊
6		阪井城		瑞穂町阪井	小型梯郭式　山城		谷垣氏
7		井尻城		瑞穂町井尻	小型弓型梯郭式　山城	中央櫓の跡あり	谷垣兵部
8		八田城	奥八田城	瑞穂町八田高畑	小型輪郭式　山城	中世初期の縄張りあり	上原久左衛門
9		中台の館		瑞穂町中台	館	郡誌にみる二ノ丸不詳	
10	2684	橋爪城		瑞穂町橋爪	小型片傾斜梯郭式　山城	本丸に天守台・井戸跡あり	山内盛豊
11	2745	蒲生谷村館	谷城／豊田城	丹波町豊田谷	小型小判型梯郭式　山城	帯郭西方側に2ケ所穴あり	須智庄左衛門
12		曽根館		丹波町曽根中上	館	館跡に何鹿大明神あり	永禄12年　木村越前守
13		口八田城	中畑城	丹波町中畑	小型L字梯郭式　山城	中世初期の縄張り多し	北道氏
14	2746	須知城	市森城	丹波町須知市森	大型梯郭式　山城	本丸近く石垣よく残る	須智慶吉
15		上野城		丹波町南上野	小型片傾斜梯郭式　平山城	郭多く空濠深く館城か	山崎加賀守
16	2764	上胡麻城	大戸城	日吉町上胡麻大戸	中型梯郭式(輪郭付加)山城	城下村落そのまま残る	塩貝将監
17		野化館		日吉町東胡麻	館	東胡麻城の館という三郭あり	宇野但馬守信忠
18		東胡麻城		日吉町東胡麻	中型梯郭式　山城	山麓城戸口に家臣用屋敷跡あり	宇野但馬守信忠
19		梅若の館		日吉町殿田	館	丹波猿楽の祖となる	梅津景久
20	2868	薬無城	船岡城	園部町船岡	小型梯郭式　山城	館跡に林松寺あり	内藤秀頼

21		新堂砦	小草山之砦	園部町新堂	小型梯郭式　山城	館跡に大国玉神社あり	
22	2867	蜷川城	高屋城	園部町高屋	中型梯郭式　山城	館跡に蟠根寺あり	蜷川親朝
23	2858	黒田城	片山城	園部町黒田	中型三方梯郭　山城	中世初期の縄張り多し	延文２年　片山虎松
24	2854	園部城		園部町小桜町	近世陣屋城　平山城	本丸跡に府立園部高校あり	元和７年　小出吉親
25	2865	大村城	大村田中城	園部町城南町	小型梯郭式　山城	天守台祖型あり	観応２年　田中宗長
26		茶臼山城		園部町温井茶山	小型　平山城	豪族の館ともみられる	
27	2853	船坂城	新江城	園部町船坂	小型梯郭式　山城	館跡に九品寺あり	
28	2870	宍人城		園部町宍人	方郭式　館城	本丸跡は小天神と俗称	小畠筑前守
29		口人館		園部町口人	方郭式　館城	館の登り口に長徳寺あり	野々垣五兵衛
30	2869	埴生城	野々口城	園部町埴生	小型方郭式（二郭）山城	廃城後最福寺がたてられていた	野々口親永
31	2866	小山城	五合山城	園部町小山東町	小型小判型単郭山城	館跡に春日社と釈王寺あり	荘林兼武
32	2940	新庄城	井上治部古城	八木町山室	中型双峰梯郭式　山城	水陸両様の要素多し	文明18年　井上雅楽助
33		船枝の館		八木町船枝	館	井上ふじ宅、中近世居館の典型	井上廣政
34		神吉城		八木町神吉	小型長小判型梯郭式　山城	北麓に寺跡館跡あり	天正年間　明智源士郎
35		刑部城	鞍谷山城	八木町刑部	中型梯郭式　山城	北方山麓に氏神を中心とした家臣用屋敷あり	
36		西田城	西田山砦	八木町西田	小型小判型　山城	本丸に金刀比羅神社を祀る	
37		屋賀城		八木町屋賀	中型中世　平城	深い外堀跡あり	
38	2941	八木城		八木町本郷	大型複合梯郭式　山城	本丸に天守台跡山麓に多くの寺坊跡	永享３年　内藤備前入道
39		田原城	亀田ノ古城	日吉町田原	小型小判型梯郭式　山城	本丸に低い石垣を巡らす	小林氏
40	2685	鎌谷城		瑞穂町鎌谷中	中型梯郭式　山城	頂上に神社あり	細見河内守

や，近世初期城持大名の築城モデルなどがあったにしても宍人城が近世園部城の雛型となって大きく展開していったことは見逃すことができない。

中型城の中には黒田城（古くは片山城）のごとく丹波守護代の居城となり南北朝中期に丹波の中心となったものもあれば，新庄城のごとく室町中期に丹波小守護代の居城となったものもある。陸路もさることながら水路の重要性はこの頃倍加しており，室町後期には丹波守護代内藤氏の八木城が丹波の中心となって150年近くも政権の座にあったということは，船井郡の地が如何に重要な地であったかを切実に物語っているものといえる。また当時，大堰川の本流が八木城下本郷を大きく迂回して川関に通じていたことは，古図や航空写真にもよく伺えるところである。半日で京に通ずるこの水路は，八木城をとりまく数多くの山麓居館をはじめ多くの寺坊を集め初期城下町を形成させる大きい要因となったとみられる。そしてそこには大堰川の水をとり入れた港町的なものの萌芽すら認められるにいたっている。

以上，主要な城館の例にもみられるように，船井の地が中世を通じて後期に近づくに従いいかに重要視されたかを見てきた。このような地の利を得た船井郡園部の地に，中世薗部城をおし拡げて近世園部城は築かれていったのである。

3.　中世薗部城

中世薗部城に就いては，史料中に“草冠”がついたのが多いので，近世園部城と区別するため“草冠”のついた薗部城とした。

中世薗部城については『原本信長記』に「……この四月十日，光秀は滝川一益・丹羽長秀らと丹波に入り，荒木山城守の居城薗部を囲み，水の手を切ってこれを降し，自分の兵を入れ置いて帰陣」と記されている。この四月とは天正6年（1578）をさしている。荒木山城守の名が『丹波志』によると屋賀城主となっている。また『丹波志』『多紀郡古城記』に荒木山城守氏綱が細工所城（荒木城・井串城）の城主として出ており，『日本城郭大系12』では「……明智光秀は“荒木鬼”といわれた荒木氏綱の勇を惜んで彼を捕え，八上城落城の後，被官になるよう誘ったが氏綱は固辞した。代りに一子氏清を出したが，氏清は天正十年の山崎の戦いの際天王山で光秀と共に滅んだという」とあるが，既に天正6年に中世薗部城で光秀の和平作戦に応じており，細工所城で捕えられたと記されているのは和平作戦に応じたことを物語っているものであり，荒木氏綱を少しでも美名化しようとした後世の作偽と考えられる。

中世薗部城[(注14)]がどこにあったかについては数説あるが，近世園部城の筆頭家老小出氏の屋敷跡一帯と考えられる。水の手を切ったが為に落城とあるが，水の手は三層櫓の設けられた小

向山（小麦山）と現在園部中学校の間の堀割を水路が通っており，この水路は筆頭家老の館を広くとりまいている。『生身天満宮文書』の中に元和5年霜月7日の「城地交換証文」がみられるが，その中に「大村上野西原，小麦山之西原，小出信濃守様御屋敷ニ被成候故……」とあるので，薗部城が天正6年（1578）開城してより元和5年（1619）小出氏による小麦山築城がはじまるまでには40年余りが経過しており，小麦山之西原一帯はこのたびの発掘でも確認されたように中世薗部城の痕跡はなく，古墳等が存在した南に高くなった扁平な丘をなしていたものと推定された。つまり中世薗部城は小麦山之西原（のち園部陣屋）の北側に居館的色彩の強い平山城として築かれ，その西南部には鬼門封じの天神社がまつられたものと認められる。

4. 近世園部城への橋渡しをした宍人城主

『古文書』『小畠家文書』によると，(注15) 天正3年（1575），織田信長は小畠左馬助に6月10日・17日と引続いて書状を与え，「その国へ光秀を遣わしたところ，其方の世話で案内を引き受けてくれたことは嬉しい……」とあり，また小畠助大夫には「……今度明智光秀を遣わすが，小畠左馬助が若年で心配したが，其方が面倒を見てやるとのこと喜ばしい……」とある。また『小畠家文書』の中には，天正7年（1579）2月16日付けで，明智伊勢千代丸および小畠一族に宛てた光秀の手紙がある。それには「……越前が討死をした。その忠節は比類がない。伊勢千代丸は幼少であるから，それが十三歳になるまで，森村左衛門尉に名代を申付けてほしいと，みなが訴えて来たので承知した。伊勢千代丸が家（宍人城主）を継ぐよう，後の証拠のため小畠一族中及び森村の誓紙を出させた。そのように承知せよ」とある。越前とは伊勢千代丸の父で『園部町史Ⅳ』に「……中世宍人城は，小畠越前守殿ト申城主御座候，多紀郡八上之城ニ而親子とも打死申上候……」と小林九兵衛日記のところに記されている人である。同町史には，小林九兵衛日記の項に「明智光秀による波多野落城と共に討死したものである」と越前親子が八上城をまくらに光秀軍と戦って戦死したかのように偽作されているが，それは誤りで『小畠家文書』には光秀軍に従っての討死は，忠節比類なしと賞めており，13才になる子供（伊勢千代丸）は後に残って森村らがその補佐にあたっているのである。明智伊勢千代丸とあるのは，光秀が小畠越前守国明の忠節を賞して，その子に明智氏を与えたものであると，高柳光寿ものべている。

『略史前録草案』元和5年（1619）には「……吉親公丹州江御移之以後，当分宍戸(人)対処士小畠太郎兵衛宅ニ御住居，元和七年園部御普請造畢ニ付御移宅但シ普請出入三年二而造畢之由，此時御普請惣奉行ハ西宗兵衛……」とあり，小畠太郎兵衛の名がでているが，この人こ

そ伊勢千代丸が成人した小畠太郎兵衛（50余歳）と推定される。

5. 近世園部城

①元和の築城

『武部家文書』の元和5年，大村上野西原と小麦山之西原が城地交換された時の証文は前節に記した。そして小麦山之西原が「小出信濃守様御屋敷」とあるように園部陣屋として築城されたものである。初代藩主小出吉親の出石より園部初入は，『山田家文書』小出氏系譜によると，元和5年8月5日とある。下見分の為，小出吉親の小麦山入りについては『武部家文書』に「宍人村小畠氏ニ御宿被成候ハ其より度々御入被成候，元和五未九月三日ニ小麦山江御入被成候ハ……」とあるところから，元和5年9月3日には小麦山の築城進行の様子を視察されたこととなる。入部については『徳川加封録巻之二』に「小出伊勢守吉親，元和五年十二月十二日，封ヲ丹波国園部ニ移サル」とある。

築城の完成は，元和7年11月になっているので，築城期間はあしかけ3年に渡ったことになる。そして其間，小出吉親は小畠太郎兵衛宅（天正の初宍人城主）に住居していたとある。『荘林家文書』には小林太郎兵衛宅に住居となり，普請惣奉行は小林宗兵衛とあり後世，小林氏に偽作されたものの写しとみられる。園部城普請には，吉親は酒井讃岐守に諸事相談され，櫓も上げさせて欲しいと御願いされたが，讃岐守は身分相応の大普請であり，其上二重堀で塀には狭間もあるのだから，櫓は当分見合した方がよかろう。追ってしかるべき沙汰があるであろう，ということで吉親も承知されたと「稲本覚書」にみえている。『武部家文書』には，築城完成の頃，年頭挨拶には城内御座敷で独礼が許されたとある。また『荘林家文書』には，元録6年（1693）庭普請が始まり，6月上旬に出来上がったと記されているが，それは城内のどこであるかは不明である。

②城下町概況

『出野家文書』「略史前録草案」　御館下町積並家数大略には，

一．惣郭堀外　南北六町　東西四町　但指渡シナリ

一．惣廻り弐拾壱町弐拾五間　但シ六拾間一町ニシテ　但大道法師ノ外廻りテハ弐十六町四十三間

一．町数六町　上本町　下本町　宮町　裏町　新町　大村町

一．侍屋舗　七拾七軒　元禄八年改

一．宮町　釘貫御門より札之辻迄弐町半五間

一．本町上ノ町升形より下升形迄三町半弐拾九間半

一．下ノ升形より新町升形迄四町半拾三間

一．札ノ辻より馬場出口迄横半町五間

一．裏町　上之町より下之寺迄弐町半拾六間

一．袋町　堀端より宮町口迄五拾三間

一．釘貫御門より新町下之升形迄拾町十四間半

一．本町上ノ升形より下之升形迄ハ町半拾壱間

一．町家数惣合四百三拾軒余

とある。『小林家文書』「園部町大村町帳・元禄十三年」によると，宮町・本町札之辻より上之町・札之辻より北へ横町・本町札之辻より下町分・新町・裏町・大村町御門通南江之町・四辻より西谷町・四辻より東中町・東谷町・袋町に，11大別され，以上各町の惣家数454軒について，それぞれの間口奥行間数が精細に記されている。またその調査は寛文改410軒・元禄改454軒・明和改486軒半となっている。園部大橋については，木崎口橋とあり，橋長28間半，橋幅２間，橋台６間半とみえている。

③幕末の城普請

幕末の大変動期，諸藩こぞって廃城へと傾いていったのに反し，ここ園部城のみは時代の激流に逆行して，ただひとり改築を急いだ。このことに関して大正14年（1925）の『府史跡勝地調査会報告』(注16)は伝え聞きとして「若シ事アルニ於テハ鳳輦ヲ奉ジテ城ニ迎ヘ，宸襟ヲ安ジ奉ランコトヲ期ス。即チ城ヲ修メ，壁ヲ高クシ，濠ヲ深クセントシタルナリト」と天皇を園部城に迎える為，城普請をしようとしたものであると記している。文久３年（1863）２月16日付『村方諸用日記』によると「然ハ今度臨時御普請被仰出候，右ニ付請職人別而大工木挽御用差支候ニ付近日より御雇入相成候間，請負・繕普請共不相成候間此段致承知村方ニ大工木挽等有之向八当人呼寄夫々可申聞置候已上」と臨時普請について村方に新築や修繕を禁ずる旨を申達している。

慶応４年（1868）１月28日付『村方諸用日記』によると「此度以叡慮為御守衛，園部城地御成功，被為蒙仰，難有思召ニ候」と三代官所より村々に廻状を送っている。慶応３年12月最後の園部藩主小出英尚(ふさなお)は入京して，孝明天皇の皇后九条夙子の御殿である准后殿を守護し，京中見廻役として京都の警固に当たっていた。このことからしても，園部城築城が，叡慮によったものであると記されていることと軌を一にしていることが知れる。また同年１月29日付『村方諸用日記』では「先達而相触置候御城地御成功，被為蒙仰ニ付村々後人幷ニ寺院御嘉詞として，寺社奉行月番へ可能罷出候，此段村々致承知廻状急々順達可致候様申達候以上」とあり，さらに同年２月10日付では，築城に際しての大赦の恩典が出されている。

築城の着工と上棟については，井尻美貞『勤向覚書』，中西伝蔵『控覚帳』によると，慶応4年1月18日に着工，明治2年8月26日に上棟されたことになっている。中西伝蔵は城普請のさい係り役をして，知営作方の心附で上棟につきお鏡を頂戴した。さらに御褒美として金200疋を頂いたことも同年8月25日の記にみえている。翌26日は上棟式で，八ツ時より「御時斗間，御鎚之間」にて，吸物御酒がふるまわれた。

慶応4年8月27日付『諸用日記』によると長瀬元八郎（元高50石）が普請奉行に任ぜられているが，城普請についての記事はいまのところ見当らない。

以上，まとめるならば，文久3年の臨時城普請が導火線となって，慶応3年12月入京して准后殿を守護していた園部藩主小出英尚は慶応4年1月18日から叡慮を以て御守衛のため園部城の改築普請にかかり，明治2年8月26日には上棟式をとり行った。この普請に関し『園部町史・史料編Ⅳ』では「……園部に天皇を迎えるためと考えるべきではなく，宮城の守衛のためであった……」と記している。しかし，『府史跡勝地調査会報告』では，この臨時普請は，鳳輦を城に迎える為のものという立場をとっている。

④園部城絵地図

（a）　園部城郭之図　（掛軸・園部高校蔵）　縦101.5cm・横147cm 旧藩士家別，旧城内略図　昭和51年8月再補修（別に，再補修されたものをさらに昭和52年3月，模写したものもある）。『園部城郭之図』の原本は船井郡役所（園部小学校）にあったものを園部高校に移したものであるが，昭和25年，同校火事の際焼失した。○山は色なし，㊙石垣，○黄色は屋舗地，○緑色は林藪，○青色は堀溜池，○鳶色は道，とそれぞれ色分けされている。また土塀・櫓・門・土蔵の記号がある。北ヤシキ十二番，屋敷一反三畝三歩五厘　小畠正生　というように藩士家別の地番・畝歩・氏名が記されている。しかし，城主の館やそれに付随した建造物は庫5棟・巽櫓・太鼓櫓・洲濱櫓・乾櫓の外は何も記されていない。（図版第26の2）

（b）　園部舊城郭見取図　（掛軸・園部高校蔵）　縦67.5cm・横75.5cm 原本は京都府総合資料館蔵，城主の館やそれに付随した建造物が半ば横をむいた形で俯瞰図的に描かれている。家臣屋敷は描かれているが下級家臣は記されていない。以上からみて，明治2年の城改築普請が終わってから以後に作成されたものと推定される。（図版第26の1）

（c）　園部城古図　（掛軸・上仲喬明氏蔵）　縦119cm・横145cm 京都府総合資料館蔵のものと骨組は殆ど同じであるが，山地描法に毛羽法をとり入れ，水田には一様に井印を配している。家臣屋敷には，御年寄弓術師範　百五十石　小畠助太夫というように藩士の役職・禄高・氏名が記されている。上仲喬明氏の語るところによると，巡査を拝命していた祖父上仲

真治が退職してから描いたものと伝え聞いており，明治の終り近くに完成したと語る。また筆跡は真治のものであるという。(図版第25)

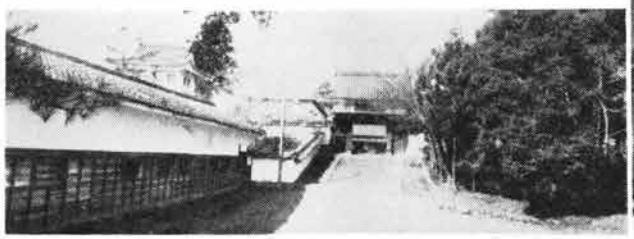
（d） 園部城（陣屋）鳥瞰図　荻原一青画『日本名城画集成』の中にある。縦25.5cm・横34.5cm　昭和38年7月一青画，当図は一青画伯の忠実な史実を考証し，そのうえ現地を何回も実地踏査した結果の絵画復元図である。園部城のすべてを繊細克明にカラーで描いている。細部にわたっては面積の大小や形態に修正の必要はみられるが，園部城図としては最も秀れたものといえる。

6. 写真で見る園部城の遺構（第30・31図）

①太鼓櫓（船井郡八木町北屋賀小字国府26　安楽寺に移築現存）(図版第22の2)

安楽寺先代住職の語るところによると，明治4年廃藩置県の後まもなく，安楽寺檀徒約50戸全員によって移築された，とのこと。昭和54年道路拡張の際北側寺寄りに移建修理がなった。下層は2間半角の規模で，内部は一室となり入口の他には小さな窓が東と西の2か所にあいている。上層への頑丈な階段が設けられている。上層は1間半角の大きさで四方とも板戸引違の開放的なつくりとなる。外観は下層が軒先まで塗込白漆喰仕上げで，腰板張りなの

②



④

③

第30図　写真で見る園部城の遺構(1)
②二重橋御門　③不開門（あけず）門　④櫓門

に対し，上層は素木のままで，長押が廻っている。太鼓は丹波亀山城のものであると伝えられている。

②二重橋御門　（亀岡市千代川町千原大門8　永田策司氏宅　明治初期に永田吉太郎が移築）（図版第23の1）

両そでの内，門に向かって左側はカットしたものと推定される。扉高さ235.5cm，巾121cm，くぐり戸高さ175cm，巾110cm，扉柱の断面35cm・19cm

③不開(あけず)門　（八木町広垣内小字石谷15　松本愛之助氏宅に扉2枚と，くぐり戸保管）

明治初年，不開門を分解して運び木材を小屋の天井に上げたままで保管していたが，（筆者確認）数年前焼却。現在は扉2枚とくぐり戸1枚を残すのみとなった。扉高さ305.5cm，巾157.5cm，くぐり戸高さ173cm，巾101cm。〈現園部高校櫓門との比較〉扉高さ310cm，巾167cm，くぐり戸172.5cm，巾108.5cm。用材は何れも欅一式。

④櫓門（正門）と巽櫓　（大正11年3月　船井郡立高等女学校卒業記念帖の写真　菱田孫太郎氏蔵）（図版第22の1）

現在府立園部高校正門として補修され現存している。城門の内には，高女の建物（明治20年7月船井郡高等小学校が設立されており，その建物が高女に受け継がれたという）が見えている。写真に向かって左側に東西に長い平屋の槍術場が見える。槍術場の裏には写真に見えないが西側に南北に長い平屋の馬屋と，その東側に南北に長い平屋の撃剣場があった。

⑤小麦山三層櫓跡に建った忠魂碑　（明治39年5月　森治兵衛写　森茂安氏蔵）

小麦山三層櫓がいつ築造されたかに就いては，最近現地より採取した瓦によって，慶応4年から明治2年，園部城大改築の際，同時に築造されたものであろうとの説が強くなってきた。元和築城の際にも，天守閣を築くことがおあずけとなって，幕末を迎えることとなるが，その様な天守閣造立の夢が，幕末城普請の際，小麦山三層櫓の形となって現れたものと考えられる。そしてこの櫓台跡が，日清・日露戦役など船井郡戦没者の合同忠魂碑となったもののようである。写真はその除幕式の光景である。

⑥西側中堀と弓張橋　（明治30年　森治兵衛写　森茂安氏蔵）

写真は園部城西側の中堀で，明治年間，園部公園が生れた時，中堀は「友ケ池」，中堀にかかった吊り橋には「弓張橋」の名がつけられた。この吊り橋は「刎吊(はねつり)橋」を起源としたもので，向かって左側には（左側が城）橋を刎上げる為の4本柱の原型がとどめられている。また弓形になったワイヤーロープのカーブが美しい。

⑦真弓橋　（大正12～13年写　田中一氏蔵）

前記「弓張橋」が腐朽のため，より耐久性と美観に秀れた擬宝珠の欄干の付いた「真弓橋」

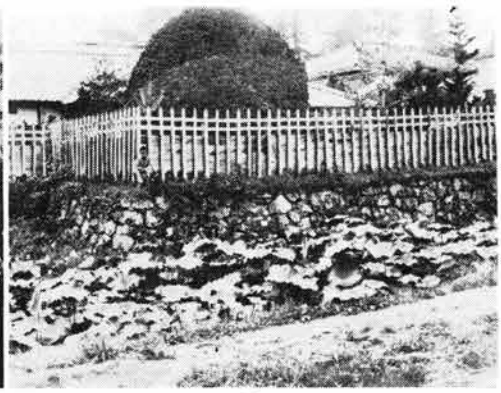
⑤

⑥

⑦

⑧

⑨



⑩

第 31 図　写 真 で 見 る 園 部 城 の 遺 構 (2)
⑤小麦山三層櫓跡に建った忠魂碑　⑥西側中堀と弓張橋　⑦真弓橋
⑧園部グラウンド　⑨家老小出屋敷跡より宮町展望　⑩蓮池

にかけ替えられた。ここで刎吊橋の残映は惜しくも消えて行った。写真は真弓橋渡り初めの光景である。現在写真に見る一帯は埋めつくされていて，海洋センターとなってしまった。

⑧園部グラウンド　(昭和4年1月7日写　田中一氏蔵)

写真は園部グウランドで行われた消防出初式の光景である。写真に向かって左側崖上に洲濱櫓，手前の方には勘定奉行所があった。勘定奉行所はのち，会計局に変りその後，杉の巨木に覆われ「杉林役所」とも呼ばれた。第1次世界大戦後，平和が訪ずれ，野球が盛んとなり，園部城跡杉の平地美林も，大正12年，野球グラウンドに衣替えしてしまった。これが園部グラウンドである。写真遠景2階建は家老小出屋敷の跡に建った料理旅館六花亭である。現在，六花亭跡は園部幼稚園となっている。

⑨家老小出屋敷跡より宮町展望　(明治30年　森治兵衛写　森茂安氏蔵)

写真手前高所の家老屋敷右側の崖渕には，白壁の練り塀が巡らされ，その崖は三間の高さをもった小石の多い不完全な石垣からなっている。正面が宮町通りで，南の突き当りが釘貫門（写真中央部）となり，まっすぐ南（手前の方）に進むことができず，西に折れて大手門をくぐり，北広小路で再び東に折れ，園部城門に達した。現在，小出屋敷跡・小林清周屋敷跡の辺が園部幼稚園となっている。

⑩蓮池　(明治30年　森治兵衛写　森茂安氏蔵)

釘貫門（別名北門）を入った所門番の建物あり，御馬廻稲本八太夫屋敷あり，その辺に明治12年，船井郡役所が開設された。写真は同役所を北から南西に向かって撮ったものである。柵型の板塀はなくなっているが現在，石垣もギンモクセイもそのまま残っている。郡役所は京都府園部地方振興局と改命され，やがて小山東町方面に移転しようとしている。慶応4年城普請の際，弥兵衛持の弓谷上田7畝9歩が外堀になった記録が残されているのは，この蓮池を含んで隣接した部分を指している。現在，蓮池の一部と弓谷の外堀の一部が残存している。

（竹岡　林）

（注1）森　浩一他『園部垣内古墳調査概報』園部町教育委員会　1973
（注2）山口　博他『温井13号墳発掘調査概報』園部町教育委員会　1981
（注3）堤　圭三郎「大向窯跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1971)』京都府教育委員会)　1971
（注4）竹岡　林『丹波園部城』日本城郭協会近畿支部　1970
（注5）『園部盆地における考古学的調査—分布調査の成果Ⅲ—』同志社大学考古学実習室園部町遺跡分布調査研究会　1981
（注6）川西宏幸「円筒埴輪総論」(『考古学雑誌』第64巻 第2号)　1978
（注7）注6に同じ

(注8) 注5に同じ
(注9) 注5に同じ
(注10) 注6に同じ
(注11) 藤岡謙二郎「国府」(『日本歴史叢書』吉川弘文館) 1970
(注12) 堤 圭三郎他『丹波笑路城発掘調査報告』亀岡市教育委員会 1978
(注13) 竹岡 林編『日本城郭大系』11 新人物往来社 1980
(注14) 注4に同じ
(注15) 高柳光寿「明智光秀」(『日本人物叢書』吉川弘文館) 1969
(注16) 西田直二郎「園部城址」(『京都府史跡勝地調査会報告』第6冊) 1925

第2章全体を通じて『園部町史』資料編Ⅱ・Ⅳを引用させていただいた。

4. 黄金塚2号墳発掘調査概要

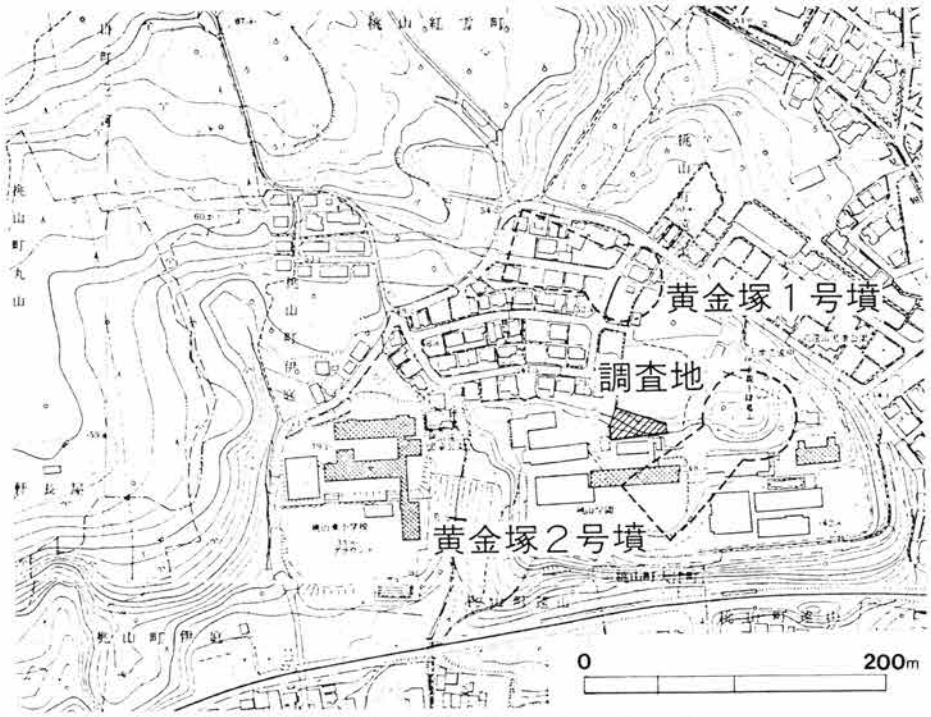
1. はじめに

京都市伏見区の府立桃山養護学校において校舎増築工事が行われることになり，工事予定地を事前調査してほしいとの依頼が当調査研究センターに対してあった。当該地は，伏見城跡に関連する遺構の検出も推定され，また黄金塚古墳があったと伝えられる場所でもあり，調査の必要が生じた。そこで，当調査研究センター調査課の水谷寿克・久保田健士の両名が調査担当者として，昭和56年11月20日から同年12月4日まで現地調査を実施した。

なお，今回の調査では，府立桃山養護学校事務部長荻野信雄氏，同校教諭村尾 清・川上 博の両氏および現場工事関係である大都建設工業株式会社工事部現場主任宮岡昌明氏など多くの人の御協力(注1)を得た。心より謝意を表したい。

2. 調査地の位置

調査地は，京都市伏見区桃山町遠山50番地にある。調査前は，養護学校の運動場の一部お



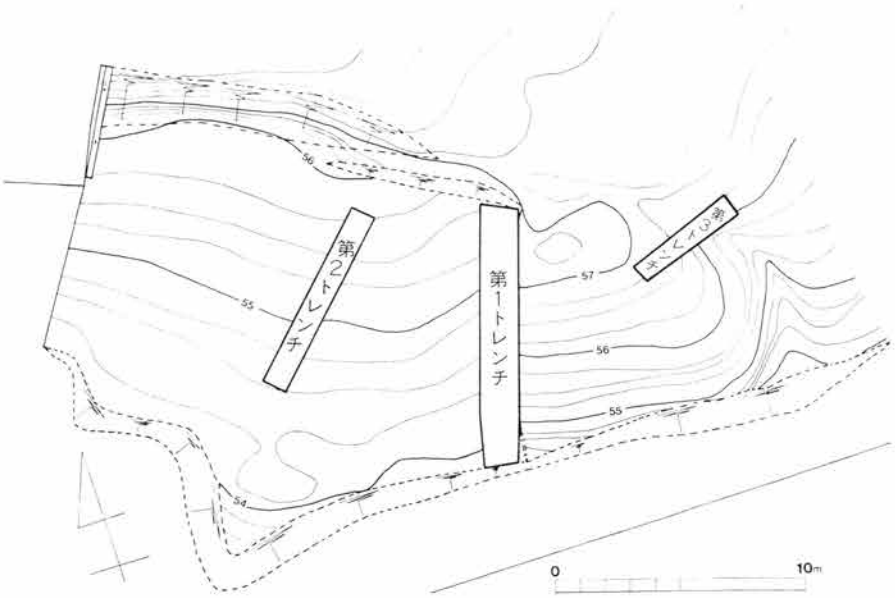
第32図　調査地位置図

よび竹林であり，現状から旧地形を推定することは困難であった。同地は，伏見城の立地する丘陵の東端にあたり，丘陵稜線が東南にのびるその南側丘陵腹である。標高約55mに位置し，丘陵南を西方向に流れる宇治川，その南方の巨椋池干拓地や宇治方面を一望できる。また北に目をむければ，山科の盆地が望める。

調査地周辺の遺跡(注2)としては，奈良・平安期の須恵器の散布する中山遺跡が，調査地北東方向にある。また，同丘陵の西端部には，須恵器・円筒埴輪の出土する桃山古墳群がある。丘陵と宇治川の間には，泰長老遺跡があり，古墳時代後期の須恵器が出土する。また，同丘陵一帯は，伏見城跡として知られており，石垣が調査地西の桃山町紅雪で検出されている。

3. 調 査 概 要

試掘溝を設定し，掘削を行ったのは，竹林にあたる場所であった。北側に果樹園があり，そこからゆるやかな傾斜が続いていた。調査地の東地区と西地区でおよそ2m前後の落差があり，まずその落差部分を削り落として断面を観察することにした。表土下において，いくつかの土層が観察しえたが，竹林において一般的に行われる置土の砂質土であると判断された。その置土の厚さは，浅い所で1m，深い所で2mあまりに達していること，その下層に淡黄灰色砂層が続くことが判明した。そこで，調査地の東地区の盛り上がりは，ほとんど竹林の置土によるものと考えられた。



第33図　調査地地形図・トレンチ設定図

以上の断面観察をふまえ，調査地内に，3本のトレンチを設定し，掘削を開始した。その結果，第1トレンチでは，淡黄灰色砂層がトレンチ南端で急傾斜をもっていること，その層がかなりの厚さをもって堆積していることが確認できた。また調査地西地区の中央の第2トレンチでは，竹林の置土である淡褐色砂質土の下層に赤褐色粘質土層が続く。赤褐色粘質土層は，トレンチの北端から2mの地点からやや急な傾きをもち落ち込んでいる。第2トレンチの北西から南東にむかっての傾斜と判断される。第3トレンチでは，竹林の表土および置土下に赤褐色粘質土層があるが，第1トレンチの土層との関連から，赤褐色粘質土層は竹林の置土の上に部分的に堆積したものと判断される。

以上のトレンチの掘削により判明したことは，地山層と思われる赤褐色粘質土層がほぼ北から南へのやや急な傾斜をもち調査地南側に落ち込んでいるということ，そしてその上層に淡黄灰色の砂層および淡褐色砂質土層が堆積し竹林の部分を形成していることなどである。(注3)

出土遺物としては，いずれも表土および竹林の置土中より，埴輪細片・須恵器片がある。

今回の調査は，3本のトレンチで2m近く掘削したが，何らかの遺構と判断される部分も確認されなかった。また出土遺物も極めて少なかった。

4. 遺　　物

今回の調査で出土した遺物は，いずれも細片であり，また少量である。この項では，調査地およびその付近で表採した遺物(注4)を含めて述べたいと考える。

遺物は，円筒埴輪片・器材埴輪片・須恵器片・陶磁器片がある。須恵器・陶磁器の破片は，いずれも数片であり，完形を推定しうる程のものでなかった。須恵器の破片には，杯蓋の一部と思われるものもあるが，その形態から7～8世紀の宝珠つまみの付くタイプと思われる。陶磁器の破片は，褐色の釉薬が認められる。

円筒埴輪は，筒部および底部の破片である。タガの形態や外面の調整等により大きく二者に分けることが可能である。まず，器壁が薄く8mm前後で，タガが台形状をなすがやや突出度が高く，外面調整として第1次調整にタテハケを施し第2次調整としてやや連続的なA種ヨコハケを行うものがある。もう一つは，器壁が厚く1cm前後で，タガが台形状をなし，外面に第1次調整としてタテハケ，第2次調整としてヨコハケを施したものである。(注5) 前者はやや赤味をおびた黄褐色で黒班が認められ，後者は黄褐色で胎土もやや粗く黒班の有無については確認できなかった。

器材埴輪の破片は1片で，調整・胎土・焼成等から円筒埴輪の後者に類似する点がある。外面にヘラによる沈線が認められる。衣蓋形埴輪の破片と思われる。

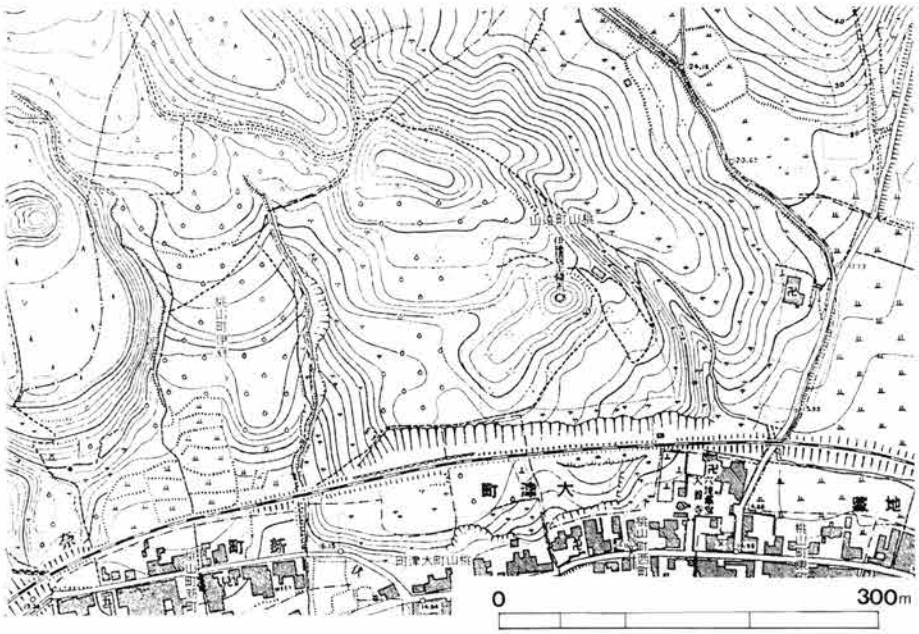
以上，遺物について述べてきたが，円筒埴輪は，川西宏幸氏の編年ではⅡ期ないしⅢ期にあたると思われる。

5. む　す　び

今回の調査では，遺構と思われる部分を確認するに至らなかった。また，遺物も少なく細片であるため，また表採あるいは表土・竹林置土中よりの出土のものばかりであったため，詳細な点まで言及しがたい。しかし，調査地の南に隣接して存在した黄金塚2号墳との関連から若干のまとめを行いたい。

黄金塚2号墳は，現在後円部のみ残存しており，その部分が宮内庁により伊予親王墓に指定されている。前方部は残存しておらず，全長に120mと推定される前方後円墳の墳形については，昭和11年の京都市土木局都市計画課作製の地形図によらなければならなかった。(注6) それによると，古墳の主軸をほぼ南西にとり，前方部を平野部に向けていたこと，墳丘と丘陵の間（特に前方部）に若干の掘割が認められる。今回の調査地は，その掘削の丘陵側の肩部にあたると思われるが，後世の地形変更により，調査では確認したとは言いがたい。

次に，黄金塚2号墳の築造年代であるが，昭和49年の宮内庁の伊予親王墓立会調査(注7)の成果



第34図　調査地付近地形図（昭和11年）

を考慮に入れるならば，後円部中央に粘土郭を内部主体とし小札革綴冑[注8]を副葬した可能性があることなどから考えて，4世紀末葉にあたると考えられる[注9]。

なお，今回の調査地の北に存在した黄金塚1号墳については，現在宅地および畑地となっており，かろうじて先述の地形図より全長100mの前方後円墳であったことが推定できるだけである。

以上，調査のまとめを行ったが，古墳の年代観については，川西宏幸氏の研究[注10]によるところが多い。

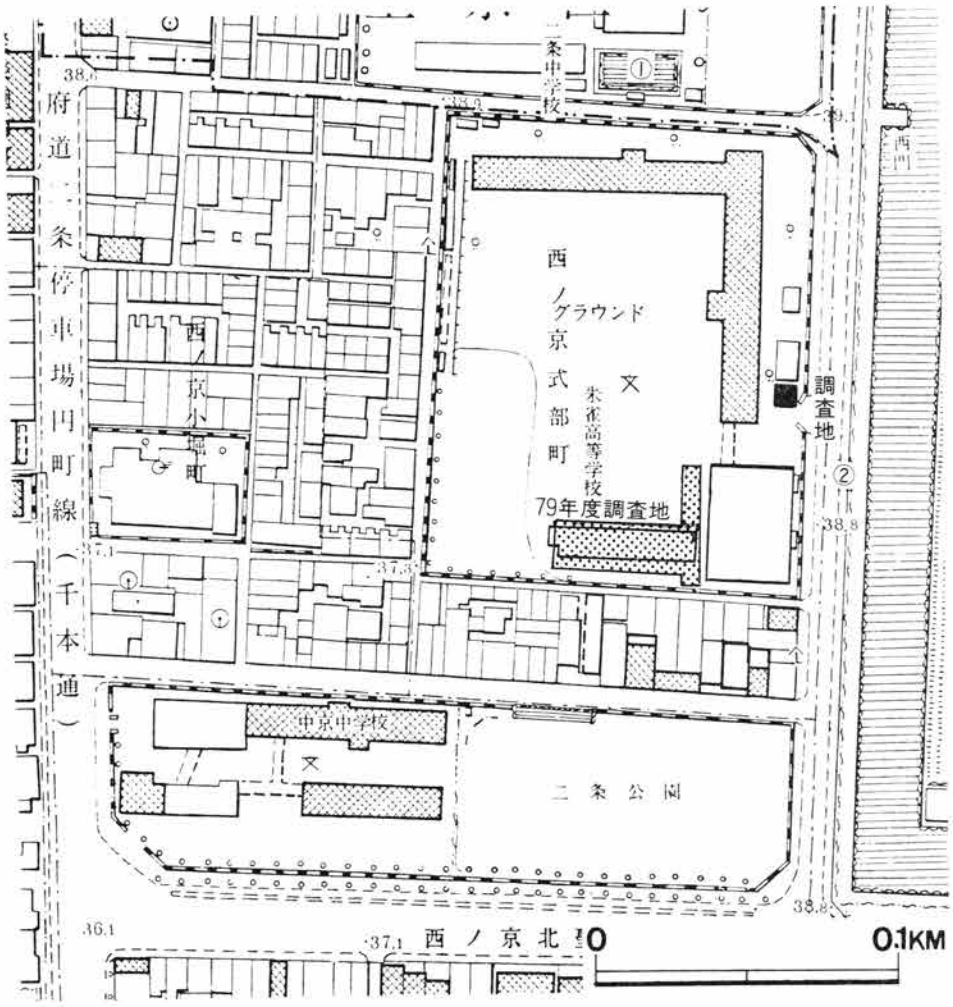
（久保田 健士）

（注1）発掘調査では，調査補助員として山口文吾・難波洋三の両氏に参加してもらった。
（注2）『京都府遺跡地図』1972および『京都市遺跡地図』1980を参考とした。
（注3）調査後の工事の際、あらためて調査地の土層を観察する機会を得たが，地山層である赤褐色粘質土の落ち込みは，ほぼ東西方向に延びていた可能性が考えられた。
（注4）桃山養護学校教諭の村尾 清・川上 博の両氏が，調査地付近で表面採集された埴輪片を両氏の御好意により実見することができた。
（注5）前者のハケは密であるが，後者はやや粗いハケである。
（注6）昭和11年の地形図の入手にあたっては，京都大学教養部人文地理学研究室の方々にお世話になった。
（注7）戸原純一・笠野 毅「巨幡墓の境界線崩壊防止工事の立会調査」（『書陵部紀要』27） 1975
（注8）同型式の小札は，京都府山城町の椿井大塚山古墳および京都府向日市の妙見山古墳，三重県上野市の石山古墳に類例を求めることができる。
梅原末治『椿井大塚山古墳』（『京都府文化財調査報告』第23冊） 1964
樋口隆康「山城国相楽郡椿井村大塚山古墳調査略報」（『史林』36-3）1953
梅原末治「向日町妙見山古墳」（『京都府文化財調査報告』第21冊） 1955
小林行雄「三重県名賀郡石山古墳」（『日本考古学年報』1・3） 1951・1955
（注9）今井 堯「陵墓問題の最近の動向」（『考古学研究』111） 1982 では，4世紀末葉に編年され，また，『京都の歴史』第1巻 京都市編 1970の中では，5世紀前半に比定されている。なお1号墳は，後者の中で5世紀に比定されている。
（注10）川西宏幸「円筒埴輪総論」（『考古学雑誌』64-2） 1978

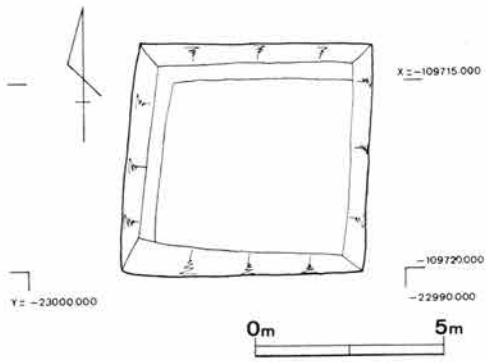
5. 平安宮跡(推定式部厨)発掘調査概要

1. はじめに

今回報告する発掘調査概要は，京都市中京区西ノ京式部町に所在する京都府立朱雀高等学校の食堂増築工事に伴うものである。本調査地は，千本通（平安京朱雀大路跡）から東へ約230m，美福通に接する地点で，平安京でいえば二条大路に北接する式部厨に相当する。平安京・二条城等の関連遺跡の存在が予想されたため，事前に発掘調査を行うことになり，京都



第35図　調査地位置図



第36図　調査地平面図

府教育庁管理部管理課と当調査研究センターとの間で協議を行い，当センターが調査主体となって，食堂増築部分の発掘調査を実施することになった。発掘調査は，昭和56年9月22日から10月9日の期間に行った。京都府教育庁指導部文化財保護課の指導のもと，当センター調査員 長谷川 達・石尾政信が現地調査を担当した。

調査にあたって，京都府教育庁管理部管理課・朱雀高等学校・京都市文化観光局文化財保護課・財団法人京都市埋蔵文化財研究所・京都市埋蔵文化財調査センターの援助・協力を得た。補助員として上野 真氏，整理員として小塩礼子・竹原京子氏等の協力を得た。報告書の執筆・編集は，石尾政信がおこなった。

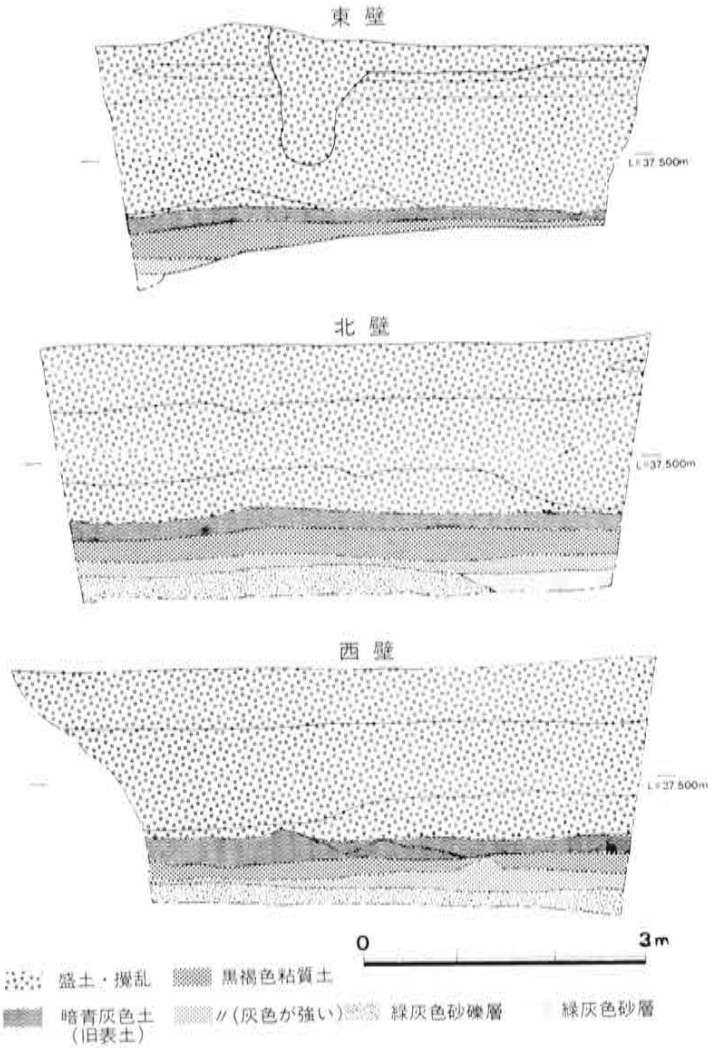
2. 調 査 概 要

本調査地は，上記のように平安宮式部厨に相当するところで，京都府教育委員会による朱雀高等学校敷地内の発掘調査[注1]地の北東40mの地点にあたる。朱雀高等学校周辺の調査としては，推定民部省[注2]（昭和48年），平安宮東限[注3]（昭和48・52年），平安宮南限（二条大路，昭和48年）等がある。推定民部省跡の発掘調査では，民部省南築地・二条城と方向のそろう石敷が，平安宮東・南限の調査では，東大宮大路東側溝と築地（平安宮東大宮），二条大路北側溝と築地（平安宮南大垣）が検出されている。

発掘調査は，食堂増築予定地に6m×6mのトレンチを設定し，重機によって掘削した。地表から約60cm掘り下げたところで，旧校舎の基礎跡を発見した。それより1.2m掘り下げたところまで（地表から1.8m下がる）が，旧校舎（女学校）建設に伴う盛土であることがわかった。この下が旧表土である暗青灰色土で，それより下は黒褐色粘質土である。黒褐色粘質土は，上・下層に分かれ，下層が灰色が強く，粘性も強くなる。この黒褐色粘質土層から，瓦（軒瓦他）・凝灰岩片・陶器片が出土した。黒褐色粘質土の下は，いわゆる地山とおもわれる。緑灰色砂礫層・砂層となる。砂礫層・砂層を断ち割ったが遺物は出土しなかった。この地山とおもわれる砂礫層は，南東から北西に緩やかに下っている。調査にあたって，前回の調査で，京都府教育委員会が設置した国土座標基準点BM1・BM2を使用した。

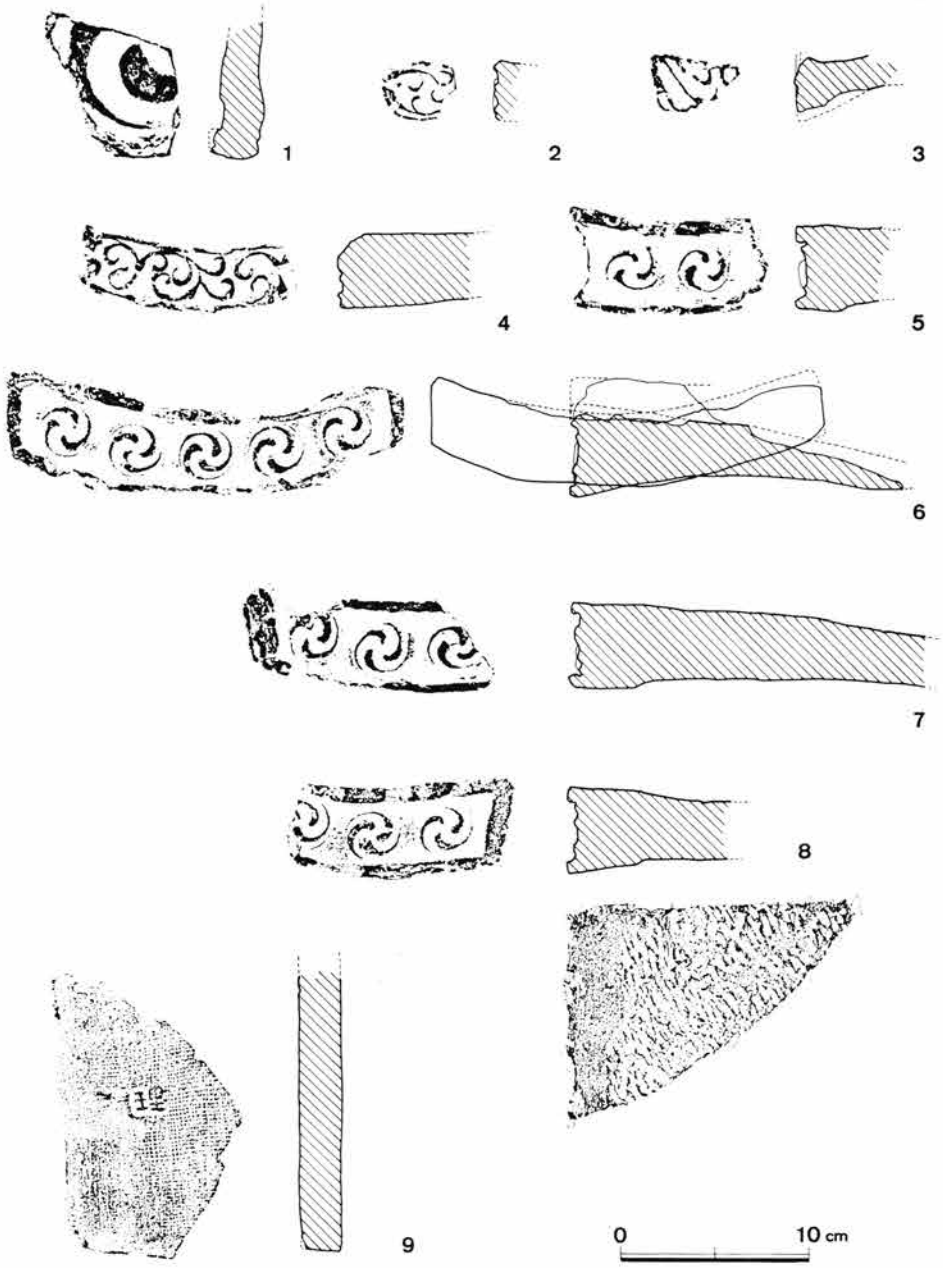
出土遺物は，旧表土から中・近世の遺物片が少量出土するだけで，ほとんどが黒褐色粘質土層から出土したもので，コンテナーに約13箱ある。出土遺物には，多量の平瓦・丸瓦と，軒丸瓦・軒平瓦・凝灰岩・陶器片・土師器片がある。このうち瓦以外で形のわかるものはない。

第38図の1は軒丸瓦，2～8は軒平瓦，9は刻印瓦である。1は，巴文を内区主文とする三巴文左巻で，尾は内外区を画する界線とならない。焼成は良く，表面は暗灰色，内面は淡灰色をしている。2は，瓦当の一部が剝離したものである。3は，軒平瓦の左端であるが上・下端を欠損する。4は，直線顎で，平瓦部凹面から瓦当面にかけて斜めにケズリとっている。その一部には，指の痕が残っている。平瓦部凸面は縄目が，凹面には布目が残る。焼成は良



第 37 図　土　層　断　面　図

く，表面は灰白色をしている。2～4は，いずれも変形の忍冬唐草文とおもわれる。5～8は，五連巴文を内区主文とするもので，巴の頭が太く，尖り気味に尾に続き，尾の先端が明確な圏線とならない。いずれも直線顎を呈し，瓦当と平瓦部の厚さに差は少なく，平瓦の先



第38図　出土遺物実測図・拓影
1.軒丸瓦　2～8.軒平瓦　9.刻印瓦

端に粘土を充塡して瓦当としたものとおもわれる。瓦当上面は，いずれも横方向のケズリ，下面に横方向のナデを施し，平瓦部凹面に斜め方向の粗い縄目をそのまま残す点等が共通する。胎土は良質で，焼成がよく淡白色・灰色をしたもの５～７と，やや軟質で，表面暗灰色，内面灰白色のもの８がある。前回調査(注1)で，ＮＨ12とされている瓦と同じものである。民部省推定地からも出土している。９は，平瓦の凹面に「理」字を刻印したものである，平城・長岡等で出土しており，瓦の移動を示すものである。

今回の発掘調査では，平安京・二条城関連等，遺構は全く検出されなかった。後世に削平されたものであろうか。出土した軒瓦は，平安後期のものとおもわれるが，陶器などからみると，埋もれた時期は，若干新しくなる。地山とおもわれる砂礫層が北に向かって下がるのは，後世の攪乱によるものであろうか。　（石尾 政信）

（注１）平良泰久他「平安京跡（二条大路）昭和54年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1980-3)』京都府教育委員会)　1980

（注２）戸田秀典・松井忠春「平安宮推定民部省跡の発掘調査」(『平安博物館研究紀要』第６輯(財)古代学協会)　1976

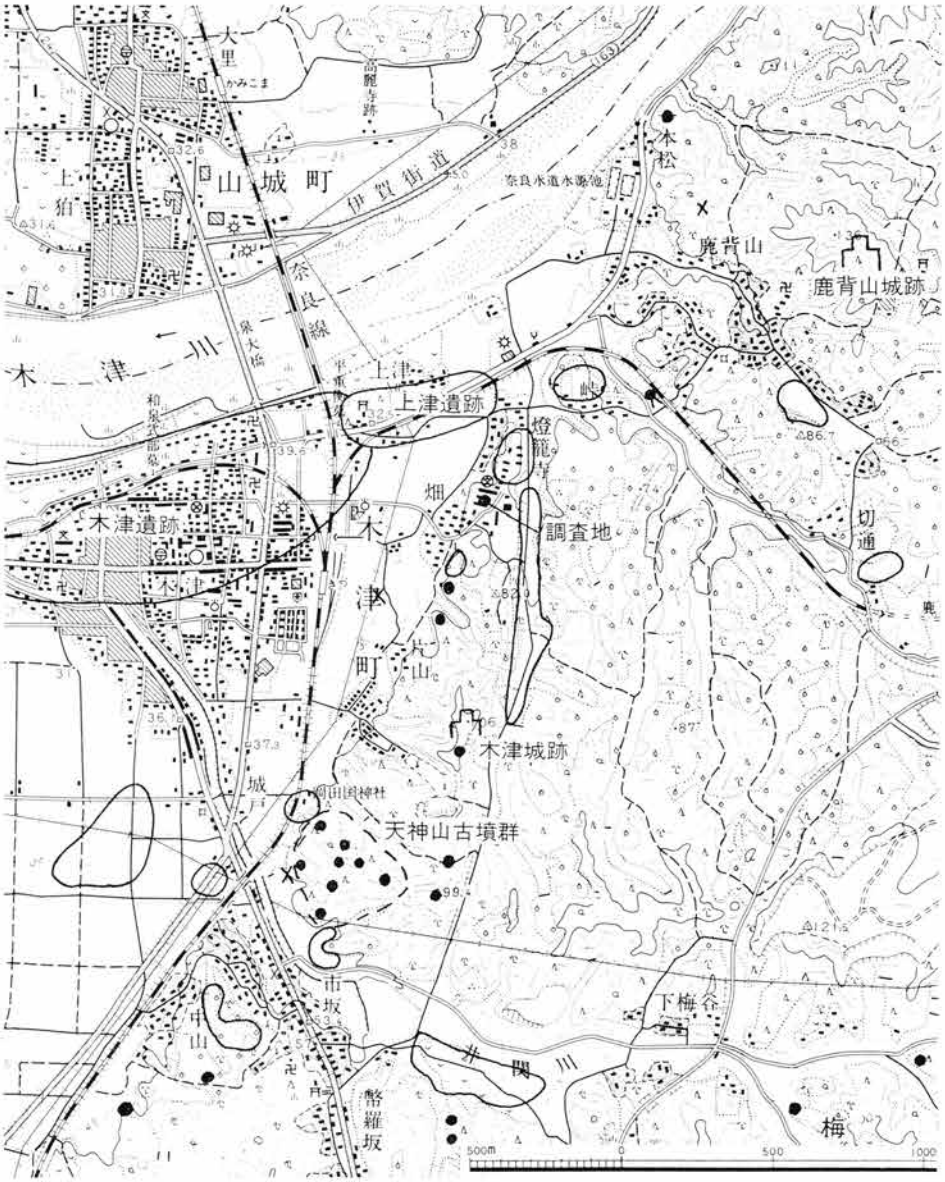
（注３）浪貝　毅・玉村登志夫「平安宮東・南限の発掘調査」(『平安宮跡』京都市文化観光局文化財保護課)　1974

浪貝　毅「平安宮跡東限発掘調査概要」(『平安宮跡』京都市文化観光局文化財保護課)　1977

6. 内田山古墳発掘調査概要

1. はじめに

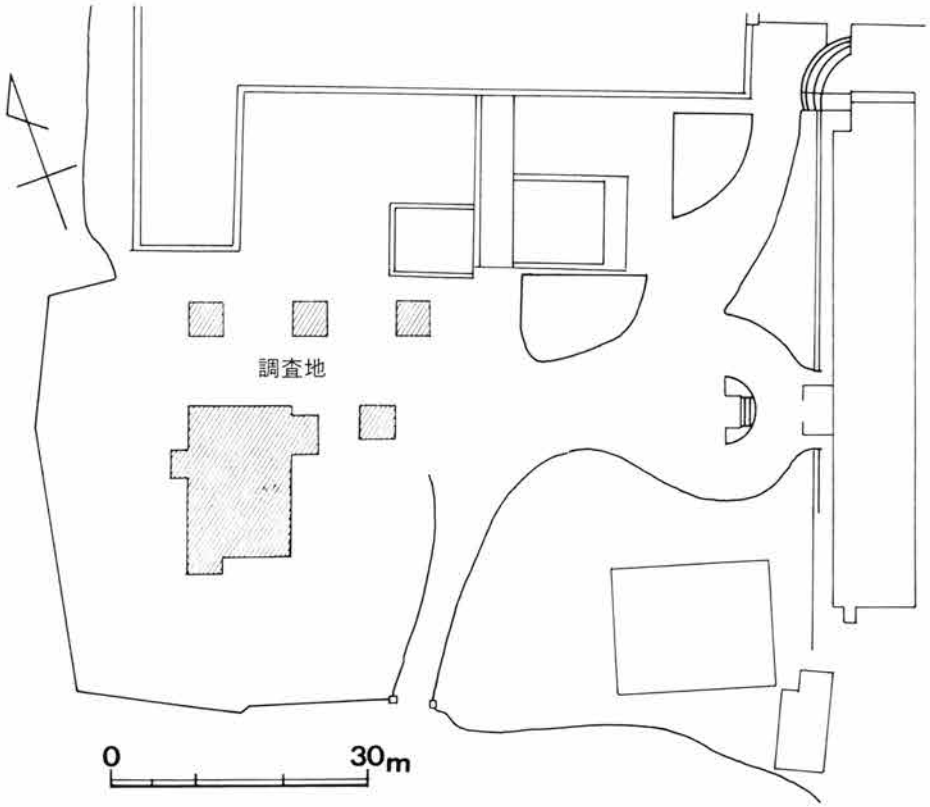
木津町は，23.17km² とその総面積こそ狭いが木津川の雄大な流れや，那羅山丘陵，鹿背



第39図　調査地位置図

山麓が，古い歴史を持つこの町を支え，今だに，のどかさをかもし出している。この地域は，大和・伊賀・歌姫の諸街道や木津川と接し，古くより交通の要所を占めてきたことは言うまでもなく，丘陵や台地・平地に散在する数多くの遺跡は，この地域が当時の政治勢力の場にあって，重要な鍵を握っていたことを示すものである。今回の調査対象となった内田山古墳は国鉄奈良線の木津駅より北東約 0.7km に位置し，現在は京都府立木津高等学校校地として利用されている。

この度京都府立木津高等学校の校舎老朽化に伴い，新校舎が建設されることになり，同計画について京都府教育委員会で協議がなされた結果，当該地が京都府遺跡地図に記載されている燈籠寺遺跡に近接していることから，この遺跡の範囲，性格等を明確にすることが急務であるとの結論にいたった。そこで工事着手前に試掘調査を実施し，その結果によって処置の再検討を行うことになり，昭和56年9月3日から同年9月24日までの22日間，調査を行った。なお発掘調査は当調査研究センターが主体となり実施したのであるが，現地では当セン



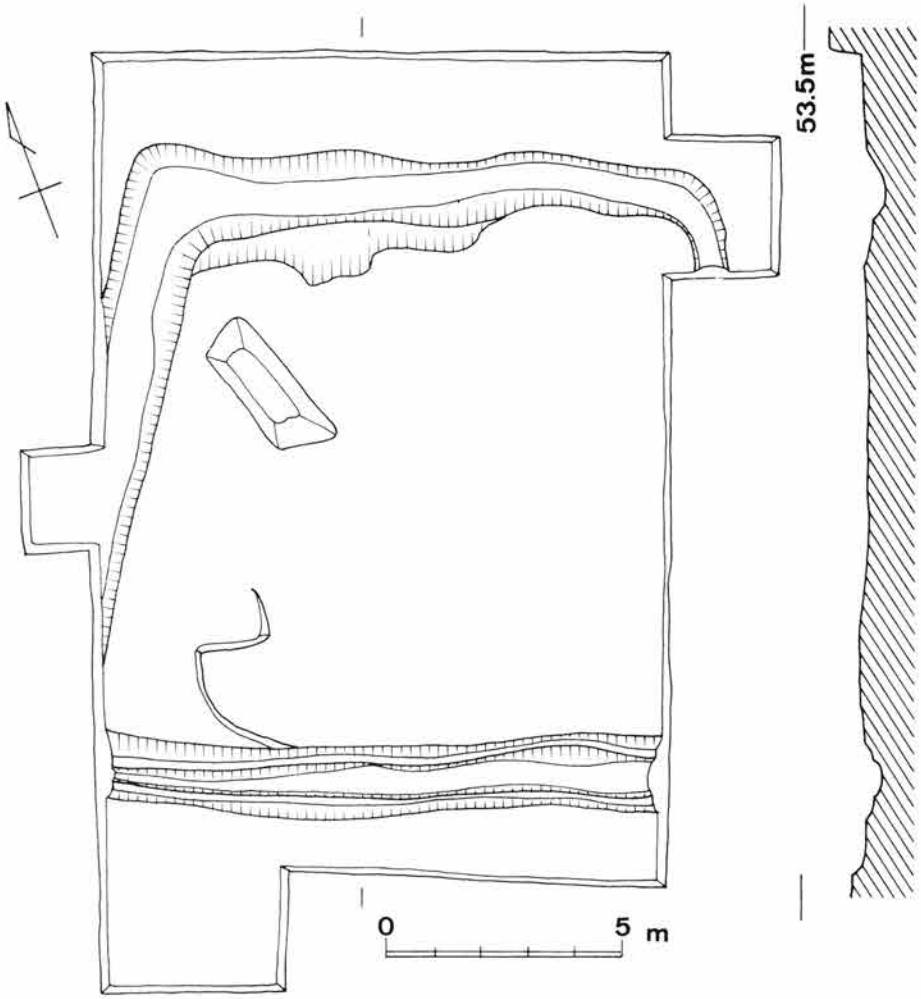
第40図　トレンチ設定図

ター調査課調査員長谷川 達，同大槻真純が担当し，京都産業大学学生清水 隆・阪口浩章・小出正憲・末澤幸一・谷本隆儀・文教短期大学学生宮本 満 の各氏には 調査補助員として，また久保直子・長谷川陶子氏には整理員として多くの協力を受けた。そして，京都府立木津高等学校・京都府教育庁管理部管理課・木津町教育委員会等の諸機関にはそれぞれの立場で多大なご援助を受けることが出来た。ここに銘記して謝意を表したい。

なおこの概要は大槻真純が執筆し報告するものである。

2. 調査の概要

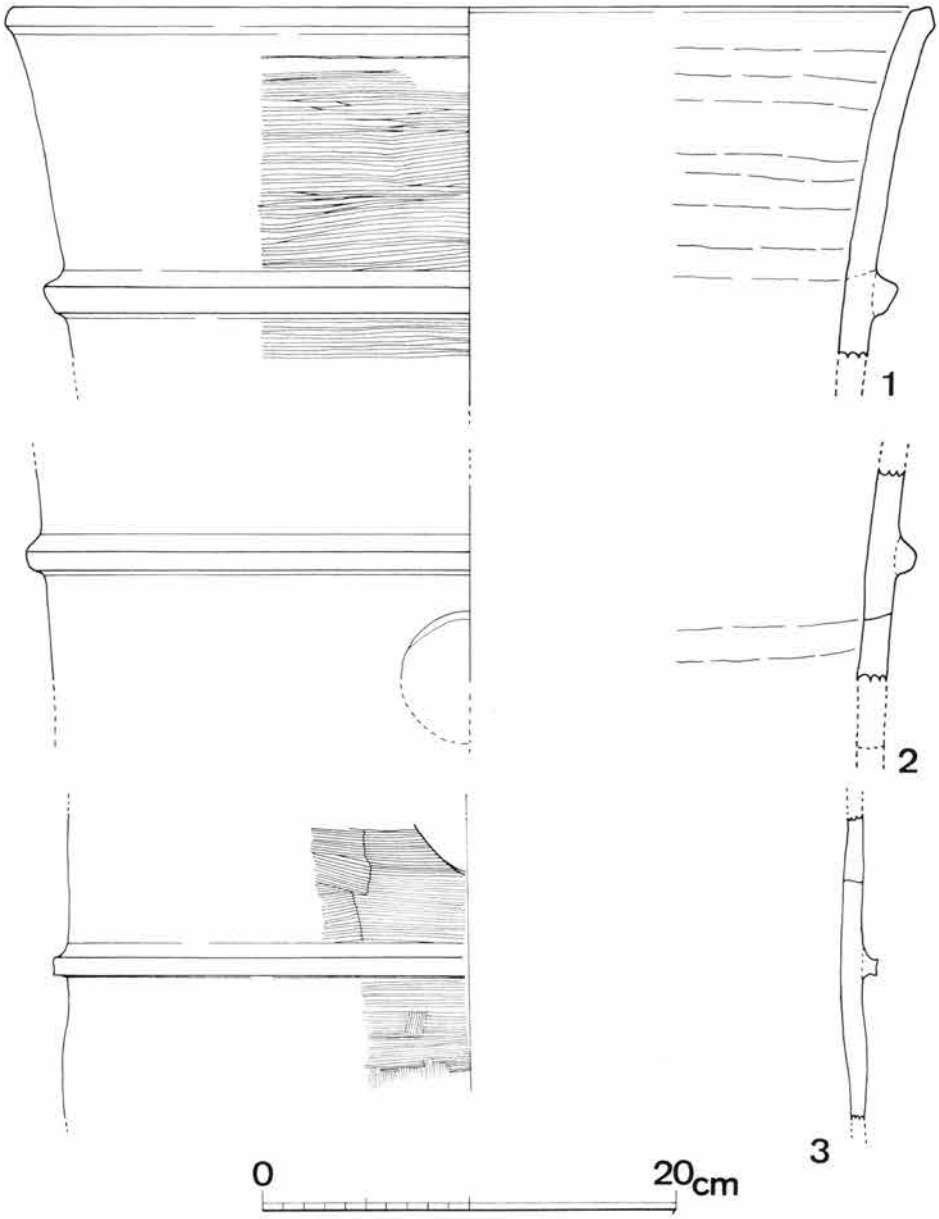
内田山周辺は，これまでに埴輪片・弥生式土器片等が散布していることから，注目されて



第41図　遺構平面および断面図

来た所ではあるが，遺跡の性格・範囲等の具体的なことについては全く明らかではなかった。したがって新校舎建設前に遺跡の有無・範囲・性格等を明確にし，工事との調整を計ること及び遺跡保存等の協議に関しての資料を得ることを目的として調査を実施した。

調査方法としては，原則として新校舎建設予定地内を，4×4mの方眼状に区切り（第40

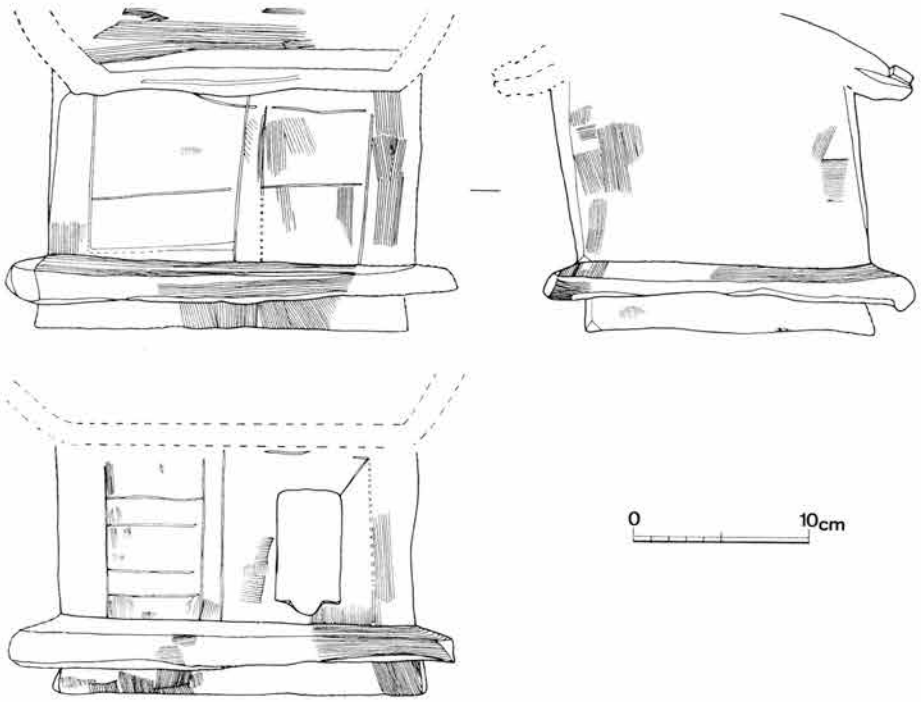


第42図　円筒埴輪実測図

図）それぞれのグリッド内に顕著な遺構・遺物が検出された場合には，その周辺部を掘り広げる方法をとったのではあったが，いずれのグリッドも旧校舎の建物基礎および，この付近一帯が，旧耕作地として利用されていたことから地山面に至るまで攪乱がおよんでいた。そのためいずれのグリッド内でも，顕著な遺構は確認できなかった。ただ埴輪片を含む溝状遺構を確認し，その広がりを追究すべく付近一帯を掘り広げた結果，ほぼ方形にまわる溝を検出するに至った。この溝は幅 約1.6m・深さ 約0.5m であり，ほぼ方形を呈し，その一辺は約12mを測ることが出来る。また溝中からは埴輪片が多量に出土した。このことから，この方形を呈した溝は自然地形を利用して構築された方墳の墓域を区画する周濠であることが明らかとなった。しかし，その埋葬施設は，前記した攪乱等による削平からか確認することは出来なかった。

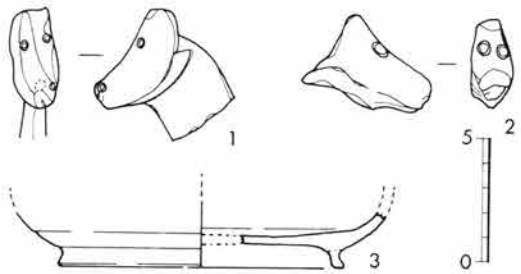
3. 出 土 遺 物

調査によって出土した遺物は，そのほとんどが周濠内より出土し，又その大半が埴輪である。埴輪は，円筒埴輪・家形埴輪・朝顔形埴輪などである。円筒埴輪（第42図1～3）はいずれも赤褐色を呈し，器肉はやや薄いが大型品である。1は，口径44.4cmを測り，口縁部下



第43図　家 形 埴 輪 実 測 図

半はややそり気味に外反する。外面は横ハケによって調整されている。2は，直径42cmを測り，円形の透孔がある。3は，直径41cmを測り，外面は横ハケ調整が施されている。家形埴輪（第43図）は，現存高18.3cmを測り，また長辺10.8cm，短辺8.5cmを測る。屋根の形は不明であるが，勾配はなだらかである。壁は縦横の平行線によって文様が施されている。おそらく窓を表現しているのであろう。外面は，すべて縦および横方行のハケ調整が施されている。その他の遺物としては，土馬・須恵器等がある。土馬（第44図1・2）は，2体分出土しているが，いずれも全体の形がわかるものではない。1は，つまみ出した頭部にうすい粘土をはりつけてあごをつくり，竹管で目と鼻をつける。2は，頭部をつまみ出した後，ナデで調整し竹管で目をつける。



第44図　土馬・須恵器実測図

4. むすび

以上のとおり，今回実施した調査の結果について報告してきた。当初に目的とした燈籠寺遺跡に関する遺構・遺物はまったく検出することができなかったが，予想に反して古墳の墓域を区画する周濠を検出することができた。これまで，内田山周辺地域において相当数の埴輪片が採集されているのにもかかわらず，はっきりとしたマウンドを有する古墳が確認されていなかったが，今回の調査により，この内田山にもかって古墳が存在したことを立証できたことになる。そしてこれまでに採集されている相当数の埴輪片および，今回の調査結果をもとにすれば，一時期の耕作等による削平のために，かなりの数の古墳がその形状を留めるに至らなかったのであろう。いずれにしても，木津の平野を一望できるこの内田山にかって古墳が存在したことが明らかになった事実は，この地域の古代を考えるうえで，一つの指針を与えてくれたものと考えられる。また，周濠内出土の埴輪は南山城地方出土のものとして重要な一資料となるであろう。

（大槻 真純）

7. 橋爪遺跡発掘調査概要

1. はじめに

ここに報告する橋爪遺跡は，京都府の北西端，熊野郡久美浜町橋爪字矢須田に所在する。久美浜町は，東は竹野郡網野町・中郡峰山町，南は兵庫県出石郡出石町・但東町，西は兵庫県豊岡市に接し，北は日本海に面する。周囲は西・南・東をそれぞれ標高600m級の山に囲まれ，その山並みをぬって東から佐野谷川，川上谷川，久美谷川が北流して久美浜湾に注いでいる。橋爪遺跡はそのうちの川上谷川によって形成された沖積平野下流域の東岸に位置する（第45図）。

当遺跡は『京都府遺跡地図』に記載された周知の遺跡で，大正9年に周辺で遺物が採集されて以降[注1]，昭和42年の府立久美浜高等学校校舎第3棟建設[注2]，昭和55年の同校第4棟建設[注3]に伴って発掘調査が実施された。その結果，昭和42年（第1次）の調査では，調査面積が狭かったにもかかわらず，遺物包含層を二層確認し，完形品8点を含む多量の土器を検出した。また昭和55年（第2次）の調査では，弥生時代中期から古墳時代前期までの3時期にわたる遺構を検出し，これまで丹後地方で資料不足であった弥生時代中期後半乃至後期中葉頃の資料を同一遺構内で層位的に確認でき，丹後地方における土器編年の指標をえた。さらにこの調査では丹後地方で初めての瀬戸内中部の遺物（分銅型土製品など）も出土した。

今回，京都府教育委員会が昭和42年度調査地から南西約150mの水田（沖積平野）及び久美浜高校テニスコートに体育館の建設を計画し，事業担当課である管理課から文化財保護課に対して同計画に係わる埋蔵文化財の取扱いについて事前協議がなされた。久美浜高等学校が立地する台地は前記2次にわたる発掘調査により弥生時代～古墳時代に形成された集落跡であることが確認されており，さらにその集落は川上谷川付近まで広がっているものと推定されるため，工事に先立ち発掘調査を行い，記録を作成するとともに，その保存を図るための資料を作成することとした。発掘調査は，昭和56年8月10日から10月3日までの約2か月を費やして実施し，調査課調査員松井忠春・戸原和人が担当した。調査にあたっては，久美浜町教育委員会，府立久美浜高等学校，府立丹後郷土資料館，京都府丹後教育局，京都府文化財保護課，地元各地区をはじめ多くの方々の協力を得た[注4]。記して感謝の意にかえたい。

2. 調査経過

調査は，橋爪遺跡を対象として，体育館建設予定地内に2×2mのグリッドを合計12か所

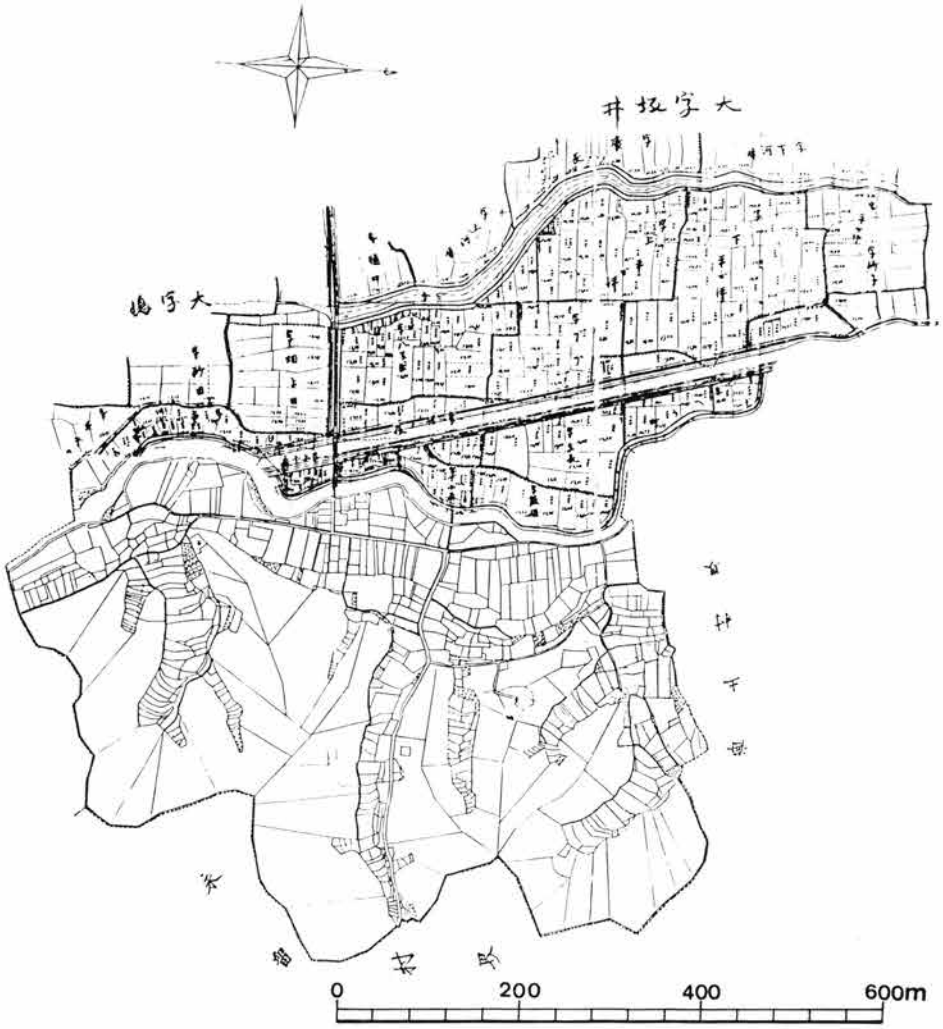
設定し，遺跡の範囲確認をおこなった（第47図）。調査の結果，西側では I 黒灰色粘土層（現耕作土）15cm，II黒灰色砂質粘土層（床土）15cm，下部からは砂質土と粘質土が随時堆積している状況で，人工的な遺構はそれらを切り込んで，もしくは埋め戻して営まれている

第 45 図　橋 爪 遺 跡 周 辺 遺 跡 分 布 図

1. 橋爪遺跡　2. 海土遺跡　3. 芦原遺跡　4. 友重遺跡　5. 須田遺跡　6. 柿本遺跡　7. 甲山古墳　8. 島茶臼山古墳　9. 甲山古墳群　10. 新谷古墳群　11. 狐塚古墳群　12. 後が谷古墳群　13. だんご山古墳群　14. 天王谷古墳群　15. 王の宮横穴群　16. ユリガ鼻古墳群　17. 九十九古墳群　18. 墓石古墳群　19. 湯舟坂古墳群　20. 二枚谷古墳群　21. セイガイ谷古墳群

ことが分かった。また調査地西側はテニスコートとして利用されていたためその掘削に困難を極めた。結局調査地東南角に設定した第12グリッドのみを断ち割り，下層遺構の確認につとめた。断ち割りは現地表下2mまでは人力により行ったが，それ以下は後日重機でさらに深く掘り下げた。その結果，調査地東側では急激な上流からの堆積は現地表下3.5mまでみられず，地表下2.5～3.1mにかっての文化面らしき層を確認した。

調査トレンチは，西側で随時グリッドを広げ，北から1～3トレンチとし，1トレンチを西側まで延長した。西側では第12グリッドを拡張し第4トレンチとし下層遺構の調査を行った。従って第48図は標高3.8～4.2mの遺構面を示し，第50図は標高2.6～2.8mの遺構面を示



第46図　調査地周辺地籍図

している。

調査は8月10日から開始し，10月3日まで行い，調査面積は約800m² に及んだ。

3. 第1～3トレンチの調査

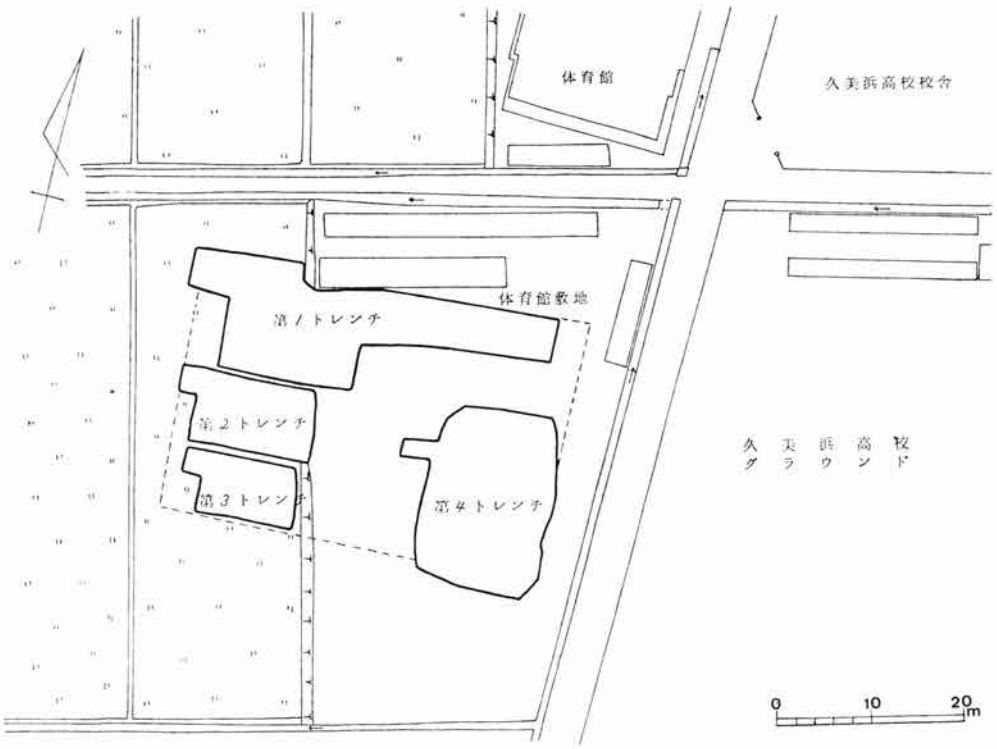
調査地西側に設定したトレンチで，地表下0.4～1.0mで下記のような各種遺構を検出した(第49図)。

SF 01

東西方向にのびる水田の畦畔である。幅0.6m，高さ0.14～0.2mで，断面逆U字形を呈している。長さ4.3mにわたって検出した。この畦畔で区画された水田は SD 02 が埋め戻された後に作られたものである。

SD 02

旧川上谷川の河道東岸である。幅9m，深さ2.7m を約24m にわたって検出した。旧川上谷川は地籍によると幅22mを測る河道である。



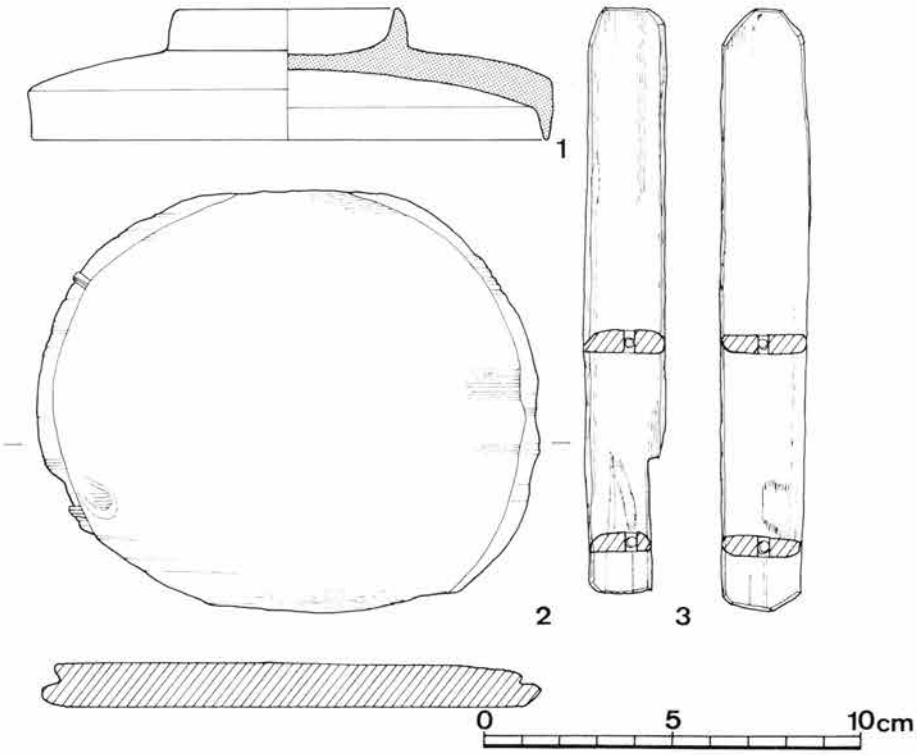
第 47 図　調　査　位　置　図

溝 SD 02 からは近年まで使用されていた瓦・陶器類とともに，磨滅した弥生式土器が出土しており，上流域に橋爪遺跡とは別の弥生時代の集落遺跡が存在するものと予想される。

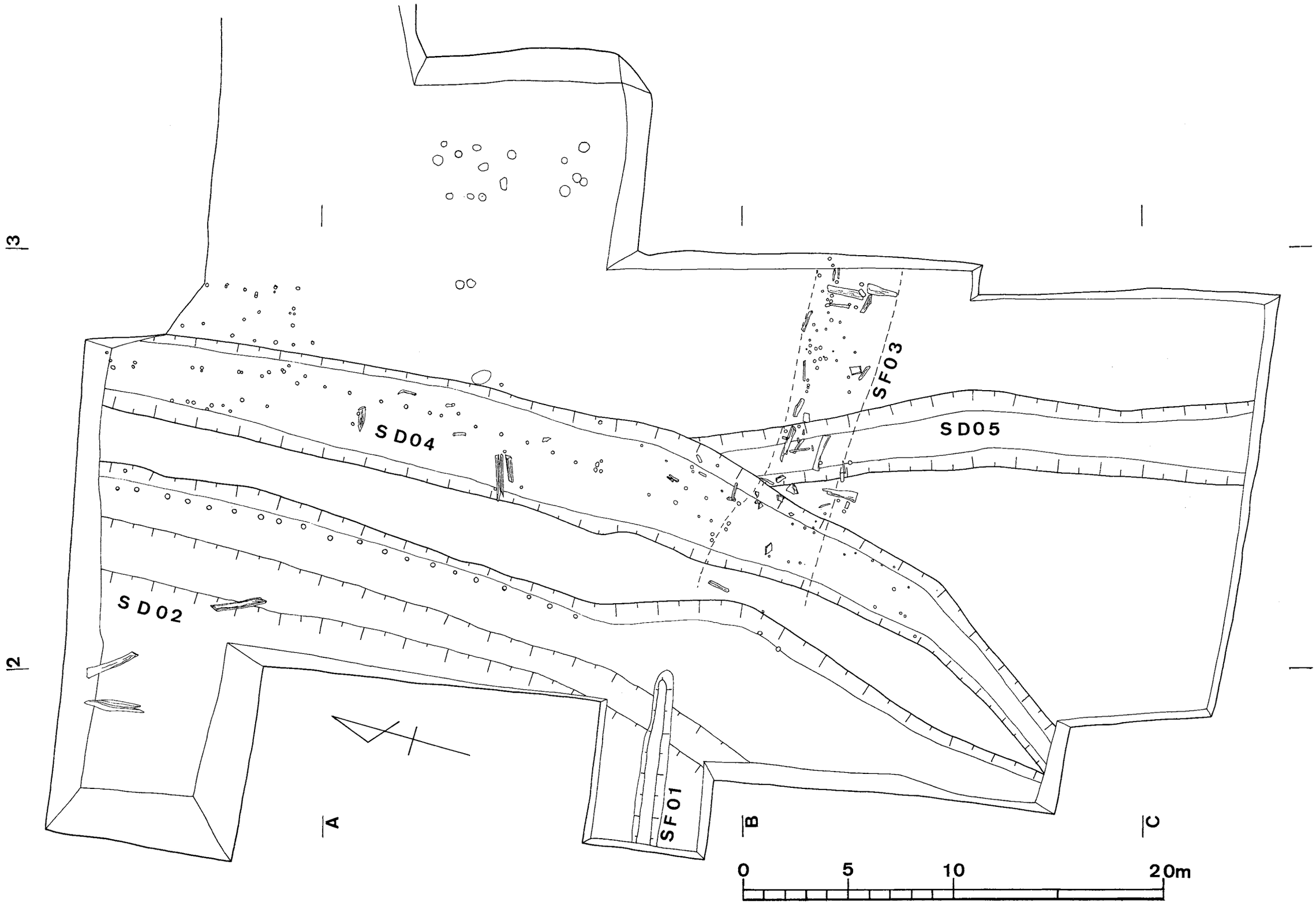
また，この川は古くから大雨時には氾濫して橋爪地区の人々を苦しめたと言う。特に調査地付近は旧河道がもっとも東側に張り出した部分で，西面する小尾根に水流が激突したのち西方へ向かって大きく押し返されるため，その周辺がたびたび遊水地帯と化して耕作不能になることがあったと言う。そのために調査地内検出の旧川上谷川東岸では直径10cm前後の針葉樹（松か）の杭を整然と打ち並べ，土留め及び護岸としている。杭の間隔は0.5～0.6mで長さ15mにわたって検出した。

SF 03

畔道（農道）である。幅1.7mを深さ0.2m程度まで溝状に掘り込み，内側といわず外側といわず杭を打ち並べてその間に竹や木を組みわたしてしがらみ状の構造物をつくり，その上に土盛りして低湿地帯内の通路としていた。この溝の底面より盛土上面まで約0.6mを測り，その中に近世の陶磁器片・瓦片・伏見人形などが埋没していた。このSF 03は第4トレン



第48図　SD04 出土木製品
1. 漆器椀蓋　2. 曲物底板　3. 組み合わせ木器（用途不明）



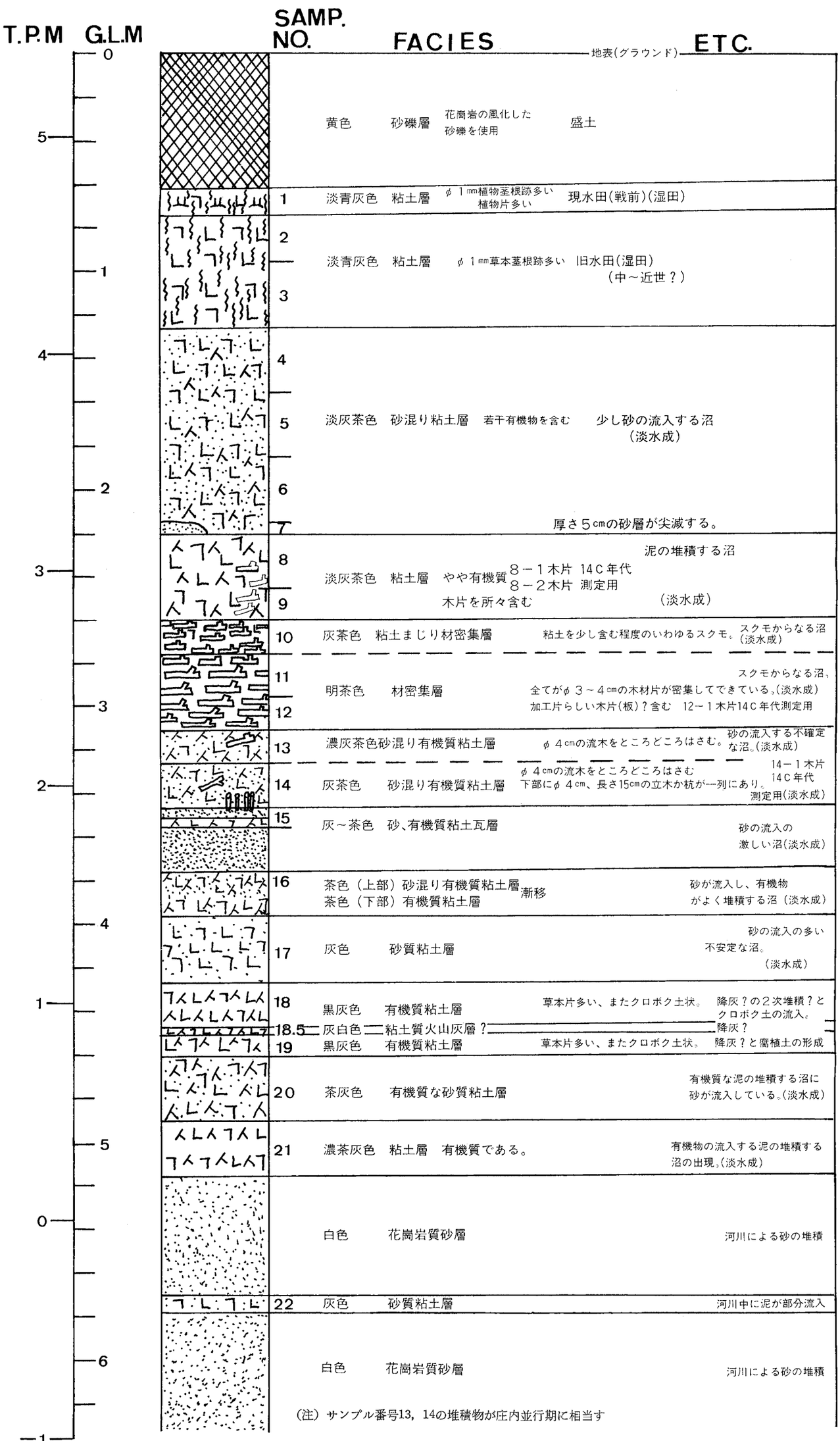
第49図　第1～3トレンチ検出状況

第50図　第　4　ト　レ　ン　チ　検　出　状　況

京都府熊野郡久美浜町

「橋 爪 遺 跡」 地 質 柱 状 図　12グリッド中央部

橋本清一，伊辻忠司
1981年8月28日，29日 調査
10月2日



第 51 図 地 質 柱 状 図

チでも見られ，第2トレンチと合わせて約32mを確認した。検出状況からみて，橋爪集落から川上谷川の提防まで続いていたものと推定される。

SD 04

SD 02 と並行する溝である。幅1.0～2.5m，深さ0.2～0.7m を24m にわたって検出した。SF 03 以前に使用されたものでSF 03 によって埋められている。また断面を観察して，近年まで旧川上谷川 (SD 02) の東岸提防の下に埋没していたことがわかった。溝内より漆器椀蓋（第48図1）・曲物底板（同図2）・組み合わせ木製品（同図3）が出土した。

SD 05

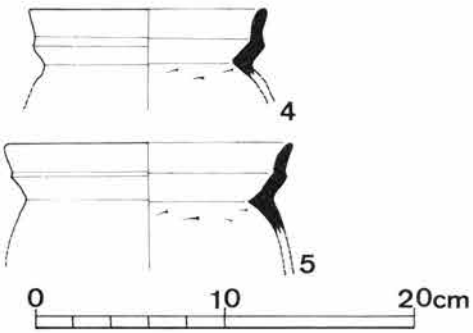
南北に走る溝である。幅1.7～2.5m，深さ0.4～0.6m を約15m にわたって検出した。北側ではSD 04 に切られ，SF 03 に埋められており，第1～3トレンチで検出した遺構の中で最も古いものである。層から鎌倉・室町期と考えられる土師器片が出土した。

4. 第4トレンチの調査

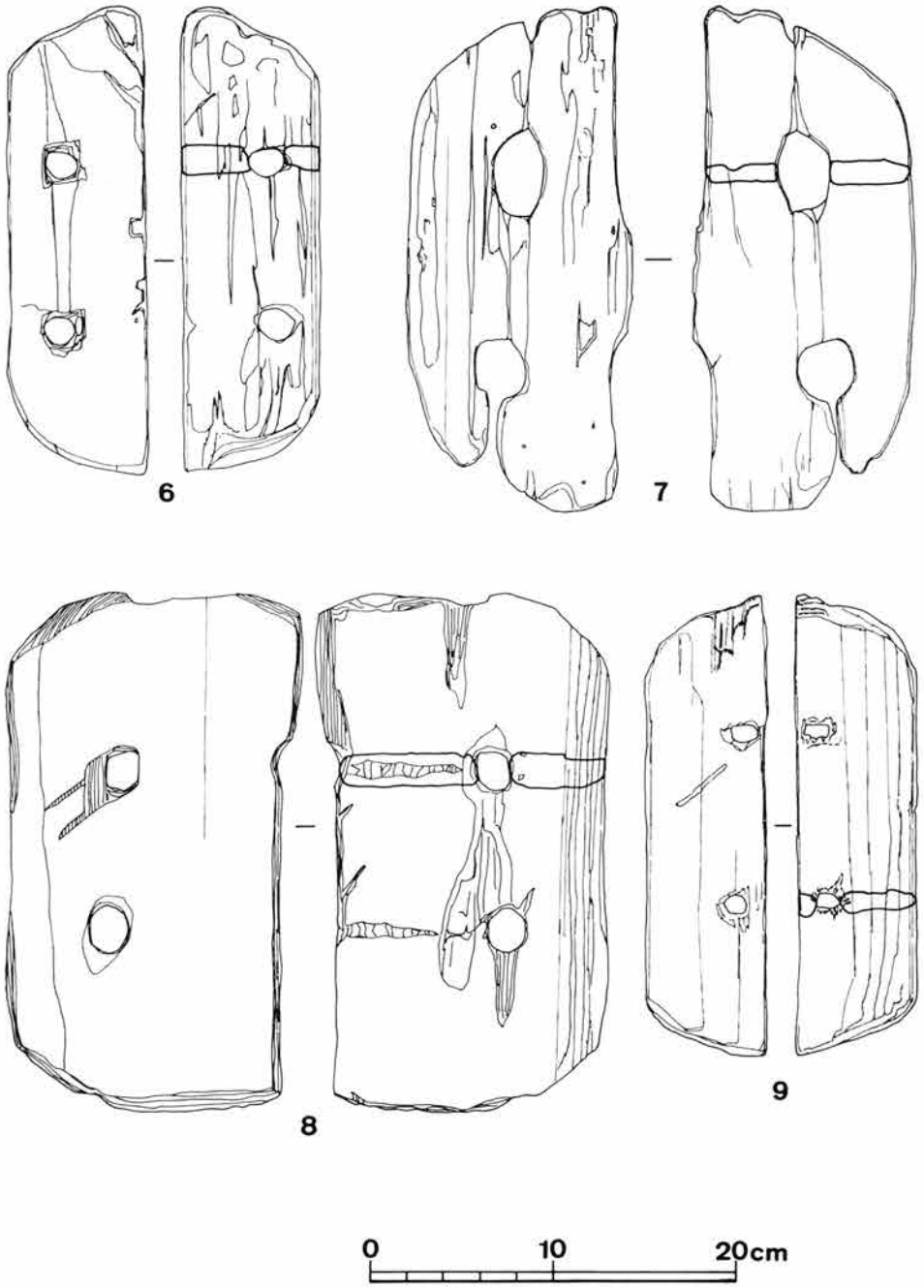
第4トレンチは遺跡の範囲確認をおこなうために断ち割りグリッド（第12グリッド）を拡張して設定したトレンチである（第50図)。そのため上層での調査は行わず重機によって地表下2.5m まで一気に掘り下げた後精査を行った。なおこのトレンチでは地質調査と土層サンプリングを並行しておこなった。

調査で確認できた層位は第51図のとおりである。地表から0.6m まではグラウンドの盛土，1.3mまでは中世以降の水田の堆積である。地表下1.3m から古墳時代初頭と確認できた2.6mより上面までは，上流域に堆積したクロボク層の二次堆積状況を呈しており，沼化している。第15層以下は文化層をみとめることができないが，海抜－1mまですべて淡水性の堆積層であることがわかった。また，第18層では火山灰土状の灰白色粘土内にガラス質をみとめた。北近畿及び東アジア周辺部の火山活動の調査によって年代決定を行うことができる層であると思われる。

発掘調査は第9層下面から開始し，第12層までを精査し，一部断ち割りで第14層を調査した。第10～12層は調査によって古墳時代初頭（庄内・布留式併行期）のものであることがわかり，橋爪遺跡内の第1次・第2次調査



第52図　第4トレンチ出土遺物(1)
4・5土師器

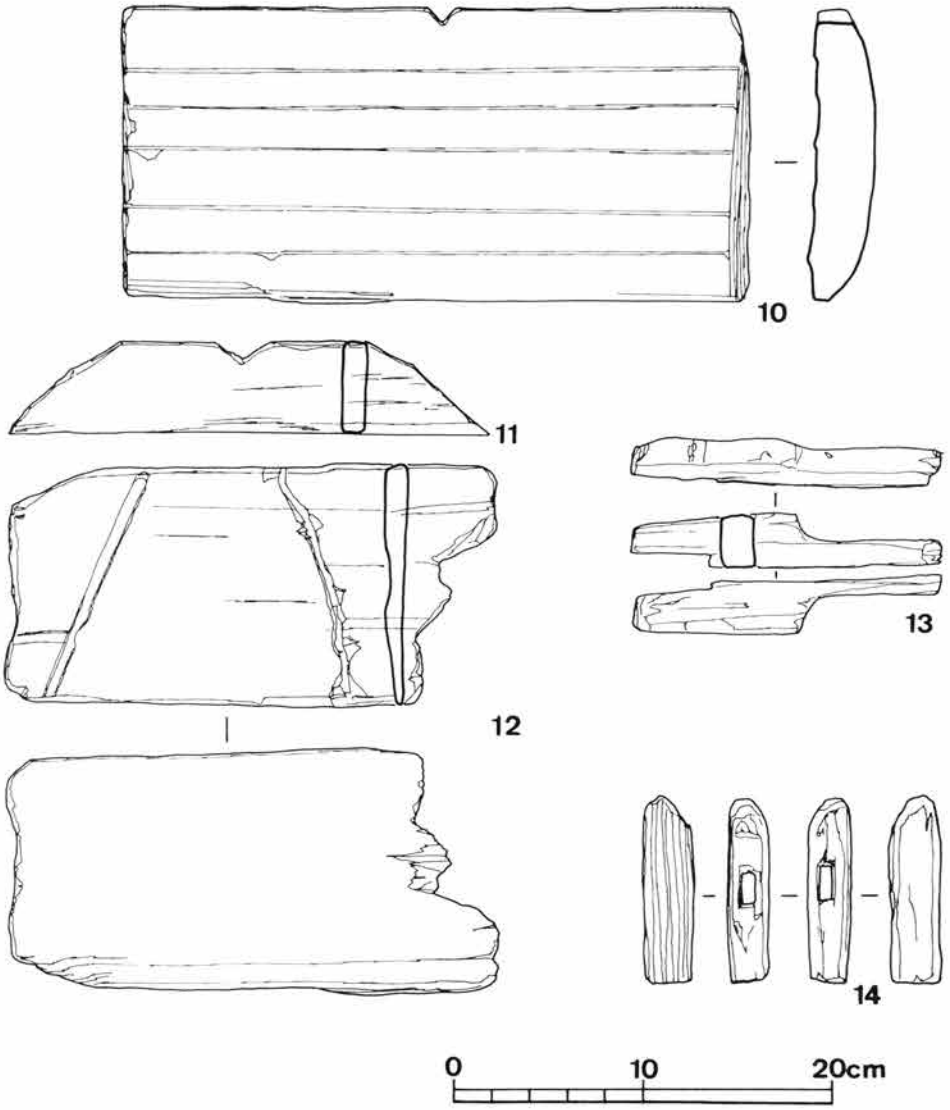


第53図　第4トレンチ出土遺物(2)
6〜9タゲタ

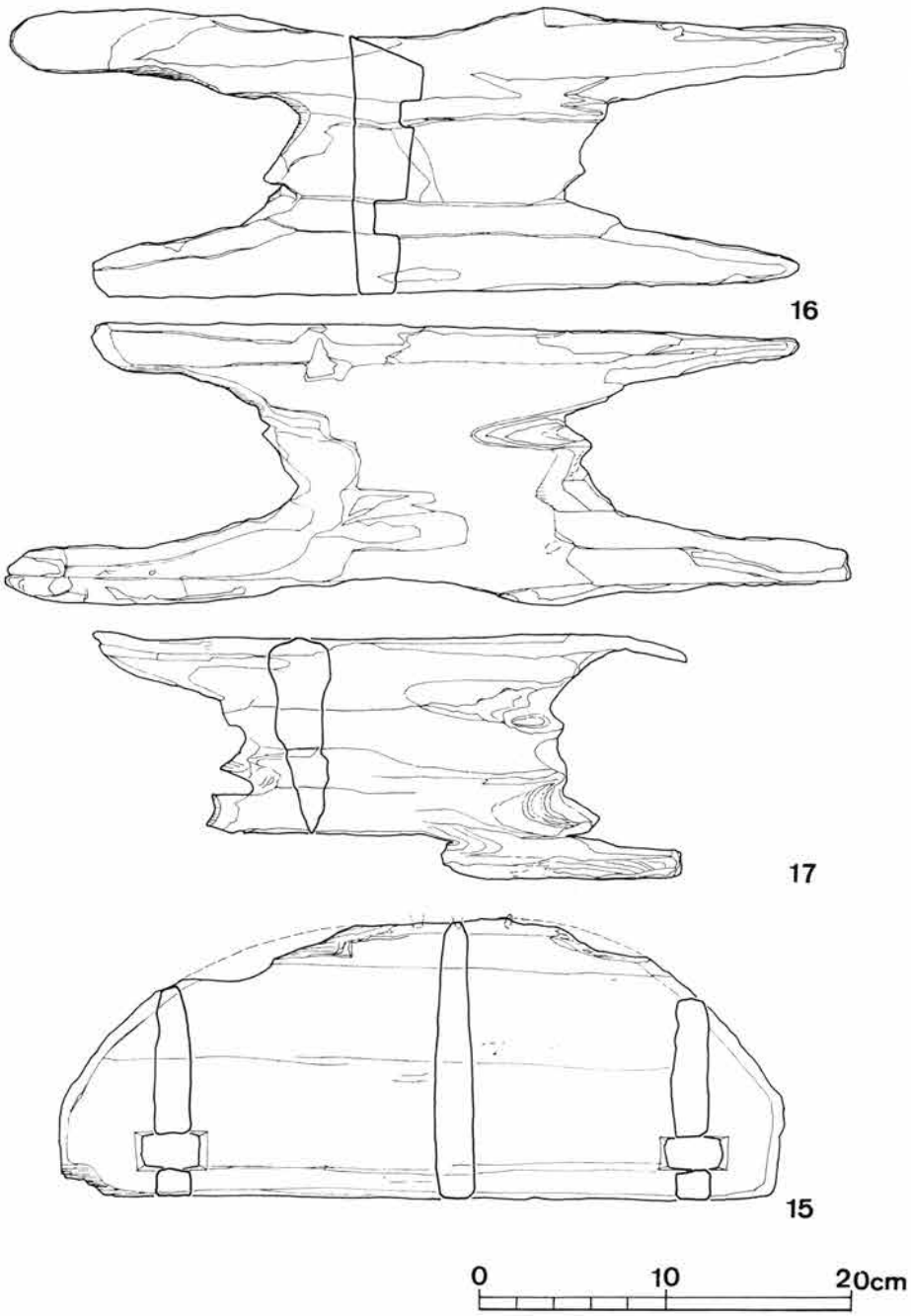
地と関連して，比高差2～3mをもって同一文化面を形成している。調査地（第4トレンチ）内は北東から南西に傾斜し，何層もの砂の流出によって形成された段丘裾部の様相を呈しており，南西の低地では沼状の低湿地に接する。

5. 出 土 遺 物

第1～3トレンチの調査で出土した遺物はSD02中よりのものが最も多いが，いずれも



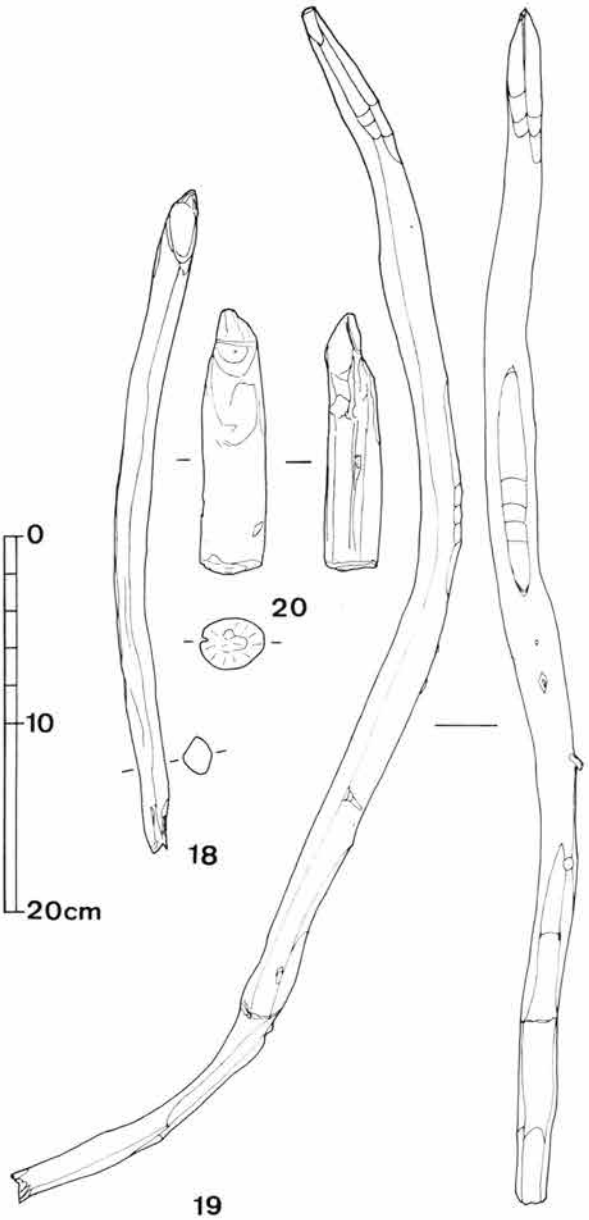
第54図　第4トレンチ出土遺物(3)
10・11えぶり(？)　12～14組み合わせ木製品



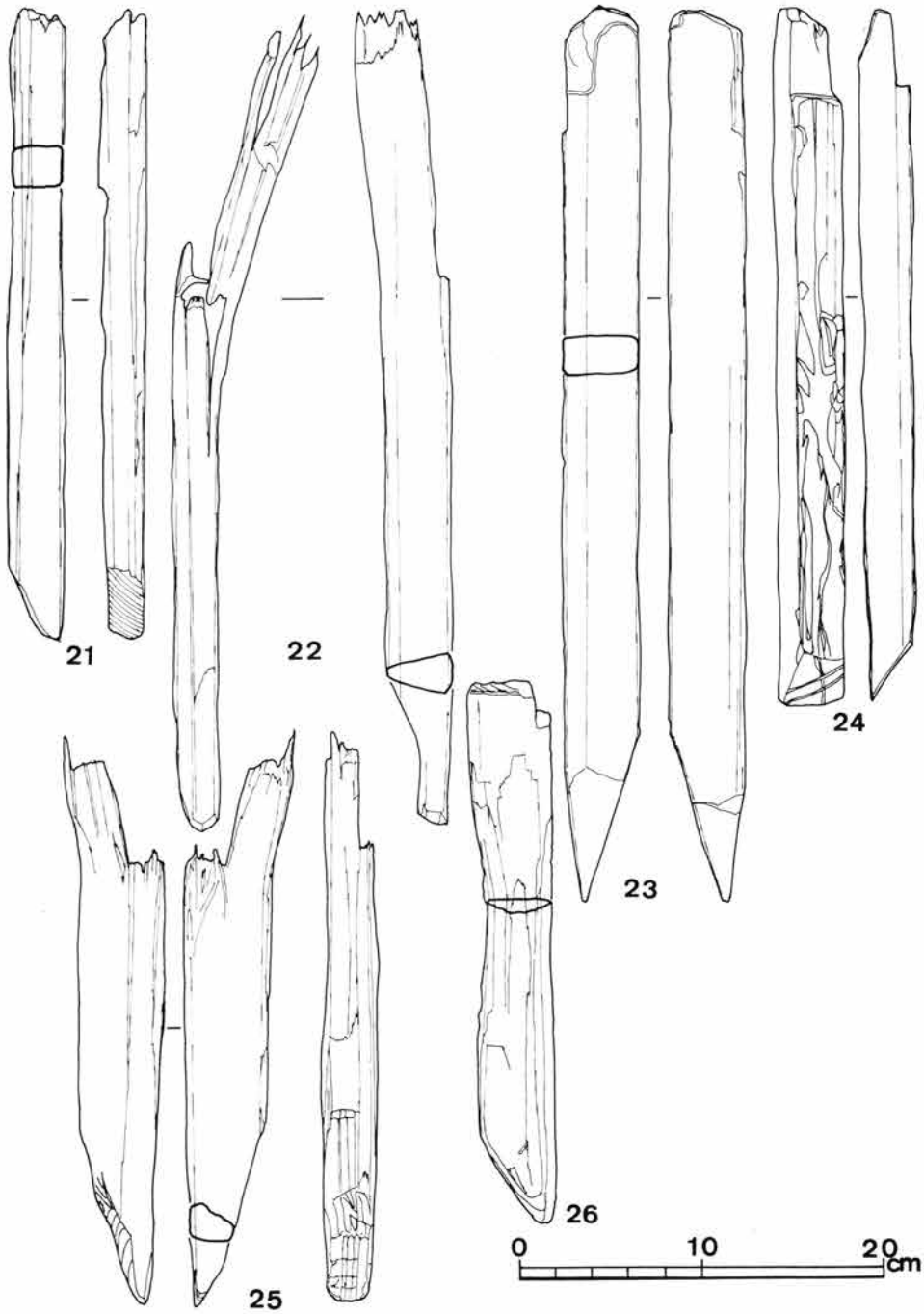
第55図　第4トレンチ出土遺物(4)
15 組み合わせ木製品　16・17 不明木製品

図示しえないものばかりである。中でわずかにSD04出土の木製品がある（第48図）。1は漆器椀蓋である。一木作りで，口縁径13.6cm，鈕部までの高さ2.5cmを測る。鈕部は口径6.0cm，高さ1.0cmを測る。2は曲物底板で，底板の側面を削り回めて側板をそのせ横から竹のクギを打ち込んでいる。3は長さ15.5cm，幅2.3cm，厚さ0.6cmの板を重ね，直径2.5mmの穴2か所で竹ヒゴで打ち止めている。用途は不明である。

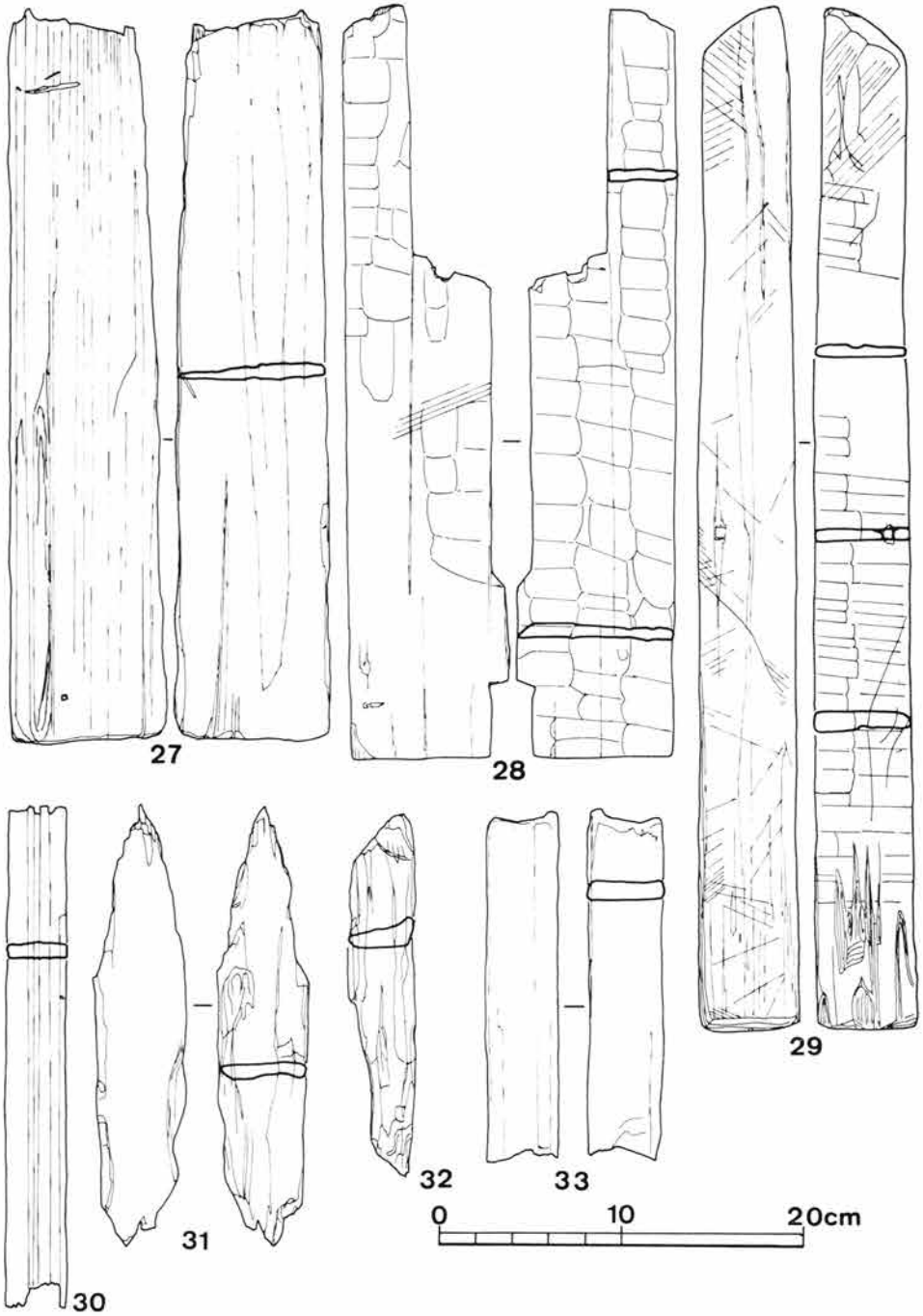
第4トレンチから出土した遺物は主として木製品である（第52～58図）。出土した多量の木製品は実測して取り上げたものだけで340点を数え，総点数は400点をこす量である。これらの木製品群は北から南へ，あるいは北西から南東へ列をなすかのごとく検出されたが，波打ちぎわに打ち寄せられた状態によく似た状況である。出土した木製品は，そのほとんどが，土木・建築の用材（板材・角材），用途不明木製品であるが，田下駄（第53図6～9）のように用途の明瞭なもの，農耕具（第54図10・11，えぶり？）とおもわれるもの，用途不明であるが何らかの組み合わせ品（第54図12～14，第55図15）など人工的な技術を窺えるものが数多くある。これらの木製品の製作には鉄製工具が使用されており，表面に残る工具痕からは，手斧・鉋・ノミ・刀子などが想定される。現在材質等の分析・器種の分類が十分でないが，そのほとん



第56図　第4トレンチ出土遺物(5)
18・19 たも(漁具)？　20 先端加工木製品



第57図　第4トレンチ出土遺物(6)
21～25 クイ状木製品



第 58 図　第 4 トレンチ出土遺物(7)
27～33 板状木製品

どがスギを材料としている。今後十分な整理検討をまって総合的な検討をおこないたい。

（戸原 和人）

6. 花 粉 分 析

昭和56年8月下旬，京都府立久美浜高等学校体育館建設予定地より多量の加工木片・自然流木等を含む地層が検出され，その後発掘調査がおこなわれた。

本報告は，同調査地の堆積物について昭和56年8月28日・10月2日の両日に試料を採取し，各試料につきおこなった花粉分析の中間報告である。最終報告は，次回報告するつもりである。

採取した試料は，全部で22試料であるが，今日の中間報告で分析に供した試料は，橋爪遺跡の過去から現在に至る自然環境を知る上で特に重要と思われる6試料である（下記のとおり）。

(1) 第3層（淡青灰色粘土層），旧水田で草木茎根跡多く含む。層厚は25cm。

(2) 第5層（淡灰茶色砂混じり粘土層），若干有機物を含む。層厚は47cm。

(3) 第9層（淡灰茶色粘土層），若干有機質・木片を所々含む。層厚は20cm。

(4) 第14層（灰茶色砂混じり有機質粘土層），流木を所々含む。層厚は20cm。

(5) 第16層（茶色砂混じり有機質粘土層），層厚は20cm。

(6) 第22層（灰色砂質粘土層），層厚は10cm。

花粉分析の方法

試料は，次の過程で処理しプレパラートを作製した。

試料（約200g）→ピロ燐酸ナトリウム飽和溶液に2昼夜浸す→傾斜沈澱法により，3時間静置して上液の濁りがなくなるまで水洗→沈泥振動法による植物質の濃縮→塩化亜鉛飽和溶液で比重分離（800ア rpm, 45分）→氷酢酸で脱水処理→アセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1の混合液を加え80°Cで1分間湯煎）→氷酢酸処理→水洗（3回）→グリセリンゼリーで封入→プレパラート作製。

検鏡は，倍率400倍でおこないAP（樹木種花粉）が1,000個以上になるまで固定計数した。

花粉分析の結果

花粉分析の結果は，付表2・3に示すとおりである。全体を通してAPは，下位層から上位層に向かって減少する。それに対して，NAP（草本種花粉）は，下位層から上位層に向かって増加し，特に第9層より上位の層で顕著である。

主要な TAXON（種・属・科等の分類単位）消長を見ると次の通りである。まずＡＰでは，スギ属が第22層（約26％）から第14層（約７％）に向かって減少し，また第９層（約21％）で増加するが，その後第３層（約３％）に向かって減少する。対して，ハンノキ属は，第22層（約21％）から第14層（約65％）に向かって増加し，その後第３層（約２％）に向かって減少する。二葉マツ亜属は，第16層（約２％）から第３層（約43％）に向かって，増加の一途をたどる。その他，ユナラ亜属は，第22層（約21％）から第14層（約６％）に向かって減少し，以後第５層（約22％）へ向かって増加する。アカガシ亜属は，第５層（約11％）で若干増加する以外ほとんど増減がみられない。ＮＡＰについて，大型イネ科（栽倍イネを含む）は，第14層では全くみられなかったが，第９層（約48％）より上位層で非常に高出現率を示した。また主として水田雑草である小型イネ科は，栽倍イネと思われる大型イネ科の増加とともに減少する傾向がみられた。他のＮＡＰの中で注目されることは，第５層と第３層においてゴマ花粉が検出されたことである。ゴマ (Sesamum indicum L.) は古くからインドで栽倍された植物で，日本のゴマも帰化植物であり，何時ごろ渡来したのか不明である。

考　　察

本遺跡からは，スギと思われる木製品や木片が多数出土したが，スギ花粉の検出状況からみても，第22層から第５層までの期間，遺跡周辺にスギを優勢種とする森林が消長をくり返しながら存在したものと推定される。第22層から第14層にかけて，スギ属が減少し，ハンノキ属が増加しているのは，遺跡周辺が沼地化し，平野部にまでハンノキ属が進入したこと，人為的にスギ林の伐採がおこなわれたことに原因していると思われる。また，第14層より上位層で二葉マツ亜属の増加がみられるが，これも，遺跡付近の森林が人為的な伐採を受け，２次林としてアカマツが進入したものと思われる。イネの栽培は，花粉の出現状況より第９層から上位層でおこなわれていたといえる（第13層～第10層までは未調査）。ゴマの栽培は，第５層より上位層でみられる（第８層～第６層までは未調査）。

現調査段階では，上記のことがわかっただけである。詳細な報告は，次回にゆずりたい。

（伊辻 忠司）

付表2　橋　爪　遺　跡　の　花

TAXON ＼ 試料採取層 ＼ 数値処理	淡青灰色粘土層			淡灰茶色砂混じり粘土層			淡灰
	3 層			5 層			
	検実出数	AP %	AP＋NAP %	検実出数	AP %	AP＋NAP %	検実出数
Ginkugo（イチョウ属）	2	0.20	0.07	1	0.08	0.04	1
Podocarpus（マキ属）	2	0.20	0.07				1
Abies（モミ属）	15	1.46	0.52	19	1.59	0.81	67
Tsuga（ツガ属）	16	1.56	0.56	13	1.09	0.55	6
Picea（トウヒ属）	1	0.10	0.03	1	0.08	0.04	2
Pinus Diploxylon（二葉マツ亜属）	446	43.51	15.51	229	19.00	9.67	134
Pinus Haploxylon（五葉マツ亜属）	1	0.10	0.03	1	0.08	0.04	1
Sciadopitys（コウヤマキ属）	3	0.29	0.10	16	1.34	0.68	9
Cryptomeria J（スギ属）	26	2.54	0.90	127	10.63	5.41	341
Chamaecyparis（ヒノキ属）	2	0.20	0.07	5	0.42	0.21	16
Salix（ヤナギ属）	22	2.15	0.76	12	1.00	0.51	6
Myrica（ヤマモモ属）	17	1.66	0.59	29	2.43	1.24	14
Juglans（オニグルミ属）	5	0.48	0.17	6	0.50	0.26	9
Pterocarya（サワグルミ属）							
Carpinus（クマシデ属）	20	1.95	0.70	18	1.51	0.77	15
Corylus（ハシバミ属）	24	2.34	0.83	14	1.17	0.60	17
Betula（シラカンバ属）	5	0.48	0.17	7	0.59	0.30	1
Alnus（ハンノキ属）	25	2.44	0.87	89	7.45	3.79	510
Fagus（ブナ属）	62	6.05	2.16	107	8.95	4.56	77
Lepidobalanus（コナラ亜属）	165	16.10	5.74	261	21.84	11.12	214
Cyclobalanopsis（アカガシ亜属）	62	6.05	2.16	128	10.71	5.45	89
Castanea（クリ属）	3	0.29	0.10	2	0.17	0.09	5
Castanopsis（シイノキ属）	14	1.37	0.49	39	3.01	1.53	14
Ulmus（ニレ属）	1	0.10	0.03	3	0.25	0.13	9
Zelkora（ケヤキ属）	15	1.46	0.52	31	2.59	1.32	39
Celtis（エノキ属）	1	0.10	0.03	5	0.42	0.21	3
Aphananthe（ムクノキ属）	4	0.39	0.14				
Akebia（アケビ属）	4	0.39	0.14				1
Deutzia（ウツギ属）							1

粉 分 析 結 果 表 (1)

茶色粘土層		灰茶色砂混じり有機質粘土層			茶色砂混じり有機質粘土層			灰色砂質粘土層		
9 層		14 層			16 層			22 層		
AP %	AP＋NAP %	検出実数	AP %	AP＋NAP %	検出実数	AP %	AP＋NAP %	検出実数	AP %	AP＋NAP %
0.06	0.05							12	0.55	0.50
0.06	0.05	1	0.05	0.05						
4.09	3.31	56	2.67	2.55	4	0.27	0.25	40	1.82	1.68
0.37	0.30	4	0.19	0.18				8	0.36	0.34
0.12	0.10	1	0.05	0.05						
8.17	6.62	114	5.43	5.20	24	1.60	1.53	70	3.18	2.94
0.06	0.05	1	0.05	0.05						
0.55	0.44	6	0.29	0.27	2	0.13	0.13	8	0.36	0.34
20.79	16.86	154	7.34	7.02	251	16.76	15.98	565	25.69	23.74
0.98	0.79	4	0.19	0.18	15	1.00	0.95	47	2.14	1.97
0.37	0.30	23	1.10	1.05	4	0.27	0.25	18	0.82	0.76
0.85	0.69				2	0.13	0.13	8	0.36	0.34
0.55	0.44	1	0.05	0.05	3	0.20	0.19	12	0.55	0.50
		1	0.05	0.05						
0.91	0.74	9	0.43	0.41	14	0.93	0.89	72	3.27	3.02
1.04	0.84	5	0.24	0.23	2	0.13	0.13	26	1.18	1.09
0.06	0.05				1	0.07	0.06	8	0.36	0.34
31.10	25.21	1,374	65.46	62.65	758	50.60	48.24	454	20.65	19.08
4.70	3.81	18	0.86	0.82	22	1.47	1.40	89	4.05	3.74
13.05	10.58	119	5.67	5.43	237	15.82	15.09	452	20.55	18.99
5.43	4.40	121	5.76	5.52	77	5.14	4.90	101	4.59	4.24
0.30	0.25	1	0.05	0.05	1	0.07	0.06	1	0.05	0.04
0.85	0.69	28	1.28	1.28	12	0.80	0.76	34	1.55	1.43
0.55	0.44	3	0.14	0.14				2	0.09	0.08
2.38	1.93	23	1.10	1.05	28	1.87	1.78	77	3.50	3.24
0.18	0.15	4	0.19	0.18	3	0.20	0.19	13	0.59	0.55
		6	0.29	0.27	1	0.07	0.06	6	0.27	0.25
0.06	0.05							9	0.41	0.38
0.06	0.05									

試料採取層 / 数値処理 / TAXON	淡青灰色粘土層			淡灰茶色砂混じり粘土層			淡灰
	3 層			5 層			
	検実出数	AP %	AP＋NAP %	検実出数	AP %	AP＋NAP %	検実出数
Pittasporum（トベラ属）							
Hamamelis（マンサク属）	1	0.10	0.03				
Prunus（サクラ属）	11	1.07	0.38	10	0.84	0.43	6
Phellodendron（キハダ属）							
Skimmia（ミヤマシキミ属）	1	0.08	0.04				
Rhus（ウルシ属）				3	0.25	0.13	
Ilex（モチノキ属）	16	1.56	0.56	8	0.67	0.34	4
Stahbyrla（ミツバウツギ属）							
Acea（カエデ属）	7	0.68	0.24	4	0.33	0.17	12
Tilia（シナノキ属）				1	0.08	0.04	1
Elaeagnus（グミ属）	5	0.48	0.17	1	0.08	0.04	
Acanthopanax（ウコギ属）							
Diospyros（カキノキ属）	5	0.48	0.17	2	0.17	0.09	1
Symplocas（ハイノキ属）	1	0.10	0.03				
Ligustrum（イボタノキ属）	1	0.10	0.03	3	0.25	0.13	9
Clerodendron（クサギ属）							1
Lonicra（スイカズラ属）	5	0.48	0.17	4	0.33	0.17	2
Ericaceae（ツツジ科）	10	0.98	0.35				1
Total AP	1,025	99.99	35.59	1,195	99.98	50.89	1,640

茶色粘土層		灰茶色砂混じり有機質粘土層			茶色砂混じり有機質粘土層			灰色砂質粘土層		
9 層		14 層			16 層			22 層		
AP %	AP＋NAP %	検実出数	AP %	AP＋NAP %	検実出数	AP %	AP＋NAP %	検実出数	AP %	AP＋NAP %
								1	0.05	0.04
0.37	0.30	5	0.24	0.23	11	0.73	0.70	9	0.41	0.38
								5	0.22	0.21
								1	0.05	0.04
								4	0.18	0.17
0.24	0.20	4	0.19	0.18	2	0.13	0.13	15	0.68	0.68
					2	0.13	0.13			
0.73	0.59	6	0.29	0.27	22	1.47	1.40	18	0.82	0.77
0.06	0.05									
								1	0.05	0.04
0.06	0.05	2	0.10	0.09						
0.55	0.44							11	0.50	0.46
0.06	0.05									
0.12	0.10	1	0.05	0.05						
0.06	0.05	4	0.19	0.18				2	0.09	0.08
100.00	81.12	2,099	100.04	95.73	1,498	99.99	95.33	2,199	99.99	92.40

付表3　橋　爪　遺　跡　の　花

試料採取層 / 数値処理 / TAXON	淡青灰色粘土層			淡灰茶色砂混じり粘土層			淡灰
	3 層			5 層			
	検実出数	NAP %	AP＋NAP %	検実出数	NAP %	AP＋NAP %	検実出数
Sesamum（ゴマ）	1	0.05	0.03	2	0.17	0.09	
Gossypium（ワタ）	1	0.05	0.03				
Fagopyrum（ソバ）	78	4.21	2.71	2	0.17	0.09	8
Artemisia（ヨモギ属）	35	1.89	1.22	36	3.12	1.53	5
Petasites（フキ属）	5	0.27	0.17	2	0.17	0.09	2
Xanthium（オナモミ属）				3	0.26	0.13	
Patrinia（オミナエシ属）	5	0.27	0.17	2	0.17	0.09	1
Justicia（キツネノマゴ属）							
Clinopodium（トウバナ属）							
Haloragis（アリノトウグサ属）	4	0.22	0.14	4	0.35	0.17	
Trapa（ヒシ属）				1	0.09	0.04	
Impatens（ツリフネソウ属）	1	0.05	0.03	1	0.09	0.04	
Geranium（フウロソウ属）	1	0.05	0.03	1	0.09	0.04	3
Phaseolus（アズキ属）	2	0.11	0.07				
Pulsatilla（オキナグサ属）				1	0.09	0.04	
Thalictum（カラマツソウ属）	2	0.11	0.07	1	0.09	0.04	
Nuphar（コオホネ属）	7	0.38	0.24	34	2.95	1.45	
Rumex（ギシギシ属）	2	0.11	0.07	4	0.35	0.17	2
Persicaria（タデ属）	28	1.51	0.97	1	0.09	0.04	30
Humulus（カラハナソウ属）	3	0.16	0.10	11	0.95	0.47	3
Chloranthus（センリョウ属）	1	0.05	0.03				
Allium（ネギ属）	3	0.16	0.10				
Monochoria（ミズアオイ属）	3	0.16	0.10				
Eriocaulon（ホシクサ属）				1	0.09	0.04	
Sagittaria（オモダカ属）	20	1.08	0.70	10	0.87	0.43	26
Typha（ガマ属）	2	0.11	0.07	3	0.26	0.13	4
Cichorioideae（タンポポ亜科）	8	0.43	0.28	2	0.17	0.09	
Carduoideae（キク亜科）	8	0.43	0.28	1	0.09	0.04	3
Cucurubitaceae（ウリ科）	10	0.54	0.35	3	0.26	0.13	3

粉分析結果表(2)

茶色粘土層		灰茶色砂混じり有機質粘土層			茶色砂混じり有機質粘土層			灰色砂質粘土層		
9 層		14 層			16 層			22 層		
NAP %	AP+NAP %	検実出数	NAP %	AP+NAP %	検実出数	NAP %	AP+NAP %	検実出数	NAP %	AP+NAP %
2.09	0.40	1	1.06	0.05						
1.31	0.25	3	3.19	0.14	2	2.74	3.13	12	6.63	7.50
0.52	0.10									
0.26	0.05									
								1	0.55	0.04
								1	0.55	0.04
								6	3.31	0.25
0.78	0.15	8	8.51	0.36	1	1.37	0.06	11	6.08	0.46
0.52	0.10	46	48.94	2.10	35	47.94	2.23	2	1.10	0.08
7.83	1.48	15	15.96	0.68				3	1.66	0.13
0.78	0.15	2	2.13	0.09	8	10.96	0.51	29	16.02	1.22
		1	1.06	0.05						
6.79	1.29	1	1.06	0.05	2	2.74	0.13			
1.04	0.20	3	3.19	0.14	2	2.74	0.13	5	2.76	0.21
		3	3.19	0.14						
0.78	0.15									
0.78	0.15				1	1.37	0.06	5	2.76	0.21

TAXON ＼ 試料採取層 ＼ 数値処理	淡青灰色粘土層			淡灰茶色砂混じり粘土層			淡灰
	3 層			5 層			
	検実出数	NAP %	AP+NAP %	検実出数	NAP %	AP+NAP %	検実出数
Umbelliferae（セリ科）				2	0.17	0.09	5
Leguminosae（マメ科）							1
Rosaceae（バラ科）				10	0.87	0.43	1
Craciferae（アブラナ科）	29	1.57	1.01	24	2.08	1.02	4
Caryophyllaceae（ナデシコ科）	20	1.08	0.70	6	0.52	0.26	2
Chenopodiaceae（アカザ科）	6	0.32	0.20	3	0.26	0.13	
Commelinaceae（ツユクサ科）	5	0.27	0.17				
Cyperaceae（カヤツリグサ科）	3	0.16	0.10	2	0.17	0.09	5
Gramineae 45μ以上（イネ科）	1,494	80.71	51.95	824	71.47	35.09	184
Gramineae 45μ以下（イネ科）	62	3.35	2.16	156	13.53	6.64	91
Total Grass pollen	1,556	99.97	64.32	1,153	100.01	49.13	383

7. む　す　び

今回の発掘調査は，昭和42年，昭和55年に次いで橋爪遺跡の3次の調査にあたるが，当初の予想を上回る成果が得られた。本調査地が橋爪弥生時代中期（畿内第Ⅳ様式）～古墳時代前期（布留式併行期）集落の周辺部にあたることは言うに及ばず，遺構面が現地表下3m（標高2.4m）で確認されたことは，川上谷平野の沖積平野の堆積（埋没）状況を知る上で，また標高－1mまでの層が淡水性の堆積の様相を呈していることは，当地方の名勝「小天橋」の成立時期を論ずる上でも貴重な資料を得たといえよう。　（戸原 和人）

茶色粘土層		灰茶色砂混じり有機質粘土層			茶色砂混じり有機質粘土層			灰色砂質粘土層		
9 層		14 層			16 層			22 層		
NAP %	AP+NAP %	検出実数	NAP %	AP+NAP %	検出実数	NAP %	AP+NAP %	検出実数	NAP %	AP+NAP %
1.31	0.25	2	2.13	0.09				3	1.66	0.13
0.26	0.05							2	1.10	0.08
0.26	0.05	1	1.06	0.05				4	2.21	0.17
1.04	0.20									
0.52	0.10									
1.31	0.25	2	2.13	0.09	3	4.11	0.19	10	5.52	0.42
48.04	9.10				6	8.22	0.38	19	10.50	0.80
23.76	4.50	6	6.38	0.27	13	17.81	0.83	68	37.57	2.86
99.98	18.97	94	99.99	4.30	73	100.00	4.65	181	99.98	7.80

（注１）梅原末治「海部村石器時代遺跡」（『京都府史蹟勝地調査会報告』第２冊　京都府）　1920

（注２）高橋美久二「橋爪遺跡発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報（1968)』京都府教育委員会）　1968

（注３）石井清司他「橋爪遺跡発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報（1981-2)』京都府教育委員会）　1981

（注４）作業員　稲垣　正男，白岩　稜，山添　圭三，田中　誠一，小西　保生，岡田　福蔵
平井　義男，鳥山　佳胤，中川　康仁，関　利彦，岡下　昌隆，今井　勝治
木村　達也，武田　敏枝，関　光子，保田　鈴江，安達　三枝，野村阿ぐ枝
下小田幸子，平井多津子，岡田美弥子，戸出ヤヲ子，曽崎　梅の，上田　康代
小森　初枝，小森　乙次，岡田　きく，田沢　順子，栄田　君恵，岡田　久恵
小西　尚子，田沢　紫，谷口　清子，戸出　純子

補助員　橋本　稔，篠崎　潔，金子　彰男，河本　研一，末房　博之，佐野　正明
田中　晃雄，西村　信一

整理員　青地佐都子，永島真知子，谷田久美子，丸山　美子，足利　真，中塚　等
中塚　良　（順不同）

図　　版

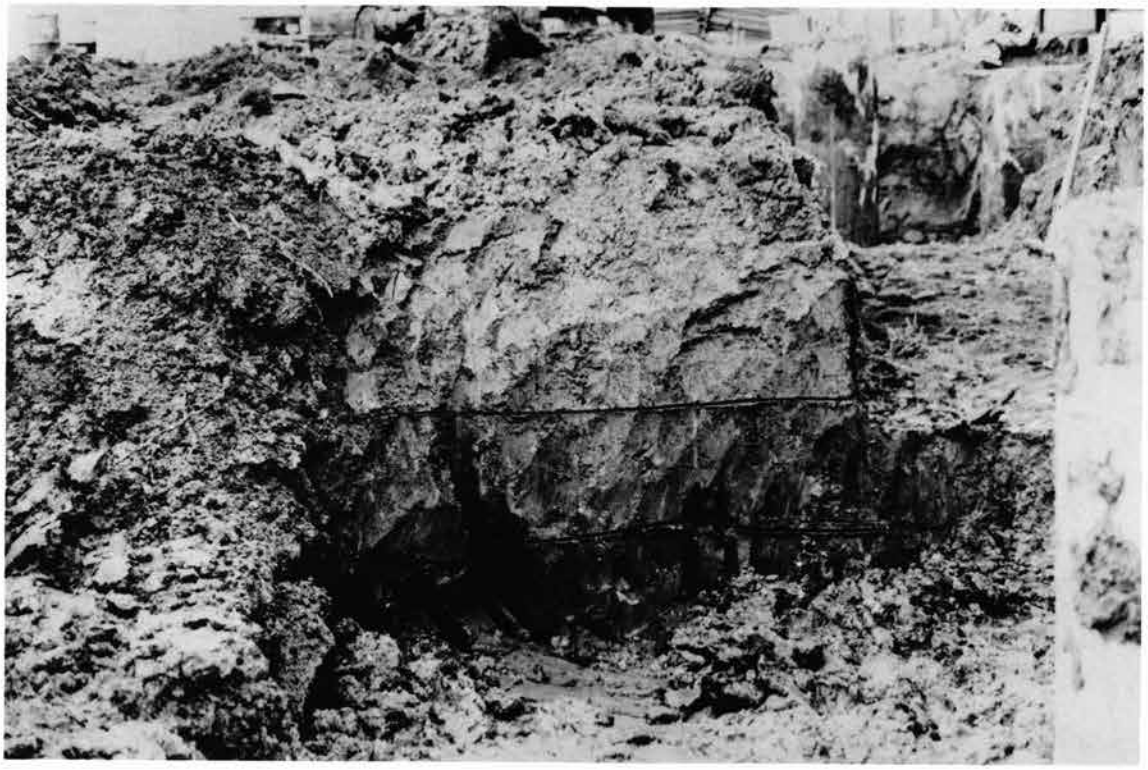
図版第1　下畑遺跡

(1) 調査地遠景（北から）

(2) 調査地遠景（東から）

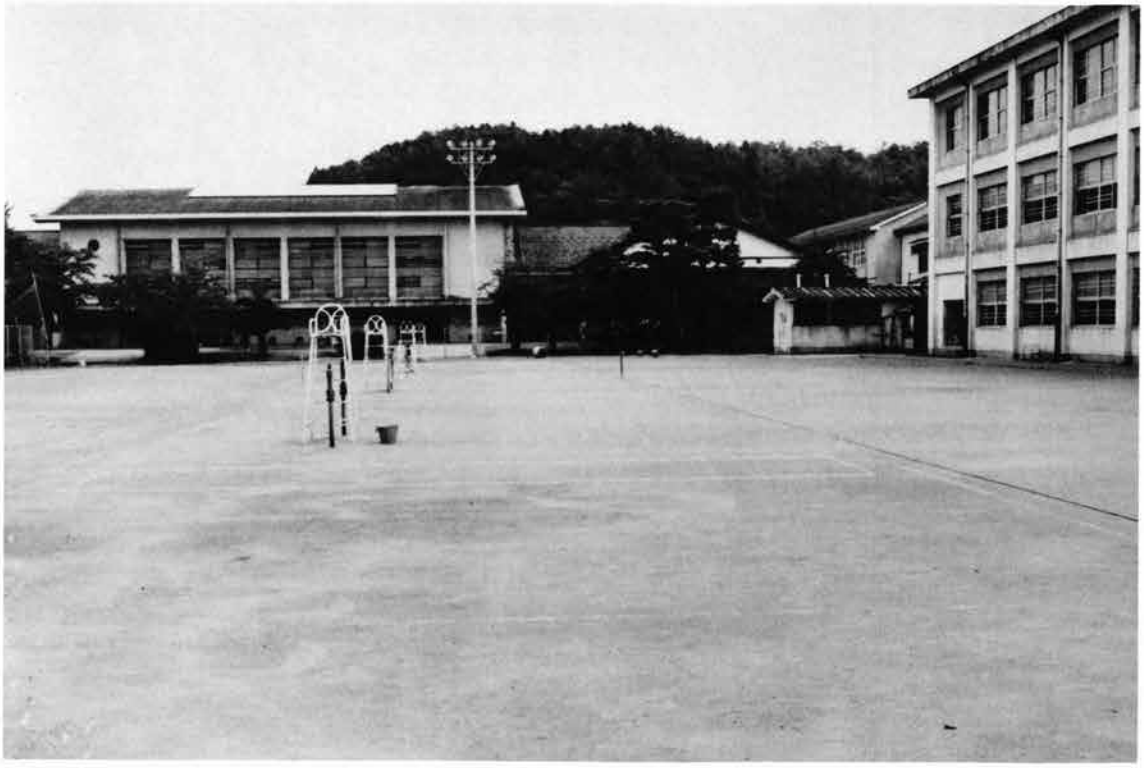
図版第2　下畑遺跡

(1)　No.2　土層断面



(2)　No.9　土層断面

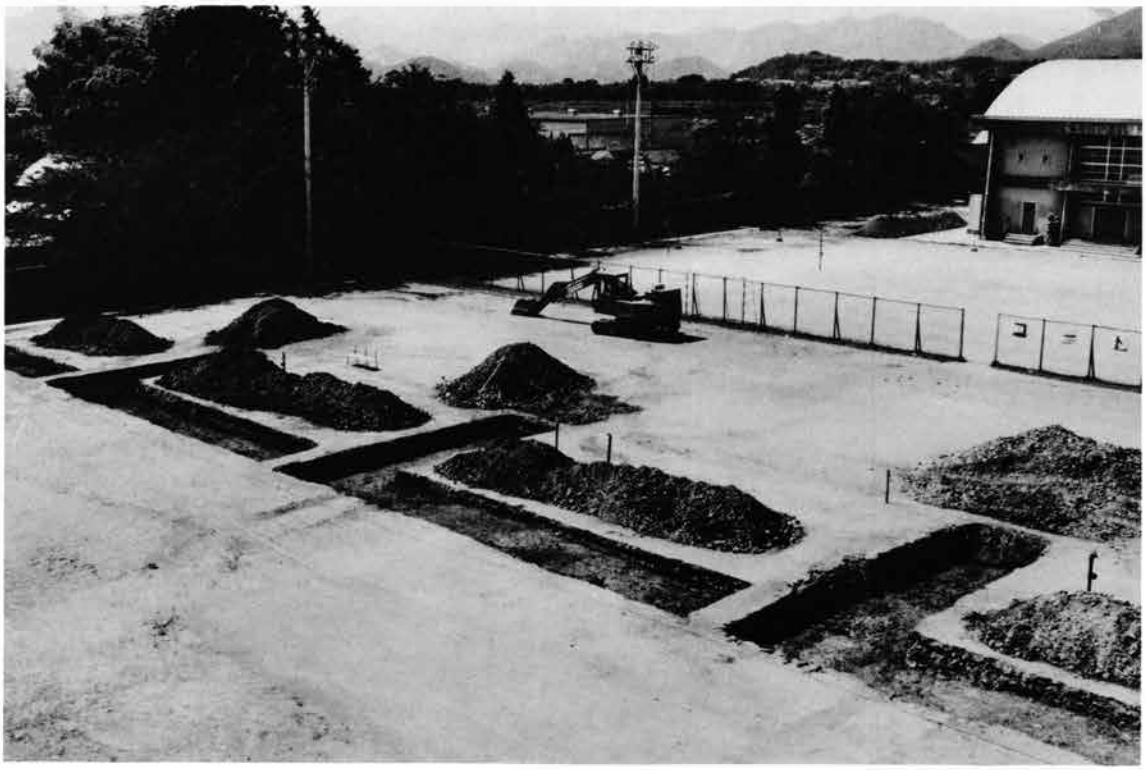
図版第3　土師南遺跡



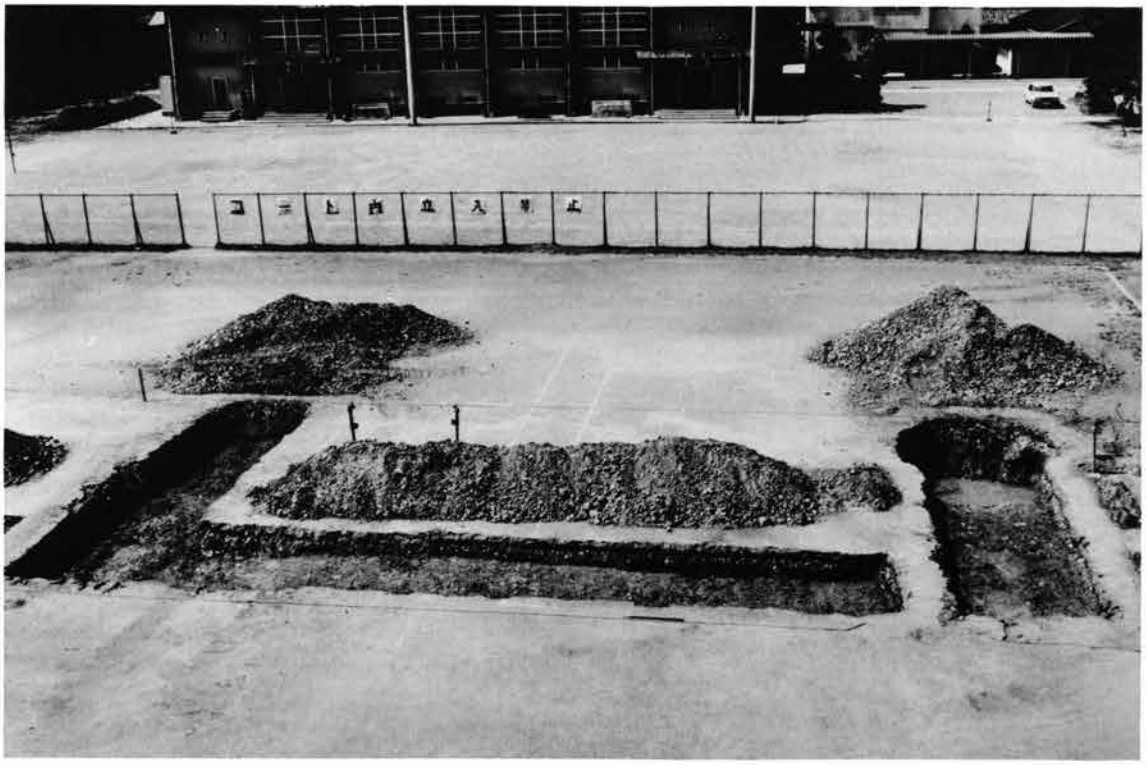
(1) 調査前状況（西から）

(2) 調査風景（南東から）

図版第4　土師南遺跡



(1)　B・C地点調査状況（南東から）



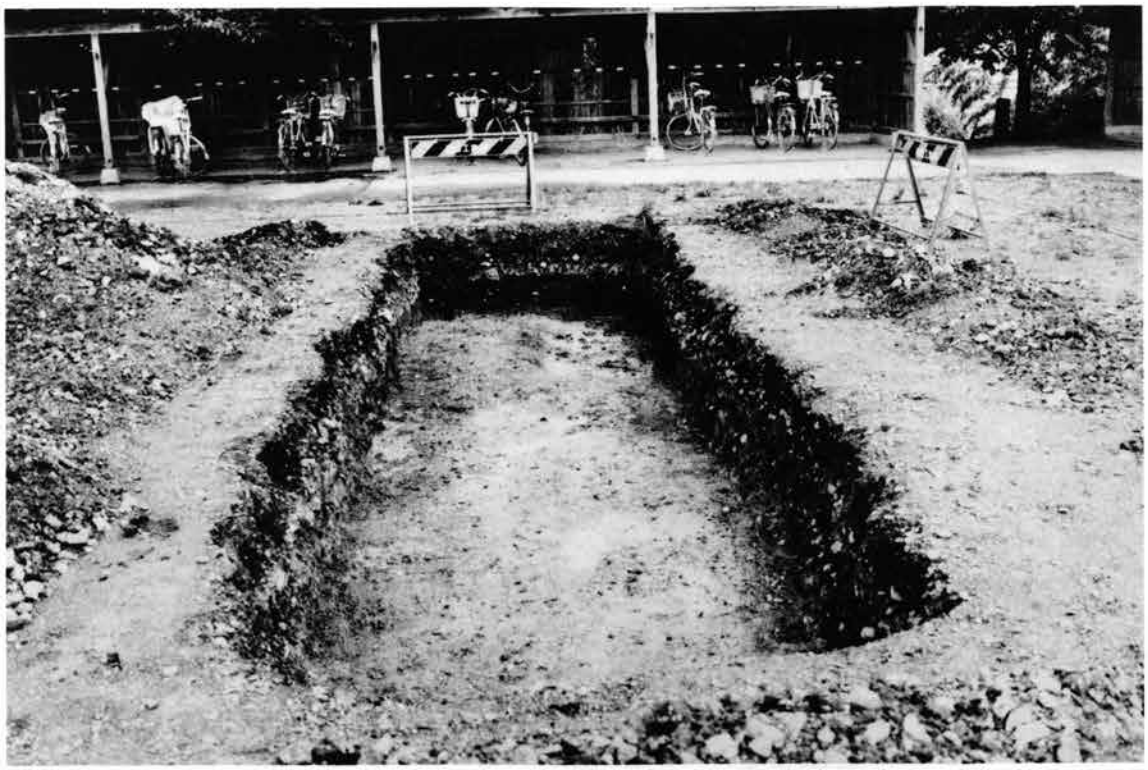
(2)　B地点調査状況（南から）

図版第5　土師南遺跡

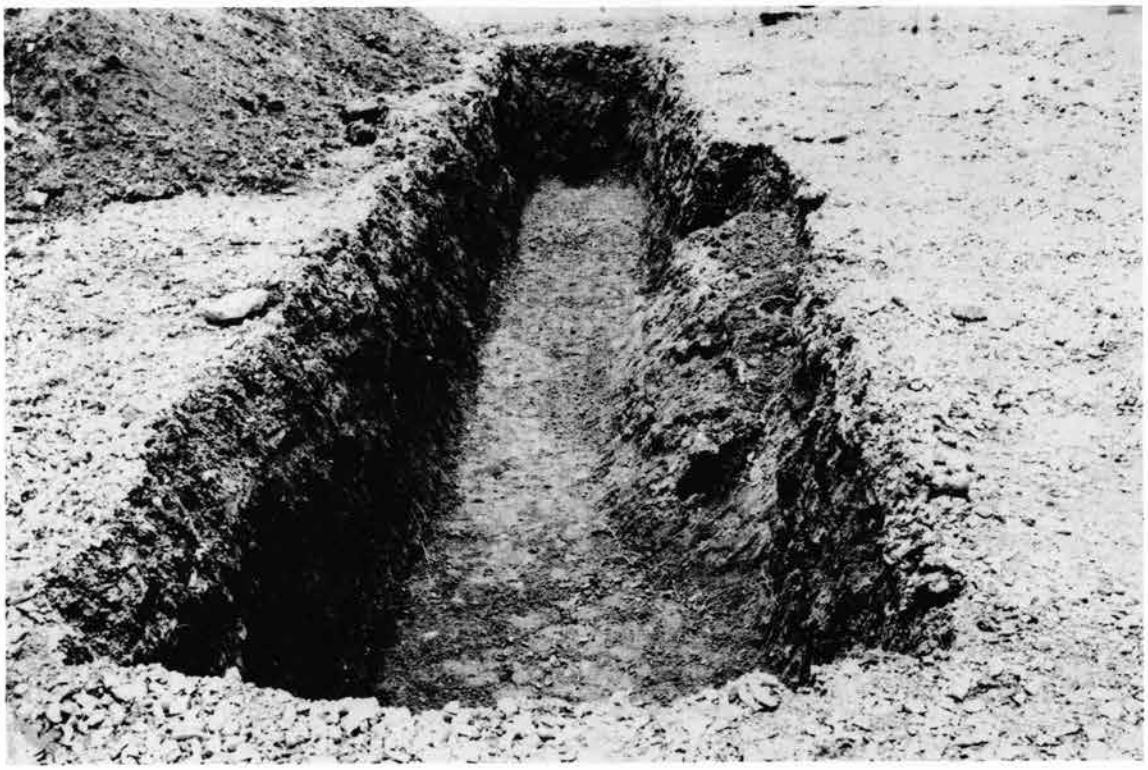
(1)　B地点調査状況（西から）

(2)　B地点土層状況

図版第6　土師南遺跡

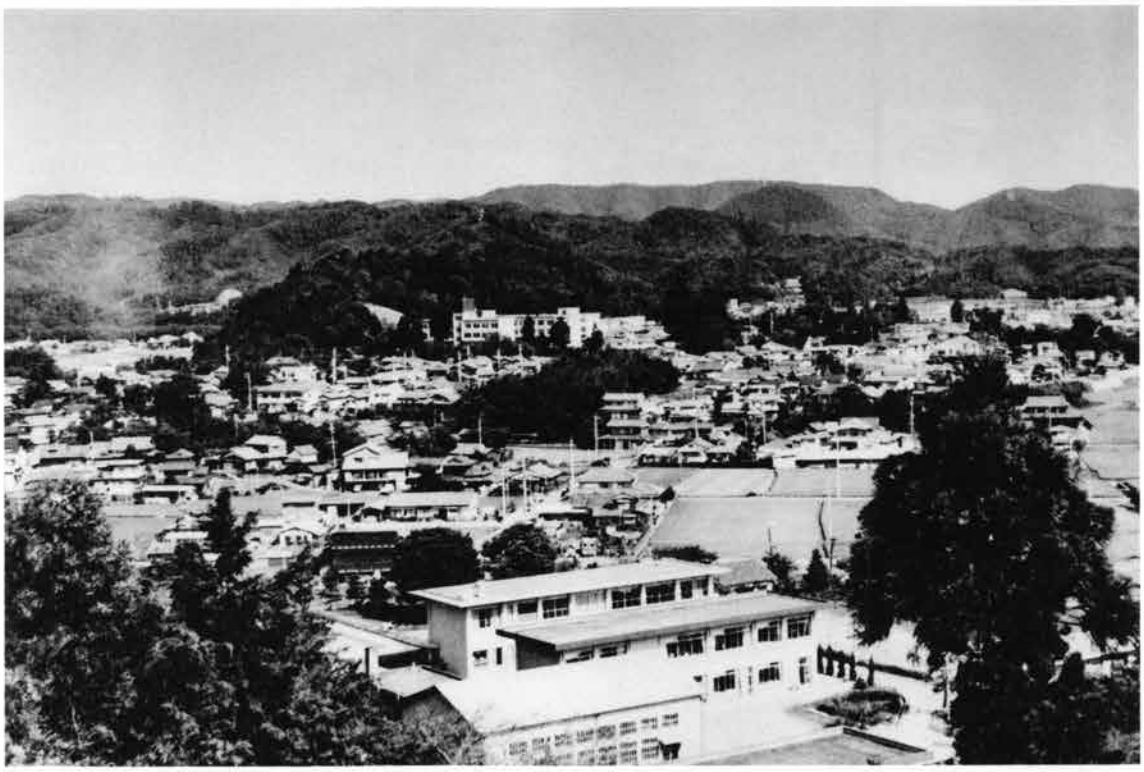


(1)　A２トレンチ調査状況（北から）



(2)　Cトレンチ調査状況（北から）

図版第7　園部城跡



(1) 調査地遠景（南から）

(2) 第1調査地調査前風景（北西から）

図版第8　園部城跡

(1) 第1調査地全景（北西から）

(2) SD01全景（北西から）

図版第9　園部城跡

(1)　SD01石組み状況

(2)　SD01石組み状況

図版第10　園部城跡

(1)　SK02検出状況（東から）

(2)　SK02・SD03完掘状況（南西から）

図版第11　園部城跡

(1)　SK02遺物出土状況

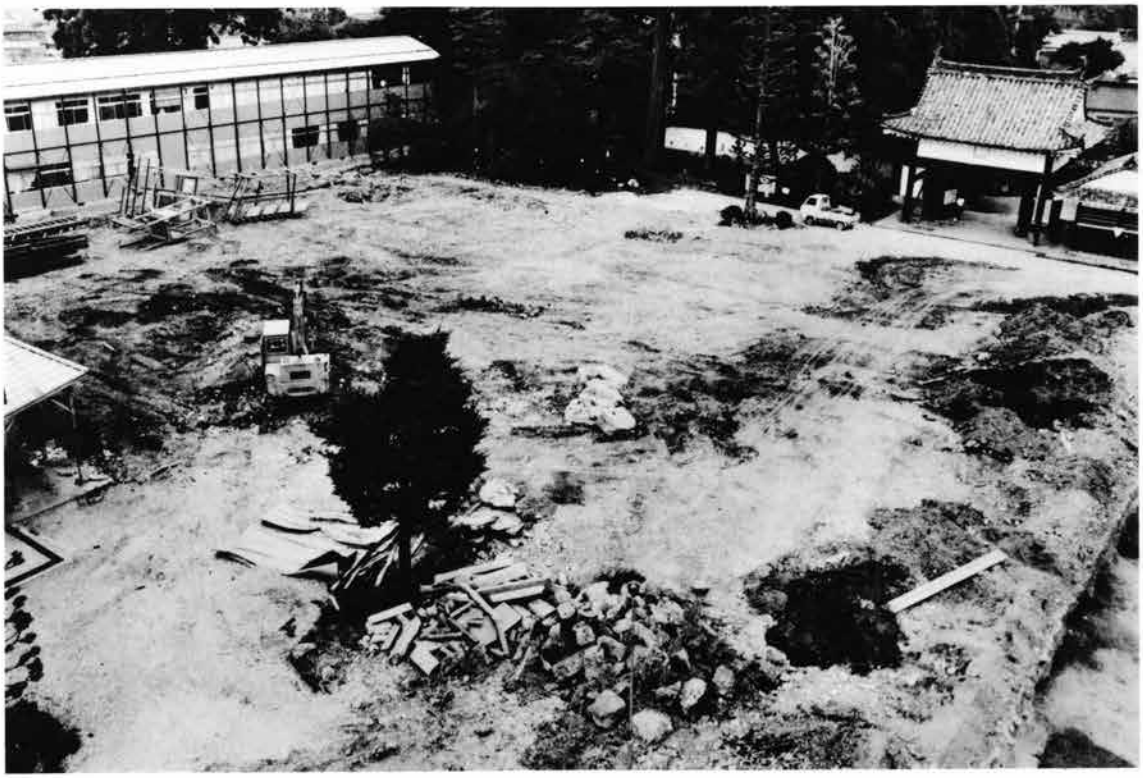
(2)　SK02遺物出土状況

図版第12　園部城跡

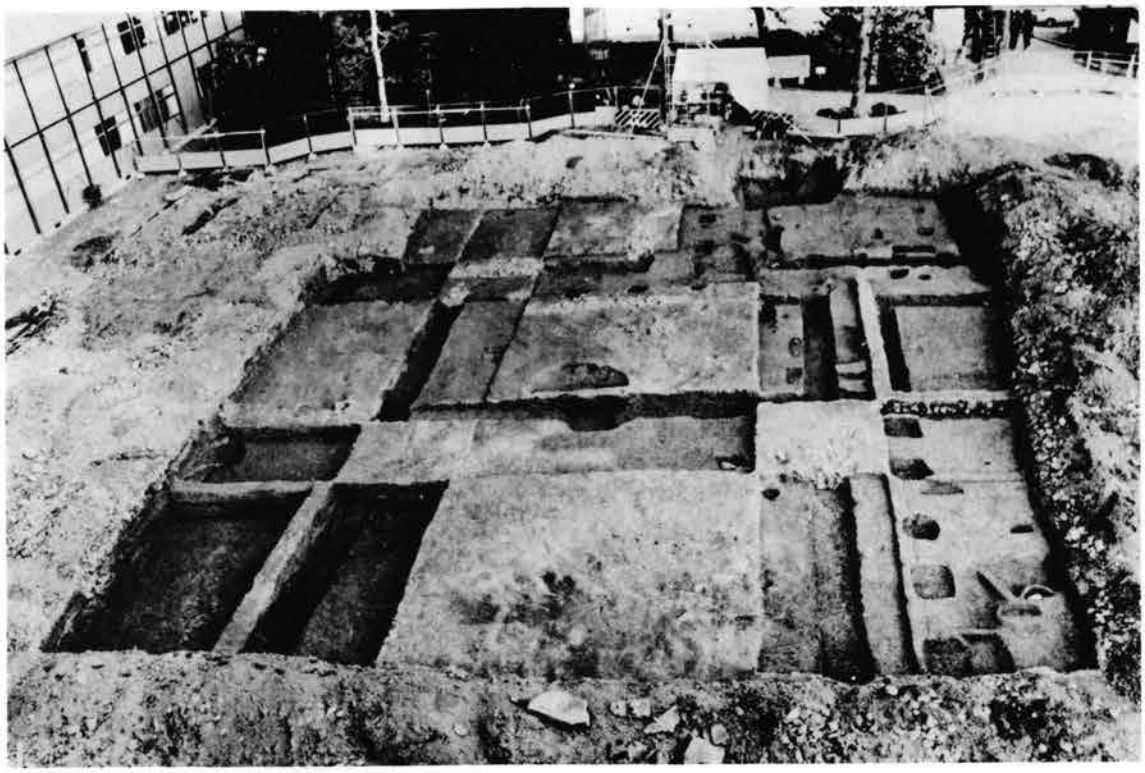
(1)　第１調査地遺物出土状況

(2)　第１調査地遺物出土状況

図版第13　園部城跡

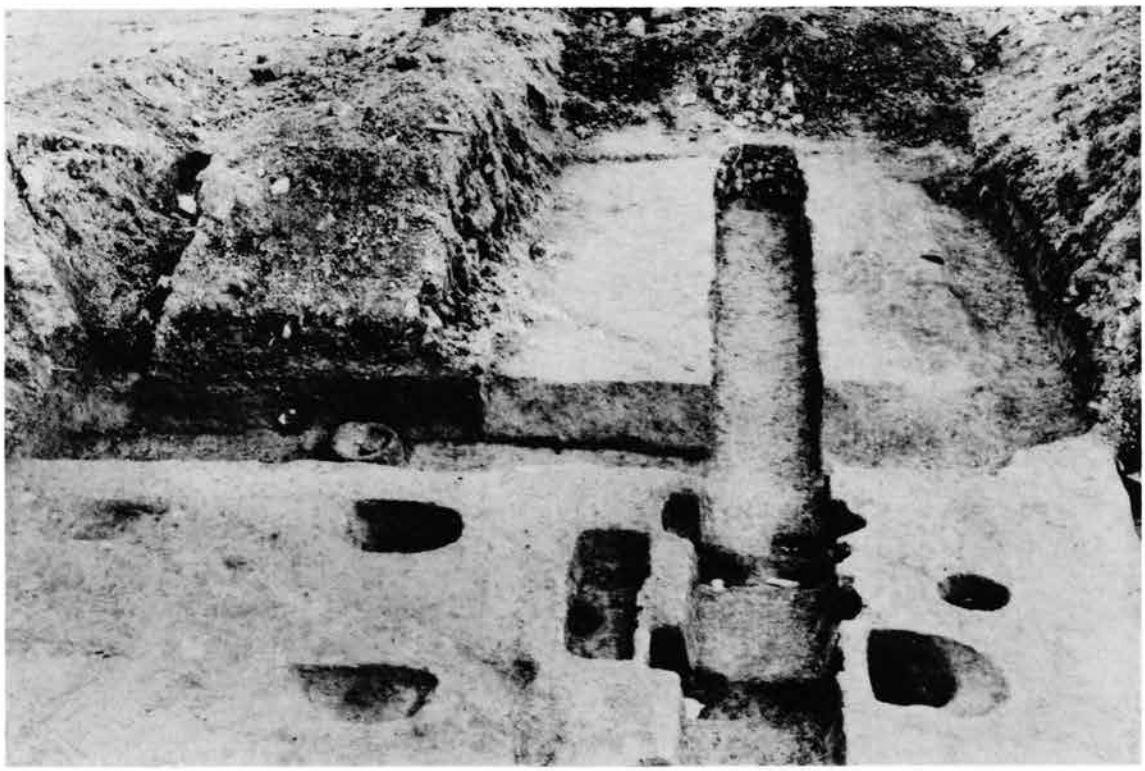


(1) 第２調査地調査前風景（西から）



(2) 第２調査地全景（北西から）

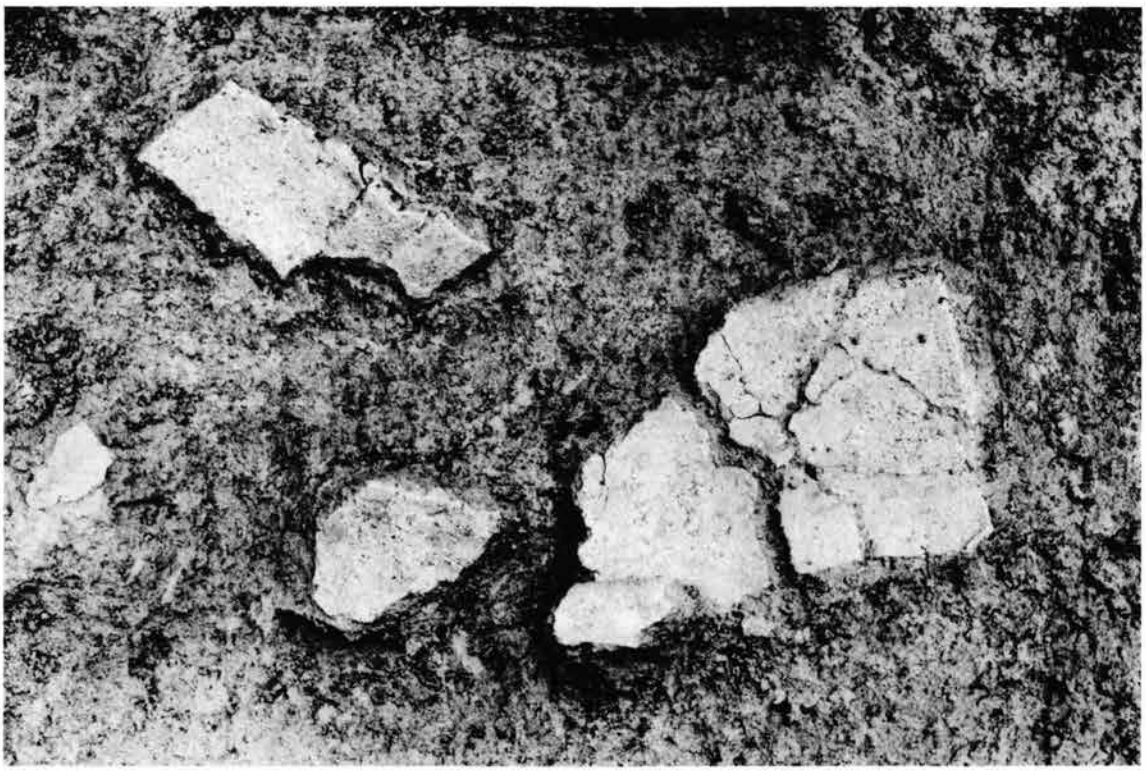
図版第15　園部城跡



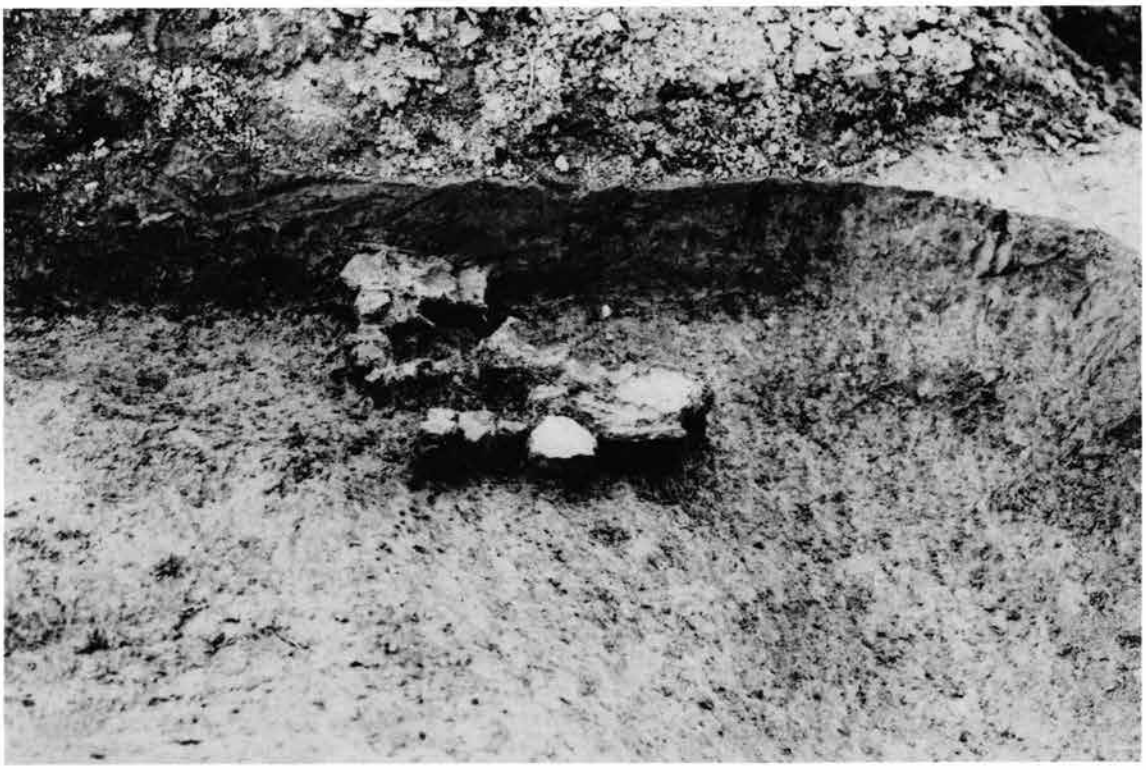
(1)　SD09全景

(2)　SD09

図版第16　園部城跡



(1)　SD09埴輪片出土状況



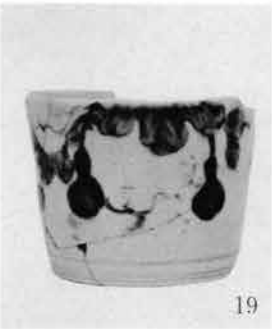
(2)　SD09埴輪片出土状況

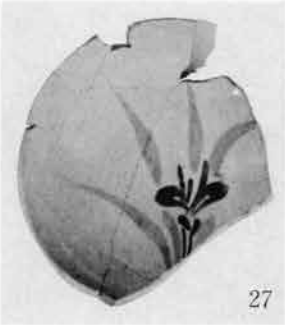
図版第17　園部城跡

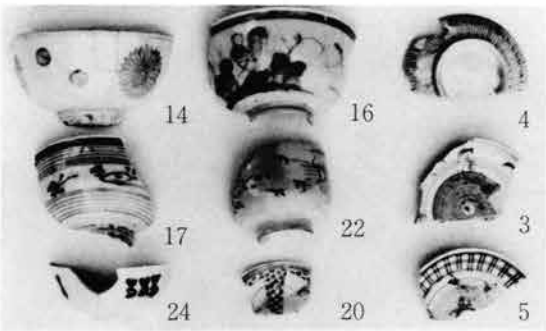
(1)　SD24検出状況

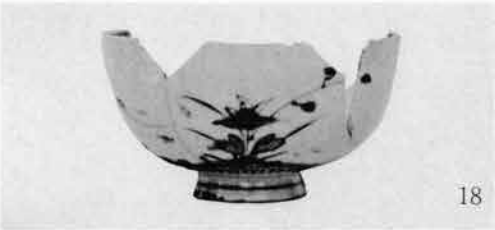
(2)　SD24全景

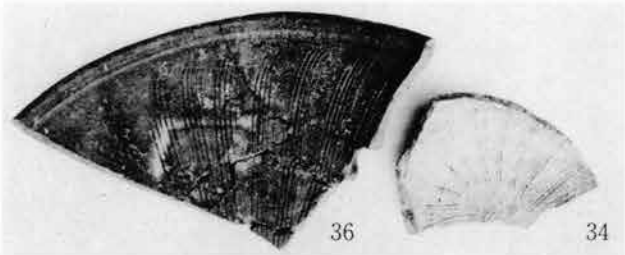
図版第18　園 部 城 跡











出土遺物（陶磁器）

図版第19　園部城跡

42

55

69

83

84

65

66

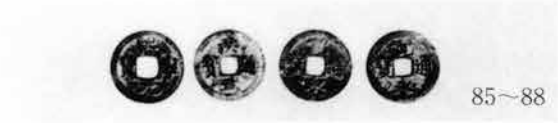
67

79

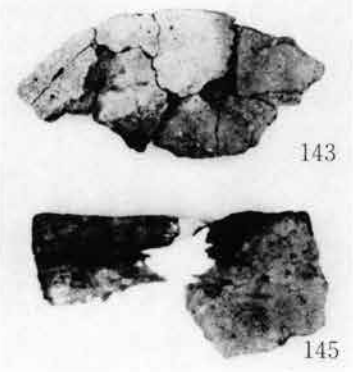
(1)　出土遺物（土師器）

93

94


85～88

138


143

145

144

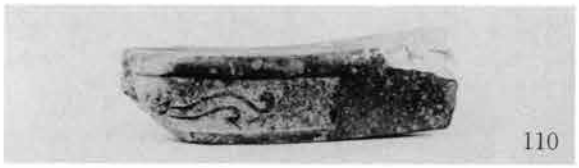
(2)　出土遺物（古銭・刀装具・埴輪）

出土遺物（軒丸瓦・桟瓦・他）

図版第21　園部城跡

117

113


110

116

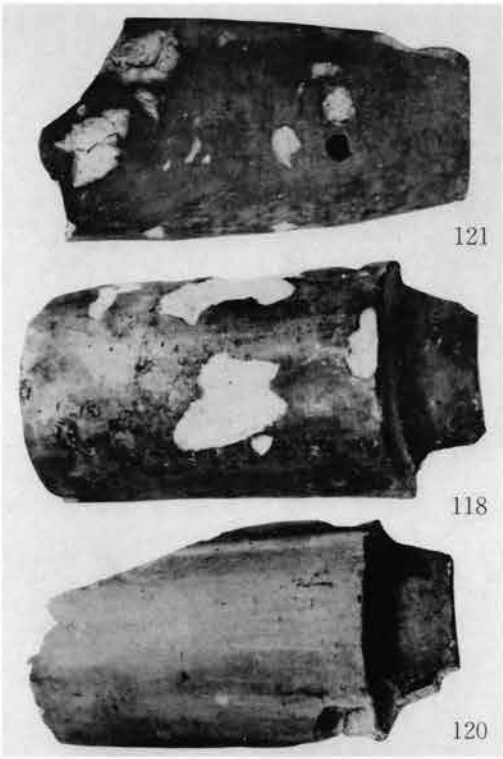
111

114

117

115

(1)　出土遺物（軒平瓦）


121

118

120

112

109

(2)　出土遺物（丸瓦・平瓦・他）

図版第22　園部城跡

(1) 園部城巽櫓(左)・櫓門(右)　(南から)

(2) 園部城太鼓櫓（船井郡八木町）

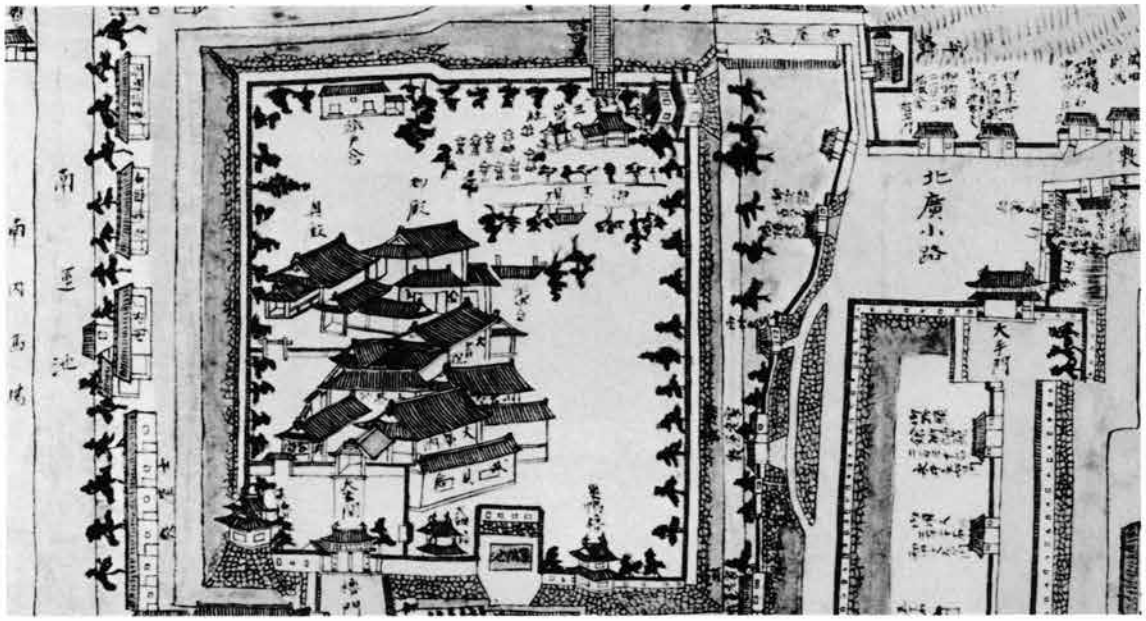
図版第24　園部城跡

(1) 園部城本丸跡北側石垣

(2) 園部城内堀跡

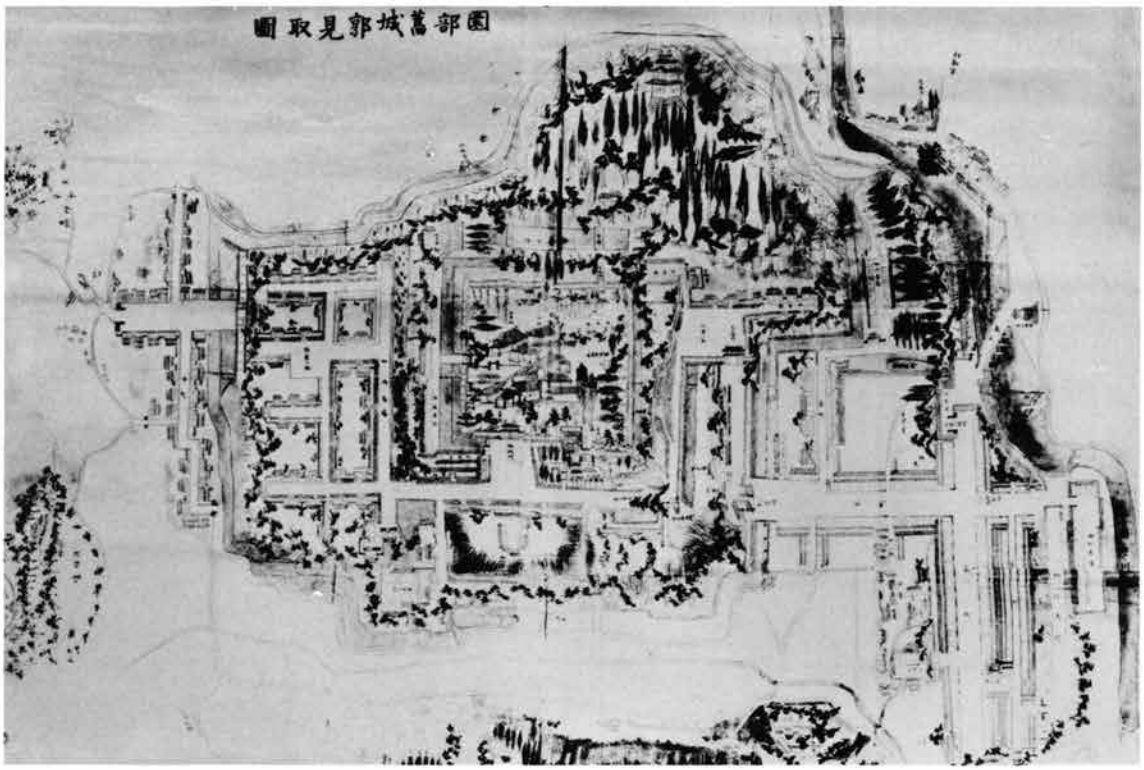
図版第25　園部城跡

(1)　園部城古図（上仲喬明氏蔵）

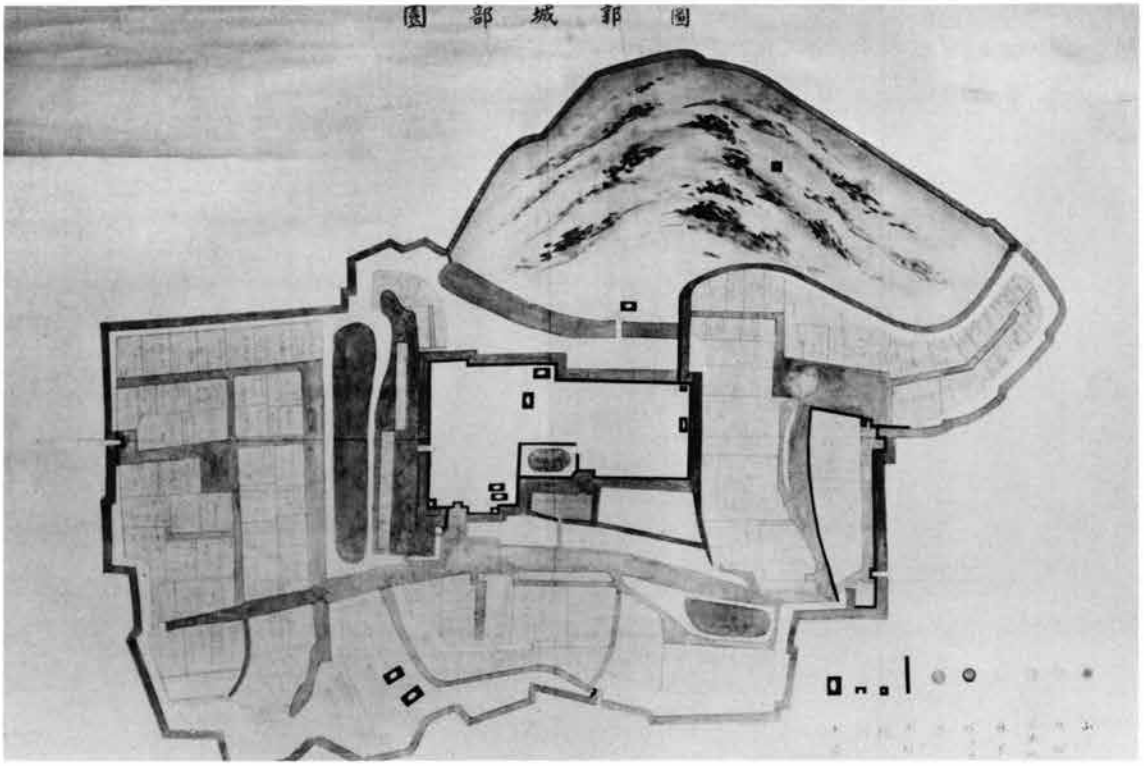


(2)　園部城古図（本丸付近）

図版第26　園 部 城 跡



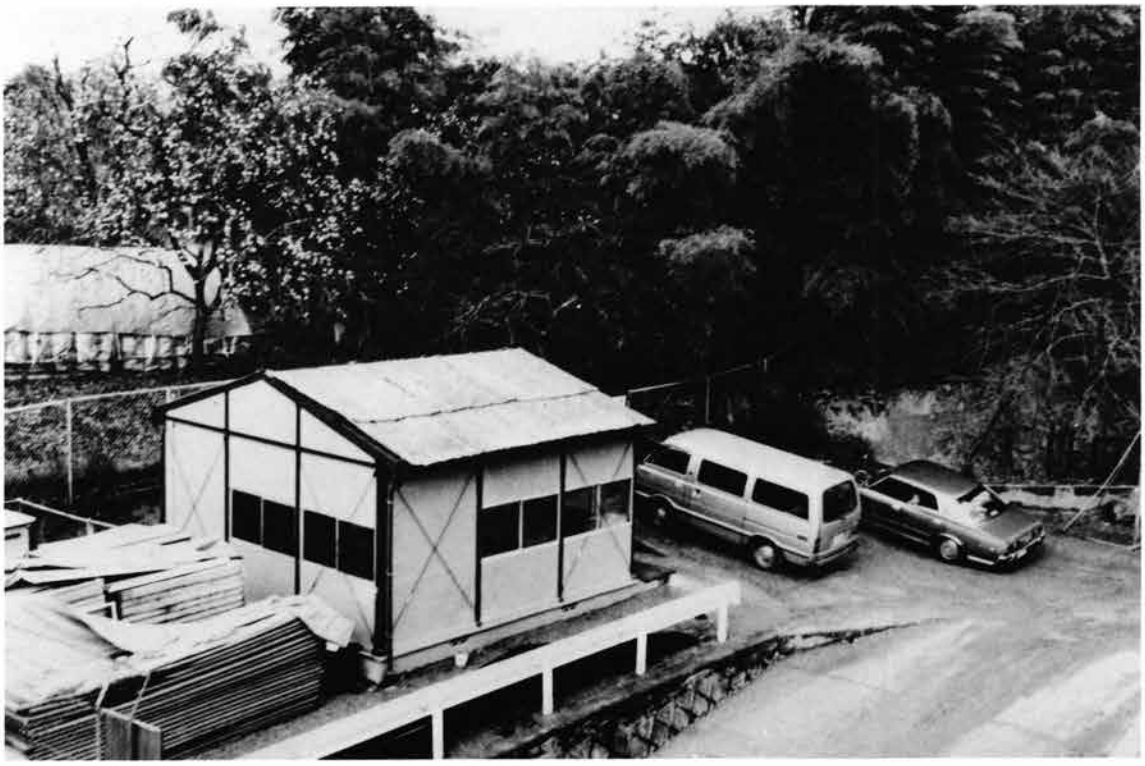
(1) 園部舊城郭見取図



(2) 園部城郭図

図版第27　黄金塚2号墳

(1) 調査地全景（南から）

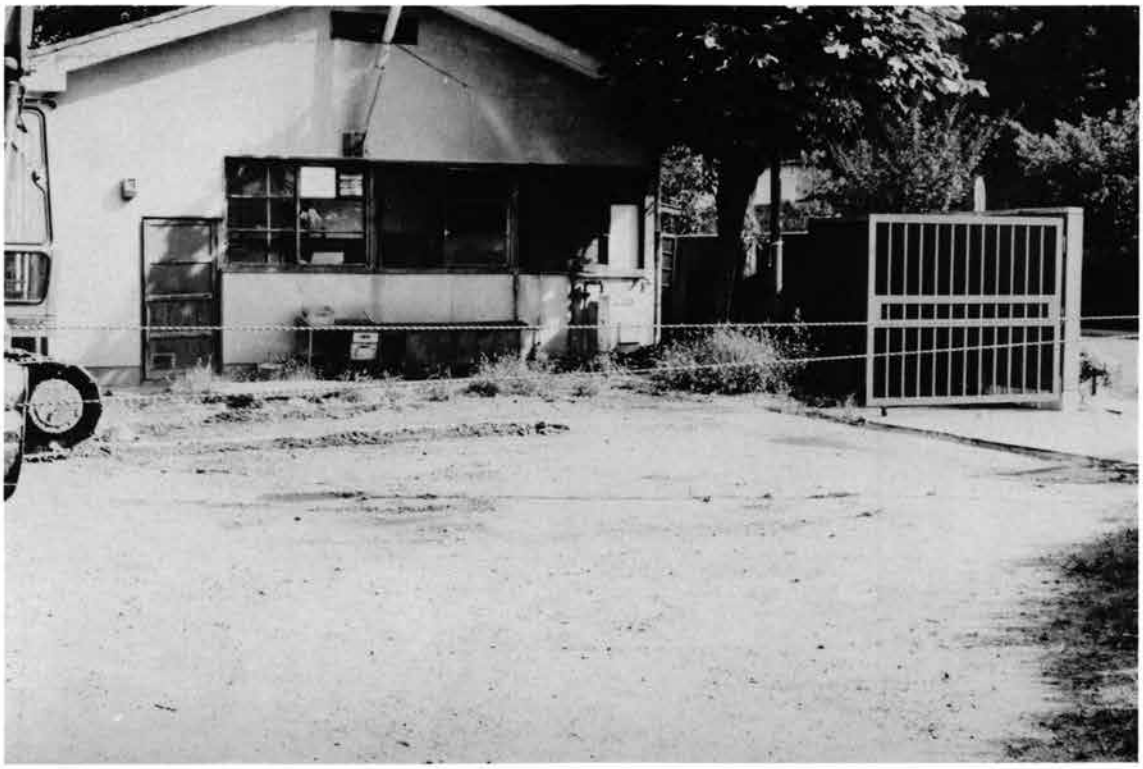


(2) 黄金塚2号墳後円部（南西から）

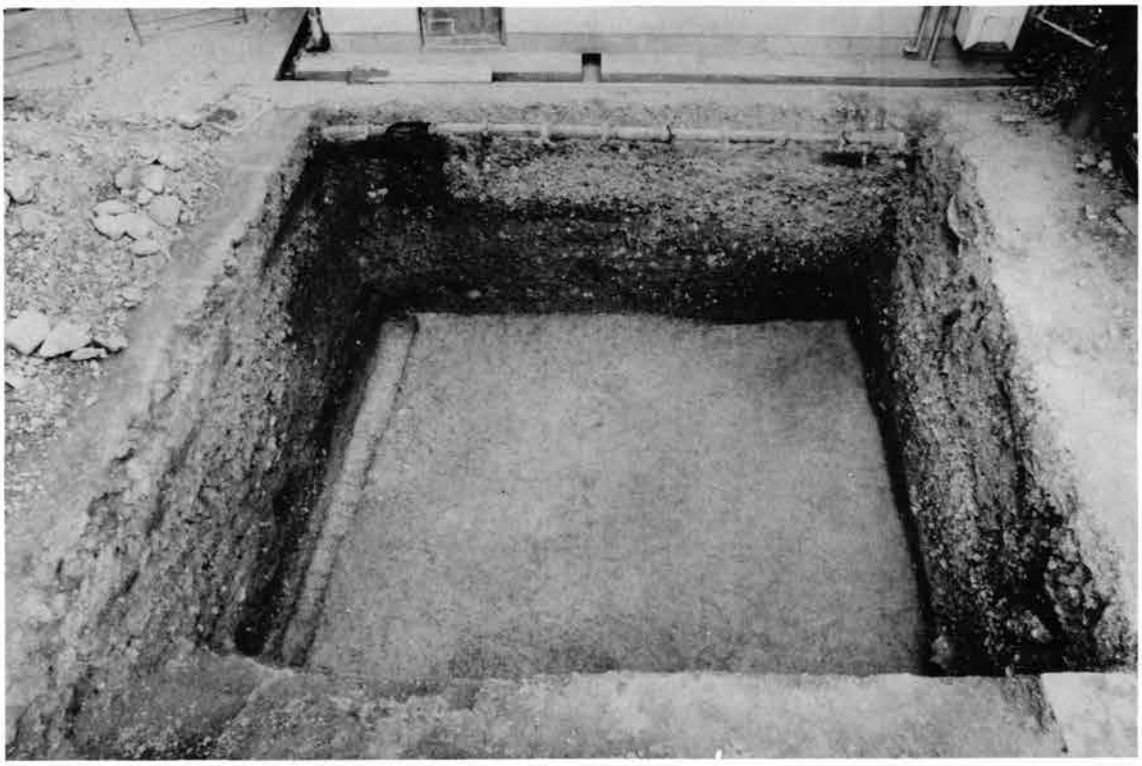
表　採　埴　輪

1．器材埴輪片　2．円筒埴輪片　3．円筒埴輪片（底部）　4．器材埴輪片

図版第29　平安宮跡

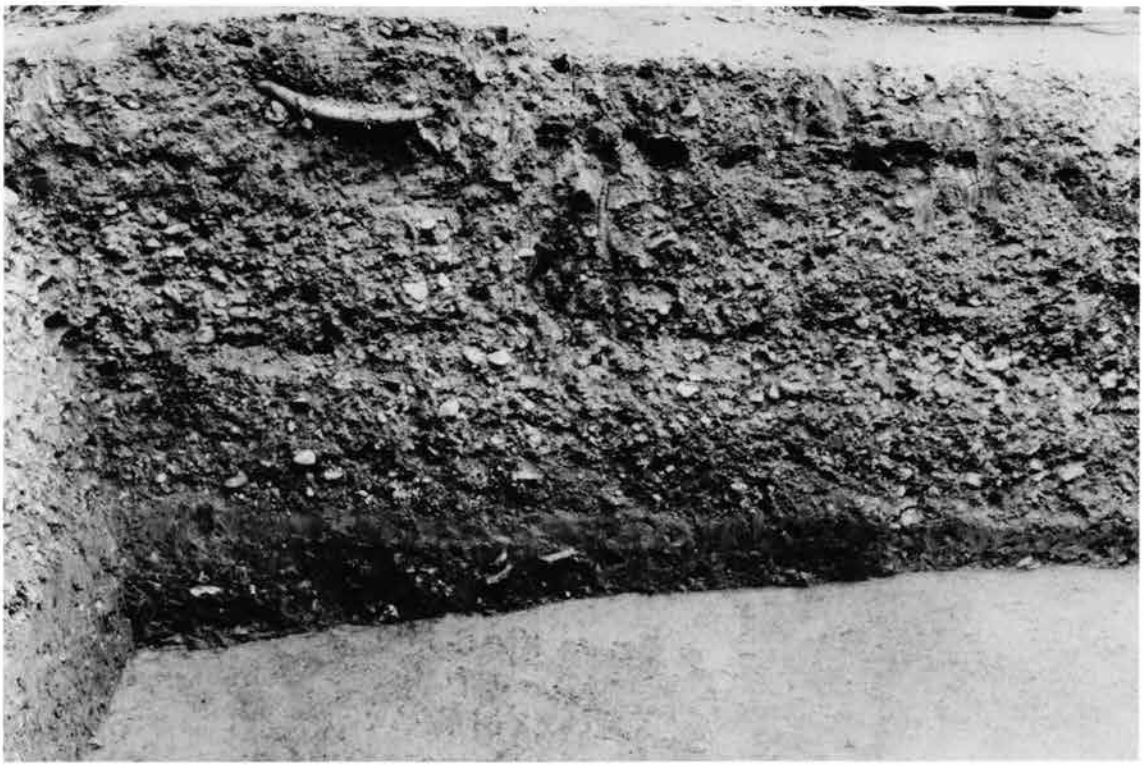


(1) 調査前風景（南から）



(2) トレンチ全景（南から）

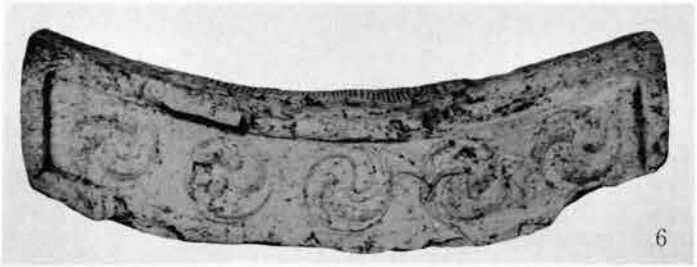
図版第30　平安宮跡

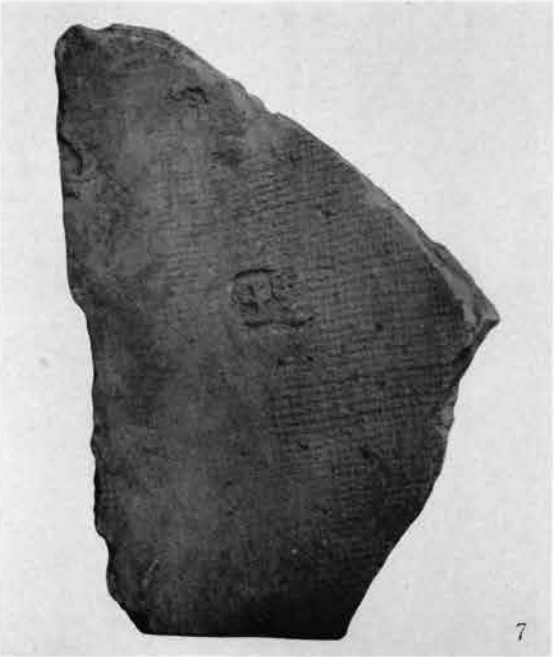


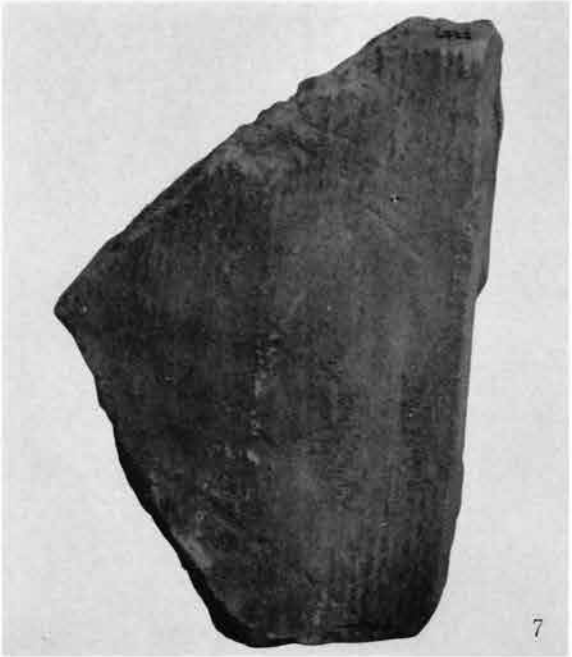
(1) トレンチ東壁

(2) 立合調査風景

図版第31　平安宮跡

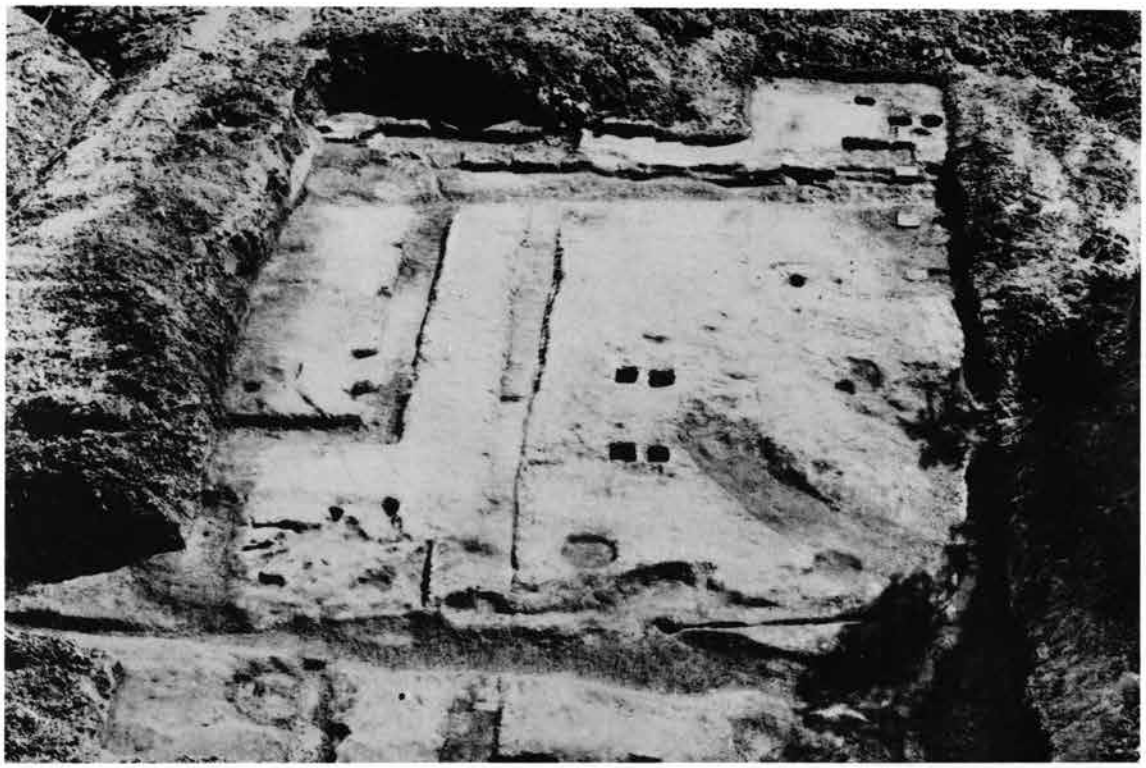






1．軒丸瓦　2～6．軒平瓦　7．刻印瓦「理」

図版第32　内田山古墳



(1) 調査地全景（東から）

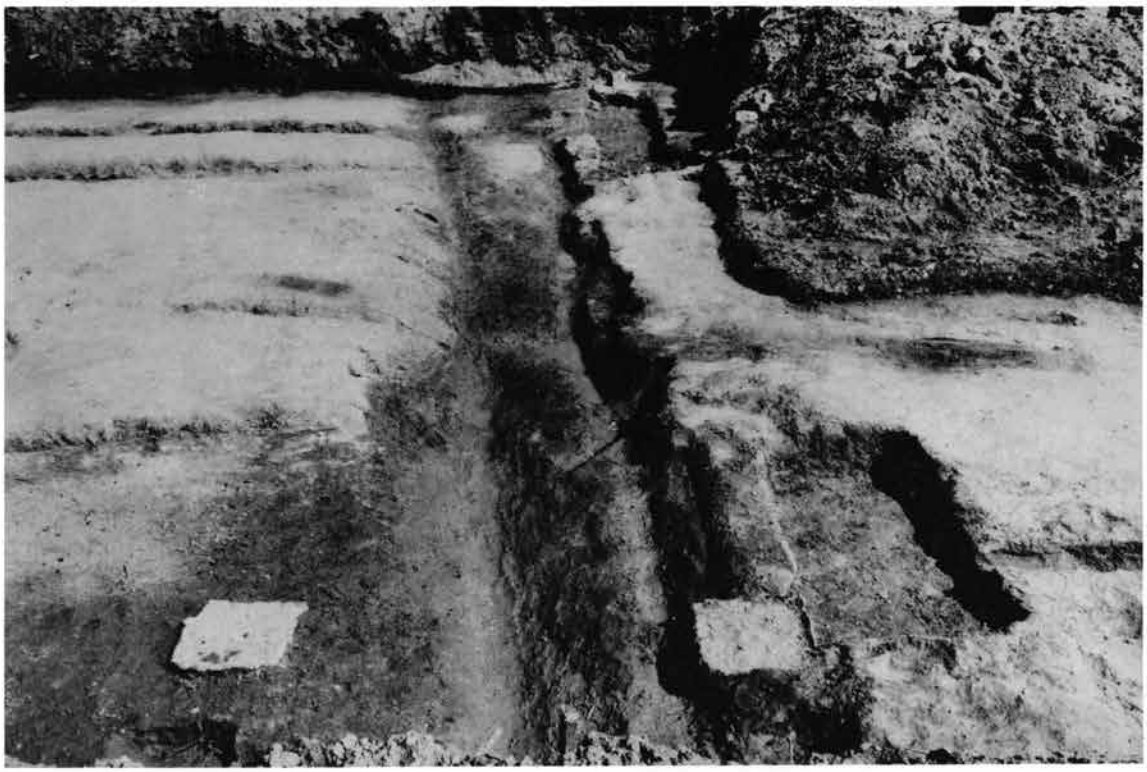
(2) 調査地全景（北西から）

図版第33　内田山古墳

(1)　東辺の周濠（北から）

(2)　東辺の周濠（南から）

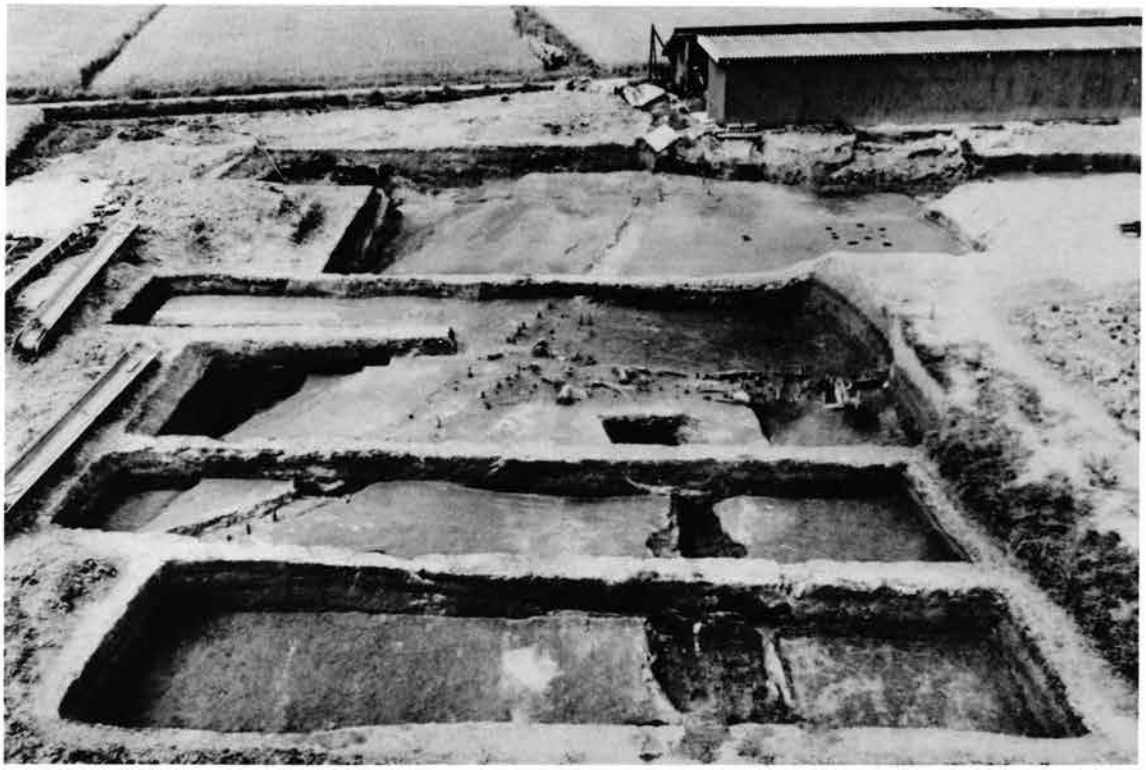
図版第34　内田山古墳



(1)　西辺の周濠（北から）

(2)　西辺の周濠（南から）

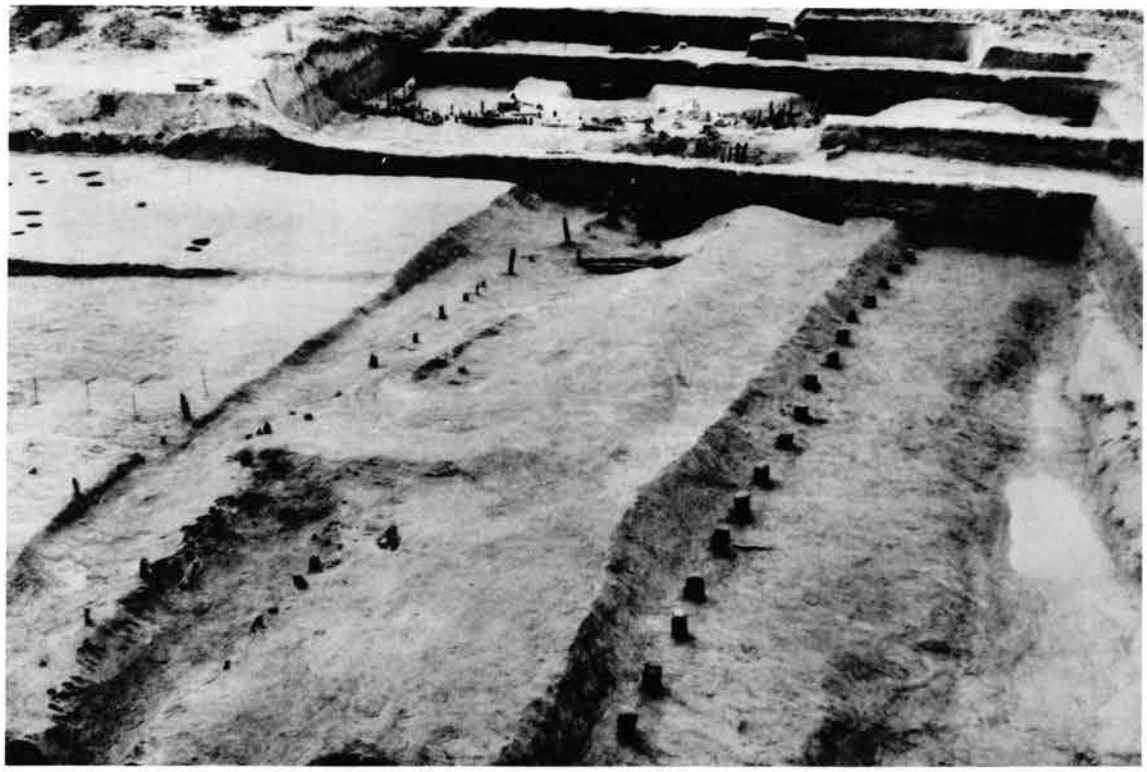
図版第35　橋 爪 遺 跡



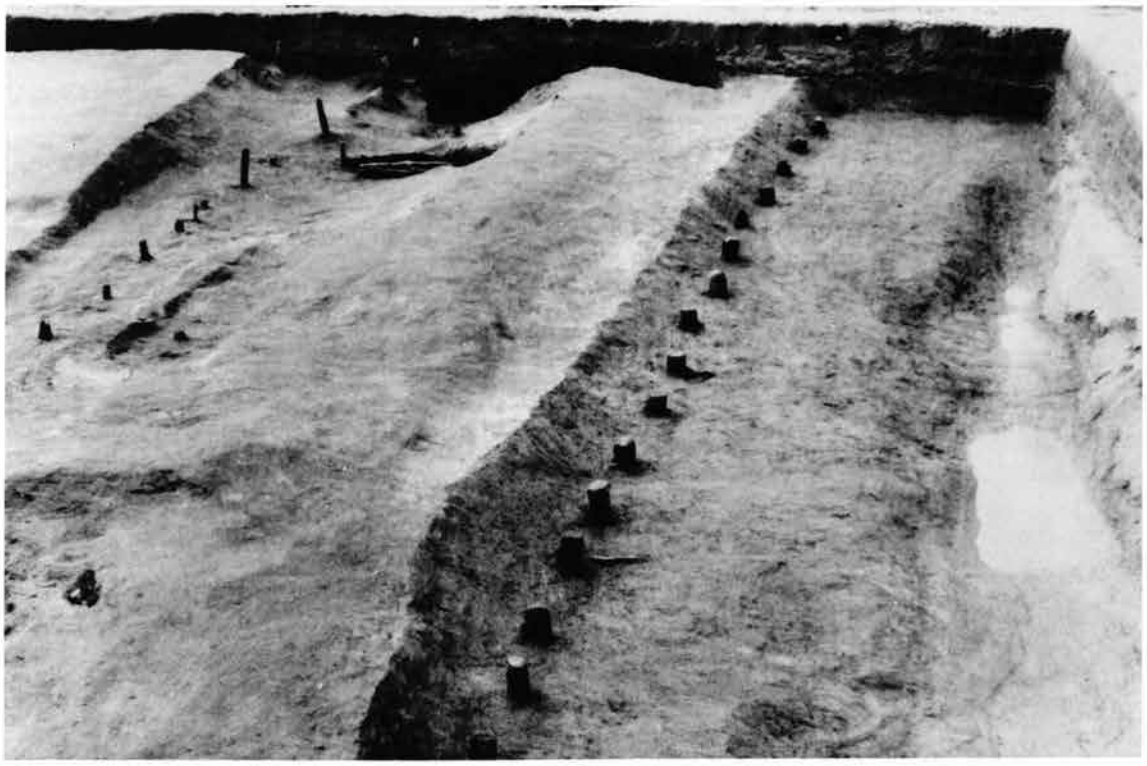
(1) 第1～3トレンチ全景（北から）

(2) 第1～2トレンチ検出状況（北から）

図版第36　橋 爪 遺 跡



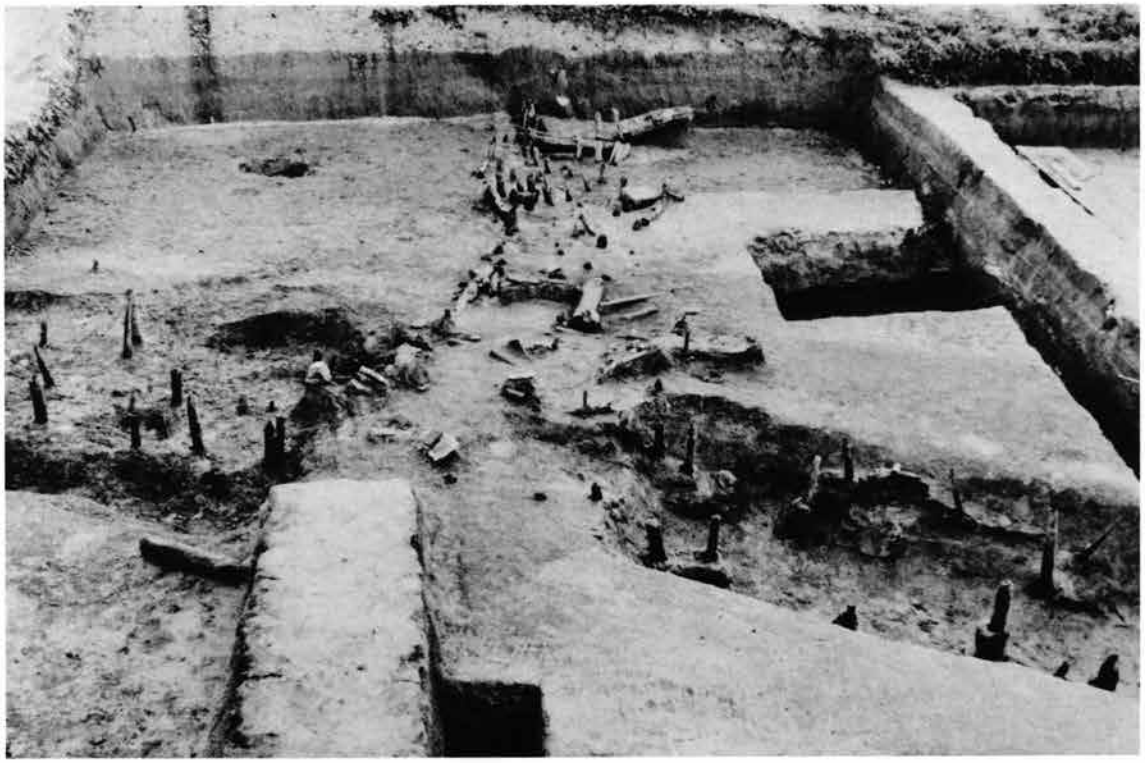
(1) 第1～3トレンチ全景（南から）



(2) 第1トレンチ　SD01・02検出状況（南から）

図版第37　橋 爪 遺 跡

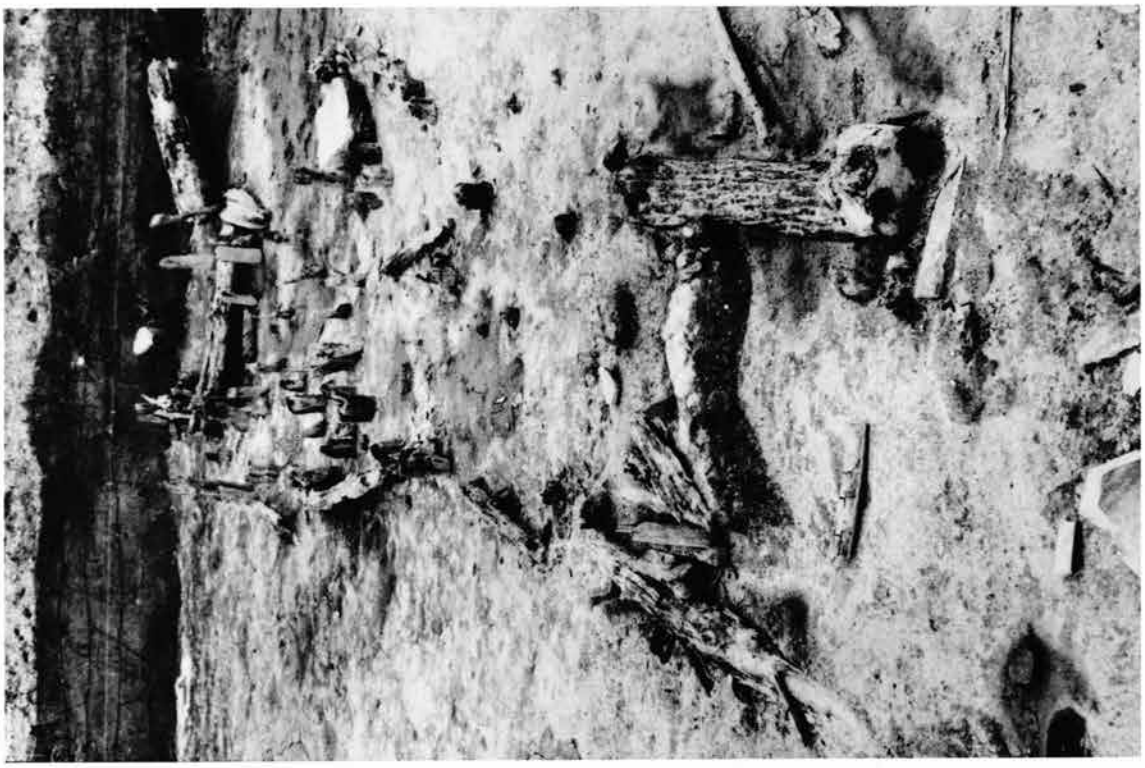
(1) 第2トレンチ全景（東から）



(2) SF03，SD04検出状況（西から）

図版第38　橋 爪 遺 跡

(2) SD05断面（北から）



(1) SF03断面（西から）

図版第39　橋 爪 遺 跡

(1) 第4トレンチ断割り（北西から）

(2) 第4トレンチ地層調査（北から）

図版第40　橋 爪 遺 跡

(1) 第4トレンチ全景（南西から）

(2) 第4トレンチ遺物出土状況（南東から）

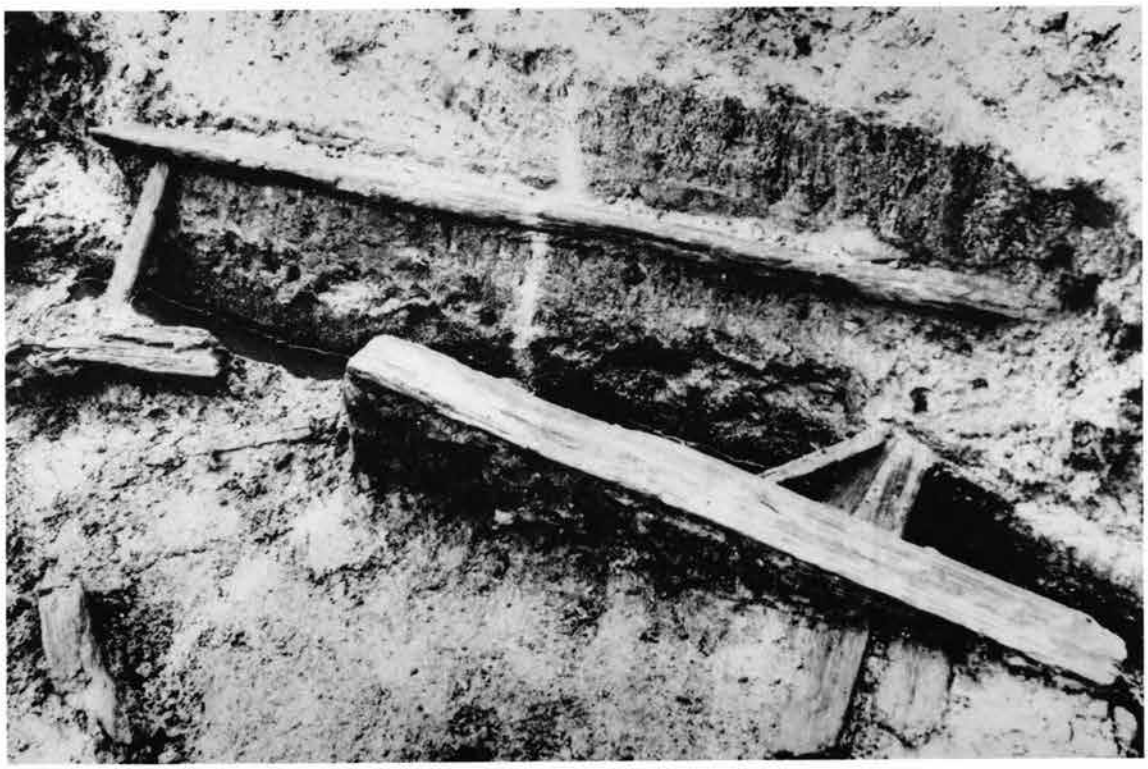
図版第41　橋 爪 遺 跡

(1) 第4トレンチ遺物出土状況（北から）

(2) えぶり出土状況

図版第42　橋 爪 遺 跡

(1) 組み合わせ式木器出土状況（北から）



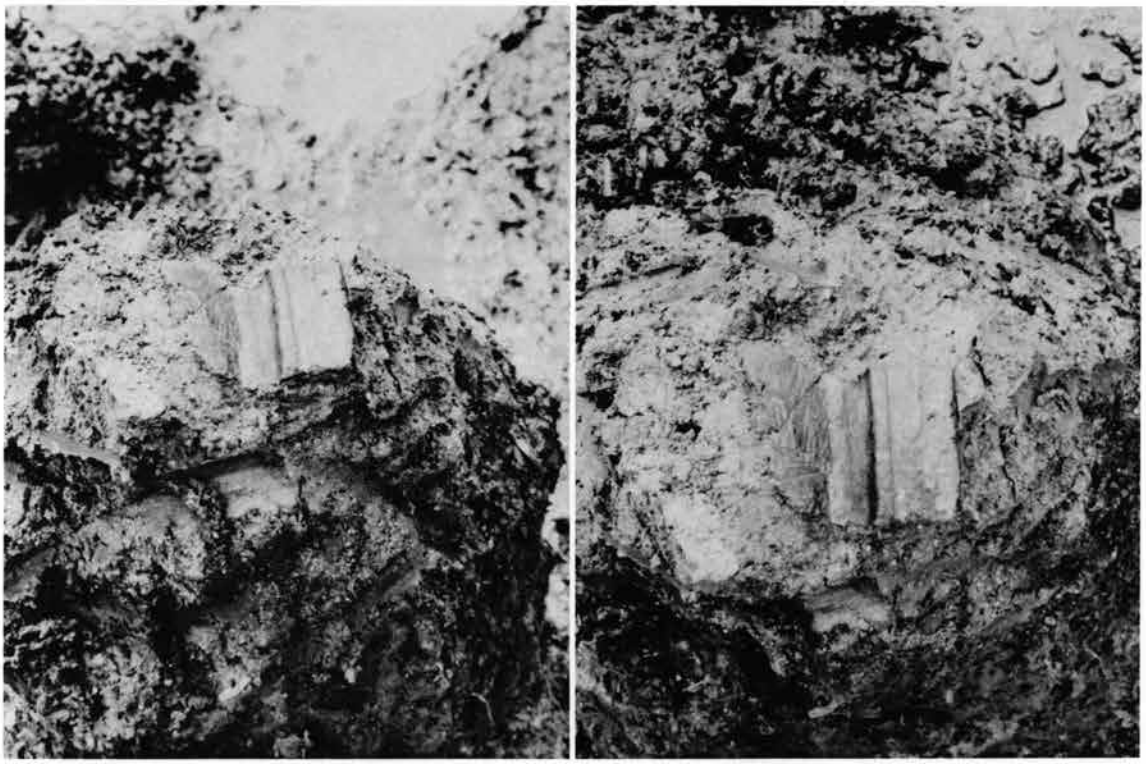
(2) 板・角材出土状況（南から）

図版第43　橋 爪 遺 跡

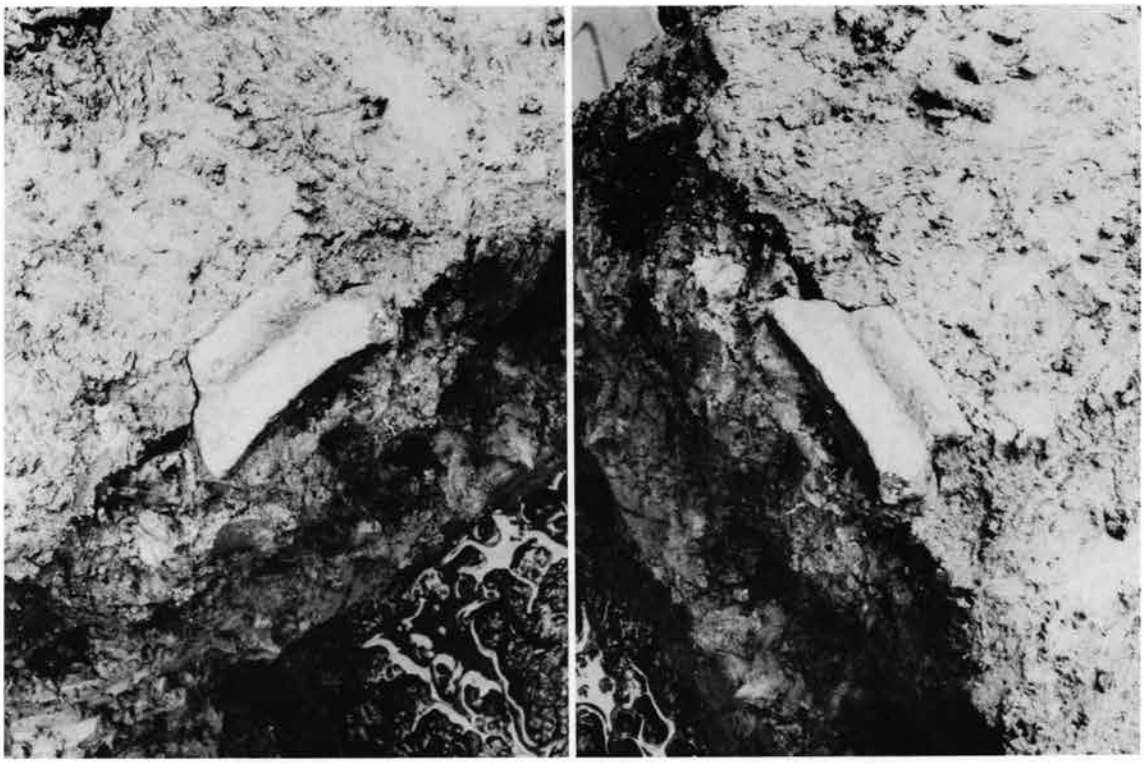
(1)　タゲタ出土状況（東から）

(2)　立木根出土状況（り　ら）

図版第44　橋 爪 遺 跡

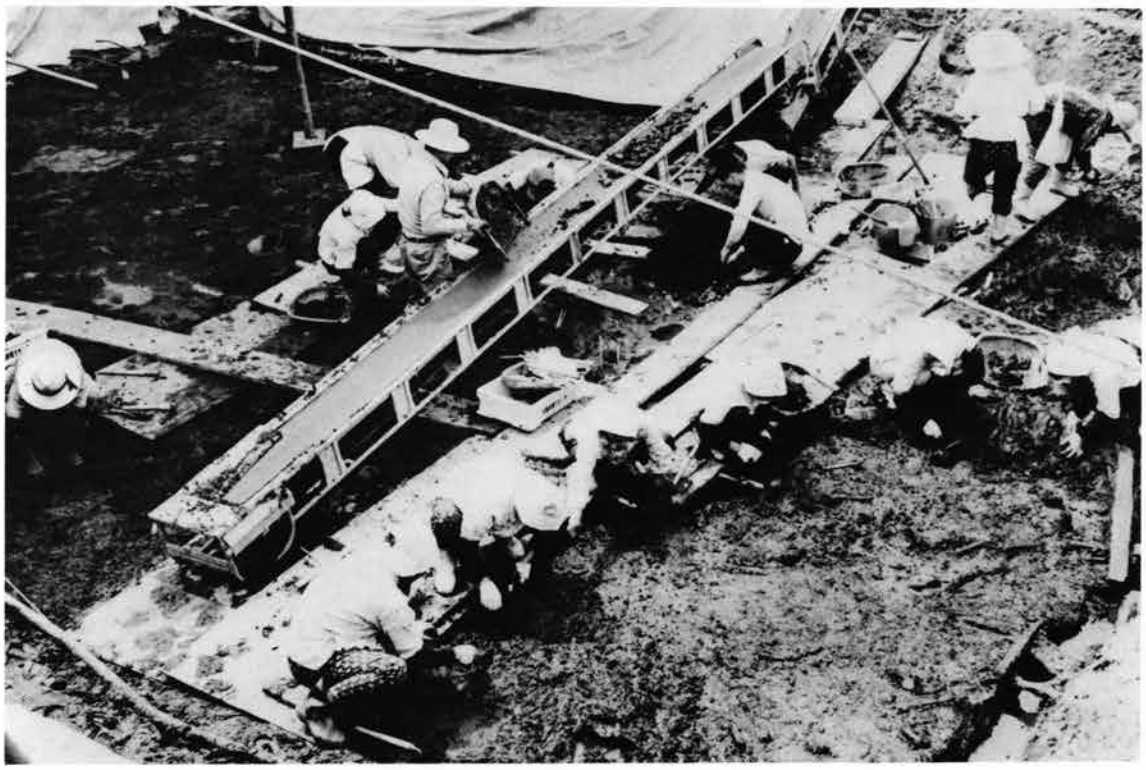


(1)　土器５出土状況

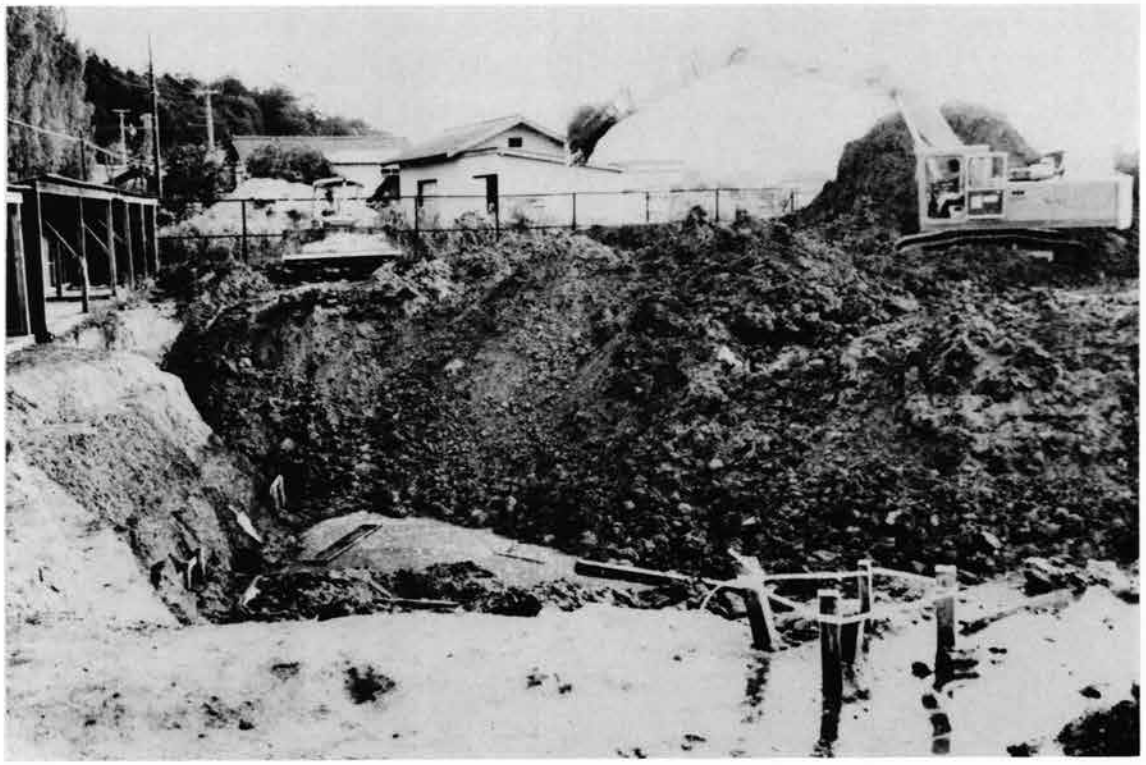


(2)　土器４出土状況

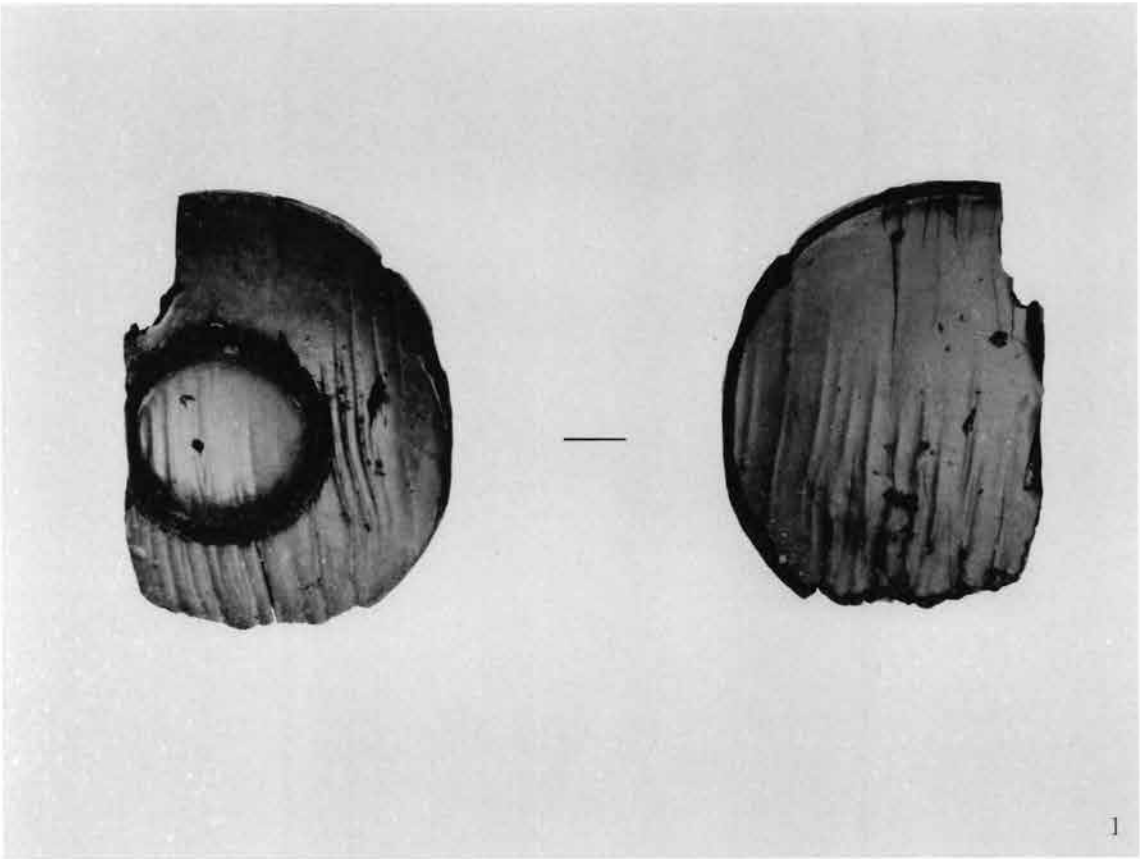
図版第45　橋 爪 遺 跡

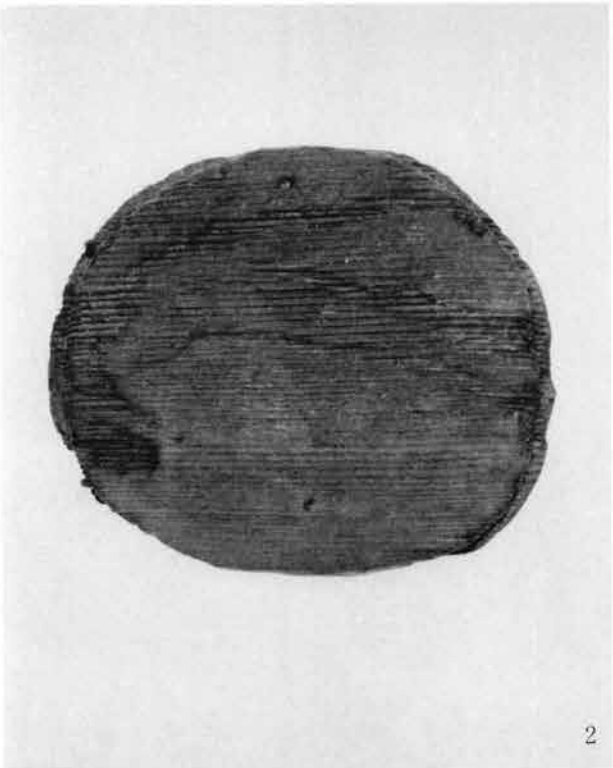


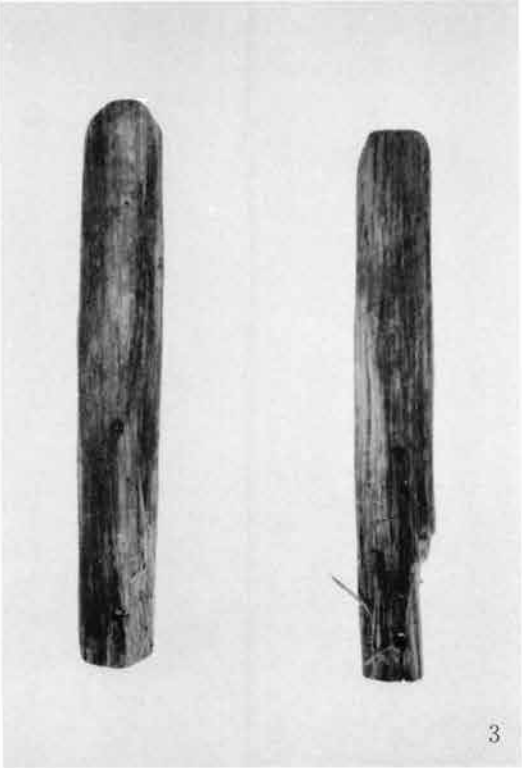
(1) 第4トレンチ調査風景（北東から）



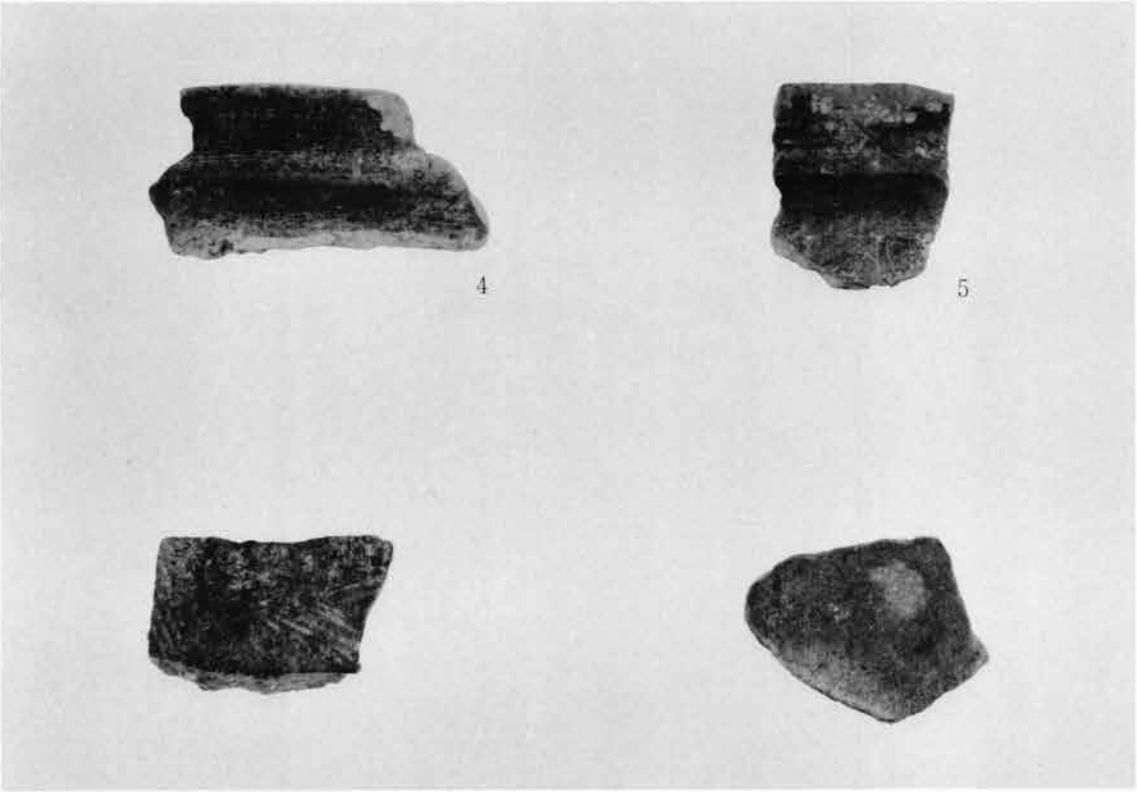
(2) 第4トレンチ埋め戻し風景（北から）

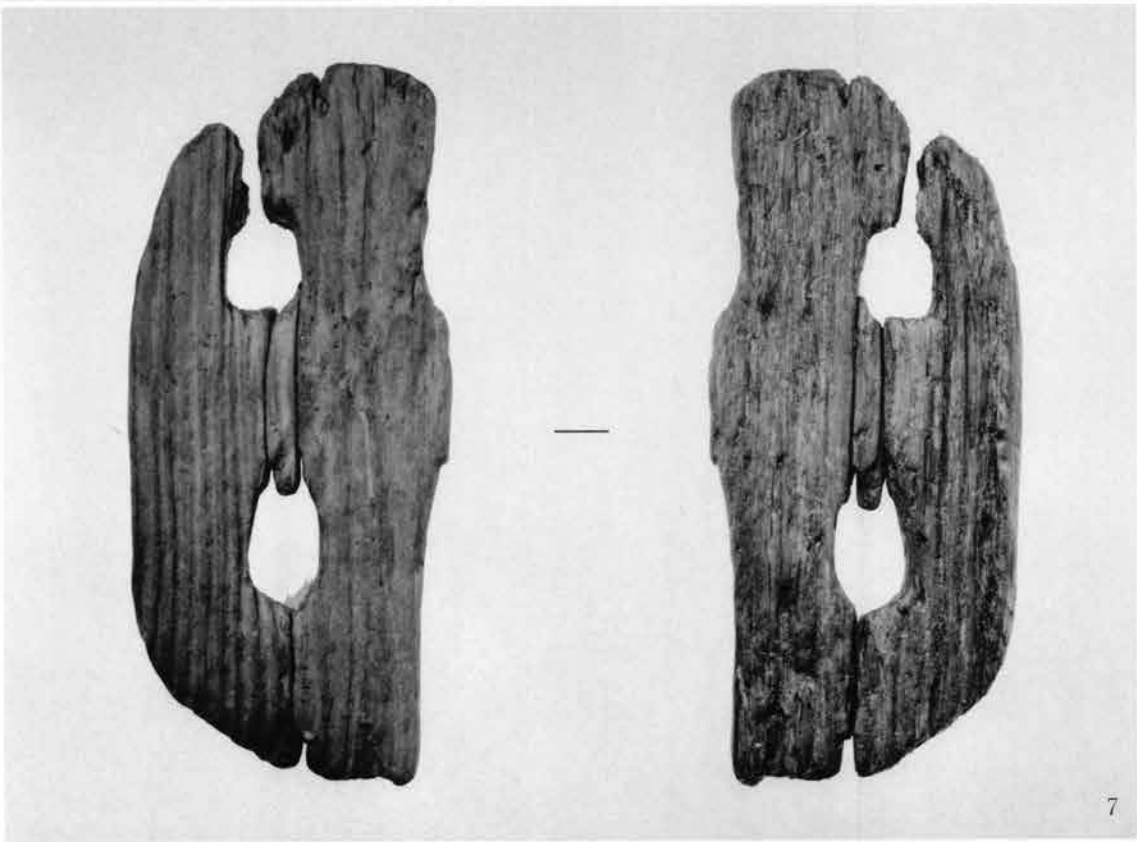




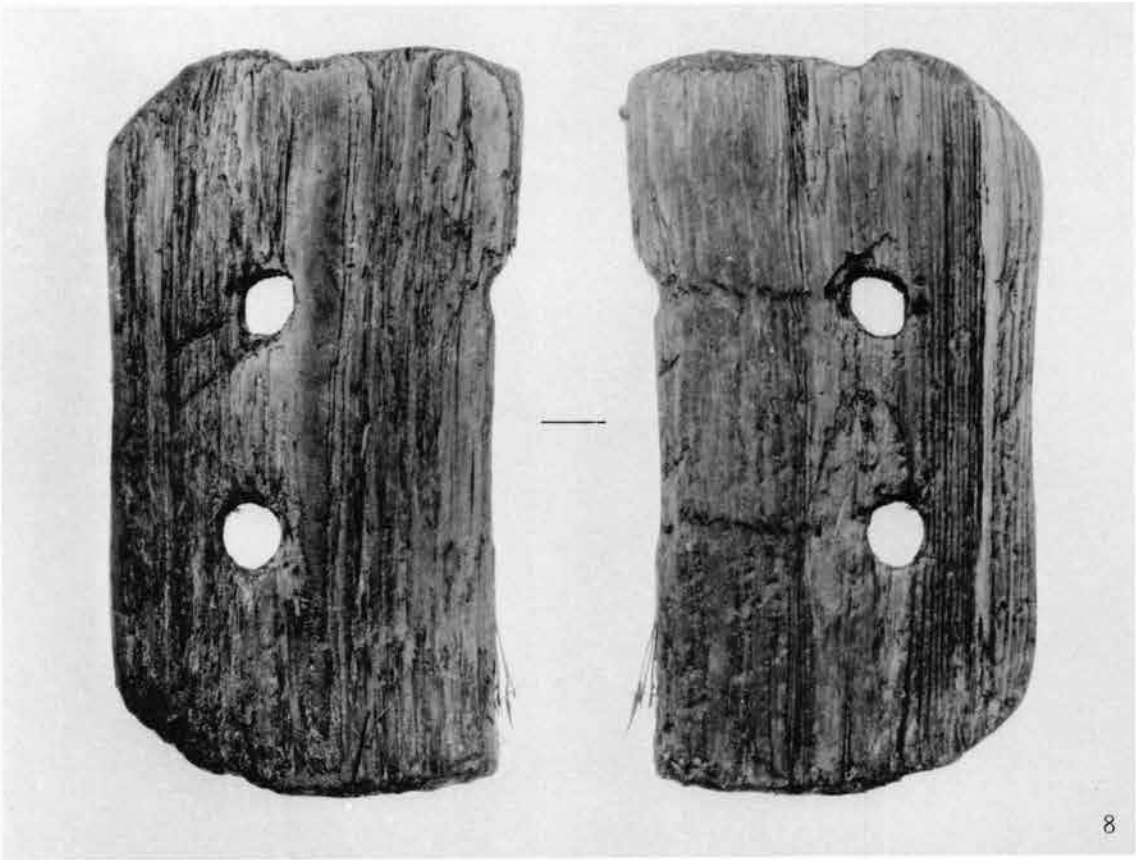


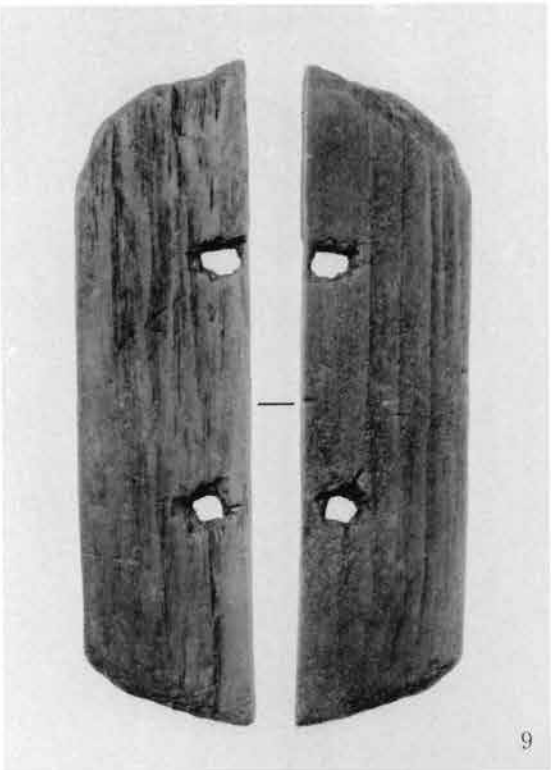
SD04　出土木製品　1. 漆器椀蓋　2. 曲物底板　3. 組み合わせ木器（用途不明）

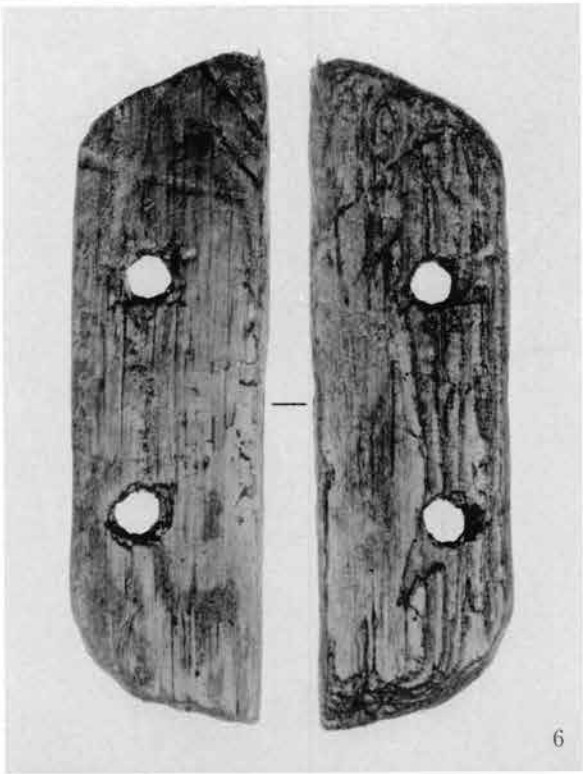




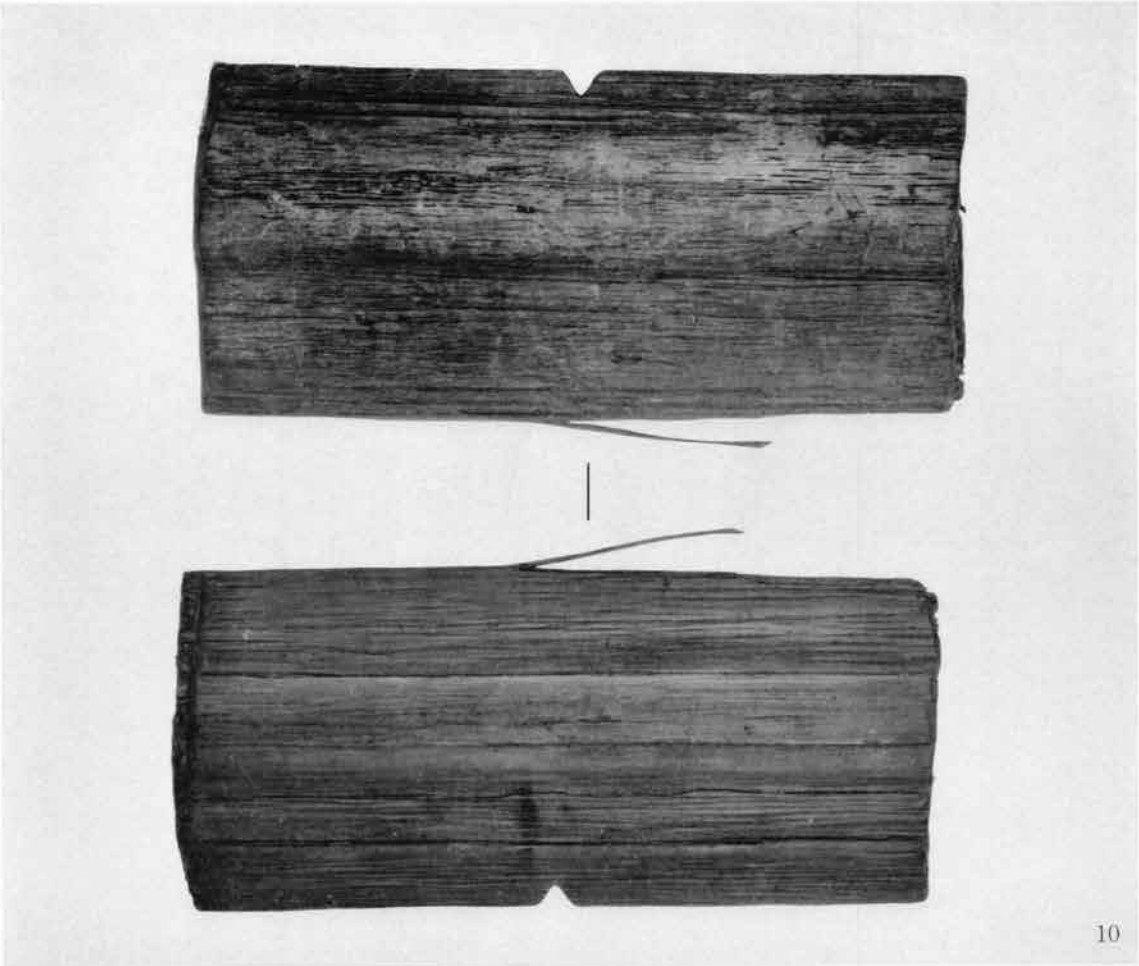
第4トレンチ出土遺物(1)　4・5．土師器　7．タゲタ

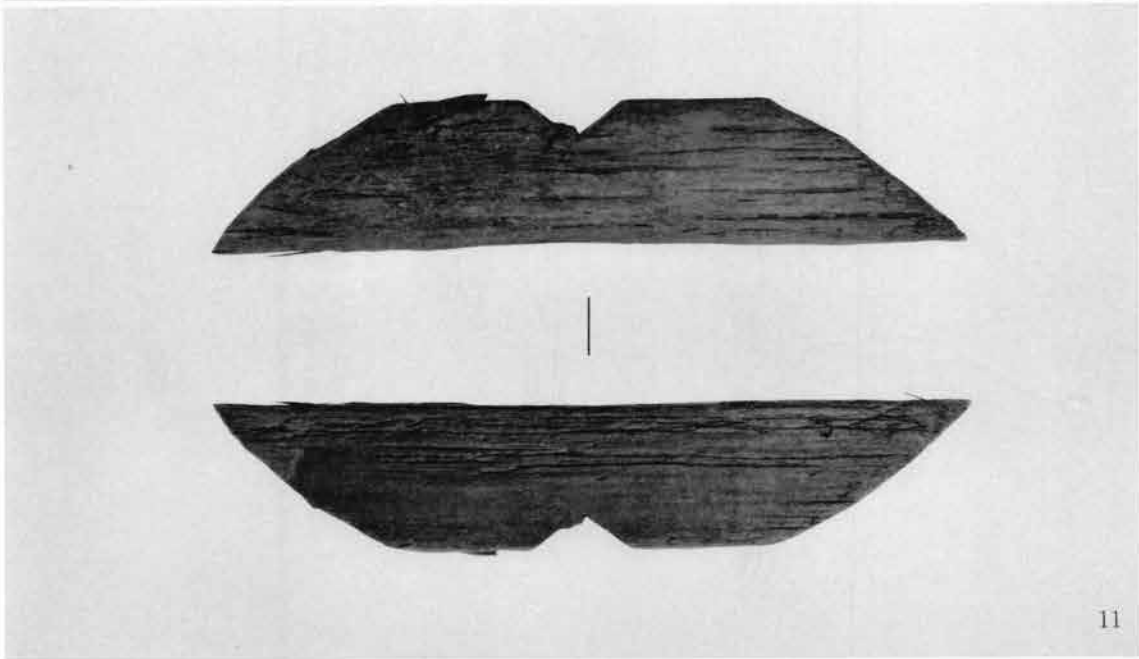




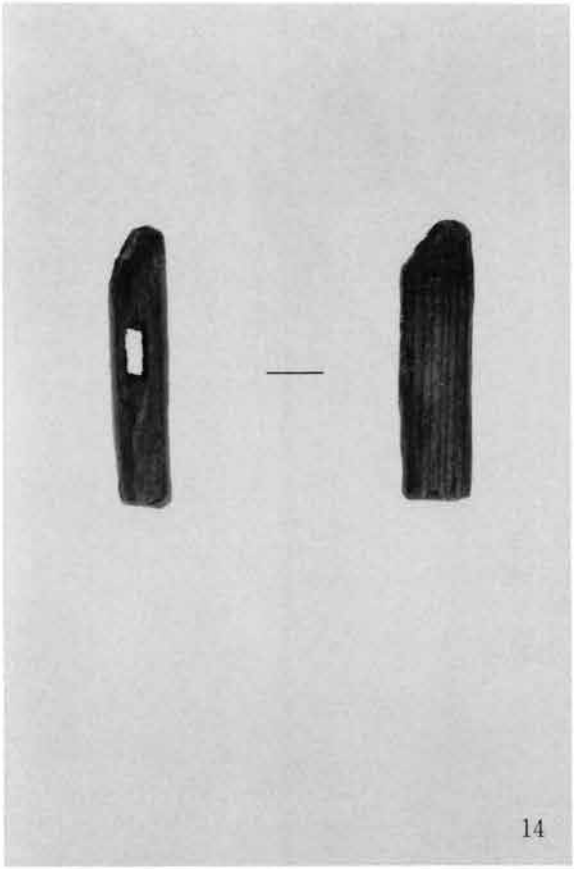


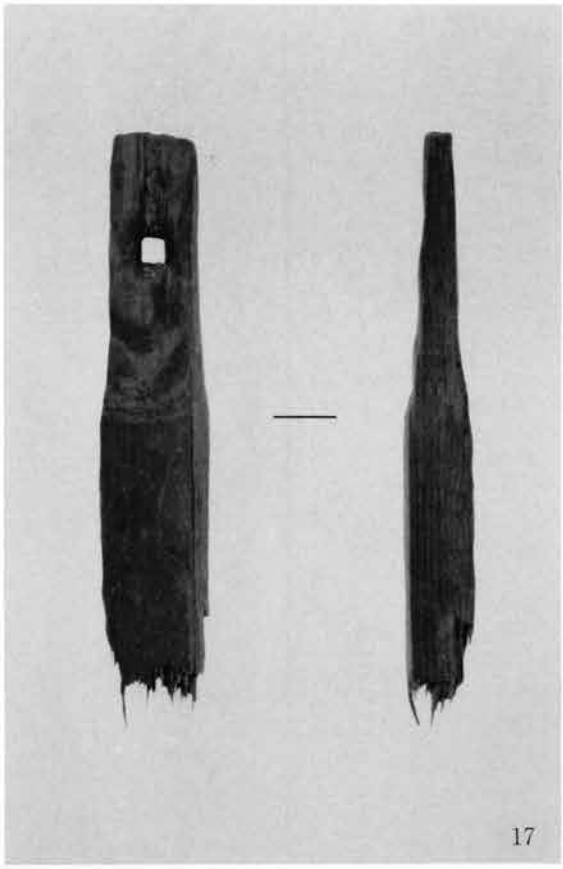
第4トレンチ出土遺物(2)　6・8・9．タゲタ

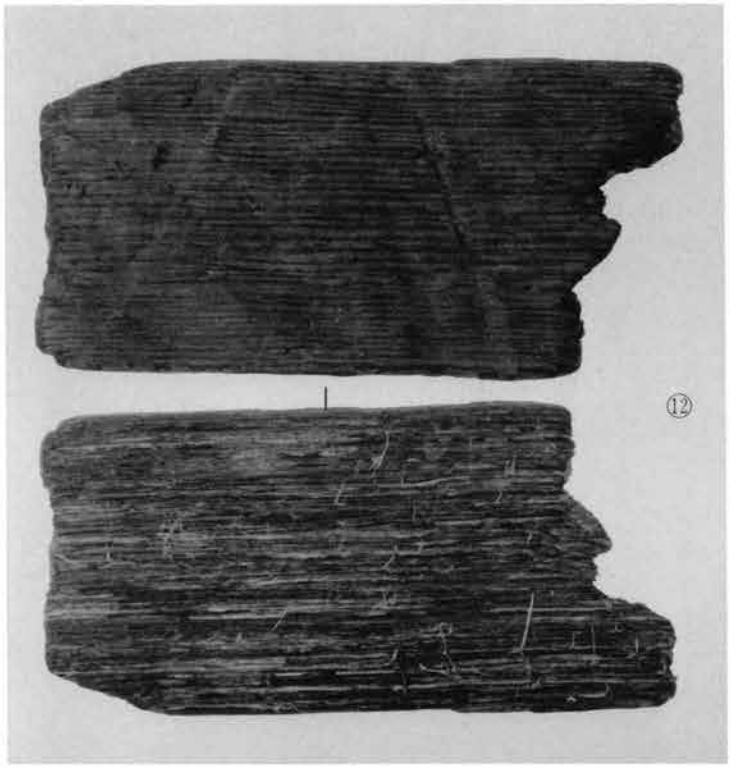


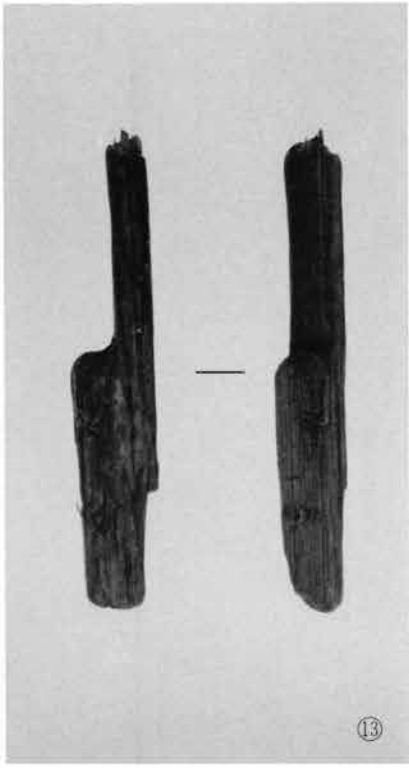


第４トレンチ出土遺物(3)　10・11．えぶり(?)

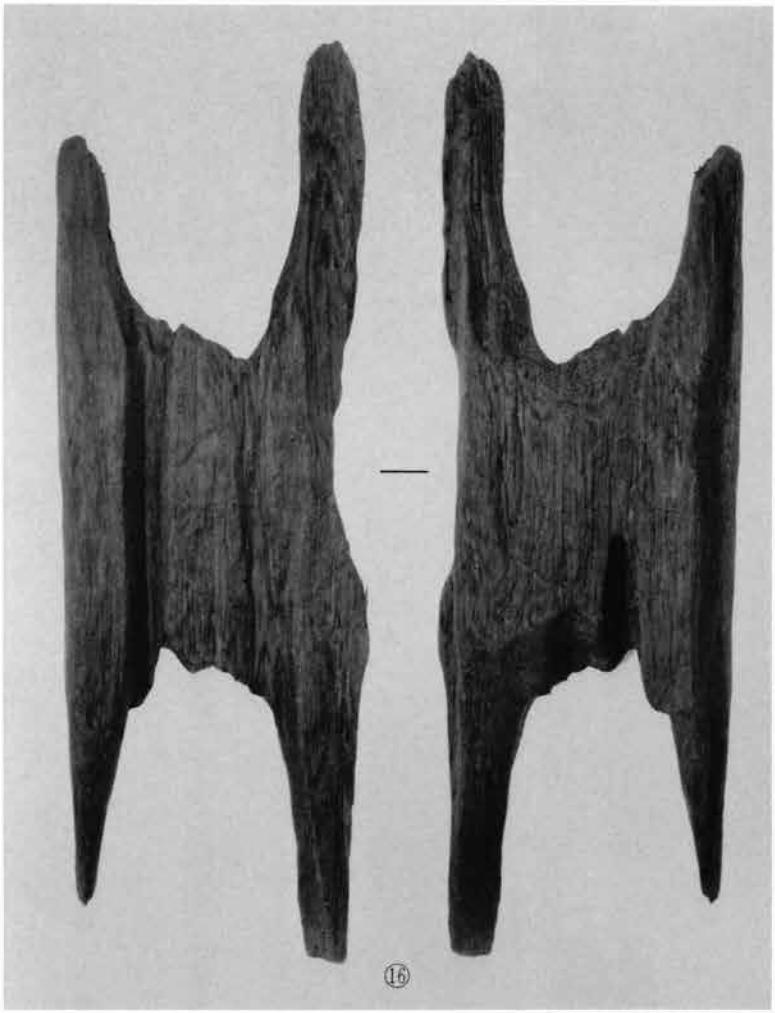


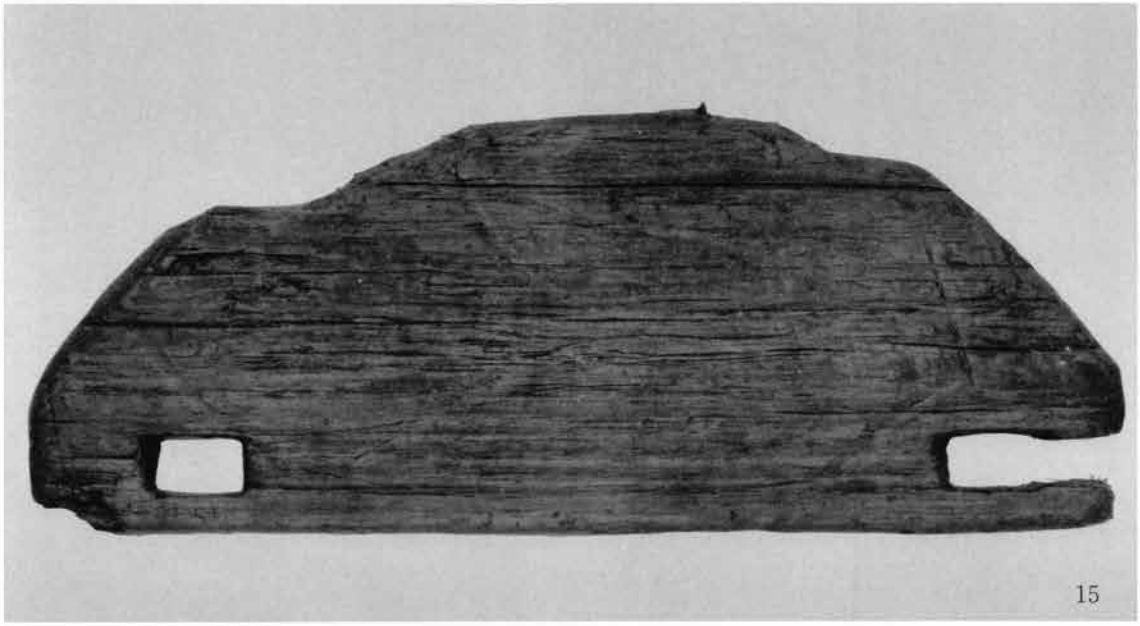




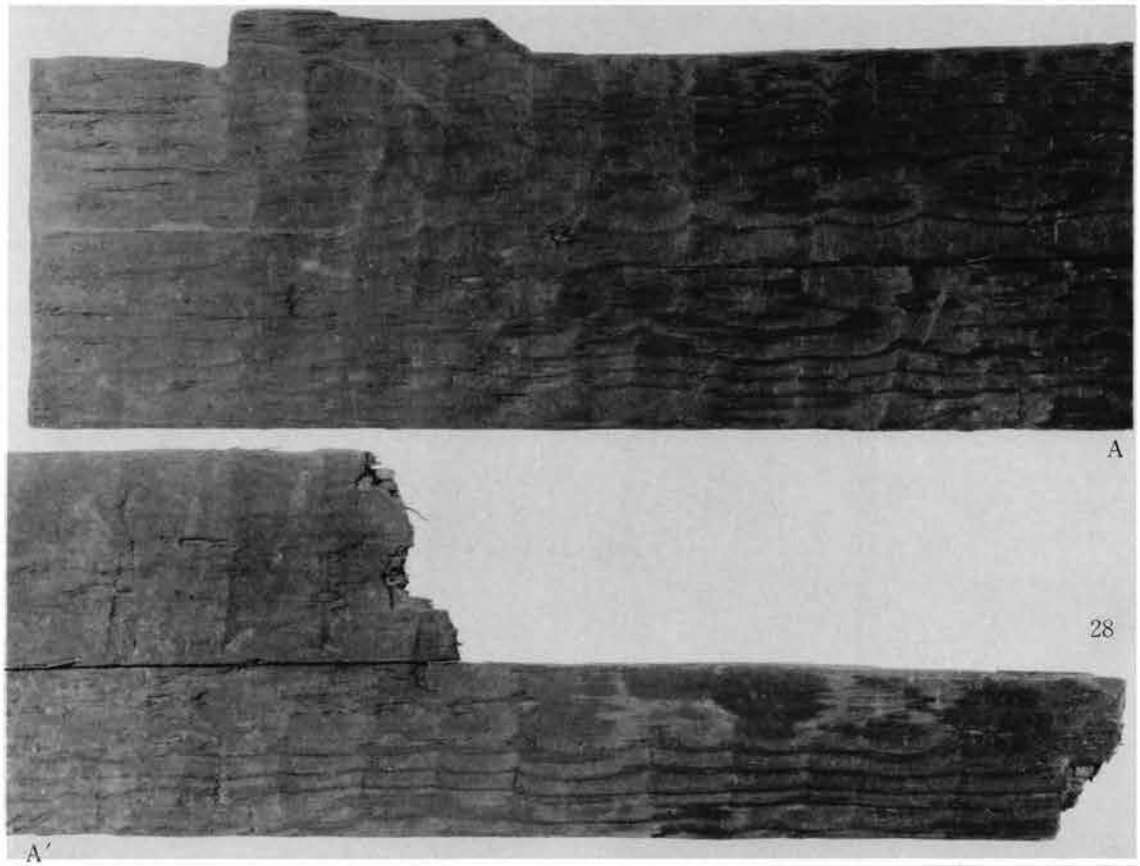


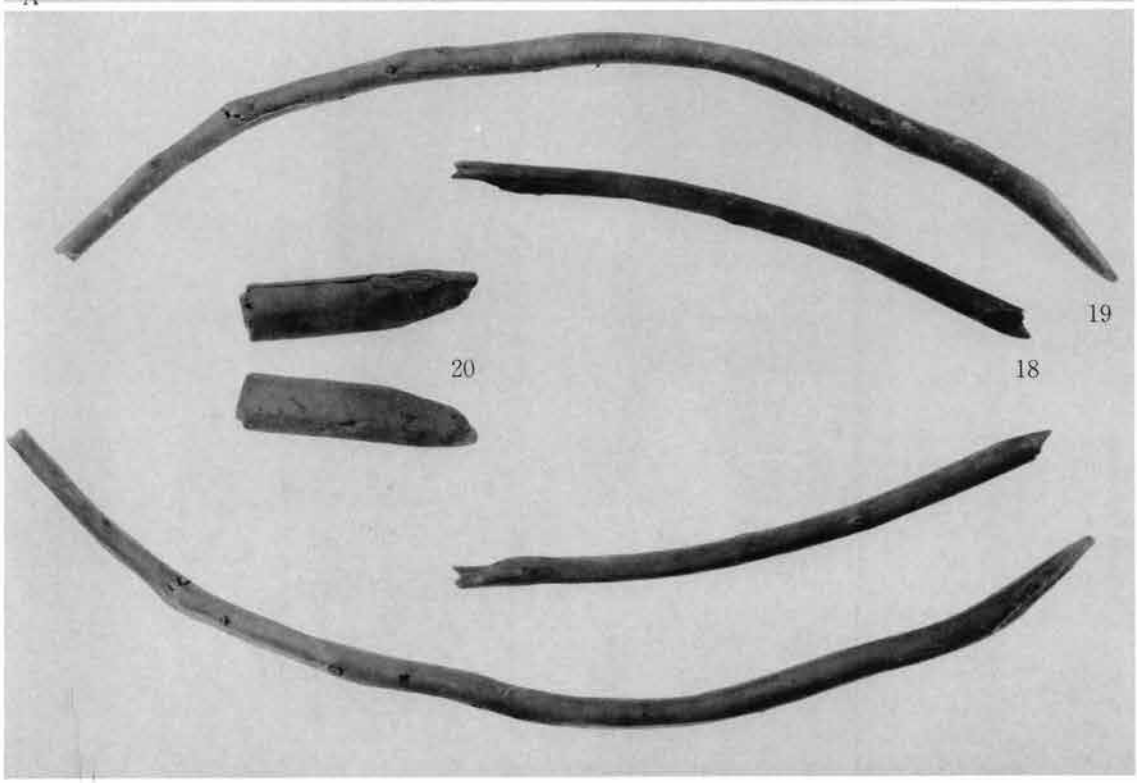
第４トレンチ出土遺物(4)　12．使用痕を残す板状木製品　13・14．他組合せ木製品



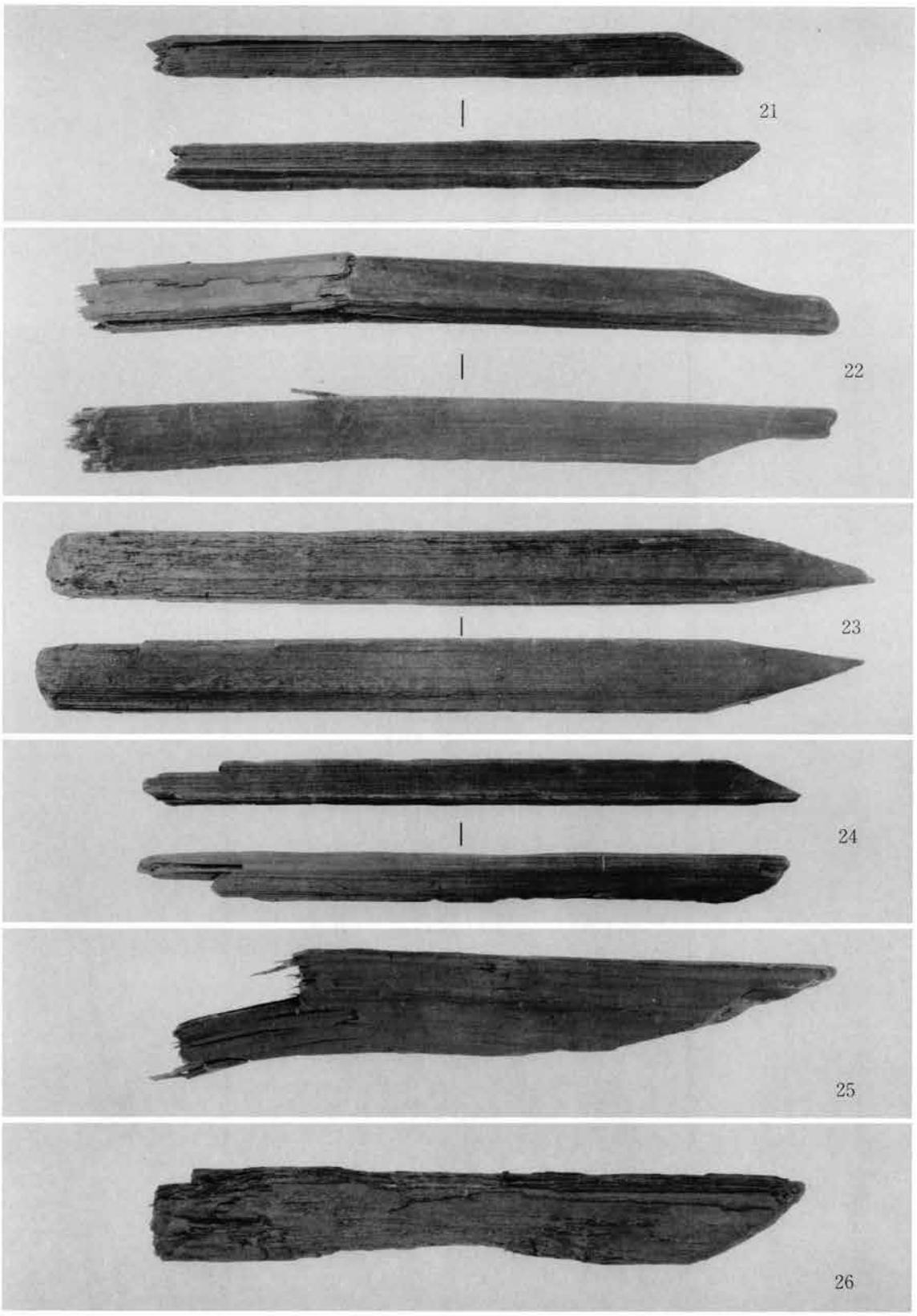


第４トレンチ出土遺物(5)　15．組み合わせ木製品　16・17．不明木製品



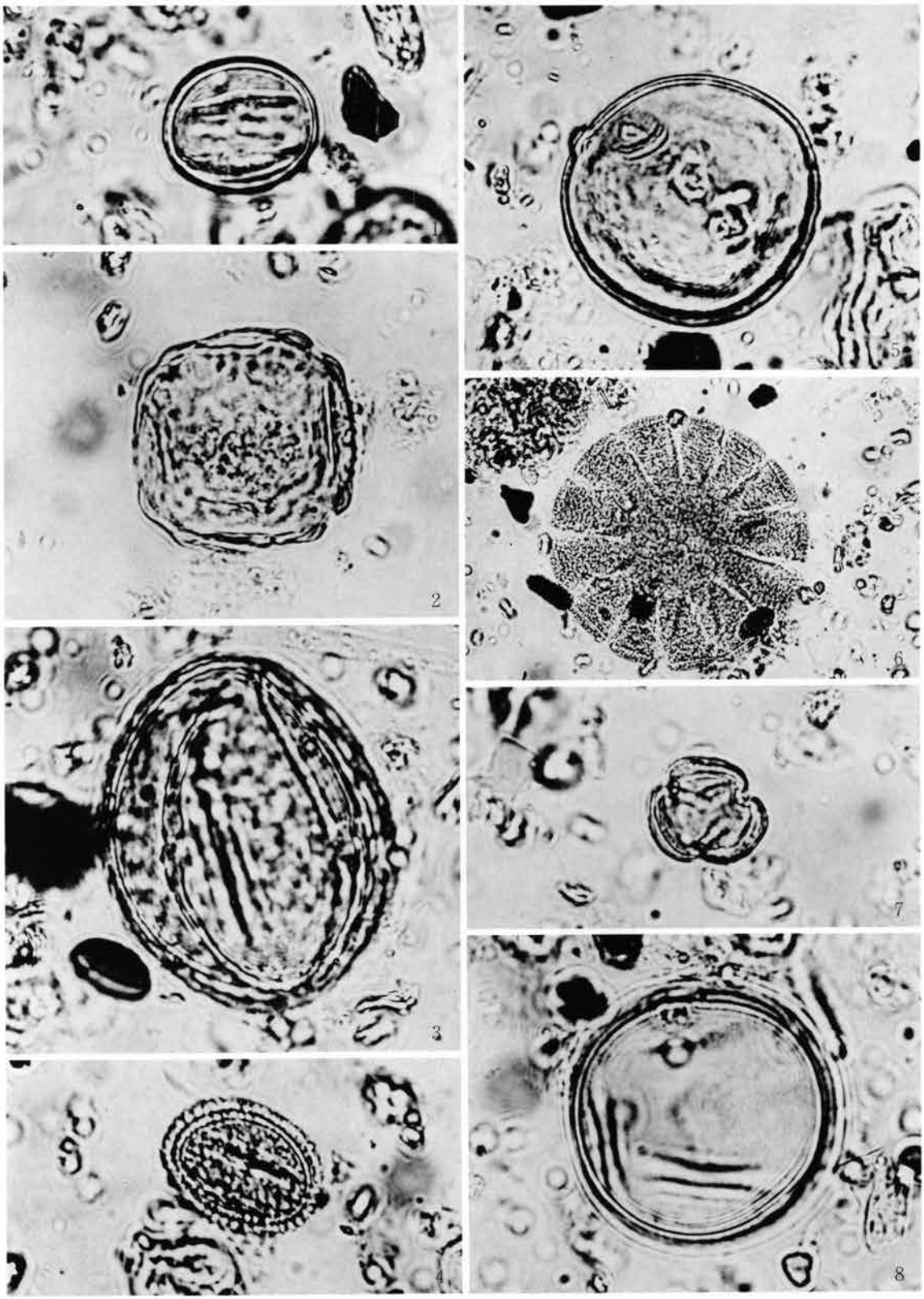


第4トレンチ出土遺物(6)　18・19．たも（漁具）カ　20．先端加工木製品　28．板状木製品



第4トレンチ出土遺物(7)　21～26．クイ状木製品

橋爪遺跡出土花粉化石(1)　1．二葉マツ亜属　2．スギ属　3．クマシデ属　4．シラカバ属
5．ハシバミ属　6．ブナ属　7．ハンノキ属　8．コナラ属



橋爪遺跡出土花粉化石(2)　1. アカガシ亜属　2. ケヤキ属　3. カキノキ属　4. モチノキ属
5. イネ　6. ゴマ　7. ヨモギ　8. イネ

京都府遺跡調査概報 第4冊

昭和57年3月31日

発行　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒602 京都市上京区広小路通寺町東入ル中御霊町424番地
TEL (075)256-0416

印刷　中西印刷株式会社
代表者　中西　亨
〒602 京都市上京区下立売通小川東入
TEL (075)441-3155（代）